

SPARC Enterprise

M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ

XSCF リファレンスマニュアル

XSCF Control Package (XCP) 108x





SPARC® Enterprise
M3000/M4000/M5000/M8000/M9000
サーバ XSCF リファレンスマニュアル

XSCF Control Package (XCP) 108x

Copyright 2007-2008 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. および富士通株式会社 〒 211-8588 神奈川県川崎市中原区上小田中 4-1-1, Japan. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。これらの製品、技術、および本書に対して Sun Microsystems, Inc. および富士通株式会社が有する知的所有権には、<http://www.sun.com/patents>に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付随する製品および技術は、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。富士通株式会社と Sun Microsystems, Inc. およびそのライセンサーの書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものでもありません。本書は、富士通株式会社または Sun Microsystems, Inc. の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフロント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者から富士通株式会社および / または Sun Microsystems, Inc. へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPL または LGPL が適用されたソースコードの複製は、GPL または LGPL の規約に従い、該当する場合に、お客様からのお申し込みに応じて入手可能です。富士通株式会社または Sun Microsystems, Inc. にお問い合わせください。

この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに由来しています。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴ、Java、Netra、Solaris、Sun Ray、Answerbook2、docs.sun.com、OpenBoot、および Sun Fire は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. または関連会社の商標または登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

SPARC64 は、Fujitsu Microelectronics, Inc. および富士通株式会社が SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の商標です。

OPEN LOOK および SunTM Graphical User Interface は、Sun Microsystems, Inc. が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。Sun Microsystems, Inc. は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインターフェースの概念の研究開発における Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。Sun Microsystems, Inc. は Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装しているかまたは Sun の書面によるライセンス契約を満たす Sun Microsystems, Inc. のライセンス実施権者にも適用されます。

United States Government Rights - Commercial use. U.S. Government users are subject to the standard government user license agreements of Sun Microsystems, Inc. and Fujitsu Limited and the applicable provisions of the FAR and its supplements.



Please
Recycle



Adobe PostScript

免責条項:本書または本書に記述されている製品や技術に関して富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限りです。このような契約で明示的に規定された保証を除き、富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. およびそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、現状のまま提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われぬものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、富士通株式会社、Sun Microsystems, Inc. またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のもとで第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

本書は、「現状のまま」提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われぬものとします。

目次

はじめに	vii
Intro	1
addboard	9
addcodlicense	13
addfru	15
adduser	17
applynetwork	19
cfgdevice	23
clockboard	29
console	31
deleteboard	33
deletecodlicense	37
deletefru	39
deleteuser	41
disableuser	43
dumpconfig	45
enableuser	49
exit	51
flashupdate	53
fmadm	57
fmdump	59
fmstat	67
getflashimage	71

ioxadm 75
man 83
moveboard 85
nslookup 89
password 91
ping 95
poweroff 97
poweron 101
prtfru 105
rebootxscf 109
replacefru 111
reset 113
resetdateoffset 117
restoreconfig 119
restoredefaults 125
sendbreak 129
setaltitude 131
setarchiving 133
setaudit 137
setautologout 143
setcod 145
setdate 149
setdcl 153
setdomainmode 157
setdomparam 163
setdscp 165
setdualpowerfeed 169
setemailreport 171
sethostname 175
sethttps 177
setldap 181
setlocale 185
setlocator 187
setlookup 189

setnameserver 191
setnetwork 193
setntp 199
setpasswordpolicy 203
setpowerupdelay 207
setprivileges 209
setroute 213
setshutdowndelay 217
setsntp 219
setsnmp 223
setsnmpusm 229
setsnmpvacm 233
setssh 237
settelnet 241
settimezone 243
setupfru 249
setupplatform 251
showaltitude 255
showarchiving 257
showaudit 261
showautologout 265
showboards 267
showcod 273
showcodlicense 275
showcodusage 277
showconsolepath 283
showdate 285
showdcl 287
showdevices 293
showdomainmode 299
showdomainstatus 301
showdscp 303
showdualpowerfeed 307
showemailreport 309

showenvironment 311
showfru 315
showhardconf 317
showhostname 323
showhttps 325
showldap 327
showlocale 329
showlocator 331
showlogs 333
showlookup 345
showmonitorlog 347
shownameserver 349
shownetwork 351
shownotice 357
showntp 359
showpasswordpolicy 361
showpowerupdelay 363
showresult 365
showroute 367
showshutdowndelay 371
showsmtp 373
showsnmp 375
showsnmpusm 377
showsnmpvacm 379
showssh 381
showstatus 385
showtelnet 387
showtimezone 389
showuser 393
snapshot 395
switchscf 405
testsb 407
traceroute 413
unlockmaintenance 415

version 417
viewaudit 421
who 427

はじめに

本書は、SPARC® Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの XSCF 環境で実行できるシェルコマンド (以降、XSCF シェルコマンド) の使いかたについて書かれたものです。

XSCF は、SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの本体装置およびドメインの監視や制御、運用、保守などを行うためのシステム監視機構です。システムのプロセッサとは独立したサービスプロセッサ上に、ファームウェアとして搭載されています。本書では、XSCF 環境で使用できる XSCF シェルコマンドの使いかたや実行例などが、コマンドごとに説明されています。

本書は、XSCF シェルコマンドを使用する上で、わからない点や確認したい内容を調べるための手引きとして用意されているマニュアルです。チュートリアルのように最初から読み進めるのではなく、確認したい内容が出てきた場合に、適宜、お使いになることをお勧めいたします。

なお、本書に書かれている XSCF シェルコマンドの説明は、XSCF 環境で `man` コマンドを実行した場合に表示されるマニュアルページと同じものです。マニュアルページを表示させる `man` コマンドの使いかたについては、本書内の `man(1)` の項目を参照してください。

また、XSCF の詳しい内容については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド』を参照してください。

ここでは、以下の項目について説明しています。

- [対象読者](#)
- [本書の表記について](#)
- [SPARC Enterprise Mx000 サーバ関連マニュアル](#)
- [用語集について](#)
- [本書内での他マニュアルの表記について](#)
- [モデル名について](#)
- [プロンプトの表記について](#)
- [ソフトウェアライセンスについて](#)
- [ご意見をお寄せください](#)

対象読者

本書は、SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバを管理するユーザー（以降、XSCF ユーザー）を対象にして書かれています。XSCF ユーザーには、以下の知識があることを前提としています。

- Solaris™ オペレーティングシステム、および UNIX コマンド
- SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ、および XSCF の基本的な知識

本書の表記について

ここでは、本書で使用されている表記について説明します。

Intro(8) には、XSCF シェルコマンドとその概要がアルファベット順に書かれています。

各 XSCF シェルコマンドは、以下の項目順で説明されています。なお、項目に対して該当する説明がない場合は、項目自体が省略されています。

項目	説明
名前	XSCF シェルコマンド名とコマンドの概要が書かれています。
形式	コマンドの構文が書かれています。 字体は以下の規則に基づいて使い分けられています。 bold コマンド名や定数など、表示されているとおりに入力します。 <i>Italic</i> 変数など、コマンド実行時に適切な値に置き換えます。 括弧などの記号は以下の規則に基づいて使い分けられています。 [] この括弧で囲まれているオプションやオペランドは省略できます。囲まれていないものは省略できません。 { } この括弧で囲まれているオプションやオペランドは1組として扱われます。 " " で区切られているオプションまたはオペランドから1つだけ指定します。 ... 直前のオプションまたはオペランドを複数指定できます。
説明	コマンドの機能など、詳しい説明が書かれています。コマンドを実行したときの動作や表示される内容について説明されます。オプションやオペランドの指定のしかたなどは説明されません。
ユーザー権限	コマンドを実行するために必要な権限について書かれています。ユーザー権限によって実行できる内容に違いがある場合は、ここで説明されます。
オプション	オプションの意味や指定のしかたについて書かれています。オプションにオペランドが必要な場合は、ここで説明されます。 1文字だけのオプションを複数指定する場合は、最初に指定したオプションのあとに、オプションのアルファベット部分だけを続けて指定することもできます。 例) <code>fmadm -a -i</code> <code>fmadm -ai</code>
オペランド	オペランドの意味や指定のしかたについて書かれています。オプションのあとに続くオペランドは「オプション」で説明されます。
詳細説明	「説明」で書かれている内容の他に、補足的な説明が必要な場合はここで説明されます。「説明」の内容が長くなるような場合に説明を分割するときにも使用されます。

項目	説明
使用例	コマンドの実行例が書かれています。実行例の説明、実行コマンド、および実行した結果システムから表示されるメッセージが書かれています。
終了ステータス	実行したコマンドが正常に終了したかどうかを表すステータスについて書かれています。正常に終了した場合は "0"、異常終了した場合は ">0" で表されます。
関連項目	関連するコマンド名が書かれています。

SPARC Enterprise Mx000 サーバ関連マニュアル

本書の関連マニュアルとして、以下のマニュアルが用意されています。

タイトル	マニュアル番号
SPARC Enterprise M3000 サーバ 設置計画マニュアル	C120-H030
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ 設置計画マニュアル	C120-H015
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ 設置計画マニュアル	C120-H014
SPARC Enterprise 19 インチラック搭載ガイド	C120-H016
SPARC Enterprise M3000 サーバ はじめにお読みください	C120-E536
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ はじめにお読みください	C120-E345
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ はじめにお読みください	C120-E323
SPARC Enterprise M3000 サーバ 製品概要	C120-E537
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ 製品概要	C120-E346
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ 製品概要	C120-E324
Important Safety Information for Hardware Systems	C120-E391
SPARC Enterprise M3000 Server Safety and Compliance Guide/ 安全に使用していただくために	C120-E538
SPARC Enterprise M4000/M5000 Servers Safety and Compliance Guide/ 安全に使用していただくために	C120-E348

タイトル	マニュアル番号
SPARC Enterprise M8000/M9000 Servers Safety and Compliance Guide/ 安全に使用していただくために	C120-E326
External I/O Expansion Unit Safety and Compliance Guide / 安全に使用していただくために	C120-E457
SPARC Enterprise M4000 Server Unpacking Guide/ 開梱の手引き	C120-E349
SPARC Enterprise M5000 Server Unpacking Guide/ 開梱の手引き	C120-E350
SPARC Enterprise M8000/M9000 Servers Unpacking Guide/ 開梱の手引き	C120-E327
SPARC Enterprise M3000 サーバ インストールガイド	C120-E539
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ インストールガイド	C120-E351
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ インストールガイド	C120-E328
SPARC Enterprise M3000 サーバ サービスマニュアル	C120-E540
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ サービスマニュアル	C120-E352
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ サービスマニュアル	C120-E330
PCI ボックス インストール・サービスマニュアル	C120-E329
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ RCI 構築手順書	C120-E361
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド	C120-E331
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド	C120-E332
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF リファレンスマニュアル	C120-E333
SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Dynamic Reconfiguration (DR) ユーザーズガイド	C120-E335
SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド	C120-E336
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ RCI ユーザーズガイド	C120-E360
SPARC Enterprise M3000 サーバ プロダクトノート	ウェブサイト参照
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ プロダクトノート	ウェブサイト参照
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ プロダクトノート	ウェブサイト参照

タイトル	マニュアル番号
PCI ボックス プロダクトノート	C120-E456
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ 用語集	C120-E514
SPARC Enterprise/PRIMEQUEST 共通 設置計画マニュアル	C120-H007

1. マニュアル公開ウェブサイト

SPARC Enterprise シリーズのすべての最新マニュアルを以下のウェブサイトで入手できます。

国内サイト

<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

海外サイト

<http://www.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

注) 『 SPARC Enterprise M3000 サーバ プロダクトノート 』 『 SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ プロダクトノート 』、『 SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ プロダクトノート 』、および 『 PCI ボックス プロダクトノート 』は、はウェブサイトでのみ公開しています。本製品の最新情報を確認してください。

2. Documentation CD

Documentation CD については、営業担当者にお問い合わせください。

- SPARC Enterprise M3000 Server Documentation CD (C120-E541)
- SPARC Enterprise M4000/M5000 Servers Documentation CD (C120-E365)
- SPARC Enterprise M8000/M9000 Servers Documentation CD (C120-E364)

3. 『 Enhanced Support Facility x.x 』 CD-ROM で提供されるマニュアル

- リモート保守サービス

タイトル	マニュアル番号
Enhanced Support Facility ユーザーズガイド REMCS 編	C112-B067

4. 本体装置内で提供されるマニュアル

XSCF のマニュアルページ (本書と同じ内容です。)

5. ウェブサイトで提供されるドキュメントおよびサポート

ご使用のサーバの、そのほかのドキュメントおよびサポートに関する最新情報が、以下のウェブサイトで提供されています。

a. メッセージ

国内サイト

<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/msg/>

海外サイト

<http://www.fujitsu.com/sparcenterprise/msg/>

b. ファームウェア

ファームウェアの最新ファイルは以下のウェブサイトから入手できます。

国内サイト

<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/download/firmware/>

海外サイト

<http://www.fujitsu.com/sparcenterprise/firmware/>

以下のファイルおよびドキュメントが公開されます。

i. ファームウェアプログラムファイル (XSCF Control Package (XCP) ファイル)

ii. XSCF 拡張 MIB 定義ファイル

注) XSCF Control Package(XCP): XCP とは計算機システムを構成するハードウェアの制御プログラムをパッケージ化したものです。XCP ファイルには XSCF ファームウェアと OpenBoot™ PROM ファームウェアが含まれます。

c. Fault Management MIB (SUN-FM-MIB) 定義ファイル

http://src.opensolaris.org/source/xref/onnv/onnv-gate/usr/src/lib/fm/libfmd_snmp/mibs/

6. Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) 関連マニュアル

<http://docs.sun.com>

7. ファームウェアプログラム CD 内で提供されるもの (保守作業員用)

a. ファームウェアプログラムファイル (XCP ファイル)

b. XSCF 拡張 MIB 定義ファイル

8. RCI 機能をご使用の場合

RCI 構築手順は本文には記載されておりません。RCI 機能をご使用の場合は、マニュアル公開ウェブサイトで提供される『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ RCI 構築手順書』および『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ RCI ユーザーズガイド』を参照してください。

用語集について

SPARC Enterprise Mx000 サーバ関連マニュアルで使用している用語については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ用語集』を参照してください。

本書内での他マニュアルの表記について

本書では、関連マニュアルについて以下のような表記をすることがあります。以下のような表記がされている場合、対応する関連マニュアルを参照してください。

関連マニュアルの名称	本書内の表現
SPARC Enterprise M3000 サーバ 製品概要	製品概要
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ 製品概要	
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ 製品概要	
SPARC Enterprise M3000 サーバ サービスマニュアル	サービスマニュアル
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ サービスマニュアル	
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ サービスマニュアル	
SPARC Enterprise M3000 サーバ インストールガイド	インストールガイド
SPARC Enterprise M4000/M5000 サーバ インストールガイド	
SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ インストールガイド	
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド	アドミニストレーションガイド
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド	XSCF ユーザーズガイド
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF リファレンスマニュアル	XSCF リファレンスマニュアル

関連マニュアルの名称	本書内の表現
SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Dynamic Reconfiguration (DR) ユーザーズガイド	Dynamic Reconfiguraion ユーザーズガイド または DR ユーザーズガイド
SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Capacity on Demand (COD) ユーザーズガイド	COD ユーザーズガイド
SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ 用語集	用語集

モデル名について

本書のモデル名表記は以下のようになっています。

サーバクラス	モデル名
エントリーレベル	SPARC Enterprise M3000
ミッドレンジ	SPARC Enterprise M4000 SPARC Enterprise M5000
ハイエンド	SPARC Enterprise M8000 SPARC Enterprise M9000

プロンプトの表記について

本書のプロンプト表記は以下のようになっています。

シェル	プロンプト表記
XSCF	XSCF>
C シェル	<i>machine-name%</i>
C シェルスーパーユーザー	<i>machine-name#</i>

シェル	プロンプト表記
Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
Bourne シェルおよび Korn シェル スーパーユーザー	#
OpenBoot PROM	ok

ソフトウェアライセンスについて

本書で使用している機能は、GPL、LGPL 等のソフトウェアを使用しています。ライセンス情報については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド』の「付録 E ソフトウェアライセンス使用許諾条件」を参照してください。

ご意見をお寄せください

本書に関するご意見、ご要望または内容に不明瞭な部分がありましたら、マニュアル番号、マニュアル名称、ページおよび具体的な内容を下記 URL の『お問い合わせ』から送付してください。

SPARC Enterprise マニュアルのサイト：
<http://primeserver.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

名前	Intro - XSCF ファームウェアで提供されるコマンドを一覧表示します。	
説明	M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの XSCF ファームウェアで提供されるコマンドを一覧にしたものです。	
	ご使用のサーバによっては、使用方法が異なったり、サポートされていなかったりするコマンドがあります。詳細については、各コマンドのページを参照してください。	
コマンド一覧	XSCF では、以下のコマンドが提供されています。	
	Intro, intro	XSCF ファームウェアで提供されるコマンドを一覧表示します。
	addboard	システムボード (XSB) をドメイン構成に組み込み、または割り当てます。
	addcodlicense	Capacity on Demand (COD) Right-To-Use (RTU) ライセンスキーを COD ライセンスデータベースに追加します。
	addfru	Field Replaceable Unit (FRU) を増設します。
	adduser	XSCF ユーザーアカウントを作成します。
	applynetwork	XSCF ネットワークに設定された内容を反映します。
	cfgdevice	CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットのポートへの接続、切り離し、および状態の表示を行います。
	clockboard	システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定または表示します。
	console	ドメインコンソールに接続します。
	deleteboard	システムボード (XSB) をドメイン構成から切り離します。
	deletecodlicense	キャパシティオンデマンド (COD) Right-To-Use (RTU) ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから削除します。
	deletefru	Field Replaceable Unit (FRU) を減設します。
	deleteuser	XSCF ユーザーアカウントを削除します。
	disableuser	XSCF ユーザーアカウントを無効にします。
	dumpconfig	システム構成情報を保存します。
	enableuser	XSCF ユーザーアカウントを有効にします。
	exit	XSCF シェルを終了します。
	flashupdate	ファームウェアをアップデートします。

fmadm	故障管理に関連するシステム構成パラメータを表示します。
fmdump	故障管理に関連するログを表示します。
fmstat	故障管理モジュールの統計情報をレポートします。
getflashimage	ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。
ioxadm	PCI ボックスを管理します。
man	XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示します。
moveboard	現在組み込まれているドメインから別のドメインへ、システムボード (XSB) を移動します。
nslookup	ホスト名を Domain Name Server(DNS) サーバに照会します。
password	XSCF ユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定します。
ping	ICMP の ECHO_REQUEST パケットをネットワーク上のホストまたはネットワーク装置へ送信します。
poweroff	ドメインの電源を切断します。
poweron	ドメインの電源を投入します。
prtfru	システムおよび PCI ボックスに FRUID データを表示します。
rebootxscf	XSCF をリセットします。
replacefru	Field Replaceable Unit (FRU) を交換します。
reset	指定したドメインをリセットします。
resetdateoffset	XSCF とドメイン間の時刻の差分をリセットします。
restoreconfig	dumpconfig(8) コマンドで保存したシステム構成情報を復元します。
restoredefaults	本体装置または XSCF ユニットに保存された設定やログを消去し、工場出荷時の状態に戻します。
sendbreak	指定したドメインにブレーク信号を送ります。
setaltitude	本体装置の高度またはエアフィルターの搭載状況を設定します。
setarchiving	ログのアーカイブ機能を設定します。
setaudit	システムの監査機能を管理します。
setautologout	XSCF コマンドシェルのセッションタイムアウト時間を設定します。

setcod	ドメインで使用されるキャパシティオンデマンド (COD) リソースを設定します。
setdate	XSCF の時計の日付、時刻を設定します。
setdcl	ドメイン構成情報 (DCL) を設定します。
setdomainmode	ドメインモードを設定します。
setdomparam	OpenBoot PROM 環境変数を強制的に書き換えます。
setdscp	ドメイン / サービスプロセッサ間通信プロトコル (DSCP) の IP アドレス割り当てを設定します。
setdualpowerfeed	二系統受電モードを有効 / 無効にします。
setemailreport	電子メールレポートの設定データをセットアップします。
sethostname	XSCF ユニットのホスト名およびドメイン名を設定します。
sethttps	XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定します。また、認証関連の設定を行います。
setldap	XSCF を Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) クライアントとして設定します。
setlocale	XSCF のデフォルトのロケールを設定します。
setlocator	オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定します。
setlookup	認証とユーザー権限の関する参照先を設定します。
setnameserver	XSCF ネットワークで 사용되는 Domain Name System (DNS) サーバを設定します。
setnetwork	XSCF で使用されるネットワークインターフェースを設定します。
setntp	XSCF ネットワークで 사용되는 NTP サーバを設定します。
setpasswordpolicy	システムのパスワードポリシーを管理します。
setpowerupdelay	システムの暖機運転時間および起動までの待ち時間を設定します。
setprivileges	ユーザー権限を割り当てます。
setroute	XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定します。
setshutdowndelay	無停電電源装置 (UPS) からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を設定します。

setsmtp	Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) サービスを設定します。
setsnmp	SNMP エージェントを管理します。
setsnmpusm	SNMPv3 エージェントの User-based Security Model (USM) 設定します。
setsnmpvacm	SNMPv3 エージェントの View-based Access Control Model (VACM) 設定を変更します。
setssh	XSCF ネットワークで使用する Secure Shell (SSH) サービスを開始または停止します。また、SSH サービスに必要なホスト鍵の生成やユーザー公開鍵の登録、削除を行います。
settelnet	XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止します。
settimezone	XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定します。
setupfru	デバイスのハードウェアに関する設定を行います。
setupplatform	プラットフォーム固有の設定を行います。
showaltitude	本体装置の高度およびエアフィルターの搭載状況を表示します。
showarchiving	ログアーカイブの設定状態を表示します。
showaudit	監査システムの現在の状態を表示します。
showautologout	XSCF コマンドシェルのセッションタイムアウト時間を表示します。
showboards	システムボード (XSB) の情報を表示します。
showcod	ドメインで設定されているキャパシティオンデマンド (COD) に関する情報を表示します。
showcodlicense	COD ライセンスデータベースに格納されている現在のキャパシティオンデマンド (COD) Right-To-Use (RTU) ライセンスキーを表示します。
showcodusage	キャパシティオンデマンド (COD) リソースの使用状況を表示します。
showconsolepath	現在接続されているドメインコンソールの情報を表示します。
showdate	XSCF の時計の日付、時刻を表示します。
showdcl	現在設定されているドメイン構成情報 (DCL) を表示します。

showdevices	システムボード (XSB) のデバイスと、リソースの使用状況を表示します。
showdomainmode	現在設定されているドメインモードを表示します。
showdomainstatus	現在のドメインの状態を表示します。
showdscp	ドメイン - SP 通信プロトコル (DSCP) に割り当てられている IP アドレスを表示します。
showdualpowerfeed	二系統受電モードの現在の状態を表示します。
showemailreport	電子メールレポートの設定データを表示します。
showenvironment	本体装置の吸気温度と湿度、温度センサー情報、電圧センサー情報、ファン回転情報を表示します。
showfru	デバイスのハードウェアに関する設定内容を表示します。
showhardconf	本体装置に搭載されている Field Replaceable Unit (FRU) の情報を表示します。
showhostname	XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。
showhttps	XSCF ネットワークに設定されている HTTPS サービスの状態を表示します。
showldap	サービスプロセッサの Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 設定を表示します。
showlocale	設定されている XSCF のロケールを表示します。
showlocator	オペレーターパネルの CHECK LED の状態を表示します。
showlogs	指定したログを表示します。
showlookup	認証とユーザー権限のルックアップに関する設定を表示します。
showmonitorlog	監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。
shownameserver	XSCF ネットワークに設定されている Domain Name System (DNS) サーバを表示します。
shownetwork	XSCF に設定されているネットワークインターフェースの情報を表示します。
shownotice	XSCF Control Package (XCP) の著作権および著作権に関するライセンス情報を表示します。
showntp	XSCF ネットワークに設定されている NTP サーバを表示します。
showpasswordpolicy	現在のパスワードポリシーの設定を表示します。

showpowerupdelay	現在設定されているシステムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を表示します。
showresult	直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。
showroute	XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。
showshutdowndelay	無停電電源装置 (UPS) からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を表示します。
showsmtp	Simple Mail Transfer Protocol(SMTP) の設定情報を表示します。
showsnmp	SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示します。
showsnmpusm	SNMP エージェントに関する現在の User-based Security Model (USM) 情報を表示します。
showsnmpvacm	SNMP エージェントに関する現在の View-based Control Access (VACM) 情報を表示します。
showssh	XSCF ネットワークに設定されている Secure Shell(SSH) サービスの状態、ホスト公開鍵、フィンガープリント、またはユーザー公開鍵を表示します。
showstatus	縮退された Field Replaceable Unit(FRU) を表示します。
showtelnet	XSCF ネットワークに設定されている Telnet サービスの状態を表示します。
showtimezone	現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示します。
showuser	ユーザーアカウント情報を表示します。
snapshot	環境、ログ、エラー、および Field Replaceable Unit Identifier(FRUID) に関するデータを収集し、転送します。
switchscf	XSCF ユニットのアクティブ、スタンバイ状態を切り替えます。
testsb	指定した物理システムボード (PSB) に初期診断を行います。
traceroute	指定したホストまたはネットワーク装置までのネットワーク経路を表示します。
unlockmaintenance	XSCF のロック状態を強制的に解除します。

<code>version</code>	ファームウェアの版数を表示します。
<code>viewaudit</code>	監査レコードを表示します。
<code>who</code>	XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。



名前	addboard - システムボード (XSB) をドメイン構成に組み込み、または割り当てます。
形式	<pre>addboard [-q] -{y n} [-f] [-v] [-c configure] -d domain_id xsb [xsb...] addboard [-q] -{y n} [-f] [-v] -c assign -d domain_id xsb [xsb...] addboard [-q] -{y n} [-f] [-v] -c reserve -d domain_id xsb [xsb...] addboard -h</pre>
説明	<p>addboard(8) は、ドメイン構成情報 (DCL) に基づいて、XSB をドメイン構成に組み込む、または割り当てるコマンドです。</p> <p>addboard(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。</p> <p>以下のいずれかの組み込み手段が指定できます。</p> <p>configure 指定したドメイン構成に XSB を組み込みます。組み込まれた XSB は、Solaris OS からアクセスできるようになります。</p> <p>assign 指定したドメインに XSB を割り当てます。割り当てられた XSB は、指定したドメインに予約され、他のドメインからは組み込み、割り当てができなくなります。割り当てられたあとは、リブートするか addboard(8) コマンドを "-c configure" で実行した場合に、ドメインに組み込まれます。</p> <p>reserve 指定したドメインに XSB の組み込みを予約します。動作は assign と同じです。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-c assign XSB をドメイン構成に割り当てます。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたものとみなされます。</p> <p>-c configure XSB をドメイン構成に組み込みます。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたものとみなされます。</p> <p>-c reserve ドメイン構成に XSB の組み込みを予約します。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたものとみなされません。</p>

-d *domain_id* XSB を組み込む、または割り当てるドメイン ID を指定します。
domain_id はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定
できます。

-f XSB を、強制的にドメインへ組み込みます。

注意 - **-f** オプションにより強制的にドメインへ XSB を追加した
場合、追加したすべてのハードウェアリソースは正常に動作しな
い可能性があります。そのため、**-f** オプションは通常の運用では
使用しないことをお勧めします。**-f** オプションを指定した場合
は、必ず、追加した XSB やデバイスの状態を確認してください。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指
定した場合はエラーになります。

-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。

-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないように
します。

-v 詳細な情報を表示します。**-q** オプションと一緒に指定した場合
は**-v**は無効となります。

-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb 組み込む、または割り当てる XSB 番号を指定します。スペース
で区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

x-y

x 00 から 15 までの整数で指定します。

y 0 から 3 までの整数で指定します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロン
プトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- "-c configure" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、または
Solaris OS が稼働していないときは、エラーとなります。
- "-c configure" を指定した場合は、XSB に対してハードウェア診断が行われてか
ら、ドメインに組み込まれます。そのため、コマンドの実行に時間がかかること
があります。
- addboard(8) コマンドで XSB を割り当てたり、組み込んだりするには、あらかじ
め、setdcl(8) コマンドを使用して、DCL を設定しておく必要があります。
- DCL については setdcl(8), showdcl(8) コマンドを参照してください。

- 対象のドメインが電源投入処理中、または切断処理中にコマンドが実行された場合は、ビジー状態となります。ドメインの処理が終了したあとで、再度実行してください。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 に対して、XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 を割り当てます。

```
XSCF> addboard -y -c assign -d 0 00-0 01-0 02-0 03-0
```

使用例 2 ドメイン ID 2 に対して、XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 を強制的に組み込みます。

```
XSCF> addboard -f -d 2 00-0 01-0 02-0 03-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deleteboard (8), moveboard (8), replacefru (8), setdcl (8), setdomainmode (8), setupfru (8), showboards (8), showdomainstatus (8), showdcl (8), showdevices (8), showfru (8), testsb (8)

addboard(8)



名前	addcodlicense - Capacity on Demand (COD) Right-To-Use (RTU) ライセンスキーを COD ライセンスデータベースに追加します。
形式	addcodlicense <i>license-signature</i> addcodlicense -h
説明	addcodlicense(8) は、指定された COD RTU ライセンスキーを、サービスプロセッサ上の COD ライセンスデータベースに追加するコマンドです。 addcodlicense(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。 COD ライセンスキーが追加されると、ヘッドルームの数はライセンスキーが提供された数だけ減ります。ヘッドルーム数はゼロより小さくなることはありません。 注 - このコマンドを実行する前に、COD ライセンスキーを取得する必要があります。ライセンスキーを取得するには、営業担当員にお問い合わせください。COD RTU ライセンスキーの詳細については、ご使用のサーバの『COD ユーザーズガイド』を参照してください。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペラント	以下のオペラントがサポートされています。 <i>license-signature</i> COD ライセンスデータベースに追加する COD RTU ライセンスキーを指定します。
使用例	使用例 1 COD RTU ライセンスキーを追加します。 XSCF> addcodlicense \ 01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	deletecodlicense (8), setcod (8), showcod (8), showcodlicense (8), showcodusage (8)

addcodlicense(8)



名前	addfru - Field Replaceable Unit (FRU) を増設します。
形式	addfru addfru -h
説明	addfru(8) は、FRU を増設するコマンドです。 FRU の増設に必要な FRU の選択、確認、取りつけなどの設定を、メニュー形式で対話的に行うことができます。 addfru(8) コマンドでは、以下の FRU を増設できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU / メモリボードユニット (CMU) ■ I/O ユニット (IOU) ■ ファンユニット (FANU) ■ 電源ユニット (PSU)
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、 <code>fieldeng</code> 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、 <code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	deletefru(8) , replacefru(8) , setupfru(8) , showfru(8) , showhardconf(8) , tests(8) , unlockmaintenance(8)

addfru(8)



名前	adduser - XSCF ユーザーアカウントを作成します。
形式	adduser [-u <i>UID</i>] <i>user</i> adduser -h
説明	<p>adduser(8) は、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成するコマンドです。</p> <p>XSCF ユーザーアカウントは、XSCF の設定、操作、管理、および運用に使用されません。新しく作成したユーザーアカウントには、パスワードが設定されていません。したがって、password(8) コマンドでパスワードを設定するか、Secure Shell (SSH) による公開鍵をユーザー用に設定するまで、ログインに使用できません。作成されたユーザーアカウントはロックされますが、無効になっているわけではありません。指定できるユーザーアカウント数は、1 ユーザーアカウントあたり平均 10 文字とすると、100 ユーザーアカウントまでです。</p> <p>-u オプションを省略して adduser(8) コマンドを実行すると、自動的にユーザー識別子がユーザーアカウントに割り当てられます。-u オプションを指定して adduser(8) コマンドを実行すると、指定したユーザー識別子がアカウントに割り当てられます。自動的に割り当てられるユーザー識別子は 100 から始まります。</p> <p>ユーザーアカウントデータに Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用するように XSCF で設定されている場合、ユーザーアカウント名とユーザー識別子は、XSCF または LDAP で未使用のものでなければなりません。</p> <p>ユーザーアカウントを作成すると、現在のパスワードポリシーの値が、作成されたユーザーアカウント用のファイルに保存されます。パスワードポリシーの詳細については、setpasswordpolicy(8) コマンドを参照してください。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-u <i>UID</i> ユーザー識別子を指定します。指定された識別子 (UID) で新しいユーザーを作成します。ユーザー識別子の指定はオプションです。UID を指定する場合は、100 以上の整数にする必要があります。ただし、65534 と 65535 は指定できません。-u オプションを省略した場合は、ユーザー識別子は 100 以上の整数で自動的に割り当てられます。</p>

オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>user</i> 作成する XSCF ユーザーアカウント名を指定します。ユーザーアカウント名は、英数字、ハイフン (-)、アンダースコア (_) を組み合わせて、31 文字以内で指定します。大文字、小文字は区別されます。先頭文字は英字で指定してください。以下に例を示します。 「jsmith」、「j_smith」、「j_smith-0123」、「J_Smith-0123」
使用例	使用例 1 新しいユーザーを作成します。 XSCF> adduser -u 359 jsmith
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	deleteuser(8) , disableuser(8) , enableuser(8) , password(8) , setldap(8) , setpasswordpolicy(8) , showldap(8) , showpasswordpolicy(8) , showuser(8)

名前	applynetwork - XSCF ネットワークに設定された内容を反映します。
形式	applynetwork [[-q] -{y n}] [-M] applynetwork -h
説明	<p>applynetwork(8) は、XSCF ネットワークに設定された内容を XSCF に反映するコマンドです。</p> <p>XSCF ネットワークの以下の内容を設定した場合は、applynetwork(8) コマンドを実行して、設定内容を XSCF に反映する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCF ホスト名 ■ DNS ドメイン名 ■ IP アドレス ■ ネットマスク ■ ルーティング <p>applynetwork(8) コマンド実行時には、XSCF ホスト名、DNS ドメイン名、ネームサーバ、IP アドレス、ネットマスク、ルーティングに設定されている内容が表示されます。applynetwork(8) コマンドで XSCF ネットワークの設定内容を反映したら、rebootxscf(8) コマンドを使用して XSCF をリセットすると、設定が完了します。</p> <p>注 - applynetwork(8) コマンドを実行しないで XSCF をリセットした場合は、設定したネットワークの内容が XSCF に反映されません。また、設定した内容自体が消去されてしまいます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p> <p>-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。</p>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

- 対象となるインターフェースに、ホスト名、DNSドメイン名、IPアドレス、ネットマスクのすべてが設定されていない場合はエラーとなります。
sethostname(8)、setnetwork(8) コマンドを実行してすべての項目を設定してから、再度、applynetwork(8) コマンドを実行してください。
- 複数のインターフェースに対して設定する場合は、対象となるすべてのインターフェースに、ホスト名、DNSドメイン名、IPアドレス、ネットマスクのすべてが設定されている必要があります。すべてのインターフェースに、1つでも設定されていない項目がある場合はエラーとなります。
- ホスト名を設定する場合は sethostname(8)、IPアドレス、ネットマスクを設定する場合は setnetwork(8) を使用します。
- すべてのネットワークインターフェースのstatusがdownの場合はエラーとなります。
- M8000/M9000 サーバで、以下に対して異なるネットマスクを設定するとエラーとなります。
 - xscf#0-lan#0, xscf#1-lan#0, lan#0
 - xscf#0-lan#1, xscf#1-lan#1, lan#1
 - xscf#0-if, xscf#1-if

使用例

使用例 1 XSCF ネットワークの設定を反映します。

M3000/M4000/M5000 サーバの場合

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
xscf#0 hostname :hostname-0
DNS domain name :example.com
nameserver      :10.23.4.3

interface       :xscf#0-lan#0
status          :up
IP address      :10.24.144.214
netmask         :255.255.255.0
route           :-n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

interface       :xscf#0-lan#1
status          :down
IP address      :
netmask         :
route           :
```

Continue? [y|n] :**y**

M8000/M9000 サーバの場合

```
XSCF> applynetwork
```

```
The following network settings will be applied:
```

```
xscf#0 hostname :hostname-0
xscf#1 hostname :hostname-1
DNS domain name :example.com
nameserver      :10.23.4.3

interface       :xscf#0-lan#0
status          :up
IP address      :10.24.144.214
netmask        :255.255.255.0
route          : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

interface       :xscf#0-lan#1
status          :down
IP address      :
netmask        :
route          :

interface       :xscf#0-if
status          :down
IP address      :10.24.100.1
netmask        :255.255.255.0

interface       :lan#0
status          :down
IP address      :
netmask        :

interface       :xscf#1-lan#0
status          :up
IP address      :10.24.144.215
netmask        :255.255.255.0
route          : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

interface       :xscf#1-lan#1
status          :down
IP address      :
netmask        :
route          :

interface       :xscf#1-if
status          :down
IP address      :10.24.100.2
netmask        :255.255.255.0

interface       :lan#1
status          :down
IP address      :
netmask        :
```

```
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 M3000/M4000/M5000 サーバで XSCF ネットワークの設定を反映します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> applynetwork -y
The following network settings will be applied:
xscf#0 hostname :hostname-0
DNS domain name :example.com
nameserver      :10.23.4.3

interface       :xscf#0-lan#0
status          :up
IP address      :10.24.144.214
netmask        :255.255.255.0
route          :-n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

interface       :xscf#0-lan#1
status          :down
IP address      :
netmask        :
route          :
```

Continue? [y|n] :**y**
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the network settings.
Please confirm that the settings have been applied by executing
showhostname, shownetwork, showroute and shownameserver after rebooting
the XSCF.

使用例 3 XSCF ネットワークの設定を反映します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> applynetwork -q -y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), sethostname(8), setnameserver(8), setnetwork(8), setroute(8)

名前	cfgdevice - CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットのポートへの接続、切り離し、および状態の表示を行います。
形式	<pre>cfgdevice [[-q] -{y n}] -c attach -p port_no</pre> <pre>cfgdevice [[-q] -{y n}] -c detach -p port_no</pre> <pre>cfgdevice -l [-M]</pre> <pre>cfgdevice -h</pre>
説明	<p>cfgdevice(8) は指定したポートに対して、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続したり、切り離したり、現在の状態を表示したりするコマンドです。</p> <p>cfgdevice(8) コマンドは、M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。</p> <p>CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続するには、IOU Onboard Device Card_A(IOUA) が搭載されている I/O ユニット上の PCI スロット番号を、ポート番号として指定する必要があります。cfgdevice(8) コマンドを実行すると、システムに内蔵されているドライブ切り替え装置によって、指定されたポートへ CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットが切り替えられます。</p> <p>現在の状態を表示した場合は、以下の内容が表示されます。</p> <p>port_no IOUA が搭載されていて、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続できるポート番号</p> <p> "IOU 番号-PCI スロット番号" で表示されます。</p> <p>IOU/SAS-status IOUA と切り替え装置間の接続状態。"-c attach", "-c detach" によって切り替わります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ enable/disable: cfgdevice(8) コマンドでの設定状態 enable: "-c attach" によって接続された状態 disable: 接続なし ■ up/down: IOUA と切り替え装置間の論理的な接続状態。 up: 接続が確立されている状態 down: 接続されていない状態 <p>SAS-status I/O ユニットと本体装置間の接続状態</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ enable/disable: I/O ユニットと本体装置間の接続設定。通常は enable が表示されます。I/O ユニットなしでドメインを起動した場合などに disable となります。 ■ up/down: I/O ユニットと本体装置間の論理的な接続状態 up: 接続が確立されている状態 down: 接続されていない状態

ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、<code>platadm</code> または <code>fieldeng</code> 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="351 319 1302 380">-c <code>attach</code> 指定したポートに CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続します。 <li data-bbox="351 397 1302 458">-c <code>detach</code> 指定したポートに接続されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを切り離します。 <li data-bbox="351 475 1302 536">-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 <li data-bbox="351 553 1302 614">-l 現在設定されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの状態を表示します。 <li data-bbox="351 631 1302 657">-M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。 <li data-bbox="351 675 1302 701">-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 <li data-bbox="351 718 1302 840">-p <code>port_no</code> 指定したドメイン上で CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットを接続するポート番号を指定します。 <i>port_no</i> は「IOU 番号-PCI スロット番号」の形式で指定できます。-p オプションは省略できません。 <li data-bbox="351 857 1302 918">-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 <li data-bbox="351 935 1302 961">-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="351 1008 1302 1095">■ 接続または切り離しの場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。 <li data-bbox="351 1112 1302 1199">■ システムの電源が投入されている場合に接続および切り離しを行うと、<code>cfgdevice(8)</code> コマンド実行後すぐに設定されます。システムの電源が切断されている場合は、接続および切り離しが予約され、電源が投入後に設定されます。 <li data-bbox="351 1216 1302 1338">■ CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットが接続された状態で、ドメイン構成を変更したり、CPU / メモリボードユニット (CMU) や I/O ユニット (IOU) を交換したりしても、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの接続状態は保持されます。 <li data-bbox="351 1355 1302 1406">■ ドメインの電源を切断したり、リブートしたりしても、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの接続状態は保持されます。

- M9000 サーバの場合は、基本筐体、拡張筐体に1台ずつCD-RW/DVD-RWドライブユニットおよびテープドライブユニットが搭載されます。このとき、各CD-RW/DVD-RWドライブユニットおよびテープドライブユニットは同一筐体内でのみ接続できます。また、接続の設定は基本、拡張筐体ごとに行う必要があります。

```
XSCF> cfgdevice -l
Current connection for DVD/DAT:
  Main chassis:      port 0-0
  Expansion chassis: port 8-0
Expander status
Port No. IOU/SAS-status SAS-status
-----
0-0      enable up      enable up
0-2      disable down  enable up
0-4      disable down  enable up
0-6      disable down  enable up
1-0      disable down  enable up
1-2      disable down  enable up
1-4      disable down  enable up
1-6      disable down  enable up
2-0      disable down  enable up
2-2      disable down  enable up
2-4      disable down  enable up
2-6      disable down  enable up
8-0      enable up      enable up
8-2      disable down  enable up
8-4      disable down  enable up
8-6      disable down  enable up
```

使用例

- 使用例 1** システムの電源が切断されているときに、CD-RW/DVD-RWドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続予約します。

```
XSCF> cfgdevice -c attach -p 0-0
Are you sure you want to attach the device [y|n] :y
Completed.( Reservation )
```

- 使用例 2** システムの電源が投入されているときに、CD-RW/DVD-RWドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続します。

```
XSCF> cfgdevice -c attach -p 0-0
Are you sure you want to attach the device [y|n] :y
Completed.
```

- 使用例 3** CD-RW/DVD-RWドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 から切り離します。

```
XSCF> cfgdevice -f -c detach -p 0-0
Are you sure you want to detach the device [y|n] :y
Completed.
```

使用例 4 M8000 サーバおよび拡張筐体なし M9000 サーバで、現在設定されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの状態を表示します。

```
XSCF> cfgdevice -l
Current connection for DVD/DAT: port 0-0
Expander status
Port No. IOU/SAS-status SAS-status
-----
0-0      enable up      enable up
0-2      disable down   enable up
```

使用例 5 拡張筐体つき M9000 サーバで、現在設定されている CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットの状態を表示します。

```
XSCF> cfgdevice -l
Current connection for DVD/DAT:
  Main chassis:      port 0-0
  Expansion chassis: port 8-0
Expander status
Port No. IOU/SAS-status SAS-status
-----
0-0      enable up      enable up
0-2      disable down   enable up
0-4      disable down   enable up
0-6      disable down   enable up
1-0      disable down   enable up
1-2      disable down   enable up
1-4      disable down   enable up
1-6      disable down   enable up
2-0      disable down   enable up
2-2      disable down   enable up
2-4      disable down   enable up
2-6      disable down   enable up
8-0      enable up       enable up
8-2      disable down   enable up
8-4      disable down   enable up
8-6      disable down   enable up
```

使用例 6 システムの電源が投入されているときに、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> cfgdevice -y -c attach -p 0-0
Are you sure you want to attach the device [y/n] :y
Completed.
```

使用例 7 システムの電源が投入されているときに、CD-RW/DVD-RW ドライブユニットおよびテープドライブユニットをポート番号 0-0 に接続します。

メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> cfgdevice -q -y -c attach -p 0-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

cfgdevice(8)



名前	clockboard - システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定または表示します。
形式	clockboard clockboard -s CLKU_B-number clockboard -h
説明	<p>clockboard(8) は、次回システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定する、または現在使用されているクロックコントロールユニットと次回システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを表示するコマンドです。</p> <p>clockboard(8) コマンドは M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。</p> <p>クロックコントロールユニットは 0 または 1 の番号で設定または表示されます。何も指定しないで clockboard(8) コマンドを実行した場合は、現在動作しているクロックコントロールユニット番号、および次回システム起動時に使用されるクロックコントロールユニット番号が表示されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-s CLKU_B-number 次回システムの電源を投入したときに使用されるクロックコントロールユニット番号を指定します。CLKU_B-number には 0 または 1 のどちらかを指定できます。</p>
使用例	<p>使用例 1 現在使用されているクロックコントロールユニットと次回システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを表示します。</p> <pre>XSCF> clockboard current CLKU_B number :0 next CLKU_B number :1</pre> <p>使用例 2 次回システム起動時に使用されるクロックコントロールユニットを設定します。</p> <pre>XSCF> clockboard -s 1</pre>

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- | | |
|----|------------------|
| 0 | 正常に終了したことを表します。 |
| >0 | エラーが発生したことを表します。 |

名前	console - ドメインコンソールに接続します。
形式	console [[-q] -{y n}] -d <i>domain_id</i> [-f -r] [-s <i>escapeChar</i>] console -h
説明	<p>console(8) は、XSCF シェルコンソールから、指定したドメインのコンソール (ドメインコンソール) に接続するコマンドです。</p> <p>ドメインコンソールには、書き込み可能コンソールと読み取り専用コンソールがあります。1つのドメインに対して、書き込み可能コンソールは1つだけ、読み取り専用コンソールは複数接続できます。すでに書き込み可能コンソールが接続されている場合に、書き込み可能コンソールに接続しようとするエラーになります。この場合でも、<code>platadm</code> または <code>domainadm</code> 権限を持つユーザーであれば、強制的に書き込み可能コンソールに接続できます。このとき、現在接続されている書き込み可能コンソールは切断されます。</p> <p>ドメインコンソールを終了して XSCF シェルコンソールに戻る場合は、Enter キーを押してから、"#" と "." (ピリオド) を入力します。</p> <p>注 - ドメインからログアウトしないで、ドメインコンソールから XSCF シェルコンソールに戻った場合は、自動的にドメインからログアウトされます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p><code>platadm</code>, <code>platop</code>, <code>fieldeng</code> すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p><code>domainadm</code>, <code>domainmgr</code>, <code>domainop</code> アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -d <i>domain_id</i> 接続するドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で1つだけ指定できます。 -f 強制的に書き込み可能コンソールに接続します。現在接続されている書き込み可能コンソールは切断されます。<code>platadm</code> または対象ドメインの <code>domainadm</code> 権限を持つユーザーだけが指定できます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

- r 読み取り専用コンソールに接続します。
- s *escapeChar* エスケープ記号を指定します。デフォルトは "#" です。
escapeChar として、以下の文字を指定できます。*escapeChar* は
" " "(二重引用符) で囲んで指定します。
"#", "@", "^", "&", "?", "*", "=", ".", "|"
指定したエスケープ記号は console(8) コマンドを実行したセッションにだけ有効です。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ドメインコンソールでは、行頭文字で使用される "#" はエスケープ記号とみなされません。エスケープ記号は、コンソールに対して特別な処理をさせる場合に指定します。 "#" との組み合わせで指定できる処理の例は、以下のとおりです。

"#" と "?" ステータスメッセージを出力します。

"#" と "." (ピリオド) コンソールを切断します。

- 行頭でコンソールに "#" を入力する場合は、 "#" を 2 回入力します。
- 現在接続されているドメインコンソールの情報を表示する場合は、`showconsolepath(8)` コマンドを使用します。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

`sendbreak(8)`, `showconsolepath(8)`

名前	deleteboard - システムボード (XSB) をドメイン構成から切り離します。
形式	<pre>deleteboard [[-q] -{Y n}] [-f] [-v] [-c disconnect] xsb [xsb...] deleteboard [[-q] -{Y n}] [-f] [-v] -c unassign xsb [xsb...] deleteboard [[-q] -{Y n}] [-f] [-v] -c reserve xsb [xsb...] deleteboard -h</pre>
説明	<p>deleteboard(8) は、現在組み込まれているドメイン構成から XSB を切り離すコマンドです。</p> <p>deleteboard(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。</p> <p>以下のいずれかの切り離し手段が指定できます。</p> <p>disconnect XSB をドメイン構成から切り離して、割り当て状態にします。XSB はドメイン構成に割り当てられたままのため、ドメインを再起動するか <code>addboard(8)</code> コマンドを実行することで、再びドメインに組み込むことができます。</p> <p>unassign XSB をドメイン構成から完全に切り離して、システムボードプールにします。システムボードプールとなった XSB は、他のドメイン構成に組み込んだり、割り当てたりできるようになります。</p> <p>reserve XSB をドメイン構成からすぐに切り離さず、切り離しの予約だけを行います。予約されたあとは、指定したドメインの電源が切断されたときに、ドメイン構成から XSB が切り離され、システムボードプールになります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- c disconnect XSB をドメイン構成から切り離して、割り当て状態にします。-c オプションを省略した場合は、"-c disconnect" が指定されたときみなされます。
- c reserve XSB の切り離しを予約します。-c オプションを省略した場合は、"-c disconnect" が指定されたときみなされます。
- c unassign XSB をドメイン構成から完全に切り離して、システムボードプールにします。-c オプションを省略した場合は、"-c disconnect" が指定されたときみなされます。
- f 指定した XSB を、強制的に切り離します。

注意 - -f オプションにより強制的にドメインから XSB を切り離す場合、CPU バインドしているプロセスや、デバイスをアクセスしているプロセスに対し、重要な問題が発生する可能性があります。そのため、-f オプションは通常の運用では使用しないことを推奨します。-f オプションを指定した場合は、必ずドメインの状態や業務プロセスの状態を確認してください。

- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。
- n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- v 詳細なメッセージを表示します。-q オプションと一緒に指定した場合は無効となります。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペラント

以下のオペラントがサポートされます。

xsb 切り離す XSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

```
x-y
x          00 から 15 までの整数で指定します。
y          0 から 3 までの整数で指定します。
```

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

- "-c disconnect" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、またはすでに XSB がドメイン構成から切り離されているときは、何も実行されません。ドメインの電源が投入処理中や切断処理中の場合はエラーとなります。
- "-c unassign" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、またはすでに XSB がドメイン構成から切り離されているときでも、XSB は割り当て状態からシステムボードプールに切り替えられます。XSB がすでにシステムボードプールのときは、何も実行されません。
- "-c reserve" を指定した場合に、ドメインの電源が切断されている、またはすでに XSB がドメイン構成から切り離されているときは、ただちに、割り当て状態からシステムボードプールへ切り替えられます。XSB がすでにシステムボードプールのときは、何も実行されません。ドメインの電源が投入処理中や切断処理中の場合はエラーとなります。
- XSB を切り離す場合には、XSB 上のハードウェアリソースがオペレーティングシステムから切り離されます。したがって、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
- XSB が割り当てられた状態とは、指定したドメインへの組み込みが予約された状態のことです。ドメインを再起動するか `addboard(8)` コマンドを実行することで組み込まれます。すでに割り当てられている XSB を、他のドメインから、組み込み、割り当ての対象として指定することはできません。
- システムボードプールとは、どのドメインにも属していない状態のことです。システムボードプールの XSB はどのドメインにも属していないため、自由に、割り当てたり組み込んだりできます。

使用例

使用例 1 XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 をシステムボードプールにします。

```
XSCF> deleteboard -c unassign 00-0 01-0 02-0 03-0
```

使用例 2 XSB#00-0, #01-0, #02-0, #03-0 の切り離しを予約します。

```
XSCF> deleteboard -c reserve 00-0 01-0 02-0 03-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- | | |
|----|------------------|
| 0 | 正常に終了したことを表します。 |
| >0 | エラーが発生したことを表します。 |

関連項目

`addboard(8)`, `moveboard(8)`, `replacefru(8)`, `setdcl(8)`, `setupfru(8)`, `showboards(8)`, `showdcl(8)`, `showdevices(8)`, `showdomainstatus(8)`, `showfru(8)`

deleteboard(8)



名前	deletecodlicense - キャパシティオンデマンド (COD) Right-To-Use (RTU) ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから削除します。
形式	deletecodlicense [-f] <i>license-signature</i> deletecodlicense -h
説明	deletecodlicense(8) コマンドは、指定された COD RTU ライセンスキーをサービスプロセッサ上の COD ライセンスデータベースから削除するコマンドです。 deletecodlicense(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。 COD RTU ライセンスキーの詳細については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。 COD RTU ライセンスの数と使用中の COD CPU の数がシステムによって確認されます。COD RTU ライセンスを削除するとライセンスの数が使用中の CPU の数を下回る場合、ライセンスキーは COD RTU ライセンスデータベースから削除されません。この場合、COD RTU ライセンスキーを削除するには、使用中の COD CPU の数を減らす必要があります。適切な数のドメインを電源を切断するか、Dynamic Reconfiguration (DR) 操作によって適切な数のシステムボード (XSB) を切断します。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -f 指定された COD RTU ライセンスキーを COD ライセンスデータベースから強制的に削除します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>license-signature</i> COD ライセンスデータベースから削除する COD RTU ライセンスキーを指定します。
使用例	使用例 1 COD RTU ライセンスキーを削除します。 XSCF> deletecodlicense \ 01:84000000:104:0301010100:3:00000000:XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

deletecodlicense(8)

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodlicense(8), **setcod(8)**, **showcod(8)**, **showcodlicense(8)**,
showcodusage(8)

名前	deletefru - Field Replaceable Unit (FRU) を減設します。
形式	deletefru deletefru -h
説明	deletefru(8) は、FRU を減設するコマンドです。 このコマンドは M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。 FRU の減設に必要な FRU の選択、確認、取り外しなどの設定を、メニュー形式で対話的に行うことができます。 deletefru(8) コマンドでは、以下の FRU を減設できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU / メモリボードユニット (CMU) ■ I/O ユニット (IOU)
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	addfru (8) , deleteboard (8) , replacefru (8) , setupfru (8) , showdomainstatus (8) , showfru (8) , showhardconf (8) , unlockmaintenance (8)

deletefru(8)



名前	deleteuser - XSCF ユーザーアカウントを削除します。
形式	deleteuser <i>user</i> deleteuser -h
説明	deleteuser(8) は、XSCF ユーザーアカウントを削除するコマンドです。 deleteuser(8) コマンドを実行すると、XSCF ユーザーアカウント、およびパスワードや Secure Shell (SSH) 用の公開鍵など、ユーザーアカウントに関連づけられているすべてのデータが削除されます。 ユーザーアカウントを削除すると、削除したユーザーアカウントで実行している XSCF シェルや XSCF Web のセッションが同時に終了します。ユーザーアカウントがシステムから削除されるので、そのユーザーアカウントではログインできなくなります。自分のアカウントを削除することはできません。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>user</i> 削除する XSCF ユーザーアカウントを指定します。
使用例	使用例 1 ユーザーを削除します。 XSCF> deleteuser jsmith
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	adduser (8) , disableuser (8) , enableuser (8)

deleteuser(8)



名前	disableuser - XSCF ユーザーアカウントを無効にします。
形式	disableuser <i>user</i> disableuser -h
説明	<p>disableuser(8) は、次回以降のログインで XSCF ユーザーアカウントを無効にするコマンドです。</p> <p>現在ログイン中のセッションには影響を与えません。無効にしたユーザーアカウントは、ログインに使用できなくなります。この設定は、Secure Shell(SSH) だけでなくシリアル接続されたコンソールや Telnet 接続にも適用されます。XSCF Web ログインも無効になります。ユーザーアカウントに関連づけられているすべてのデータは XSCF 内に保存されています。データにはパスワードと SSH キーも含まれます。enableuser(8) コマンドを使用すると、無効になっているユーザーアカウントを再び有効にできます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>user</i> 無効にする XSCF ユーザーアカウントを指定します。</p>
使用例	<p>使用例 1 ユーザーアカウントを無効にします。</p> <p>XSCF> disableuser jsmith</p>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	adduser (8), deleteuser (8), enableuser (8), showuser (8)

disableuser(8)



名前	dumpconfig - システム構成情報を保存します。
形式	dumpconfig [-v] [-V] [[-q] -{y n}] [-e [-P <i>password</i>]] [-c <i>comment</i>] [-u <i>user</i>] [-p <i>proxy</i> [-t <i>proxy_type</i>]] <i>url</i> dumpconfig -h
説明	dumpconfig(8) は、ユーザーが指定したファイルへ、システム構成情報をダウンロードするコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 platadm, platop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -c <i>comment</i> 保存された複数のシステム構成情報を区別できるように、ファイルにコメントを設定します。コメントは XSCF で読み込まれることはありません。132 文字以内で指定します。 -e ファイルを暗号化します。"-P <i>password</i> " でパスワードを指定できます。"-P <i>password</i> " を省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。システム構成情報が暗号化されると、パスワードがなければ解読することができなくなります。パスワードを紛失してしまった場合は、システム構成情報は復元できません。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -P <i>password</i> 暗号化するためのパスワードを設定します。-e オプションと一緒に指定します。-P オプションを省略した場合は、パスワードを設定するためのプロンプトが表示されます。 -p <i>proxy</i> 転送に使用するプロキシサーバを指定します。"-t <i>proxy_type</i> " を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。 <i>proxy</i> は <i>servername:port</i> の形式で指定します。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -t <i>proxy_type</i> プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http, socks4, socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

- u *user* 認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
- v 詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
- V 詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。 .

- url* システム構成情報の保存先となる URL を指定します。以下のよう
な形式がサポートされています。


```

http://server[:port]/path/file
https://server[:port]/path/file
ftp://server[:port]/path/file
file:///media/usb_msd/path/file

```

使用例

使用例 1 FTP サイトにシステム構成情報を保存します。

```

XSCF> dumpconfig -V -p 129.145.155.156:8080 -u minilla ftp:/
10.7.79.18/sollgell/proxytest-ftp.cfg
transfer from '/tmp/dumpconfig.EvY1Yf' to 'ftp://10.7.79.18/sollgell/
proxytest-ftp.cfg'
Password:
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
* Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
* Proxy auth using (nil) with user ''
* Server auth using Basic with user 'minilla'
> PUT ftp://10.7.79.18/iktest/proxytest-ftp.cfg HTTP/1.1
Authorization: Basic bHdhbmc6bHdhbmc=
User-Agent: dumpconfig
Host: 10.7.79.18:21
Pragma: no-cache
Accept: */*
Content-Length: 24720
Expect: 100-continue
< HTTP/1.1 100 Continue
< HTTP/1.1 200 OK
< Server: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Date: Mon, 04 Aug 2008 16:46:11 GMT
< Transfer-encoding: chunked
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
operation completed
XSCF>

```

使用例 2 http サイトにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -v -p 129.145.155.166:8080 http://10.7.79.18/
sollgell/proxytest.cfg
reading database ... .....*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...done
removing temporary file ... done
operation completed
XSCF>
```

使用例 3 https サイトにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -V -p 129.145.155.166:8080 http://10.7.79.18/
sollgell/proxytest-https.cfg
transfer from '/tmp/dumpconfig.ZMCI3d' to 'http://10.7.79.18/iktest/
proxytest-https.cfg'
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
* Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
> > PUT http://10.7.79.18/iktest/proxytest-https.cfg HTTP/1.1
User-Agent: dumpconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
Content-Length: 24720
Expect: 100-continue
< HTTP/1.1 100 Continue
< HTTP/1.1 204 No Content
< Content-type: text/html
< Date: Mon, 04 Aug 2008 16:42:46 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27 OpenSSL/0.9.7d
< Via: 1.1 proxy-proxy
< Proxy-agent: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
operation completed
XSCF>
```

使用例 4 USB デバイスにシステム構成情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -v -V file:///media/usb_msd/proxytest.cfg
Making sure mount point is clear
Trying to mount USB device /dev/sda1 as /media/usb_msd
Mounted USB device
file '/media/usb_msd/proxytest.cfg' already exists
Do you want to overwrite this file? [y|n]: y
removing file 'file:///media/usb_msd/proxytest.cfg' ... done
reading database ... .....*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...transfer from '/tmp/dumpconfig.HE1RZa' to
'file:///media/usb_msd/san-ff1-54.cfg'
done
```

dumpconfig(8)

```
removing temporary file ... done
operation completed
Unmounted USB device
XSCF>
```

使用例 5 システム構成情報を暗号化してパスワード保護します。

```
XSCF> dumpconfig -v -e -P kamacuras -p 129.145.155.166:8080 http:/
/10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg
reading database ... .....*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...done
removing temporary file ... done
operation completed
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

restoreconfig(8)

名前	enableuser - XSCF ユーザーアカウントを有効にします。
形式	enableuser <i>user</i> enableuser -h
説明	enableuser(8) は、無効になっている XSCF ユーザーアカウントを有効にするコマンドです。 有効になったユーザーアカウントは、Secure Shell (SSH) を使用して、コンソールでのログインに使用できるようになります。enableuser(8) コマンドを使用すると、disableuser(8) コマンドで無効にしたアカウントを再び有効にすることができます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>user</i> 有効にする XSCF ユーザーアカウントを指定します。
使用例	使用例 1 ユーザーアカウントを有効にします。 XSCF> enableuser jsmith
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	adduser (8), deleteuser (8), disableuser (8), showuser (8)

enableuser(8)



名前	exit - XSCF シェルを終了します。
形式	exit
説明	exit(1) は、XSCF シェルを終了して閉じるコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

exit(1)



名前	flashupdate - ファームウェアをアップデートします。
形式	<pre>flashupdate -c check -m xcp -s version</pre> <pre>flashupdate [[-q] -{Y n}] -c update -m xcp -s version</pre> <pre>flashupdate -c sync</pre> <pre>flashupdate -h</pre>
説明	<p>flashupdate(8) はファームウェアをアップデートするコマンドです。</p> <p>以下のファームウェア全体をアップデートします。アップデートする場合には、アップデートが可能かどうかを事前に確認することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ファームウェア全体(XSCF, Power-On Self-Test(POST)を含むOpenBoot PROM)のアップデート (xcp)
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。 .</p> <ul style="list-style-type: none"> -c check 指定したファームウェアのアップデートが可能かどうかを確認します。 -c update 指定したファームウェアをアップデートします。M8000/M9000 サーバの場合は、両方の XSCF ユニットのファームウェアがアップデートされます。 -c sync M8000/M9000 サーバの場合に、XSCF ユニット間のファームウェアの版数を合わせます。XSCF ユニットの交換した場合などに使用します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -m xcp ファームウェア全体を対象にします。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。

- q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- s *version* XCP 総合版数を指定します。*version* にはメジャー版数、マイナー版数、マイクロ版数を続けて指定します。
- XCP の版数は「xyz」のように 4 桁で表されます。各番号の意味は以下のとおりです。
- | | |
|-----------|------------|
| <i>x</i> | メジャーリリース番号 |
| <i>yy</i> | マイナーリリース番号 |
| <i>z</i> | マイクロリリース番号 |
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ファームウェアをアップデートする場合、XSCF ユニットがリセットされます。そのため、XSCF に LAN 接続している場合には、いったん接続が切断されます。
- 故障している Field Replaceable Unit (FRU) がある場合は、ファームウェアはアップデートできません。FRU の故障を解消してからアップデートしてください。

使用例

使用例 1 ファームウェア全体を 1020 版にアップデート可能かどうかを確認します。

```
XSCF> flashupdate -c check -m xcp -s 1020
```

使用例 2 ファームウェア全体を 1010 版から 1020 版にアップデートします。

```
XSCF> flashupdate -c update -m xcp -s 1020
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
XCP update is started (XCP version=1020:last version=1010)
OpenBoot PROM update is started
OpenBoot PROM update has been completed (OpenBoot PROM version=01010001)
XSCF update is started (SCF=0, bank=1, XCP version=1020:last version=1010)
XSCF download is started (SCF=0, bank=1, XCP version=1020:last version=1010, Firmware Element ID=00:version=01010002:last version=01010001)
XSCF download has been completed (SCF=0, bank=1, XCP version=1020:last version=1010, Firmware Element ID=00:version=01010002:last version=01010001)
:
:
XSCF download is started (SCF=0, bank=1, XCP version=1020:last version=1010, Firmware Element ID=07:version=01010002:last version=01010001)
XSCF download has been completed (SCF=0, bank=1, XCP version=1020:last version=1010, Firmware Element ID=07:version=01010002:last version=01010001)
XSCF update has been completed (SCF=0, bank=1, XCP version=1020:last version=1010)
```

```

XSCF update is started (SCF=0, bank=0, XCP version=1020:last version=1010)
XSCF download is started (SCF=0, bank=0, XCP version=1020:last
version=1010, Firmware Element ID=00:version=01010002:last
version=01010001)
XSCF download has been completed (SCF=0, bank=0, XCP version=1020:last
version=1010, Firmware Element ID=00:version=01010002:last
version=01010001)
:
:
XSCF download is started (SCF=0, bank=0, XCP version=1020:last
version=1010, Firmware Element ID=07:version=01010002:last
version=01010001)
XSCF download has been completed (SCF=0, bank=0, XCP version=1020:last
version=1010, Firmware Element ID=07:version=01010002:last
version=01010001)
XSCF is rebooting to update the reserve bank

```

使用例 3 M8000/M9000 サーバで、XSCF ユニット交換後にファームウェアの版数を合わせます。

```
XSCF> flashupdate -c sync
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```

0          正常に終了したことを表します。
>0        エラーが発生したことを表します。

```

関連項目

version (8)

flashupdate(8)



名前	fmadm - 故障管理に関連するシステム構成パラメータを表示します。
形式	fmadm [-q] config fmadm -h
説明	<p>fmadm(8) は、故障管理に関連するシステム構成パラメータを表示するコマンドです。</p> <p>fmadm(8) コマンドを使用して、以下のことができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在、故障管理に関与している診断エンジンと診断エージェントのセットを表示する ■ 故障があると診断されたシステムコンポーネントのリストを表示する <p>Fault Manager と呼ばれるモジュールにより、可能なアクティビティは自動化されているため、通常は fmadm(8) コマンドを使用する必要はありません。システム管理者または当社技術員の支援が必要になると、Fault Manager はその旨を示すメッセージを表示します。また、関連する情報記事が記載されている URL を参照するように指示します。このウェブサイトで、fmadm(8) コマンドまたは別の故障管理ユーティリティを使用してより多くの情報を収集するか、追加タスクを実行するよう指示されることがあります。故障管理アクティビティを監視するツールの詳細については、fmdump(8) コマンドを参照してください。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platop, platadm, fieldeng</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p>
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p>config Fault Manager の構成を表示します。具体的には、モジュール名、バージョン、各コンポーネントモジュールの説明などを表示します。Fault Manager のモジュールは各種サービス (自動診断、自己修復、システム上のハードウェアとソフトウェアのメッセージ機能など) を提供します。</p>

使用例

使用例 1 Fault Manager の設定を表示します。

```
XSCF> fmadm config
MODULE          VERSION STATUS  DESCRIPTION
case-close      1.0   active  Case-Close Agent
fmd-self-diagnosis 1.0   active  Fault Manager Self-Diagnosis
sysevent-transport 1.0   active  SysEvent Transport Agent
syslog-msgs     1.0   active  Syslog Messaging Agent
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

fmdump (8), **fmstat** (8)

名前	fmdump - 故障管理に関連するログを表示します。
形式	<p>fmdump</p> <p>fmdump [-e] [-f] [-M] [-v] [-V] [-c <i>class</i>] [-t <i>time</i>] [-T <i>time</i>] [-u <i>uuid</i>]</p> <p>fmdump -m [-M] [-t <i>time</i>] [-T <i>time</i>]</p> <p>fmdump -h</p>
説明	<p>fmdump(8) は、Fault Manager と呼ばれるモジュールで管理されているログの内容を表示するコマンドです。</p> <p>Fault Manager は、システムのバックグラウンドで動作します。XSCF によって検出された故障をエラーログに記録し、故障のあるコマンドを無効にするなどの自己修復を行います。</p> <p>Fault Manager では、以下の 2 つのログが管理されています。これらのログは、システム管理者や当社技術員によって使用されます。</p> <p>エラーログ システムによって検出された問題の症状を表すエラーが記録されます。</p> <p>フォールトログ それらの症状を解明すると考えられる、問題の故障診断情報が記録されます。fmdump(8) コマンドは、デフォルトでフォールトログの内容を表示します。フォールトログには、Fault Manager またはそのコンポーネントモジュールのいずれかで行われた各診断の結果が記録されます。</p> <p>フォールトログに記録された各問題は、以下の項目によって識別されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 問題が診断された時刻 ■ 任意のシステム内で、問題を一意に識別するために使用できる Universal Unique Identifier (UUID) ■ 指定されたウェブサイトに掲載されている、関連記事にアクセスするために使用できるメッセージ識別子 (MSG-ID) <p>システム管理者や当社技術員による作業が必要となったり、システムの動作に影響を及ぼしたりするような問題の場合は、Fault Manager から、メッセージが出力されます。</p> <p>出力されたメッセージには、問題の概要と、指定されたウェブサイト上にある関連情報への参照先が含まれています。</p> <p>-v オプションおよび-V オプションを使用すると、1 行の概要ではなく、ログに記録されたイベントごとに詳細を表示できます。-M オプションを使用すると、1 画面ずつ表示できます。-c、-t、-T、および-u の各オプションは、指定した <i>class</i>、時刻の範囲、または <i>uuid</i> に一致するイベントだけを選択して、出力できます。異なるフィルタオプションを複数指定した場合は、それらのオプションの論理和で選択されたイ</p>

ベントだけが表示されます。同じフィルタオプションを複数指定した場合は、それらのオプションの論理積で選択されたイベントがすべて表示されます。

-m オプションを使用すると **Fault Manager syslog** の内容を表示できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細については、**setprivileges(8)** コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- c *class* 指定されたクラスに一致するイベントを出力します。*class* には一般的なワイルドカードが使用できます。これは、一般的なファイルのパターンマッチングに似ています。たとえば、*xyz.** は *xyz.sxc* および *xyz.pdf* と一致します。*class* は、テレメトリイベントのタイプを示す階層的な分類を表します。
- e フォールトログではなく、エラーログからイベントを表示します。

エラーログには、XSCF の自動診断ソフトウェアで使用される **Private** テレメトリ情報が含まれています。この情報は、問題やイベントの再現について事後分析を容易にするために記録されます。そのため、エラーログの内容をスクリプトやその他のツールを開発する目的で、解析および使用することはできません。
- f コマンド実行後に、ダンプファイルに追加された行だけを表示します。Ctrl+C キーで割り込みが発生するまで出力されます。
- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- m **Fault Manager** の **syslog** メッセージの内容を表示します。
- M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
- t *time* 時刻を指定してイベントを表示する場合の、開始時刻を指定します。*time* には、この項のあとに記載されている形式で指定できます。-T オプションと一緒に使用すると、範囲を指定できます。
- T *time* 時刻を指定してイベントを表示する場合の、終了時刻を指定します。*time* には、-t オプションと同じ形式を使用できます。-t オプションと一緒に使用すると、範囲を指定できます。

- `-u uuid` 故障診断イベントの内容を `uuid` によってフィルタリングします。各診断は、識別のために `UUID` に関連づけられています。`-u` オプションは、`-v` など、他のオプションと組み合わせることで、特定の診断に関連づけられている詳細情報をすべて表示できます。
- `-e` オプションと `-u` オプションを同時に指定すると、関連するエラーイベントを表示できます。
- `-v` 詳細なイベント情報を表示します。選択されたイベントに含まれる他の情報を表示するために、イベントの表示が拡大されます。
- `-V` より詳細なイベント情報を表示します。各イベントに関連づけられている値と、名前の対応リストに含まれる情報をすべて表示するために、イベントの表示が拡大されます。さらに、フォールトログの場合は、診断に関連づけられた、対応するエラーへの相互参照のリストがイベントの表示に追加されます。

時刻の形式は、以下のとおりです。

時刻の形式	説明
<code>"mm/dd/yy hh:mm:ss"</code>	月、日、年をスラッシュ (/) で、時 (24 時間制)、分、秒をコロン (:) で区切って指定します。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
<code>"mm/dd/yy hh:mm"</code>	月、日、年をスラッシュ (/) で、時 (24 時間制)、分をコロン (:) で区切って指定します。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
<code>mm/dd/yy</code>	月、日、年をスラッシュ (/) で区切って指定します。時刻は午前 12 時 00 分 00 秒とみなされます。
<code>"ddMonyy hh:mm:ss"</code>	日、月の名称、年と、時 (24 時間制)、分、秒をコロン (:) で区切って指定します。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
<code>"Mon dd hh:mm:ss"</code>	月の名称、日をスペースで、時 (24 時間制)、分、秒をコロン (:) で区切って指定します。年は本年とみなされます。日付と時刻の間はスペースで区切ります。全体は引用符で囲みます。
<code>"yyyy-mm-dd [T hh:mm[:ss]]"</code>	年、月、日をハイフン (-) で、時 (24 時間制)、分、秒をコロン (:) で指定します。T は 10 進数表記の整数値です。秒、または時、分、および秒は、オプションで省略可能です。日付と時刻の間はスペースで区切ります。日付と時刻を指定した場合は、全体を引用符で囲みます。

<i>ddMonyy</i>	日、月の名称、年を指定します。時刻は午前 12 時 00 分 00 秒とみなされます。
<i>hh:mm:ss</i>	時 (24 時間制)、分、秒をコロン (:) で区切って指定します。日付は本日とみなされます。
<i>hh:mm</i>	時 (24 時間制)、分をコロン (:) で区切って指定します。日付は本日とみなされます。
<i>Tns Tnsec</i>	<i>T</i> ナノ秒前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。
<i>Tus Tusec</i>	<i>T</i> マイクロ秒前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。
<i>Tms Tmsec</i>	<i>T</i> ミリ秒前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。
<i>Ts Tsec</i>	<i>T</i> 秒前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。
<i>Tm Tmin</i>	<i>T</i> 分前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。
<i>Th Thour</i>	<i>T</i> 時間前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。
<i>Td Tday</i>	<i>T</i> 日前。 <i>T</i> は 10 進数表記の整数値で指定します。

.n という形式の小数部を -t オプションの引数に付加して、指定時刻の秒以下の小数を表すことができます。

使用例

使用例 1 フォールトログを表示します。

```
XSCF> fmdump
TIME                               UUID                               MSG-ID
Aug 12 16:12:13.2811 7868c1cc-23d4-c575-8659-85cdb61842e FMD-8000-77
Aug 12 16:12:13.2985 7868c1cc-23d4-c575-8659-85cdb61842e FMD-8000-77
Sep 01 16:06:57.5839 3ceca439-b0b2-4db1-9123-c8ace3f2b371 FMD-8000-77
Sep 01 16:06:57.6278 3ceca439-b0b2-4db1-9123-c8ace3f2b371 FMD-8000-77
Sep 06 09:37:05.0983 6485b42b-6638-4c5d-b652-bec485290788 LINUX-8000-1N
Sep 06 09:38:10.8584 77435994-5b99-4db8-bdcd-985c7d3ae3e4 LINUX-8000-1N
Sep 06 09:57:44.6502 0087d58c-e5b9-415d-91bc-adf7c41dd316 LINUX-8000-1N
Sep 06 12:40:59.2801 97de2cef-8ea1-407a-8a53-c7a67e61987a LINUX-8000-1N
Sep 06 12:41:10.1076 fa7304f9-c9e8-4cd1-9ca5-e35f57d53b2c LINUX-8000-1N
Sep 06 13:01:49.1462 ce550611-4308-4336-8a9a-19676f828515 LINUX-8000-1N
Sep 06 15:42:56.6132 0f4b429f-c048-47cd-9d9f-a2f7b6d4c957 LINUX-8000-1N
Sep 06 16:07:14.4652 7d5fb282-e01b-476a-b7e1-1a0f8de80758 LINUX-8000-1N
Sep 06 16:08:16.3755 41379237-9750-4fd6-bce3-b5131d864d34 LINUX-8000-1N
Sep 29 14:49:27.8452 0455ceaa-e226-424a-9b34-27603ca603f1 FMD-8000-58
Sep 29 15:02:00.3039 fb550ebc-80e9-41c8-8afc-ac680b9eb613 FMD-8000-58
Sep 29 15:09:25.4335 8cec9a83-e2a3-4dc3-a7cd-de01caef5c63 FMD-8000-4M
Sep 29 15:10:09.6151 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed FMD-8000-58
```

使用例 2 フォールトログの詳細な情報を表示します。

```
XSCF> fmdump -v
TIME                UUID                MSG-ID
Nov 30 20:44:55.1283 9f773e33-e46f-466c-be86-fd3fcc449935 FMD-8000-0W
 100% defect.sunos.fmd.nosub
:
```

使用例 3 最後の UUID に対するエラーログのすべての情報を表示します。

```
XSCF> fmdump -e -V -u 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed
TIME                CLASS
Sep 29 2005 15:10:09.565220864 ereport.io.iox.cp.seeprom0.nresp
nvlist version: 0
  detector = (embedded nvlist)
  nvlist version: 0
    scheme = hc
    version = 0
    hc-root = /
    hc-list_sz = 0x1
    hc-list = (array of embedded nvlists)
    (start hc-list[0])
    nvlist version: 0
      scheme = hc
      hc-name = iox
      hc-id = 0
    (end hc-list[0])
  (end detector)
IOXserial_no = 123456
class = ereport.io.iox.cp.seeprom0.nresp
ena = 0x921b650000000001
```

使用例 4 最後の UUID に対するフォールトログの、すべての情報を表示します。

```
XSCF> fmdump -V -u 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed
TIME                UUID                MSG-ID
Sep 29 15:10:09.6151 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed FMD-8000-58
  TIME                CLASS                ENA
  Sep 29 15:10:09.5652 ereport.io.iox.cp.seeprom0.nresp
  0x921b650000000001
nvlist version: 0
  version = 0x0
  class = list.suspect
  uuid = 5f88d7d5-a107-4435-99c9-7c59479d22ed
  code = FMD-8000-58
  diag-time = 1128021009 615016
  de = (embedded nvlist)
  nvlist version: 0
    version = 0x0
    scheme = fmd
    authority = (embedded nvlist)
  nvlist version: 0
    version = 0x0
```

```

        product-id = SUNW,SPARC-Enterprise
        chassis-id = BF0000001V
        server-id = localhost
    (end authority)
    mod-name = sde
    mod-version = 1.13
(end de)
fault-list-sz = 0x1
fault-list = (array of embedded nvlists)
(start fault-list[0])
nvlst version: 0
    version = 0x0
    class = fault.io.iox.cp.seeprom
    certainty = 0x64
    fru = (embedded nvlst)
    nvlst version: 0
        scheme = hc
        version = 0x0
        hc-root =
        hc-list-sz = 0x1
        hc-list = (array of embedded nvlists)
        (start hc-list[0])
        nvlst version: 0
            hc-name = iox
            hc-id = 0
        (end hc-list[0])
    (end fru)
(end fault-list[0])

```

使用例 5 Fault Manager syslog メッセージの内容を表示します。

```

XSCF> fmdump -m -M
MSG-ID: FMD-8000-11, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor
EVENT-TIME: Tue Nov 7 07:01:44 PST 2006
PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: 7860000764, HOSTNAME: san-ff2-20-0
SOURCE: sde, REV: 1.5
EVENT-ID: 2dadde0-2f42-47ee-b5b2-57ae6a41bfc0
DESC: A Solaris Fault Manager component generated a diagnosis for which no
message summary exists. Refer to http://www.sun.com/msg/FMD-8000-11 for
more information.
AUTO-RESPONSE: The diagnosis has been saved in the fault log for
examination by Sun.
IMPACT: The fault log will need to be manually examined using fmdump(1M)
in order to determine if any human response is required.

MSG-ID: FMD-8000-11, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor
EVENT-TIME: Tue Nov 7 07:03:25 PST 2006
PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: 7860000764, HOSTNAME: san-ff2-20-0
SOURCE: sde, REV: 1.5
EVENT-ID: 2b03ab60-96db-439d-a13a-2f420a1b73c7

```

DESC: A Solaris Fault Manager component generated a diagnosis for which no message summary exists. Refer to <http://www.sun.com/msg/FMD-8000-11> for more information.

AUTO-RESPONSE: The diagnosis has been saved in the fault log for examination by Sun.

IMPACT: The fault log will need to be manually examined using `fmdump(1M)` in order to determine if any human response is required.

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。ログファイル内のすべてのレコードに対するが調査が正常に終了されています。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

fmadm(8), **fmstat(8)**

fmdump(8)



名前	fmstat - 故障管理モジュールの統計情報をレポートします。																						
形式	fmstat [-a] [-s] [-z] [-m <i>module</i>] [<i>interval</i>] [<i>count</i>] fmstat -h																						
説明	<p>fmstat(8) コマンドは、システム管理者や当社技術員が使用でき、Fault Manager と呼ばれるモジュールに関連づけられている統計情報とモジュールのセットをレポートします。</p> <p>Fault Manager は、各システムのバックグラウンドで動作します。XSCF によって検出されたテレメトリ情報を取得し、これらの問題を診断して、予測的自己修復アクティビティ (故障のあるコンポーネントの無効化など) を開始します。</p> <p>fmstat(8) コマンドを使用して、現在故障管理に関与している診断エンジンと診断エージェントに関する統計情報を表示できます。fmadm(8) コマンドおよび故障管理アクティビティを監視するツールの詳細については、fmdump(8) コマンドを参照してください。</p> <p>-m オプションを指定して fmstat(8) コマンドを実行すると、指定した故障管理モジュールによって保持されている統計情報がレポートされます。モジュールのリストは、fmadm config を使用して取得できます。</p> <p>-m オプションを指定せずに fmstat(8) コマンドを実行すると、そのクライアントモジュールごとに、以下の統計情報がレポートされます。</p> <table border="0" style="margin-top: 10px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">module</td> <td>fmadm config がレポートした故障管理モジュールの名前</td> </tr> <tr> <td>ev_recv</td> <td>モジュールが取得したテレメトリイベント数</td> </tr> <tr> <td>ev_acpt</td> <td>診断関連としてモジュールが取得したイベント数</td> </tr> <tr> <td>wait</td> <td>モジュールによる検査を待機していたテレメトリイベントの平均数</td> </tr> <tr> <td>svc_t</td> <td>モジュールが取得したテレメトリイベントの平均サービス時間 (ミリ秒)</td> </tr> <tr> <td>%w</td> <td>テレメトリイベントがモジュールによる検査を待機していた時間のパーセンテージ</td> </tr> <tr> <td>%b</td> <td>モジュールがテレメトリイベントを処理していた時間のパーセンテージ</td> </tr> <tr> <td>open</td> <td>モジュールが現在担当している問題 (未解決の問題の調査) の数</td> </tr> <tr> <td>solve</td> <td>このモジュールがロードされたあとに解決した問題の総数</td> </tr> <tr> <td>memsz</td> <td>このモジュールが現在割り当てているダイナミックメモリの容量</td> </tr> <tr> <td>bufsz</td> <td>このモジュールが現在割り当てている固定バッファの容量</td> </tr> </table>	module	fmadm config がレポートした故障管理モジュールの名前	ev_recv	モジュールが取得したテレメトリイベント数	ev_acpt	診断関連としてモジュールが取得したイベント数	wait	モジュールによる検査を待機していたテレメトリイベントの平均数	svc_t	モジュールが取得したテレメトリイベントの平均サービス時間 (ミリ秒)	%w	テレメトリイベントがモジュールによる検査を待機していた時間のパーセンテージ	%b	モジュールがテレメトリイベントを処理していた時間のパーセンテージ	open	モジュールが現在担当している問題 (未解決の問題の調査) の数	solve	このモジュールがロードされたあとに解決した問題の総数	memsz	このモジュールが現在割り当てているダイナミックメモリの容量	bufsz	このモジュールが現在割り当てている固定バッファの容量
module	fmadm config がレポートした故障管理モジュールの名前																						
ev_recv	モジュールが取得したテレメトリイベント数																						
ev_acpt	診断関連としてモジュールが取得したイベント数																						
wait	モジュールによる検査を待機していたテレメトリイベントの平均数																						
svc_t	モジュールが取得したテレメトリイベントの平均サービス時間 (ミリ秒)																						
%w	テレメトリイベントがモジュールによる検査を待機していた時間のパーセンテージ																						
%b	モジュールがテレメトリイベントを処理していた時間のパーセンテージ																						
open	モジュールが現在担当している問題 (未解決の問題の調査) の数																						
solve	このモジュールがロードされたあとに解決した問題の総数																						
memsz	このモジュールが現在割り当てているダイナミックメモリの容量																						
bufsz	このモジュールが現在割り当てている固定バッファの容量																						

ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, platop, fieldeng</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-a Fault Manager またはモジュールに関するすべての統計情報を表示します。</p> <p> -m オプションと一緒に指定しない場合は Fault Manager に関するすべての統計情報が表示され、-m オプションと一緒に指定した場合は指定したモジュールに関するすべての統計情報が表示されます。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-m <i>module</i> すべての統計情報のレポートではなく、指定された故障管理モジュールに関連づけられている統計情報のレポートを出力します。</p> <p> モジュールは任意の統計情報を発行して、故障管理ソフトウェア自体のサービスを支援することができます。</p> <p> -a オプションと一緒に指定しない場合はモジュールに保持されている統計情報だけが表示され、-a オプションと一緒に指定した場合はモジュールに保持されている統計情報とモジュールに関連づけられているすべての統計情報が表示されます。</p> <p>-s デフォルトの統計情報のレポートではなく、モジュールに関連づけられている Soft Error Rate Discrimination (SERD) エンジンのレポートを出力します。SERD エンジンは、故障管理ソフトウェアが使用して、任意の時間 <i>T</i> の <i>N</i> イベントの統計情報しきい値が超過したかどうかを判定するために設計されています。-s オプションと組み合わせて使用できるのは、-m オプションのみです。</p> <p>-z 指定された故障管理モジュールに関連づけられているレポートから、値がゼロの統計情報を除外します。-z オプションと組み合わせて使用できるのは、-m オプションのみです。</p>
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>count</i> <i>count</i> のレポートだけを出力して終了します。</p> <p><i>interval</i> <i>interval</i> 秒ごとに新しいレポートを出力します。</p> <p><i>count</i> も <i>interval</i> も指定しないと、1つのレポートが出力されたあと、fmstat(8) コマンドは終了します。</p>

interval を指定し、*count* を指定せずに `fmstat(8)` コマンドを実行すると、Ctrl+C キーによってこのコマンドへの割り込みが発生しない限り、*interval* 秒ごとにレポートが出力され続けます。

使用例

使用例 1 `syslog` モジュールに関する Fault Manager 統計情報を表示します。

```
XSCF> fmstat -a -m syslog-msgs
NAME VALUE DESCRIPTION
bad_code 0 event code has no dictionary name
bad_fmri 0 event fmri is missing or invalid
bad_time 0 event time is not properly encoded
bad_vers 0 event version is missing or invalid
fmd.accepted 0 total events accepted by module
fmd.buflimit 10M limit on total buffer space
fmd.buftotal 0 total buffer space used by module
fmd.caseclosed 0 total cases closed by module
fmd.caseopen 0 cases currently open by module
fmd.casesolved 0 total cases solved by module
fmd.ckptcnt 0 number of checkpoints taken
fmd.ckptrestore true restore checkpoints for module
fmd.ckptsave true save checkpoints for module
fmd.ckpttime 0d total checkpoint time
fmd.ckptzero false zeroed checkpoint at startup
fmd.debugdrop 4 dropped debug messages
fmd.dequeued 1 total events dequeued by module
fmd.dispatched 1 total events dispatched to module
fmd.dlastupdate 1144424838299131us hrtime of last event dequeue
completion
fmd.dropped 0 total events dropped on queue overflow
fmd.dtime 0d total processing time after dequeue
fmd.loadtime 1144424251692484us hrtime at which module was loaded
fmd.memlimit 10M limit on total memory allocated
fmd.memtotal 97b total memory allocated by module
fmd.prdequeued 0 protocol events dequeued by module
fmd.snaptime 1144424838299148us hrtime of last statistics snapshot
fmd.thrlimit 8 limit on number of auxiliary threads
fmd.thrtotal 0 total number of auxiliary threads
fmd.wcnt 0 count of events waiting on queue
fmd.wlastupdate 1144424838299131us hrtime of last wait queue update
fmd.wlentime 30us total wait length * time product
fmd.wtime 30us total wait time on queue
fmd.xprtlimit 256 limit on number of open transports
fmd.xprtopen 0 total number of open transports
fmd.xprtqlimit 256 limit on transport event queue length
log_err 0 failed to log message to log(7D)
msg_err 0 failed to log message to sysmsg(7D)
no_msg 0 message logging suppressed

XSCF> fmstat
module ev_rcv ev_acpt wait svc_t %w %b open solve memsz bufisz
case-close 0 0 0.0 0.0 0 0 0 0 0 0
```

fmstat(8)

fmd-self-diagnosis	1	1	0.0	0.2	0	0	1	0	27b	0
sysevent-transport	0	0	0.0	573.2	0	0	0	0	0	0
syslog-msgs	0	0	0.0	0.0	0	0	0	0	97b	0

使用例 2 FMD 自己診断モジュールに関する Fault Manager 統計情報を表示します。

```
XSCF> fmstat -z -m fmd-self-diagnosis
NAME VALUE DESCRIPTION
module 1 error events received from fmd modules
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

fmadm(8), **fmdump**(8)

名前	getflashimage - ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。
形式	<pre>getflashimage [-v] [[-q] -{y n}] [-u user] [-p proxy [-t proxy_type]] url getflashimage -l getflashimage [[-q] -{y n}] [-d] getflashimage -h</pre>
説明	<p>getflashimage(8) は flashupdate(8) コマンドで使用するファームウェアイメージファイルをダウンロードするコマンドです。</p> <p>現在、XSCF ユニット上に旧バージョンのファームウェアイメージファイルがある場合は、新しいバージョンのファームウェアイメージファイルがダウンロードされる前に削除されます。ダウンロードが成功したあとは、イメージファイルが正しいかどうかチェックされ、MD5 チェックサムが表示されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。.</p> <ul style="list-style-type: none"> -d XSCF ユニット上にある、旧バージョンのファームウェアイメージファイルをすべて削除します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -l XSCF ユニット上にある、ファームウェアイメージファイルの一覧を表示します。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -p <i>proxy</i> 転送に使用するプロキシサーバを指定します。"-t <i>proxy_type</i>" を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。<i>proxy</i> は <i>servername:port</i> の形式で指定します (使用例 3 を参照)。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -t <i>proxy_type</i> プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

- u *user* 認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
- v 詳細な情報を表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。 .

url ファームウェアイメージをダウンロードする URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

```
http://server[:port]/path/file
https://server[:port]/path/file
ftp://server[:port]/path/file
file:///media/usb_msd/path/file
```

file は以下のいずれかの値となります。

```
XCPvvvv.tar.gz
IKXCPvvvv.tar.gz
FFXCPvvvv.tar.gz
DCXCPvvvv.tar.gz
```

また、*vvvv* には 4 文字のバージョン番号が入ります。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

使用例

使用例 1 HTTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage http://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
      Version              Size Date
      FFXCP1040.tar.gz    46827123 Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
 43MB received
 44MB received
 45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a0
```

使用例 2 FTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
      Version                Size  Date
      FFXCP1040.tar.gz      46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
 43MB received
 44MB received
 45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a1
```

使用例 3 ポート番号 8080 の HTTP プロキシサーバを使用して、イメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -p webproxy.sun.com:8080 \
http://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
      Version                Size  Date
      FFXCP1040.tar.gz      46827123  Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
 43MB received
 44MB received
 45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a2
```

使用例 4 ユーザー名とパスワードを使用して、イメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -u jsmith \
http://imageserver/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
      Version                Size Date
      FFXCP1040.tar.gz      46827123 Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
Password: [not echoed]
      0MB received
      1MB received
      2MB received
...
      43MB received
      44MB received
      45MB received
Download successful: 46827KB at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a3
```

使用例 5 USB メモリスティックからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage file:///media/usb_msd/images/FFXCP1041.tar.gz
Existing versions:
      Version                Size Date
      FFXCP1040.tar.gz      46827123 Wed Mar 14 19:11:40 2007
Warning: About to delete existing versions.
Continue? [y|n]: y
Removing FFXCP1040.tar.gz.
Mounted USB device
      0MB received
      1MB received
...
      44MB received
      45MB received
Download successful: 46827 Kbytes in 109 secs (430.094 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a4
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

flashupdate(8)

名前	ioxadm - PCI ボックスを管理します。								
形式	<pre>ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] env [-e] [-l] [-t] [target [sensor]] ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] list [target] ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] locator [on off] [target] ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] poweroff target ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] poweron target ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] reset target ioxadm [-f] [-p] [-v] [-M] settled [on off slow fast] target led_type ioxadm -h</pre>								
説明	<p>ioxadm(8) は、システムに接続された PCI ボックスとリンクカードを管理するコマンドです。</p> <p>ioxadm(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。</p> <p>ioxadm(8) コマンドには、パラメータを持つオペランドおよび対象のデバイスを指定する必要があります。対象のデバイスに指定できるのは、ホストサーバ内蔵の PCI スロットに搭載されているダウンリンクカード、PCI ボックス、または PCI ボックス内部の Field Replaceable Unit (FRU) です。ダウンリンクカードは、ホストサーバからのダウンリンクカードまでのパスを表す文字列で識別されます。アップリンクカードは、I/O ボード内部の FRU です。</p>								
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>ユーザー権限</th> <th>オペランド</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>platop</td> <td>env, list</td> </tr> <tr> <td>platadm</td> <td>env, list, locator, poweroff, poweron</td> </tr> <tr> <td>fielddeng</td> <td>すべてのオペランド</td> </tr> </tbody> </table> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>	ユーザー権限	オペランド	platop	env, list	platadm	env, list, locator, poweroff, poweron	fielddeng	すべてのオペランド
ユーザー権限	オペランド								
platop	env, list								
platadm	env, list, locator, poweroff, poweron								
fielddeng	すべてのオペランド								
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -f 警告を無視して、強制的にコマンドを実行します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 								

- M テキストを1画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
- p 解析可能な出力にします。表示出力のヘッダを非表示にします。フィールドは1つのタブによって区切られます。
- v 詳細な情報を表示します。詳細については、個々のオペランドを参照してください。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`env [-e] [-l] [-t] [target [sensor]]`

PCI ボックスまたはリンクカードの環境状態の要約を表示します。

- -e
電気に関する状態 (電流および電圧の測定値、ファンの回転速度、スイッチの設定) を表示します。
- -l
LED の状態を表示します。
- -t
温度センサーの測定値を表示します。

target を指定しない場合、*env* はすべての PCI ボックスに対するすべてのセンサーのリストを表示します。

target に *box_id* を指定した場合、*env* は指定された PCI ボックス内部のすべての FRU および取り付けられているダウンリンクカードに対するセンサーの測定値のリストを表示します。

box_id のあとに *fru* が続く形式で *target* を指定した場合は、その FRU の環境状態だけが出力されます。オプションの *sensor* を指定すると、そのタイプのセンサーだけが表示されます。これらのオプションは同時に使用できます。

target を *host path* の形式で指定した場合は、ダウンリンクカードの情報だけが出力されます。使用例 2 を参照してください。

結果は表形式で表示されます。各 FRU センサーは1列目に表示されます。次の列はセンサー名です。周囲温度の場合は `T_AMBIENT`、12V レールの電圧測定値は `v_12v_0v` のように表示されます。3 列目、4 列目、5 列目はそれぞれセンサー測定値 (Value)、センサー分解能 (Res)、単位 (Units) が表示されます。使用例 1 を参照してください。

各 FRU にはさまざまなセンサーが含まれます。*sensor* に複数の値を指定する場合は、値をスペースで区切って指定します。*sensor* に指定できる値は、使用例 1 の Sensor カラムに示されています。Units には、摂氏温度、電圧、アンペア、SWITCH、および RPM が表示されます。

(続き)

sensor の名前は FRU に依存しており、FRU のタイプによって異なります。場合によっては、個々の FRU 間でも異なることがあります。

-v オプションを指定した場合は、詳細な情報が出力されます。通常の出力に加えて、センサーでサポートされる最大値と最小値 (Max, Min) が、上下の警告しきい値 (Min Alarm, Max Alarm) とともに出力に含まれます。

LED インジケータは、これらのフィールドをサポートしていません。

「-」を含んでいるフィールドは、サポートされない設定であることを示します。たとえば、温度の下限値に関する警告しきい値は存在しません。

led_type

XSCF で制御できる FRU LED を指定します。setled オペランドと一緒に指定します。以下の表は setled オペランドの off, on, fast, slow の値で制御できる LED の状態を示しています。Y(yes) は制御できる LED、N(no) は制御できない LED を表します。

LED	Name	off	on	fast	slow
ACTIVE	Power/OK	Y	Y	Y	Y
LOCATE	Locate	Y	N	Y	N
SERVICE	Fault/Locate	Y	Y	Y	Y
RDY2RM	Ready to remove	Y	Y	Y	Y
OVERTEMP	Overtemp	*	*	*	*
DCOK	DC Power	N	N	N	N
POWER	AC Power	N	N	N	N
DATA	Data	N	N	N	N
MGMT	Management	N	N	N	N

* OVERTEMP LED と筐体の ACTIVE LED はすべての LED 状態を設定することはできません。しかし、LED の状態はハードウェアによって頻繁に更新されるため、変更された LED 状態は表示されない場合があります。

注 - この他の LED は、ソフトウェアでは制御されません。システムが備えている LED のリストは、"env -l" オペランドを使用することで表示できます。

list [*target*]

システムが管理する PCI ボックスを一覧表示します。

target を指定せずに list を実行すると、PCI ボックスのリストが表示されます (1 行に 1 つの PCI ボックスが表示されます)。各行には、その PCI ボックス固有の識別子、およびそのダウンリンクカードのホスト固有の名前が含まれます。使用例 3 を参照してください。

PCI ボックスの引数またはダウンリンクカードのパスを指定してコマンドを実行すると、指定した FRU が含まれる単一の行が表示されます。*host path* を指定した場合は、そのダウンリンクカードの情報だけが表示されます。使用例 4 および使用例 6 を参照してください。

(続き)

詳細のオプション `-v` を設定した場合は、出力に FRU の詳細情報が含まれません。使用例 5 を参照してください。

`locator [on | off] [target]`

オプションを指定せずに `locator` を実行すると、指定した FRU に関する LED の現在の状態が出力されます。

`target` を指定せずに `locator` を実行すると、すべてのロケータ LED の現在の状態が出力されます。

オプションのフィールドを使用する場合、`target` 引数は必須です。

- `on`
LED を点灯します。
- `off`
LED を消灯します。

シャーシロケータは白色の LED です。FRU を指定すると、FRU の黄色のサービス LED がシャーシ (ロケータ)LED と一緒に使用されます。

PCI ボックスのシャーシで同時にロケーションインジケータを有効にできる FRU は、1 つだけです。シャーシ (ロケータ)LED をオフにすると、(サービス)FRU LED も点滅しなくなります。

`poweroff target`

指定の FRU を停止し、該当の LED を点灯させて、FRU の取り外しが可能になったことを示します。`-f` オプションと一緒に使用してください。`-f` を使用すると、ドメインがクラッシュする可能性があることに注意してください。

同一の PCI ボックスにある 2 つの電源ユニット (PSU) を両方とも取り外さないでください。このように 2 つの電源ユニットを停止すると、コマンドラインから PCI ボックスの電源を再投入できなくなります。PCI ボックスの電源を物理的に投入する必要があります。

注 - LED とファンは、2 つの電源ユニットから電力の供給を受けているため、1 つの電源ユニットを停止しても動作する場合があります。

`poweron target`

I/O ボードへの全電源供給を復旧します。または、すでに取り外し可能になっている電源からの供給を再び有効にします。電源ユニットを新規にインストールして電源スイッチをオンの位置にするか、または電源付きのリンクカードにボードを接続すると、それらの電源は自動的に投入されます。ただし、取り外しのためにすでに電源を切断している電源ユニットまたは I/O ボードの場合は、電源スイッチがオンの位置になっている場合に限り、それらの電源を再投入するために、このコマンドを使用できます。

reset target

PCI ボックス環境を監視するために使用された FRU コンポーネントを再度初期化します。I/O ポートまたはリンクカードを指定すると、リンクカードのブリッジコントローラはリセットされて再度初期化されます。PCI ボックスを指定すると、PCI ボックスに関連づけられているブリッジコントローラとともに、PCI ボックスのファンコントローラとデマルチプレクサがリセットされて再度初期化されます。

setled [on|off|slow|fast] target led_type

LED 状態を設定します。

off	消灯します。
on	点灯します。
fast	点滅を高速にします。
slow	点滅を低速にします。

target

対象のデバイスを指定します。指定できるのは、ホストサーバ内蔵の PCI スロットに搭載されたダウンリンクカード、PCI ボックス、または PCI ボックス内部の FRU です。

ダウンリンクカードは、カードへの *hostpath* によって識別されます。

- *hostpath* はプラットフォームに依存します。ダウンリンクカードを持つホストシステムのスロットへのパスを示します。SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバでは、*hostpath* は以下の形式になります。

```
IOU#0-PCI#0 IO Board 0, PCI-E slot0
```

PCI ボックス (*box_id*) は、シリアル番号によって識別されます。

- シリアル番号で参照するには、「iox@nnnn」を使用します。「nnnn」は PCI ボックスのシリアル番号の下 4 桁です。

指定する内容によっては、PCI ボックスの 1 つのコンポーネントだけに影響する場合があります。たとえば、個々の I/O ポートと電源ユニットはそれぞれ独立して電源の投入と切断が行われる場合があります。

PCI ボックス内部の FRU (*fru*) は、以下のように識別されます。

- iox@nnnn/iob0 - 背面左のトレイにある I/O ポート
- iox@nnnn/iob1 - 背面右のトレイにある I/O ポート
- iox@nnnn/iob0/link - ポート 0 にあるアップリンクカード
- iox@nnnn/iob1/link - ポート 1 にあるアップリンクカード
- iox@nnnn/ps0 - 前面左のベイにある電源ユニット
- iox@nnnn/ps1 - 前面右のベイにある電源ユニット

使用例

使用例 1 温度、電圧、電流、ファン回転速度センサーの測定値を表示します。

```
XSCF> ioxadm env -te iox@A3B5
Location          Sensor          Value          Res          Units
IOX@A3B5/PS0     T_AMBIENT       28.000         1.000        C
IOX@A3B5/PS0     T_CHIP          28.000         1.000        C
IOX@A3B5/PS0     T_HOTSPOT       31.000         1.000        C
IOX@A3B5/PS0     SWITCH          On              -            SWITCH
IOX@A3B5/PS0     V_12V_ANODE     11.703         0.059        V
IOX@A3B5/PS0     V_12V_CATHODE   11.703         0.059        V
IOX@A3B5/PS0     V_ISHARE        0.632         0.040        V
IOX@A3B5/PS0     I_DC            2.316         0.289        A
IOX@A3B5/PS0     S_FAN_ACTUAL    3708.791       40.313       RPM
IOX@A3B5/PS0     S_FAN_SET       4500.000       300.000      RPM
IOX@A3B5/PS1     T_AMBIENT       28.000         1.000        C
IOX@A3B5/PS1     T_CHIP          29.000         1.000        C
IOX@A3B5/PS1     T_HOTSPOT       31.000         1.000        C
IOX@A3B5/PS1     SWITCH          On              -            SWITCH
IOX@A3B5/PS1     V_12V_ANODE     11.762         0.059        V
IOX@A3B5/PS1     V_12V_CATHODE   11.762         0.059        V
IOX@A3B5/PS1     V_ISHARE        0.672         0.040        V
IOX@A3B5/PS1     I_DC            5.211         0.289        A
IOX@A3B5/PS1     S_FAN_ACTUAL    4115.854       49.588       RPM
IOX@A3B5/PS1     S_FAN_SET       4500.000       300.000      RPM
IOX@A3B5/IOB0    T_CHIP          32.000         1.000        C
IOX@A3B5/IOB0    T_HOTSPOT       35.000         1.000        C
IOX@A3B5/IOB1    T_CHIP          33.000         1.000        C
IOX@A3B5/IOB1    T_HOTSPOT       36.000         1.000        C
IOX@A3B5/IOB1    V_12_0V         12.052         0.005        V
IOX@A3B5/IOB1    V_12V_MAIN      12.000         0.400        V
IOX@A3B5/IOB1    V_1_0V          1.030         0.001        V
IOX@A3B5/IOB1    V_1_5V          1.496         0.001        V
IOX@A3B5/IOB1    V_3_3V          3.291         0.002        V
IOX@A3B5/IOB1    V_3_3AUX        3.308         0.002        V
IOX@A3B5/IOB1    I_DC            8.600         0.200        A
IOX@A3B5/IOB1/LINK T_SIGCON0       45.000         40.000       C
IOX@A3B5/IOB1/LINK T_SIGCON1       45.000         40.000       C
IOU#1-PCI#1      T_SIGCON0       45.000         40.000       C
IOU#1-PCI#1      T_SIGCON1       45.000         40.000       C
```

使用例 2 1つのリンクに関するすべてのセンサー測定値を表示します。ヘッダは非表示にします。

```
XSCF> ioxadm -p env iou#1-pci#1
IOU#1-PCI#1 T_SIGCON0 45.000 40.000 C
IOU#1-PCI#1 T_SIGCON1 45.000 40.000 C
IOU#1-PCI#1 DATA On - LED
IOU#1-PCI#1 MGMT Flash - LED
```

使用例 3 すべての PCI ボックスまたはダウンリンクカードのパスを表示します。

```
XSCF> ioxadm list
IOX                Link 0                Link 1
IOX@0033           IOU#1-PCI#4          IOU#1-PCI#1
IOX@12B4           -                    IOU#1-PCI#2
-                  IOU#2-PCI#1
```

使用例 3 では、PCI ボックスとホストサーバ内部のダウンリンクカード間の接続を、list コマンドで表示しています。(I/O ボード、アップリンクカード、および電源を備えている)IOX@0033 は、2 枚のダウンリンクカードを介してホストサーバに接続されています。Link 0 は、I/O ボード 0 に接続されているダウンリンクカードを表します。Link 1 は、I/O ボード 1 に接続されているダウンリンクカードを表します。IOX@12B4 は、1 枚のダウンリンクカードを介してホストに接続されています。このカードは、I/O ボード 1 に接続されています。「-」は、PCI ボックスへのホストリンク接続がないことを示します。ベイに I/O ボードとアップリンクカードが搭載されているか、ベイが空き状態になっている可能性があります。I/O ボードが搭載されている場合は、I/O ボードがホストに接続されていないか、ホストダウンリンクカードスロットの電源が投入されていません。

使用例 4 単一の PCI ボックスを表示します。

```
XSCF> ioxadm list iox@12B4
IOX                Link 0                Link 1
IOX@12B4           -                    IOU#1-PCI#2
```

使用例 5 詳細な出力を使用した単一の PCI ボックスを表示します。

```
XSCF> ioxadm -v list IOU#1-PCI#1
Location           Type      FW Ver  Serial Num Part Num  State
IOX@A3B5           IOX      1.4    CP0001   5016937-01 On
IOX@A3B5/PS0      A195    -      PS0001   3001701-02 On
IOX@A3B5/PS1      A195    -      PS0001   3001701-02 On
IOX@A3B5/IOB1     PCIE     -      PCIE01   5016939-01 On
IOX@A3B5/IOB1/LINK CU       1.2    CU0001   5017041-03 On
IOU#1-PCI#1       CU       1.2    CU0001   5017041-03 On
```

使用例 6 詳細モードでのホストパスを使用したダウンリンクカードを表示します。ヘッダは非表示にします。

```
XSCF> ioxadm -p -v list IOU#0-PCI#2
IOU#0-PCI#2 OP      2.0    XF01A1   CF005017040/5017040-03 on
```

使用例 7 PCI ボックス 12B4 にある電源ユニット 0 の、ロケータ LED の電源を投入します。

```
XSCF> ioxadm locator on iox@12B4/ps0
```

使用例 8 PCI ボックスのロケータ LED のステータスを表示します。

```
XSCF> ioxadm locator iox@12B4
Location          Sensor          Value      Resolution Units
IOX@12B4          LOCATE          Fast       -         LED
IOX@12B4/PS0     SERVICE         Fast       -         LED
```

故障の検出により FRU サービスインジケータがすでに点灯されている場合は、PCI ボックスのロケータ LED だけが高速に設定されます。

使用例 9 電源ユニット 1 のインジケータを有効にします (電源ユニット 1 は故障を示している)。

```
XSCF> ioxadm locator on iox@x031/ps1
XSCF> ioxadm locator
Location          Sensor          Value      Resolution Units
IOX@X031          LOCATE          Fast       -         LED
XSCF> ioxadm env -1 iox@x031/ps1 SERVICE
Location          Sensor          Value      Resolution Units
IOX@X031/PS1     SERVICE         On         -         LED
```

PCI ボックスのシャーシの白色 LED には、電源ボタンがついています。このボタンは、シャーシの白色ロケータ LED の状態を「消灯」または「高速」に切り替えるために使用できます。この押しボタンを使用してロケータ LED をオフにすると、高速点滅の FRU サービス LED がクリアされます。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0           正常に終了したことを表します。
>0         エラーが発生したことを表します。
```


名前	man - XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示します。										
形式	man <i>command_name</i> ... man -h										
説明	man(1) は、指定した XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示するコマンドです。										
ユーザー権限	このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。 ユーザー権限の詳細については、 setprivileges(8) コマンドを参照してください。										
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。										
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>command_name</i> マニュアルページを表示するコマンドを指定します。スペースで区切って複数指定できます。										
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ マニュアルページが長い場合は、1 画面ごとに区切られて表示されます。このときは、キーを使用して、以下のように操作できます。 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">キー</td> <td>説明</td> </tr> <tr> <td>Enter</td> <td>次の 1 行を表示します。</td> </tr> <tr> <td>スペース</td> <td>次の 1 ページ分を表示します。</td> </tr> <tr> <td>b</td> <td>半ページ分遡ります。</td> </tr> <tr> <td>q</td> <td>マニュアルページの表示を中断します。</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ■ <i>command_name</i> に Intro を指定した場合は、XSCF シェルコマンドの一覧が表示されます。 	キー	説明	Enter	次の 1 行を表示します。	スペース	次の 1 ページ分を表示します。	b	半ページ分遡ります。	q	マニュアルページの表示を中断します。
キー	説明										
Enter	次の 1 行を表示します。										
スペース	次の 1 ページ分を表示します。										
b	半ページ分遡ります。										
q	マニュアルページの表示を中断します。										
使用例	<p>使用例 1 addboard(8) コマンドのマニュアルページを表示します。</p> <pre>XSCF> man addboard</pre> <p>使用例 2 XSCF シェルコマンドの一覧を表示します。</p> <pre>XSCF> man Intro</pre>										

終了ステータス	以下の終了値が返されます。
0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。
関連項目	setlocale (8), showlocale (8)

名前	moveboard - 現在組み込まれているドメインから別のドメインへ、システムボード (XSB) を移動します。
形式	<pre> moveboard [[-q] -{y n}] [-f] [-v] [-c configure] -d <i>domain_id</i> <i>xsb</i> [<i>xsb...</i>] moveboard [[-q] -{y n}] [-f] [-v] -c assign -d <i>domain_id</i> <i>xsb</i> [<i>xsb...</i>] moveboard [[-q] -{y n}] [-f] [-v] -c reserve -d <i>domain_id</i> <i>xsb</i> [<i>xsb...</i>] moveboard -h </pre>
説明	<p>moveboard(8) は、現在組み込まれているドメインから XSB を切り離し、ドメイン構成情報 (DCL) に基づいて、指定したドメインに割り当てる、または組み込むコマンドです</p> <p>moveboard(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。</p> <p>以下のいずれかの移動手段が指定できます。</p> <p>configure 現在組み込まれているドメイン構成から XSB を切り離し、移動先のドメイン構成に XSB を組み込みます。組み込まれた XSB は、Solaris OS からアクセスできるようになります。</p> <p>assign 現在組み込まれているドメイン構成から XSB を切り離し、移動先ドメイン構成に XSB を割り当てます。割り当てられた XSB は、指定したドメインに予約され、他のドメインからは組み込み、割り当てができなくなります。割り当てられたあとは、ドメインをリポートするか、addboard(8) コマンドを -c configure で実行した場合に、ドメイン構成に組み込まれます。</p> <p>reserve 指定した XSB に対して、移動元のドメイン構成からの切り離しと移動先のドメイン構成へ割り当てを予約します。移動元ドメインの電源が切断されるかリポートされた場合に、XSB が移動先のドメイン構成に割り当てられます。その後、移動先ドメインの電源が投入されるかリポートされた場合に、XSB が組み込まれます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p>
	<p>注 - moveboard(8) コマンドを実行する場合は、移動元と移動先のドメインに対する domainadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- c assign XSB を現在組み込まれているドメイン構成から切り離し、移動先のドメイン構成に割り当てます。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたとみなされます。
- c configure XSB を現在組み込まれているドメイン構成から切り離し、移動先のドメイン構成に組み込みます。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたとみなされます。
- c reserve XSB に対して、現在のドメイン構成からの切り離しと移動先のドメイン構成へ割り当てを予約します。-c オプションを省略した場合は、"-c configure" が指定されたとみなされます。
- d *domain_id* XSB の移動先となるドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
- f 指定した XSB を、強制的に、ドメインから切り離します。

注意 - -f オプションにより強制的に移動元ドメインから XSB を削除する場合、CPU バインドしているプロセスや、デバイスをアクセスしているプロセスに対し、重要な問題が発生する可能性があります。そのため、-f オプションは通常の運用では使用しないことを推奨します。-f オプションを指定した場合は、必ず移動元ドメインの状態や業務プロセスの状態を確認してください。

注 - 故障している、または故障が検出された XSB は、強制的にドメイン構成に組み込まれることはありません。

- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。
- n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- v 詳細なメッセージを表示します。-q オプションと一緒に指定した場合は -v は無効となります。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペラント

以下のオペラントがサポートされています。

xsb 移動する XSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

x-y

x

00 から 15 までの整数で指定します。

y

0 から 3 までの整数で指定します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- "-c configure" を指定した場合は、ドメインが以下のどちらかのときだけ処理が行われます。
 - 移動元ドメインと移動先ドメインの Solaris OS が、共に稼働しているとき
 - 移動元ドメインの電源が切断されているが、移動先ドメインの Solaris OS が稼働しているとき
- "-c assign" を指定した場合は、ドメインが以下のどちらかの状態のときだけ処理が行われます。
 - 移動元ドメインの Solaris OS が稼働しているとき
 - 移動元ドメインの電源が切断されているとき
- "-c reserve" を指定した場合に、移動元ドメインの電源が切断されている、または Solaris OS が稼働していないときは、ただちに、XSB が移動元のドメイン構成から切り離され、移動先のドメイン構成に割り当てられます。
- XSB を移動する場合は、内部的に以下の作業が行われるため、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
 - XSB のハードウェアリソースが Solaris OS から切り離される作業
 - 組み込み時に、XSB に対して行われるハードウェア診断作業
- DCL については setdcl(8)、showdcl(8) コマンドを参照してください。

使用例

使用例 1 XSB#00-0 をドメインから切り離し、ドメイン ID 1 に組み込みます。

```
XSCF> moveboard -d 1 00-0
```

使用例 2 XSB#00-0 を、ドメイン ID 1 へ組み込みを予約します。

```
XSCF> moveboard -d 1 -c reserve 00-0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard(8)**, **setdcl(8)**, **setupfru(8)**, **showboards(8)**, **showdcl(8)**, **showdevices(8)**, **showdomainstatus(8)**, **showfru(8)**

moveboard(8)



名前	nslookup - ホスト名を Domain Name Server(DNS) サーバに照会します。								
形式	nslookup <i>hostname</i> nslookup -h								
説明	nslookup(8) は、指定したホスト名を、DNS サーバに照会するコマンドです。 以下の情報が表示されます。 <table border="0"> <tr> <td>Server</td> <td>DNS サーバ名</td> </tr> <tr> <td>Address</td> <td>DNS サーバの IP アドレス</td> </tr> <tr> <td>Name</td> <td>ホスト名</td> </tr> <tr> <td>Address</td> <td>ホストの IP アドレス</td> </tr> </table>	Server	DNS サーバ名	Address	DNS サーバの IP アドレス	Name	ホスト名	Address	ホストの IP アドレス
Server	DNS サーバ名								
Address	DNS サーバの IP アドレス								
Name	ホスト名								
Address	ホストの IP アドレス								
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。								
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。								
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>hostname</i> 照会するホスト名を指定します。Fully Qualified Domain Name(FQDN) または省略形で指定できます。								
使用例	使用例 1 scf0-hostname0 というホスト名の情報を表示します。 <pre>XSCF> nslookup scf0-hostname0 Server: server.example.com Address: xx.xx.xx.xx Name: scf0-hostname0.example.com Address: xx.xx.xx.xx</pre>								
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。								

nslookup(8)



名前	password - XSCF ユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定します。
形式	<p>password</p> <p>password [-e <i>days</i> <i>date</i> NEVER] [-i <i>inactive</i>] [-M <i>maxdays</i>] [-n <i>mindays</i>] [-w <i>mindays</i>] [<i>user</i>]</p> <p>password -h</p>
説明	<p>password(8) は、XSCF ユーザーアカウントのパスワードとパスワードの有効期限を設定するコマンドです。</p> <p>パスワードは 32 文字以内で指定します。以下の文字が使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ abcdefghijklmnopqrstuvwxyz ■ ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ ■ 0123456789 ■ !@#\$%^&*[]{}()+= `~></"?:;[SPACE] <p>1 つ以上のオプションを指定して password(8) コマンドを実行すると、アカウントの有効期限が変更されます。デフォルトの値については、setpasswordpolicy(8) コマンドを参照してください。</p> <p>オプションを省略して password(8) コマンドを実行すると、パスワードを変更するためのプロンプトが表示されます。</p> <p><i>user</i> オペランドを省略して password(8) コマンドを実行すると、現在のユーザーアカウントが対象となります。</p>
	<hr/> <p>注意 - <i>user</i> オペランドに他ユーザーを指定してパスワードを変更するときは、システムのパスワードポリシーは自動では反映されません。<i>user</i> オペランドは新ユーザーの初期パスワードを作成するときやユーザーアカウントが失効されたり、パスワードを忘れていたりした場合に使用してください。他ユーザーのパスワードを変更するときは、必ず、システムのパスワードポリシーに従ったパスワードを指定してください。showpasswordpolicy(8) コマンドを実行すると現在のパスワードポリシーを参照することができます。</p> <hr/>
	<p>ユーザー名が指定されるかどうかにかかわらず、ユーザーアカウントは、ローカルなものでなくてはなりません。もしユーザーアカウントがローカルでなければ、password(8) コマンドはエラーになります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>useradm オプションあるいはオペランドがあるなしにかかわらず、このコマンドを実行できます。また、すべてのアカウントのパスワードを変更できます。</p>

以下の場合においてユーザー権限は必要ありません。

- 現在のユーザーアカウントパスワードを変更する場合
- `-h` オプションを使用する場合

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges(8)` コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-e days | date | Never` *days* には本日を起点とする XSCF ユーザーアカウントの有効期間の日数を設定します。0 から 10730 までの数値で指定できます。現在の日付に *days* で指定した数値を加えた結果が 2038 年 1 月を超えた場合は、指定した数値は無効となりコマンドは実行されません。

date にはアカウントの有効期限が切れる日付を設定します。2038 年 1 月を超えない日付で指定します。以下のいずれかの形式で指定できます。

mm/dd/yy (10/30/08)

yyyy-mm-dd (2008-10-30)

yy-mm-dd (08-10-30)

dd-Mmm-yy (30-Oct-08)

dd-Mmm-yyyy (30-Oct-2008)

dd Mmm yy ("30 Oct 08")

dd Mmm yyyy ("30 Oct 2008")

Mmm dd, yy ("Oct 30, 08")

Mmm dd, yyyy ("Oct 30, 2008")

スペースを含む形式を使用する場合は、二重引用符で囲みません。大文字と小文字は区別しません。

`Never` は、アカウントの有効期限がないことを表します。大文字と小文字は区別されません。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i inactive` パスワードの有効期限が切れてからアカウントがロックされるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは `-1` です。値が `-1` の場合は、パスワードの有効期限が切れたあともアカウントがロックされないことを表します。 `-1` 以上の整数で指定します。

- M maxdays** パスワードが有効である最大日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 999999 です。0 以上の整数で指定します。
- n mindays** パスワードを変更してから、次に変更するまでの間の最小日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 0 です。いつでもパスワードを変更できることを表します。0 以上の整数で指定します。
- この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。
- w warn** ユーザーにパスワードの有効期限の警告を発してから実際に有効期限が切れるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 7 です。0 以上の整数で指定します。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

user XSCF ユーザーアカウント名を指定します。

使用例 **使用例 1** パスワードの有効期限を 2008 年 2 月 2 日に設定します。

```
XSCF> password -e 2008-02-02
```

使用例 2 パスワードの有効期限が切れてから 10 日後にロックします。

```
XSCF> password -i 10
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setpasswordpolicy (8)**, **showpasswordpolicy (8)**

password(8)



名前	ping - ICMP の ECHO_REQUEST パケットをネットワーク上のホストまたはネットワーク装置へ送信します。
形式	ping [-c <i>count</i>] [-q] <i>host</i> ping -h
説明	ping(8) は、ICMP の ECHO_REQUEST データグラムを用いて、指定したホストまたはネットワーク装置からの ECHO_RESPONSE を引き出すコマンドです。 ping(8) コマンドが正常に実行できれば、XSCF と、指定したホストまたはネットワーク装置間のネットワークは正常であると判断できます。また、結果からネットワーク性能を計測することができます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 <ul style="list-style-type: none"> ■ DSCP アドレスに対して実行する場合 platadm または fiieldeng ■ "localhost" またはループバックアドレス (127.0.0.0/8) に対して実行する場合 fiieldeng ■ インター SCF ネットワーク (ISN) に対して実行する場合 fiieldeng ■ 上記以外の場合 必要な権限はありません ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> -c <i>count</i> パケットを送信する回数を指定します。指定した回数分パケットを送信し、その応答を受信すると、ping(8) コマンドは終了します。省略した場合は、割り込みが発生するまでパケットを送信し続けます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -q 出力を抑制します。開始時と終了時だけ出力します。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> <i>host</i> パケットを送信するホストまたはネットワーク装置を指定します。ホスト名または IP アドレスで指定できます。

使用例

使用例 1 scf0-hostname0 というホストに、パケットを 3 回送信します。

```
XSCF> ping -c 3 scf0-hostname0
PING scf0-hostname0 (XX.XX.XX.XX): 56 data bytes
64 bytes from XX.XX.XX.XX: icmp_seq=0 ttl=64 time=0.1 ms
64 bytes from XX.XX.XX.XX: icmp_seq=1 ttl=64 time=0.1 ms
64 bytes from XX.XX.XX.XX: icmp_seq=2 ttl=64 time=0.1 ms

--- scf0-hostname0 ping statistics ---
3 packets transmitted, 3 packets received, 0% packet loss
round-trip min/avg/max = 0.1/0.1/0.1 ms
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

名前	poweroff - ドメインの電源を切断します。
形式	<p>poweroff [[-q] -{y n}] [-f] [-M] -d <i>domain_id</i></p> <p>poweroff [[-q] -{y n}] -a [-M]</p> <p>poweroff -h</p>
説明	<p>poweroff(8) は、ドメインの電源を切断するコマンドです。</p> <p>指定したドメイン、またはすべてのドメインに対して電源を切断できます。Solaris OS に対して通常のシャットダウン処理が行われてから、電源が切断されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, fieldeng すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm, domainmgr 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-a 電源が投入されている、すべてのドメインの電源を切断します。platadm, fieldeng 権限を持つユーザーだけが指定できます。暖機運転待ち、空調待ち、またはドメインの電源投入中の場合でも、電源を切断します。</p> <p>-d <i>domain_id</i> 電源を切断するドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。暖機運転待ち、空調待ち、またはドメインの電源投入中の場合、電源を切断しません。</p> <p>-f 指定したドメインに対して、XSCF によって強制的に電源を切断します。-d オプションと一緒に使用します。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p> <p>-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。</p>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

- ドメインの Solaris OS が動作中の場合、poweroff(8) コマンドでは、Solaris OS に用意されている shutdown(1M) コマンドの "-i 5" オプションに相当する処理が行われます。
- ドメインの Solaris OS がブート中の場合は電源を切断できません。ブート完了後に、再度 poweroff(8) コマンドを実行してください。
- ドメインの Solaris OS がシングルユーザーモードで動作中の場合は、poweroff(8) コマンドを使用して電源を切断できません。ドメイン上で shutdown(1M) コマンドを実行してください。
- poweroff(8) コマンドを実行すると、指定されたドメインごとに、以下の形式で、電源の切断結果が表示されます。

Powering off 電源が正常に切断されたことを表します。

Not powering off エラーが発生し、電源が切断できなかったことを表します。結果とともに、エラーメッセージが表示されます。

- showdomainstatus(8) コマンドを使用すると、システム上の各ドメインの電源が切断されているかどうかを確認できます。

使用例

使用例 1 すべてのドメインの電源を切断します。

```
XSCF> poweroff -a
DomainIDs to power off:00,01,02,03
Continue? [y|n]:y
00:Powering off
01:Powering off
02:Powering off
03:Powering off

*Note*
This command only issues the instruction to power-off.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 2 ドメイン ID 0 の電源を切断します。

```
XSCF> poweroff -d 0
DomainIDs to power off:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering off

*Note*
This command only issues the instruction to power-off.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
```

使用例 3 ドメイン ID 0 の電源を強制的に切断します。

```
XSCF> poweroff -f -d 0
DomainIDs to power off:00
The -f option will cause domains to be immediately resets.
```



```
Continue? [y|n]:y
00:Powering off
```

Note

This command only issues the instruction to power-off.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".

使用例 4 ドメイン ID 2 の電源を切断します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweroff -y -d 2
DomainIDs to power off:02
Continue? [y|n]:y
02:Powering off
```

Note

This command only issues the instruction to power-off.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".

使用例 5 ドメイン ID 2 の電源を切断します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweroff -q -y -d 2
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweron (8), reset (8), showdomainstatus (8)

poweroff(8)



名前	poweron - ドメインの電源を投入します。
形式	<pre>poweron [[-q] -{y n}] [-M] -d domain_id poweron [[-q] -{y n}] [-M] -a poweron -h</pre>
説明	<p>poweron(8) は、ドメインの電源を投入するコマンドです。</p> <p>指定したドメイン、またはすべてのドメインに対して電源を投入できます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, fieldeng すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm, domainmgr 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。.</p> <p>-a セットアップが完了している、すべてのドメインの電源を投入します。platadm または fieldeng 権限を持つユーザーだけが指定できます。「セットアップが完了しているドメイン」とは、setdcl(8) と setupfru(8) コマンドによって設定が完了しているドメインのことです。</p> <p>-d domain_id 電源を投入するドメイン ID を指定します。domain_id はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p> <p>-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。</p>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

- poweron(8) コマンドを実行すると、指定されたドメインごとに、以下の形式で、電源の投入結果が表示されます。

Powering on 電源が正常に投入されたことを表します。

Not Powering on エラーが発生し、電源が投入できなかったことを表します。結果とともに、エラーメッセージが表示されます。

- showdomainstatus(8) コマンドを使用すると、システム上の各ドメインの電源が投入されているかどうかを確認できます。

使用例

使用例 1 すべてのドメインの電源を投入します。

```
XSCF> poweron -a
DomainIDs to power on:00,01,02,03
Continue? [y|n]:y
00:Powering on
01:Powering on
02:Powering on
03:Powering on
```

Note

This command only issues the instruction to power-on.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".

使用例 2 ドメイン ID 0 の電源を投入します。

```
XSCF> poweron -d 0
DomainIDs to power on:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering on
```

Note

This command only issues the instruction to power-on.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".

使用例 3 ドメイン ID 0 の電源を投入します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweron -y -d 0
DomainIDs to power on:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering on
```

Note

This command only issues the instruction to power-on.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".
XSCF>

使用例 4 ドメイン ID 1 の電源を投入します。メッセージは非表示にして、プロンプト

には自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> poweron -q -y -d 1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), reset(8), showdomainstatus(8)

poweron(8)



名前	prtfriu - システムおよび PCI ボックスの FRUID データを表示します。
形式	prtfriu [-c] [-l] [-M] [-x] [<i>container</i>] prtfriu -h
説明	<p>prtfriu(8) は、システムおよび PCI ボックスから Field Replaceable Unit Identifier (FRUID) を取得するコマンドです。</p> <p>出力形式はツリー構造で、FRU のパスが各コンテナにエコーされます。コンテナが見つかり、コンテナのデータも同様にツリー構造で出力されます。</p> <p>prtfriu(8) コマンドを引数を指定しないで実行すると、FRU の階層とすべての FRUID コンテナデータが出力されます。prtfriu(8) コマンドを実行すると、画面に出力されます。出力はファイルにリダイレクトできます。</p> <p>注 - ドメインからの FRU 情報は、このコマンドを使用しても取得できません。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-c コンテナとコンテナデータだけを出力します。このオプションは FRU ツリー階層を出力しません。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-l FRU ツリー階層だけを出力します。このオプションはコンテナデータを出力しません。</p> <p>-M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。</p> <p>-x prtfriureg.dtd のシステム識別子 (SYSTEM) をつけて XML 形式で出力します。</p>
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>container</i> データを格納する特定のハードウェアのパス名を指定します。</p>
使用例	<p>使用例 1 FRU ツリー階層を表示します。</p> <pre>XSCF> prtfriu -l /frutree /frutree/chassis (fru) /frutree/chassis/iou0 /frutree/chassis/iou0/IOU (fru) /frutree/chassis/iou0/IOU/slot3</pre>

```

/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3/LINK (container)
/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3/LINK/iox983392.IOX.iob1.PCIX.LINK (fru)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps0
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps0/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps1
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps1/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX/LINK
(container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX/LINK/
iou0.IOU.slot3.LINK (fru)
/frutree/chassis/MBU_B (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#0/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#1/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0 (fru)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#1/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0 (fru)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#0/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#1/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#2/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#3/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#4/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#5/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#6/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#7/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1 (fru)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#8/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#9/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#10/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#11/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#12/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#13/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#14/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#15/MEM (container)
/frutree/chassis/XSCFU (container)
/frutree/chassis/OPNL (container)
/frutree/chassis/PSU#0 (fru)
/frutree/chassis/PSU#0/PSU (container)
/frutree/chassis/PSU#2 (fru)
/frutree/chassis/PSU#2/PSU (container)
/frutree/chassis/IOU#0 (fru)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU (container)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU/DDCR#0/DDCR (container)
/frutree/chassis/FANBP_C#0 (fru)
/frutree/chassis/FANBP_C#0/FANBP_C (container)

```


使用例 2 コンテナのリストを表示します。

```
XSCF> prtfriu -lc
/frutree/chassis/iou0/IOU/slot3/LINK (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps0/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/ps1/A195 (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX (container)
/frutree/chassis/iox983392?Label=IOX@XCX031/IOX/iob1/PCIX/LINK
(container)
/frutree/chassis/MBU_B (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#0/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/CPUM#1/CPUM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#0/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#1/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#2/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#3/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#4/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#5/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#6/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#0/MEMB/MEM#7/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#8/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#9/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#10/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#11/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#12/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#13/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#14/MEM (container)
/frutree/chassis/MBU_B/MEMB#1/MEMB/MEM#15/MEM (container)
/frutree/chassis/XSCFU (container)
/frutree/chassis/OPNL (container)
/frutree/chassis/PSU#0/PSU (container)
/frutree/chassis/PSU#2/PSU (container)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU (container)
/frutree/chassis/IOU#0/IOU/DDCR#0/DDCR (container)
/frutree/chassis/FANBP_C#0/FANBP_C (container)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

ioxadm (8)

prtfru(8)



名前	rebootxscf - XSCF をリセットします。
形式	rebootxscf [[-q] -{y n}] rebootxscf -h
説明	rebootxscf(8) は、XSCF をリセットするためのコマンドです。 M8000/M9000 サーバの場合は、アクティブとスタンバイ両方の XSCF がリセットされます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ コマンドを実行すると、実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。 ■ コマンドを実行すると、telnet や ssh 等の XSCF への接続が切断されます。自動的に XSCF をリセットする setdate(8) コマンドを使用して、途中でリセットをキャンセルした場合、本コマンドで XSCF をリセットしても、設定した内容は XSCF に反映されません。
使用例	<p>使用例 1 XSCF をリセットします。</p> <pre>XSCF> rebootxscf The XSCF will be reset. Continue? [y n]:y</pre> <p>使用例 2 XSCF をリセットします。プロンプトには自動的に "y" と応答します。</p> <pre>XSCF> rebootxscf -y The XSCF will be reset. Continue? [y n]:y</pre> <p>使用例 3 XSCF をリセットします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。</p> <pre>XSCF> rebootxscf -q -y</pre>

使用例 4 XSCF のリセットを途中で中止します。

```
XSCF> rebootxscf  
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:n  
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork (8), **setdate (8)**, **sethttps (8)**, **setssh (8)**

名前	replacefru - Field Replaceable Unit (FRU) を交換します。
形式	replacefru replacefru -h
説明	<p>replacefru(8) は、FRU を交換するコマンドです。</p> <p>FRU の交換に必要な FRU の選択、確認、交換などを、メニュー形式によって、対話的に行うことができます。</p> <p>replacefru(8) コマンドによって、以下の FRU を交換できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU / メモリボードユニット (CMU) ■ I/O ユニット (IOU) ■ ファンユニット (FAN) ■ 電源ユニット (PSU) ■ XSCF ユニット (XSCFU)
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、<code>fieldeng</code> 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p><code>-h</code> 使用方法を表示します。</p>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	addboard (8) , addfru (8) , deleteboard (8) , deletefru (8) , setupfru (8) , showdcl (8) , showdomainstatus (8) , showfru (8) , showhardconf (8) , testsb (8) , unlockmaintenance (8)

replacefru(8)



名前	reset - 指定したドメインをリセットします。
形式	reset [[-q] -{y n}] -d <i>domain_id level</i> reset -h
説明	<p>注 - reset(8) コマンドはシステムを強制的にリセットするため、ディスクなどの故障を引き起こす可能性があります。Solaris OS がハングアップした場合のリカバリなどに限定して使用してください。</p> <p>reset(8) は、指定したドメインをリセットするコマンドです。</p> <p>リセット方法として、以下の 3 種類が指定できます。</p> <p>por ドメインのシステムをリセットします。</p> <p>panic ドメインの Solaris OS にパニックを指示します。電源の切断中やシャットダウン中は無視されます。</p> <p>xir ドメインの CPU をリセットします。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, fieldeng すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm, domainmgr 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> リセットするドメイン ID を 1 つだけ指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p> <p>-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。</p>

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

<i>level</i>	リセット方法を指定します。以下のいずれかを指定できます。省略できません。
<code>por</code>	ドメインのシステムをリセットします。
<code>panic</code>	ドメインの Solaris OS にパニックを指示します。
<code>xir</code>	ドメインの CPU をリセットします。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- `showdomainstatus(8)` コマンドを使用すると、リセット指示後の現在のドメインの状態を確認できます。
- 以下の状態で `reset(8)` コマンドを実行すると、Solaris OS が起動される前に処理が停止します。
 - オペレーターパネルのモードスイッチが Service モードの場合
 - `setdomainmode(8)` コマンドで `auto boot` 機能が無効となっている場合

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 にパニックを発生させます。

```
XSCF> reset -d 0 panic
DomainID to panic:00
Continue? [y|n]:y
00:Panicked
```

Note

This command only issues the instruction to reset.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".

使用例 2 ドメイン ID 0 の CPU をリセットします。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> reset -y -d 0 xir
DomainID to reset:00
Continue? [y|n]:y
00:Reset
```

Note

This command only issues the instruction to reset.
The result of the instruction can be checked by the "showlogs power".

使用例 3 ただちに、ドメイン ID 0 をリセットします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> reset -q -y -d 0 por
```


使用例 4 実行した `reset(8)` コマンドを途中で中止します。

```
XSCF> reset -d 0 panic  
DomainID to panic:00  
Continue? [y|n]:n
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

`poweroff(8)`, `poweron(8)`, `setdomainmode(8)`, `showdomainstatus(8)`

reset(8)



名前	resetdateoffset - XSCF とドメイン間の時刻の差分をリセットします。
形式	resetdateoffset resetdateoffset -h
説明	<p>resetdateoffset(8) は、XSCF に保存されている XSCF とドメイン間の時刻の差分をリセットするコマンドです。</p> <p>通常、ドメインの時刻は XSCF の時刻と同期しています。このとき、ドメインの Solaris OS に用意されている date(1M) コマンドなどでドメインの時刻を変更すると、XSCF の時刻と変更されたドメインの時刻との差分が XSCF 内に保存されます。保存された時刻の差分はドメインをリブートしたり、rebootxscf(8) コマンドなどで XSCF をリセットしたりした場合でも保持されているため、XSCF とドメイン間の時刻の差分は保たれたままとなります。</p> <p>resetdateoffset(8) コマンドは、XSCF に保存されたすべてのドメインに対する時刻の差分をリセットします。これにより、起動後のドメインの時刻は、XSCF と同じ時刻に設定されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。</p>
詳細説明	resetdateoffset(8) コマンドは、システムの電源が切断された状態で実行する必要があります。
使用例	<p>使用例 1 XSCF とドメイン間の時刻の差分をリセットします。</p> <pre>XSCF> resetdateoffset</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>

resetdateoffset(8)



名前	restoreconfig - dumpconfig(8) コマンドで保存したシステム構成情報を復元します。
形式	restoreconfig [-v] [-V] [[-q] -{y n}] [-P <i>password</i>] [-s network={yes no}] [-u <i>user</i>] [-p <i>proxy</i>] [-t <i>proxy_type</i>] <i>url</i> restoreconfig -h
説明	restoreconfig(8) は、dumpconfig(8) コマンドで保存したシステム構成情報を復元するコマンドです。 このコマンドでは、システム構成情報の整合性を確認し、ネットワーク情報を探しだし、システム構成情報を保存したときのサーバと復元先のサーバが一致しているかどうかを検証します。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。システムにあらかじめ用意されている default と admin アカウントでも実行できます。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -P <i>password</i> 暗号化されたファイルを復号するためのパスワードを指定します。-P オプションを省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。 -p <i>proxy</i> 転送に使用するプロキシサーバを指定します。"-t <i>proxy_type</i> " を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。proxy は <i>servername:port</i> の形式で指定します。使用例 3 を参照してください。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -s network={yes no} ネットワーク構成の復元について設定します。 network=yes とした場合は、ネットワーク構成データは復元されます。 network=no とした場合は、ネットワーク構成データは復元されません。 -s オプションを省略した場合は、対象システムのシリアル番号と構成情報のシリアル番号が比較され、番号が一致した場合にネットワーク構成が復元されます。

-t <i>proxy_type</i>	プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u <i>user</i>	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-Y	プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。 .

<i>url</i>	システム構成情報が保存されている URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。
	<code>http://server[:port]/path/file</code>
	<code>https://server[:port]/path/file</code>
	<code>ftp://server[:port]/path/file</code>
	<code>file:///media/usb_msd/path/file</code>

詳細説明

- システム構成情報の先頭に、テキスト形式で、基本的な識別情報が含まれています。テキストビューワーを使用して、以下のような情報を確認できます。
 - システム構成情報が保存されたときのシステム
 - 保存された日付
 - 暗号化されているかどうか
- restoreconfig(8) コマンドを実行する前には、すべてのドメインの電源を切断する必要があります。このコマンドでは、システム構成情報がダウンロードされ、情報が正しいかどうか認証されます。認証が終わると、システムが再起動され、復元が行われます。データが復元されたらシステムが停止されるため、電源を投入しなおして再起動する必要があります。restoreconfig(8) コマンドを実行する前には、システムの電源を投入しなおすことができるかどうか確認してください。
- M8000/M9000 サーバでは、アクティブおよびスタンバイの、両方の XSCF ユニットが停止されます。電源を投入しおす前に、両方の XSCF ユニットが停止されたかどうかを確認してください。
- システム構成情報は、同じサーバモデルに対してのみ、復元させることができます。M5000 サーバ上で dumpconfig(8) コマンドによって作成されたシステム構成情報は、他の M5000 サーバ上に復元させることはできません。しかし、M3000 サーバや M8000 サーバには復元させることはできません。

使用例

使用例 1 FTP を使用して、システム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -V -u manilla 129.145.155.156:8080 ftp:/
10.7.79.18/sollgell/proxytest-ftp.cfg
transfer from '/tmp/dumpconfig.EvY1Yf' to 'ftp://10.7.79.18/sollgell/
proxytest-ftp.cfg'
Password:
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
* Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
* Proxy auth using (nil) with user ''
* Server auth using Basic with user 'minilla'
> GET ftp://10.7.79.18/sollgell/proxytest-ftp.cfg HTTP/1.1
Authorization: Basic bHdhbmc6bHdhbmc=
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18:21
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Server: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Date: Thu, 07 Aug 2008 18:01:00 GMT
< Proxy-agent: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Via: 1.1 proxy-proxy
< Transfer-encoding: chunked
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
Configuration backup created on Mon Aug 4 12:58:19 2008
  from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version '19830000'
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

使用例 2 http を使用して、システム構成情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -V -p 129.145.155.166:8080 http://10.7.79.18/
sollgell/proxytest.cfg
transfer from '/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin' to
'http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg'
* About to connect() to 129.145.155.166 port 8080
* Trying 129.145.155.166... * connected
* Connected to 129.145.155.166 (129.145.155.166) port 8080
GET http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg HTTP/1.1
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Content-length: 24603
< Content-type: text/plain
< Date: Thu, 07 Aug 2008 17:07:43 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27 OpenSSL/0.9.7d
```

```

< Last-modified: Mon, 04 Aug 2008 20:01:51 GMT
< Etag: "4fa2a-601b-4897602f"
< Accept-ranges: bytes
< Via: 1.1 proxy-proxy
< Proxy-agent: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
* Connection #0 to host 129.145.155.166 left intact
* Closing connection #0
Configuration backup created on Mon Aug  4 12:58:19 2008
  from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version '19830000'
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.

```

使用例 3 `https` を使用して、システム構成情報を復元します。

```

XSCF> restoreconfig -v -V https://10.7.79.18/sollgell/
proxytest.cfg
obtaining lock ... done
initiating file transfer from 'https://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg'
... transfer from
'/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin' to 'https://10.7.79.18/
sollgell/proxytest.cfg'
* About to connect() to 10.7.79.18 port 443
*   Trying 10.7.79.18... * connected
* Connected to 10.7.79.18 (10.7.79.18) port 443
* error setting certificate verify locations, continuing anyway:
*   CAfile: /home/ares/cross/fje/pwrqcc3/target_root/usr/share/ssl/certs/
ca-bundle.crt
   Cpath: none
* SSL connection using EDH-RSA-DES-CBC3-SHA
* Server certificate:
*   subject:
/C=US/ST=California/L=SanDiego/O=toho/OU=QT/CN=10.7.79.18/
emailAddress=minilla.zilla@toho.com
*   start date: 2008-07-22 18:32:49 GMT
*   expire date: 2009-07-22 18:32:49 GMT
*   common name: 10.7.79.18 (matched)
*   issuer:
/C=US/ST=California/L=SanDiego/O=toho/OU=QT/CN=Lwang/
emailAddress=minilla.zilla@toho.com
* SSL certificate verify result: error number 1 (20), continuing anyway.
> GET /sollgell/proxytest.cfg HTTP/1.1
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: */*
< HTTP/1.1 200 OK
< Date: Tue, 12 Aug 2008 22:02:12 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27 OpenSSL/0.9.7d
< Last-Modified: Mon, 04 Aug 2008 20:01:51 GMT
< ETag: "4fa2a-601b-4897602f"
< Accept-Ranges: bytes

```



```

< Content-Length: 24603
< Content-Type: text/plain
* Connection #0 to host 10.7.79.18 left intact
* Closing connection #0
done
file decoding done.
Configuration backup created on Mon Aug  4 12:58:19 2008
  from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version '19830000'
validating backup configuration data
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y/n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.

```

使用例 4 USB を使用して、システム構成情報を復元します。

```

XSCF> restoreconfig -V -p 129.145.155.166:8080 file:///media/
usb_msd/proxytest.cfg
transfer from '/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin' to 'file:///media/
usb_msd/proxytest.cfg'
Configuration backup created on Mon Aug  4 14:38:27 2008
  from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version '19830000'
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation is
completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y/n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.

```

使用例 5 暗号化されたシステム構成情報を復元します。

```

XSCF> restoreconfig -v -V -P encryption http://10.7.79.18/sollgell/
proxytest.cfg
obtaining lock ... done
initiating file transfer from 'http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg'
... transfer from '/scf/firmtmp/hcp/config/config_file.bin' to
'http://10.7.79.18/sollgell/proxytest.cfg'
* About to connect() to 10.7.79.18 port 80
* Trying 10.7.79.18... * connected
* Connected to 10.7.79.18 (10.7.79.18) port 80
GET /sollgell/proxytest.cfg HTTP/1.1
User-Agent: restoreconfig
Host: 10.7.79.18
Pragma: no-cache
Accept: /*/*
< HTTP/1.1 200 OK
< Date: Wed, 13 Aug 2008 23:29:42 GMT
< Server: Apache/1.3.36 (Unix) mod_perl/1.29 mod_ssl/2.8.27
OpenSSL/0.9.7d
< Last-Modified: Wed, 13 Aug 2008 23:25:16 GMT
< ETag: "4fa55-501b-48a36d5c"
< Accept-Ranges: bytes
< Content-Length: 20507

```

restoreconfig(8)

```
< Content-Type: text/plain
* Connection #0 to host 10.7.79.18 left intact
* Closing connection #0
done
file decoding done.
Configuration backup created on Wed Aug 13 16:21:01 2008
  from system 'M3000' with serial number 'IKS08220xx', version
  '19830000'
validating backup configuration data
File decryption completed
*** You will need to power-cycle the entire system after this operation
is completed
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y|n]: y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
Connection to ghidorah.com closed by foreign host.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

restoreconfig(8)

名前	restoredefaults - 本体装置または XSCF ユニットに保存された設定やログを消去し、工場出荷時の状態に戻します。				
形式	restoredefaults -c range restoredefaults -h				
説明	restoredefaults(8) は、本体装置または XSCF ユニットに保存された設定やログを消去し、工場出荷時の状態に戻すコマンドです。 対象として、以下のどちらかを指定できます。 XSCF ユニット (xscfu) XSCF ユニット内の以下の内容が、工場出荷時の状態に戻されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCF 内部の各種設定 ■ XSCF ユニットに保存されているログ ■ オペレーターパネルのバックアップ 本体装置 (factory) オペレーターパネルと XSCF ユニットに保存された設定やログが、工場出荷時の状態に戻されます。				
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。				
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -c range 工場出荷時の状態に戻す対象を指定します。range には以下のどちらかを指定できます。 <table style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>xscfu</td> <td>XSCF ユニット</td> </tr> <tr> <td>factory</td> <td>本体装置</td> </tr> </table> -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。	xscfu	XSCF ユニット	factory	本体装置
xscfu	XSCF ユニット				
factory	本体装置				
詳細説明	スタンバイ XSCF に対して restoredefaults(8) コマンドを実行した場合は、以下のような結果となります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ factory を指定するとエラーとなります。 ■ xscfu を指定するとスタンバイ XSCF だけ初期化されます。 				
使用例	使用例 1 XSCF ユニットの工場出荷時の状態に戻します。 XSCF> restoredefaults -c xscfu WARNING: If this system does not have OPNL, this command will set all the user				

settable XSCF configuration parameters to their default value as they were set when the system was shipped out.
 Furthermore, this command will delete all logs on both XSCFUs.
 Check the man page of this command before you run it.

Continue?[yes/no] (default no) :**yes**

You must check the following points.

1. Have the ability to powercycle the system.
2. Have access to the serial console and hold the serial console of the XSCFU to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCFU when it completes.
 You will need to powercycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?

Continue?[yes/no] (default no) :**yes**

The initialization of XSCFU will be started.

XSCFU : all data clear

OPNL : not clear

XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCFU will be initialized.

Continue?[yes/no] (default no) :**yes**

The NVRAM setting of XSCFU#0 was completed.

XSCF shutdown request was completed.

<snip>...XSCF reboot..<snip>

***** WARNING *****

XSCF initialization terminate for XSCF data clear.

execute "setdefaults xscf" (AUTO)

setdefaults : XSCF clear : start

setdefaults : XSCF clear : DBS start

setdefaults : XSCF clear : wait 20s for DBS initialization

setdefaults : XSCF clear : common database clear complete

setdefaults : XSCF clear : /bin/rm /var/log/lastlog >/dev/null 2>&1

setdefaults : XSCF clear : /bin/rm /var/log/boot.log >/dev/null 2>&1

...

setdefaults : XSCF clear : /bin/rm /hcpcommon/tmp/panel_up_to_date_fail >/dev/null 2>&1

setdefaults : XSCF clear : log data clear complete

setdefaults : XSCF clear : NVRAM(PAGE#0) clear complete

...

setdefaults : XSCF clear : NVRAM(PAGE#7) clear complete

setdefaults : XSCF clear : NVRAM reset complete

...

setdefaults : XSCF clear : unmount filesystem start

dbs[282]: NOTICE: received signal: 15

setdefaults : XSCF clear : unmount /hcp0/linux

...

setdefaults : XSCF clear : unmount /hcpcommon/firmtmp -- complete

setdefaults : XSCF clear : unmount filesystem complete

```
setdefaults : XSCF clear : end
setdefaults : complete
```

Please turn off the breaker after XSCF halt.

```
The system is going down NOW !!
Please stand by while rebooting the system.
Restarting system.
XSCF uboot 01950000 (Apr 15 2007 - 11:08:18)
```

```
XSCF uboot 01950000 (Apr 15 2007 - 11:08:18)
```

```
SCF board boot factor = a040
DDR Real size: 512 MB
DDR: 480 MB
```

```
XSCF BOOT STOP (recover by NFB-OFF/ON)
```

使用例 2 本体装置を工場出荷時の状態に戻します。

```
XSCF> restoreddefaults -c factory
```

WARNING:

If this system does not have OPNL, this command will set all the user settable XSCF configuration parameters to their default value as they were set when the system was shipped out.
Furthermore, this command will delete all logs on both XSCFUs.
Check the man page of this command before you run it.

```
Continue?[yes/no] (default no):yes
You must check the following points.
```

1. Have the ability to powercycle the system.
2. Have access to the serial console and hold the serial console of the XSCFU to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCFU when it completes.
You will need to powercycle the system after the XSCF BOOT STOP.

```
Do you really want to continue?
```

```
Continue?[yes/no] (default no):yes
The initialization of XSCFU will be started.
XSCFU : all data clear
OPNL : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCFU will be
initialized.
Continue?[yes/no] (default no):yes
The NVRAM setting of XSCFU#0 was completed.
XSCF shutdown request was completed.
```

```

<snip>...XSCF reboot..<snip>

***** WARNING *****
XSCF initialization terminate for XSCF/OPNL data clear.
execute "setdefaults factory" (AUTO)

setdefaults : FACTORY mode clear : start
setdefaults : FACTORY mode clear : DBS start
setdefaults : FACTORY mode clear : wait 20s for DBS initialization
initialize OPNL SEEPROM 1/6 -- complete
...
initialize OPNL SEEPROM 6/6 -- complete
setdefaults : FACTORY mode clear : OPNL reset complete
setdefaults : FACTORY mode clear : restore SYSTEM-ID data complete
setdefaults : FACTORY mode clear : /bin/rm /var/log/lastlog >/dev/null
2>&l
setdefaults : FACTORY mode clear : /bin/rm /var/log/boot.log >/dev/null
2>&l
...
setdefaults : FACTORY mode clear : /bin/rm /hcpcommon/tmp/
panel_up_to_date_fail >/dev...
setdefaults : FACTORY mode clear : log data clear complete
setdefaults : FACTORY mode clear : NVRAM(PAGE#0) clear complete
...
setdefaults : FACTORY mode clear : NVRAM(PAGE#7) clear complete
setdefaults : FACTORY mode clear : NVRAM reset complete
...
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount filesystem start
dbs[283]: NOTICE: received signal: 15
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount /hcp0/linux
...
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount /hcpcommon/firmtmp -- complete
setdefaults : FACTORY mode clear : unmount filesystem complete
Please stand by while rebooting the system.
Restarting system.
XSCF uboot 01950000 (Apr 15 2007 - 11:08:18)

XSCF uboot 01950000 (Apr 15 2007 - 11:08:18)

SCF board boot factor = 4040
DDR Real size: 512 MB
DDR: 480 MB

XSCF BOOT STOP (recover by NFB-OFF/ON)

```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

名前	sendbreak - 指定したドメインにブレイク信号を送ります。
形式	<pre>sendbreak -d domain_id</pre> <pre>sendbreak [[-q] -{y n}] -d domain_id</pre> <pre>sendbreak -h</pre>
説明	<p>sendbreak(8) は、指定したドメインにブレイク信号を送るコマンドです。</p> <p>ドメインコンソールから、ドメイン上の Solaris OS に対してブレイク信号を送ると、Solaris OS から OpenBoot PROM へ制御が移行され、OpenBoot PROM 用のプロンプト "ok>" が表示されます。</p> <p>注 - オペレーターパネルのモードスイッチが "Locked" にセットされている場合、secure モードを "on" に設定するとブレイク信号は送信されません。詳細については、setdomainmode(8) コマンドを参照してください。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ブレイク信号を送るドメイン ID を指定します。 <i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定できます。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p> <p>-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。</p>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	console(8), showconsolepath(8)

sendbreak(8)



- showaltitude(8) コマンドを実行すると、現在の設定内容が表示されます。

使用例

使用例 1 本体装置の高度を 1000 m に設定します。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=1000
1000m
```

使用例 2 本体装置の高度を 200 m に設定します。指定した値は 100 m 単位以下は切り上げられます。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=157
200m
```

使用例 3 エアフィルターが搭載された M4000/M5000 サーバで本体装置の高度を 1000 m に設定します。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=1000
1000m
Filter is installed.
```

使用例 4 M4000/M5000 サーバでエアフィルターを搭載されていないとします。

```
XSCF> setaltitude -s filter=uninstalled
1000m
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

showaltitude(8)

名前	setarchiving - ログのアーカイブ機能を設定します。
形式	<p>setarchiving [-k <i>host-key</i>] [-l <i>audit-limit, non-audit-limit</i>] [-p <i>password</i> -x] [-t <i>user@host:directory</i>] [-v] [-y -n]</p> <p>setarchiving enable disable</p> <p>setarchiving -h</p>
説明	<p>setarchiving(8) は、ログのアーカイブ機能を設定するコマンドです。</p> <p>サービスプロセッサ上の固定記憶領域は限られています。ログによっては、古いログの上書きまたは削除が必要になるほど肥大化する場合があります。ログのアーカイブ機能を使用すると、ログデータを自動的にリモートホストにアーカイブするようにサービスプロセッサを設定できます。</p> <p>注 - ログのアーカイブ機能を有効にする前に、アーカイブホストを正しく設定する必要があります。指定したアーカイブホストが存在しない場合など、設定が正しくないときにアーカイブを有効にしようとすると、エラーが表示されます。また、アーカイブが有効になっているときに、不正な設定変更をしようとすると同様にエラーとなります。</p> <p>注 - setarchiving(8) コマンドは最低でも 1 つのオプションまたはオペランドを指定する必要があります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>

-k *host-key*

XSCF がホストの ID を確認するために使用する公開キーを設定します。 *host-key* には以下のいずれかを指定できます。

none

アーカイブホストの認証に公開ホストキーを使用しません。アーカイブホストの公開ホストキーがすでに設定されている場合は、そのキーが削除されます。

download

SSH プロトコルによってアーカイブホストから公開ホストキーをダウンロードします。-t オプションと一緒に指定して *setarchiving(8)* コマンドを実行すると、-t オプションで指定したホストからキーがダウンロードされます。-t オプションと一緒に指定しない場合は、現在のアーカイブホストからキーがダウンロードされます。ダウンロード後、公開ホストキーの md5 フィンガープリントが表示され、続行するホストの ID の確認が求められます。キーを受け入れると、そのキーは保存され、キーを拒否すると、*setarchiving(8)* コマンドは設定を変更せずに終了します。

public-key

指定した公開キーは保存され、サーバ認証に使用されます。 *host-key* 引数は、キータイプで始まる、アーカイブホストの完全な公開ホストキーでなければなりません。

注 - *public-key* は引用符で囲む必要があります。

- l *audit-limit,non-audit-limit*** ログのアーカイブの容量制限をメガバイトで設定します。このオプションの引数には2つの値があり、カンマ(,)で区切って指定します。
- audit-limit* の値には、監査ログに関するアーカイブの容量制限を指定します。0 (ゼロ)、unlimited、または500から50000までの整数で指定できます。-1 オプションを指定しない場合は、監査ログに関するアーカイブの容量制限は無制限となります。
- non-audit-limit* の値には、その他のすべてのログに関する、アーカイブの容量制限を指定します。500から50000までの整数で指定できます。-1 オプションを指定しない場合は、*non-audit-limit* はシステムに依存した値となります。showarchiving(8) コマンドを使用して現在の値を確認してください。
- どちらかの引数に無効な値を指定した場合は、エラーとなります。
- n** プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- p *password*** SSH ログインに使用されるパスワードを設定します。-p オプションは、スクリプト処理を容易にするために提供されています。パスワードを対話的に変更するためには、-r オプションを使用します。
- r** SSH ログインに使用されるパスワードを読み取ります。setarchiving(8) コマンドを実行すると、プロンプトが表示され、新しいパスワードが読み取られませんが、画面にはエコーされません。
- t *user@host:directory*** アーカイブの対象を設定します。*user* には、アーカイブホストへのSSH ログイン用のユーザー名を指定します。*host* には、アーカイブホストのホスト名またはIPアドレスを指定します。*directory* には、アーカイブの保存先となるアーカイブホスト上のディレクトリを指定します。*directory* は "~" で始める必要があります。
- v** 詳細な情報を出力します。-k download オプションと一緒に指定すると、ダウンロードされた公開キーがそのmd5フィンガープリントとともに表示されます。
- y** プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p>enable ログのアーカイブ機能を有効にします。一緒に指定できるオプションはありません。</p> <p>disable ログのアーカイブ機能を無効にします。一緒に指定できるオプションはありません。</p>
使用例	<p>使用例 1 アーカイブの対象とパスワードを設定します。</p> <pre>XSCF> setarchiving -t jsmith@somehost.company.com:/home/jsmith/ logs -r Enter ssh password for jsmith@somehost.company.com: []</pre> <p>使用例 2 公開ホストキーを設定します。</p> <pre>XSCF> setarchiving -k download Downloading public host key from somehost.company.com... Fingerprint: c3:75:f9:97:7d:dc:le:le:62:06:c1:6f:87:bc:e8:0d Accept this public key (yes no): yes</pre> <p>使用例 3 アーカイブの容量制限を設定します。</p> <pre>XSCF> setarchiving -l 10000,10000</pre> <p>使用例 4 アーカイブ機能を有効にします。</p> <pre>XSCF> setarchiving enable Testing the archiving configuration... Logs will be archived to somehost.company.com.</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。設定がアップデートされたことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	<p>showarchiving (8)</p>

名前	setaudit - システムの監査機能を管理します。
形式	<pre>setaudit enable disable archive delete setaudit [-p count suspend] [-m mailaddr] [-a users=enable disable default] [-c classes= {enable disable}]... [-e events=enable disable]... [-g {enable disable}] [-t percents] setaudit -h</pre>
説明	<p>setaudit(8) は、システムリソースの使用に関するデータの収集を管理するコマンドです。</p> <p>監査データには、セキュリティに関連するシステムイベントのレコードが含まれています。このデータは、システムで実行されたアクションに対する責任の割り当てに使用できます。監査では、指定のイベントが発生したときにレコードが生成されます。監査レコードを生成するイベントは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ システムの起動とシャットダウン ■ ログインとログアウト ■ 認証のアクション ■ 管理のアクション
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、auditadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-a users=enable disable default 指定されたユーザーの監査レコード生成ポリシーを設定します。users は、有効なユーザー名のカンマ区切りリストです。</p> <p>enable または disable にすると、ユーザーの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。この設定によって、指定されたユーザーのグローバルポリシーは無効になります。</p> <p>default に設定すると、ユーザーのポリシーはグローバルポリシーに従うように設定されます。ユーザーのグローバル監査レコードポリシーを確認する場合は、"showaudit -g" を使用してください。</p>

`-c classes=enable|disable`

指定された監査クラスの監査レコード生成ポリシーを変更します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前によって指定できます。ACS_ プレフィックスは省略可能です。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 16 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

```
all
  すべてのクラス
ACS_SYSTEM(1)
  システムに関連するイベント
ACS_WRITE(2)
  状態を変更できるコマンド
ACS_READ(4)
  現在の状態を読み出すコマンド
ACS_LOGIN(8)
  ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT(16)
  監査に関連するイベント
ACS_DOMAIN(32)
  ドメイン管理に関連するイベント
ACS_USER(64)
  ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM(128)
  プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES(256)
  モードに関連するイベント
```

このオプションは複数指定できます。複数指定すると、リストの順序で `-e` オプションと一緒に処理されます。使用例 1 を参照してください。

`enable` または `disable` にすると、クラスの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。この設定によって、グローバルポリシーは無効になります。`default` に設定すると、ユーザーのポリシーはグローバルポリシーに従うように設定されます。ユーザーのグローバル監査レコードポリシーを確認する場合は、"`showaudit -g`" を使用してください。

-e <i>events</i> =enable disable	<p>指定された監査イベントの監査レコード生成ポリシーを変更します。<i>events</i> は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前によって指定できます。AEV プレフィックスは省略可能です。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV LOGIN SSH、LOGIN_SSH、または 0 と表現できます。</p> <p>有効なイベントのリストについては、<code>showaudit -e all</code> を参照してください。</p> <p>このオプションは複数指定できます。複数指定すると、リストの順序で <code>-c</code> オプションと一緒に処理されます。使用例 3 を参照してください。</p> <p><code>enable</code> または <code>disable</code> にすると、イベントの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。この設定によって、グローバルポリシーは無効になります。<code>default</code> に設定すると、ユーザーのポリシーはグローバルポリシーに従うように設定されます。ユーザーのグローバル監査レコードポリシーを確認する場合は、<code>"showaudit -g"</code> を使用してください。</p>
-g enable disable	<p>ユーザーのグローバル監査レコード生成ポリシーを設定します。</p> <p><code>disable</code> に設定した場合は、すべてのユーザーアカウントに帰属できる監査レコードが生成されません。これらの設定は、<code>-a</code> オプションによって個々のユーザーごとに無効になる場合があります。</p>
-h	<p>使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>
-m <i>mailaddr</i>	<p>ローカルの監査領域の使用量がしきい値に達した場合に送信される電子メールのメールアドレスを設定します (<code>-t</code> オプションを参照)。電子メールアドレスは、有効な形式の電子メールアドレス (<code>user@company.com</code>) である必要があります。<i>mailaddr</i> に <code>none</code> を指定すると、電子メール通知を無効にします。</p>

-p suspend count	<p>監査トレイルが全容量に達した場合に従うポリシーを設定します。有効な値は以下のとおりです。</p> <p>suspend 空き領域が確保されてレコードの書き込みが可能になるまで、またはポリシーが count に変更されるまで、監査レコードに書き込もうとするプロセスはすべて一時停止します。</p> <p>count 新たな監査レコードは削除されます。また、削除されるレコードの数がカウントされます。</p>
-t <i>percents</i>	<p>ローカルの領域の使用量に関して警告を発行するしきい値を設定します。<i>percents</i> は、使用済みの領域のパーセンテージを示すカンマ区切りリストです。このリストには最大2つの値を設定できます。たとえば、50、75 という値を設定すると、監査レコードに使用できる領域の消費率がそれぞれ50%、75% に達したときに警告が発行されます。デフォルトは80%です。</p> <p>警告は、コンソールにメッセージとして発行されます。また、オプションで、電子メールを使用して管理者に警告を発行することもできます。"-m <i>mailaddr</i>" を参照してください。</p>
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p>archive 現在の監査トレイルをアーカイブするようにログのアーカイブ機構に通知します。</p> <p>delete セカンダリパーティションにあるローカルの監査トレイルの一部を削除します。この操作は、ローカルの監査トレイルが全容量に達した場合に、新たな監査レコード用に領域を空けるために使用できます。セカンダリパーティションの詳細については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバアドミニストレーションガイド』を参照してください。</p> <p>disable 監査トレイルへの監査レコードの書き込みをオフにします。その後、現在の監査トレイルをアーカイブするようにログのアーカイブ機構に通知します。</p> <p>enable 監査トレイルへの監査レコードの書き込みを有効にします。</p>

使用例	<p>使用例 1 名前によりクラスを変更します。ログインおよび監査に関連する監査クラスを無効にして、リードに関連する監査クラスを有効にします。</p> <pre>XSCF> setaudit -c LOGIN,AUDIT=disable -c ACS_READ=enable</pre> <p>使用例 2 番号によりクラスを変更します。クラス 8（ログイン）および 16（監査）を無効にして、1（システム）を有効にします。</p> <pre>XSCF> setaudit -c 8,16=disable -c 1=enable</pre> <p>使用例 3 クラスを変更してイベントを有効にします。イベント 64（ユーザー）だけを無効にして、クラス 1（システム）を有効にします。</p> <pre>XSCF> setaudit -c 1=enable -e 64=disable</pre> <p>使用例 4 監査を有効にします。監査トレイルのためのレコードの書き込みを有効にします。</p> <pre>XSCF> setaudit enable</pre> <p>使用例 5 警告を有効にします。容量が 50% および 75% に達した場合に警告を送ります。</p> <pre>XSCF> setaudit -t 50,75</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	<p>showaudit(8)</p>

setaudit(8)



名前	setautologout - XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定します。
形式	setautologout -s <i>timeout</i> setautologout -h
説明	setautologout(8) は、XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定するコマンドです。 デフォルトのタイムアウト時間は 10 分です。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -s <i>timeout</i> XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を指定します。 <i>timeout</i> にはタイムアウトする時間を分単位で指定します。1 から 255 までの整数で指定できます。
詳細説明	設定されたセッションタイムアウト時間は、次のログイン以降で有効になります。
使用例	使用例 1 XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を 30 分に設定します。 XSCF> setautologout -s 30 30min
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	showautologout (8)

setautologout(8)



名前	setcod - ドメインで使用されるキャパシティオンデマンド (COD) リソースを設定します。
形式	<pre>setcod setcod [-v] setcod [[-q] -{y n}] [-v] headroom setcod [-v] -d domain_id [proc-rtus] setcod -h</pre>
説明	<p>setcod(8) は、ドメインで使用される COD リソースを設定するコマンドです。</p> <p>setcod(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。</p> <p>ドメイン上の COD ボードを利用するためには、ライセンスキーをインストールする必要があります (詳細は <code>addcodlicense(8)</code> コマンドを参照)。また、<code>setcod(8)</code> コマンドではヘッドルームを有効にしたり、ドメインに対してライセンスを予約したりできます。</p> <p><code>domain_id</code> を指定しない場合は、コマンドプロンプトに現在の値が角括弧 ([]) で囲まれて表示されます。オペランドの値を指定しない場合、現在の値が保持されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、<code>platadm</code> 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -d <i>domain_id</i> ドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -v 詳細な情報を表示します。 -y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

<i>headroom</i>	有効にするヘッドルーム (プロセッサ) の数を指定します。最大値は 4 です。
<i>proc-rtus</i>	ドメイン用に予約される Right-To-Use (RTU) ライセンスの数を指定します。各 CPU に対して 1 つの RTU ライセンスが必要です。

詳細説明

- オプションを何も指定しないで `setcod(8)` コマンドを実行すると、COD に関して、使用する COD ヘッドルームの数、およびドメイン用に予約する COD RTU ライセンスの数を指定するように求められます。COD 情報を入力するように求められるプロンプトには、許容される最大値が丸括弧 (()) の中に、デフォルトの値が角括弧 ([]) の中にそれぞれ表示されます。
- `setcod(8)` コマンドは、COD ヘッドルーム (必要に応じて使用するプロセッサ) を有効にします。ドメイン用に予約する COD RTU ライセンスの数を指定する場合には、`-d domain_id` オプションを使用します。

使用例

使用例 1 COD CPU ヘッドルームの数、およびドメイン用に予約する COD RTU ライセンスの数を設定します。

```
XSCF> setcod
```

```
PROC RTUs installed: 0
PROC Headroom Quantity (0 to disable, 4 MAX) [0]: 1
WARNING:Using headroom requires you to install license key(s) within 30
days. Do you agree? [y|n]: y
PROC RTUs reserved for domain 0 (1 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 1 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 2 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 3 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 4 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 5 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 6 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 7 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 8 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 9 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 10 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 11 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 12 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 13 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 14 (0 MAX) [0]:
PROC RTUs reserved for domain 15 (0 MAX) [0]:
```

使用例 2 COD ヘッドルーム CPU を 3 に設定します。

```
XSCF> setcod 3
```

```
WARNING: Using headroom requires you to install license key(s) within 30
days. Do you agree? [y|n]: y
```


このコマンドが完了すると、以下のようなメッセージが XSCF コンソールに表示されます。

```
Aug 28 17:28:30 FF1-1-0 codd[PID]: COD PROC Headroom changed to 3
```

使用例 3 COD ヘッドルーム CPU を 0 に設定します。

```
XSCF> setcod 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodlicense(8), **showcod**(8)

setcod(8)



名前	setdate - XSCF の時計の日付、時刻を設定します。
形式	setdate [[-q] -{y n}] [-u] -s <i>date</i> setdate -h
説明	setdate(8) は、XSCF の時計の日付、時刻を設定するコマンドです。 日付、時刻を設定する場合に地方時で指定したときは、協定世界時 (UTC) に変換されてから設定されます。 コマンド実行後は、XSCF が自動的にリセットされます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、 <code>platadm</code> または <code>fieldeng</code> 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、 <code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -s <i>date</i> 日付、時刻を設定します。 <i>date</i> は、以下のどちらかの形式で指定できます。 YYYY.MM.DD-hh:mm:ss " 世紀年 . 月 . 日 - 時 (24 時制) : 分 : 秒 " MMDDhhmmYYYY.ss " 月日時 (24 時制) 分世紀年 . 秒 " -u 時刻を UTC で指定します。省略した場合は地方時となります。 -y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。 ■ M8000/M9000 サーバの場合、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。 ■ XSCF を NTP サーバとしている場合は、XSCF の時刻を変更後、ドメインの時刻を同期させる必要があります。以下のどちらかの操作を行うと、時刻がドメインに反映されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ドメイン上で <code>ntpdate(1M)</code> コマンドを実行する ■ ドメインをリブートする

- **setdate(8)** コマンドは、システムの電源が切断されている状態で実行する必要があります。
- XSCF に対して NTP サーバが設定されている場合は、**setdate(8)** コマンドを実行するとエラーとなります。XSCF に NTP サーバが設定されているかどうかは、**showntp(8)** コマンドで確認できます。
- **showdate(8)** コマンドを使用すると、現在設定されている XSCF の日付、時刻が確認できます。

使用例

使用例 1 現在の時刻を地方時 (JST) で「2006 年 1 月 27 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。

```
XSCF> setdate -s 012716592006.00
Fri Jan 27 16:59:00 JST 2006
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

使用例 2 現在の時刻を UTC で「2006 年 1 月 27 日 7 時 59 分 00 秒」に設定します。

```
XSCF> setdate -u -s 012707592006.00
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

使用例 3 現在の時刻を地方時 (JST) で「2006 年 1 月 27 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdate -y -s 012716592006.00
Fri Jan 27 16:59:00 JST 2006
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Fri Jan 27 07:59:00 UTC 2006
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

使用例 4 現在の時刻を地方時 (JST) で「2006 年 1 月 27 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdate -q -y -s 012716592006.00
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 | **setntp (8), settimezone (8), showdate (8), showntp (8), showtimezone (8)**

setdate(8)



名前	setdcl - ドメイン構成情報 (DCL) を設定します。
形式	<pre>setdcl -d domain_id -s policy=value setdcl -d domain_id -s option=value lsb [lsb...] setdcl -d domain_id -a lsb=xsb [lsb=xsb...] setdcl -d domain_id -r lsb [lsb...] setdcl -h</pre>
説明	<p>setdcl(8) は、DCL を設定するコマンドです。</p> <p>DCL とは、ドメインやドメインを構成する論理システムボード (LSB) に設定できるハードウェアリソース情報です。</p> <p>LSB とは、ドメインの Solaris OS で認識されるボードの単位です。ドメインごとに最大 16 枚まで登録でき、00 から 15 までの整数で表されます。</p> <p>システムボード (XSB) とは、物理システムボード (PSB) を分割してシステム上で使用できる単位に構成しなおしたボードのことです。XSB は PSB 番号と PSB を分割したときの分割番号を組み合わせて $x-y$ (x は 00 から 15 までの整数、y は 0 から 3 までの整数) で表されます。</p> <p>setdcl(8) コマンドは、XSB を、ドメイン上の Solaris OS で認識できる LSB に対応させたり、LSB に対応させた XSB 上のハードウェアリソースを、ドメイン上の Solaris OS で使用させたりするための設定を行います。</p> <p>setdcl(8) コマンドでは、DCL 内の、以下の情報を設定できます。</p> <p>ドメインに対する設定：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲 (policy) M3000 サーバでは policy だけ設定できます。 <p>LSB に対する設定：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ LSB に対応させる XSB 番号 (lsb, xsb) LSB に対応させる XSB 番号を指定します。 ■ LSB に搭載されているメモリの使用 (no-mem) LSB に搭載されているメモリを、ドメイン上のオペレーティングシステムで使用させるかどうか設定できます。 ■ LSB に搭載されている入出力デバイスの使用 (no-io) LSB に搭載されている PCI カードなどの入出力デバイスを、ドメイン上のオペレーティングシステムで使用させるかどうか設定できます。 ■ LSB をフローティングボードとするための優先度 (float)

指定した LSB を優先してフローティングボードとするかどうかを設定できます。フローティングボードとは、ドメイン構成を変更する場合など、オペレーティングシステムへの影響を最小限に抑えながら、Dynamic Reconfiguration(DR)を実施するためのボードです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges(8)` コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- `-a lsb=xsb` ドメインの LSB 番号に対応させる XSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。M3000 サーバでは指定できません。
- `lsb=xsb`
`lsb` LSB 番号を指定します。00 から 15 までの整数で指定できます。
`xsb` XSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。
- `x-y`
`x`: 00 から 15 までの整数で指定します。
`y`: 0 から 3 までの整数で指定します。
- `lsb` と `xsb` をイコール (=) で区切った形式で指定できます。「=」との間にスペースを含めてはなりません。`lsb=xsb` はスペースで区切って複数指定できます。
- 同じ LSB 番号 と XSB 番号 を重複して指定した場合はエラーとなります。また、指定した `lsb` に XSB 番号が設定されている場合もエラーとなります。
- 指定した `xsb` が別の LSB に設定されている場合は、既存の設定がクリアされ、指定した `lsb` に上書きされます。
- `-d domain_id` 設定するドメイン ID を指定します。`domain_id` はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
- `-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- `-r` 指定したドメインの LSB 番号に対応する XSB 番号をクリアします。M3000 サーバでは指定できません。

`-s option=value` LSB へ対応させた XSB のハードウェアリソースに関して設定します。*option* には設定する項目、*value* には *option* に対する値を指定します。*option* と *value* をイコール (=) で区切った形式で 1 つだけ指定します。「=」との間にスペースを含めてはなりません。

option には、以下のいずれかを指定できます。M3000 サーバでは *policy* だけ指定できます。

<code>policy</code>	ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲
<code>no-mem</code>	メモリをドメインで使用するかどうか
<code>no-io</code>	入出力デバイスをドメインで使用するか
<code>float</code>	優先してフローティングボードにするか

option に `policy` を指定した場合、*value* には以下のいずれかを指定できます。

<code>fru</code>	診断で異常が発生した場合、対象の Field Replaceable Unit (FRU) を縮退します。
<code>xsb</code>	診断で異常が発生した場合、対象の XSB を縮退します。
<code>system</code>	診断で異常が発生した場合、対象のドメインを停止します。

option に `no-mem` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

<code>true</code>	メモリをドメインで使用させません。
<code>false</code>	メモリをドメインで使用させます (デフォルト)。

option に `no-io` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

<code>true</code>	入出力デバイスをドメインで使用させません。
<code>false</code>	入出力デバイスをドメインで使用させます (デフォルト)。

option に `float` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

<code>true</code>	フローティングボードになり易くします。
<code>false</code>	フローティングボードになり易くしません (デフォルト)。

オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>lsb</i> 設定する LSB 番号を指定します。<i>lsb</i> は 00 から 15 までの整数で指定できます。スペースで区切って複数指定できます。<i>lsb</i> はドメイン内で一意の値を指定してください。同じ <i>lsb</i> を指定した場合はエラーとなります。M3000 サーバでは指定できません。</p>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定した LSB に対応させた XSB がすでにドメイン構成に組み込まれている場合は、LSB に設定されている内容は変更できません。deleteboard(8) コマンドでドメイン構成から割り当てを解除し、moveboard(8) コマンドで他のドメイン構成へ組みなおしてから変更してください。 ■ 指定したドメインが稼働している場合、policy の値は変更できません。指定したドメインの電源を切断してから変更してください。 ■ showdcl(8) コマンドを使用すると、現在設定されている DCL の情報が確認できます。
使用例	<p>使用例 1 ドメイン ID 0 の LSB#00 に XSB#00-0 を、LSB#01 に XSB#00-1 を設定します。</p> <pre>XSCF> setdcl -d 0 -a 00=00-0 01=00-1</pre> <p>使用例 2 ドメイン ID 0 の LSB #00, #01 に no-mem=true を設定します。</p> <pre>XSCF> setdcl -d 0 -s no-mem=true 00 01</pre> <p>使用例 3 ドメイン ID 0 に configuration-policy=system を設定します。</p> <pre>XSCF> setdcl -d 0 -s policy=system</pre> <p>使用例 4 ドメイン ID 0 の LSB#00, #01 に対応している XSB をクリアします。</p> <pre>XSCF> setdcl -d 0 -r 00 01</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	<p>addboard (8), deleteboard (8), moveboard (8), setupfru (8), showboards (8), showdcl (8), showdevices (8), showfru (8)</p>

名前	setdomainmode - ドメインの動作モードを設定します。
形式	setdomainmode [[-q] -{y n}] -d <i>domain_id</i> -m <i>function=mode</i> setdomainmode -h
説明	<p>setdomainmode(8) は、ドメインの動作モードを設定するコマンドです。</p> <p>ドメインの動作モードには、以下の種類があります。</p> <p>Diagnostic Level OpenBoot PROM の診断レベル。デフォルトは標準です。</p> <p>Secure Mode host watchdog 監視および Break 信号受信抑止機能の有効、無効。デフォルトは host watchdog 監視有効、Break 信号受信抑止有効です。</p> <p>Autoboot ドメイン起動時のオートブートの有効、無効。デフォルトは有効です。</p> <p>CPU Mode ドメインに搭載されている CPU 動作モードの設定方法。CPU 動作モードの設定方法には、ドメイン起動時に自動的に判別させる方法 (auto) と、手動で互換モードに設定する方法 (compatible) があります。デフォルトは、ドメイン起動時に自動的に判別させます。M3000 サーバでは設定できません。</p> <p>CPU 動作モードには以下の 2 種類があります。</p> <p>SPARC64 VII 拡張モード SPARC64 VII プロセッサの拡張された機能を利用して動作します。SPARC64 VII プロセッサだけで構成されたドメインで、CPU 動作モードを自動的に判別させる場合にだけ設定されます。</p> <p>SPARC64 VI 互換モード 搭載されているすべての CPU が SPARC64 VI プロセッサと同等の機能で動作します。ドメインがどのような CPU 構成でも設定できます。</p> <p>ドメインの動作モードのいずれかを設定すると、現在の設定内容が一覧表示されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>■ OpenBoot PROM 診断レベル</p> <p>fieldeng すべてのドメインに対して実行できます。</p>

- host watchdog 監視および Break 信号受信抑止、オートブート機能、CPU 動作モード

platadm すべてのドメインに対して実行できます。

domainadm 管理権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domain_id* 設定するドメイン ID を指定します。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-m function=mode` 動作モードとその値を設定します。*function* には動作モードを指定します。以下のいずれかを指定できます。

<code>diag</code>	OpenBoot PROM の診断レベルを設定します。
<code>secure</code>	host watchdog 監視、Break 信号受信抑止機能を設定します。
<code>autoboot</code>	オートブート機能を設定します。
<code>cpumode</code>	CPU 動作モードを設定します。M3000 サーバでは指定した場合はエラーとなります。

function に `diag` を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。

注 - 電源が投入されているドメインには設定できません。

<code>none</code>	診断を行いません。
<code>min</code>	診断レベルを「標準」に設定します。
<code>max</code>	診断レベルを「最大」に設定します。

function に `secure` を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。設定した内容は、ドメインの電源を投入または再起動すると反映されます。

<code>on</code>	host watchdog 監視、Break 信号受信抑止を有効にします。
<code>off</code>	host watchdog 監視、Break 信号受信抑止を無効にします。

function に `autoboot` を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。設定した内容は、ドメインの電源を投入または再起動すると反映されます。

<code>on</code>	オートブート機能を有効にします。
<code>off</code>	オートブート機能を無効にします。

function に `cpumode` を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。

注 - 電源が投入されているドメインには設定できません。

`auto`

ドメイン起動時に CPU 動作モードを自動的に判別します。ドメインに搭載されている CPU 構成によって、以下のいずれかの CPU 動作モードが設定されます。

- SPARC64 VII プロセッサだけで構成されている場合：
SPARC64 VII 拡張モード
- SPARC64 VII と VI プロセッサが混在している場合：
SPARC64 VI 互換モード
- SPARC64 VI プロセッサだけで構成されている場合：
SPARC64 VI 互換モード

`compatible`

搭載されている CPU に関係なく、CPU 動作モードを SPARC64 VI 互換モードに設定します。

詳細説明

- n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- ドメインに設定されている CPU 動作モードにより、Dynamic Reconfiguration (DR) 操作で追加可能なシステムボード (XSB) が決まります。以下のとおりです。

ドメインの CPU 構成	CPU Mode の値	現在の CPU 動作モード	DR 操作で追加可能なシステムボードの CPU 構成
SPARC64 VII	auto	SPARC64 VII 拡張モード	SPARC64 VII
	compatible	SPARC64 VI 互換モード	すべての CPU 構成
SPARC64 VII/VI	auto または compatible	SPARC64 VI 互換モード	すべての CPU 構成
SPARC64 VI	auto または compatible	SPARC64 VI 互換モード	すべての CPU 構成

CPU 動作モードと DR 操作に関する詳細については、『SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ Dynamic Reconfiguration(DR) ユーザーズガイド』を参照してください。

- 上記以外の XSB をドメインに追加する場合は、ドメインの電源切断 / 投入、または再起動を伴うドメインの再構築を行う必要があります。
- CPU 動作モードを自動的に判別している場合に、以下のような状態が発生すると、ドメイン再起動時に CPU 動作モードが、SPARC64 VI 互換モードから SPARC64 VII 拡張モードに変わります。SPARC64 VII 拡張モードになると SPARC64 VI プロセッサが搭載された XSB を DR 操作で追加できなくなります。
 - SPARC64 VII と VI プロセッサ混在時に、SPARC64 VI プロセッサの故障による再起動後、SPARC64 VI プロセッサがドメイン上になくなってしまった場合ドメインに SPARC64 VI プロセッサが搭載されている、または搭載する予定の場合は、CPU 動作モードを SPARC64 VI 互換モードに設定してください。
- 現在、ドメインに設定されている CPU 動作モードを確認する場合は、Solaris OS 上で `prtdiag(1M)` コマンドを実行します。`prtdiag(1M)` コマンドについては、Solaris OS のマニュアルページを参照してください。
- オペレーターパネルのモードスイッチが「Service」の場合は、`setdomainmode(8)` コマンドで設定された内容にかかわらず、ドメインの動作モードは以下のように設定されます。
 - OpenBoot PROM 診断レベル (Diagnostic Level), CPU 動作モード (CPU Mode): `setdomainmode(8)` コマンドの設定どおり

- host watchdog 監視および Break 信号受信抑止 (Secure Mode), オートブート機能 (Autoboot): 無効
- OpenBoot PROM 環境変数 "auto-boot?" が false に設定されている場合は、オートブート機能は無効となります。
- OpenBoot PROM の診断レベルは addboard(8) コマンドと moveboard(8) コマンドの diag level に適用されます。
- showdomainmode(8) コマンドを使用すると、現在設定されているドメインの動作モードの内容が確認できます。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 の OpenBoot PROM の診断レベルを none に設定します。

```
XSCF> setdomainmode -d 0 -m diag=none
Diagnostic Level      :min      -> none
Secure Mode          :on       -> -
Autoboot             :on       -> -
CPU Mode             :auto     -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level      :none
Secure Mode          :on (host watchdog: available Break-signal:non-receive)
Autoboot             :on (autoboot:on)
CPU Mode             :auto
```

使用例 2 ドメイン ID 0 のオートブート機能を有効にします。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdomainmode -y -d 0 -m autoboot=on
Diagnostic Level      :none      -> -
Secure Mode          :on       -> -
Autoboot             :off      -> on
CPU Mode             :auto     -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level      :none
Secure Mode          :on (host watchdog: available Break-signal:non-receive)
Autoboot             :on (autoboot:on)
CPU Mode             :auto
```

使用例 3 setdomainmode(8) コマンドでの設定を途中で中止します。

```
XSCF> setdomainmode -d 0 -m diag=none
Diagnostic Level      :min      -> none
Secure Mode          :on       -> -
Autoboot             :on       -> -
CPU Mode             :auto     -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:n
```

使用例 4 ドメイン ID 0 のオートブート機能を有効にします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setdomainmode -q -y -d 0 -m autoboot=on
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdomainmode(8)

名前	setdomparam - OpenBoot PROM 環境変数を強制的に書き換えます。
形式	<pre>setdomparam [[-q] -{y n}] -d <i>domain_id</i> use-nvramrc setdomparam [[-q] -{y n}] -d <i>domain_id</i> security-mode setdomparam [[-q] -{y n}] -d <i>domain_id</i> set-defaults setdomparam -h</pre>
説明	<p>setdomparam(8) は、指定したドメインの OpenBoot PROM 環境変数を書き換えるコマンドです。</p> <p>以下の OpenBoot PROM 環境変数が設定できます。</p> <p>use-nvramrc? ドメインの起動または再起動時に NVRAM の内容を実行するかどうか</p> <p>security-mode? ファームウェアのセキュリティレベルの設定</p> <p>set-defaults OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に戻すかどうか</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm 管理権限を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> OpenBoot PROM 環境変数を書き換えるドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。</p> <p>注 - 電源が投入されているドメインは指定できません。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p> <p>-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。</p>

オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><code>use-nvramrc</code> 環境変数 <code>use-nvramrc?</code> を <code>false</code> に設定します。</p> <p><code>security-mode</code> 環境変数 <code>security-mode?</code> を <code>none</code> に設定します。</p> <p><code>set-defaults</code> OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に戻します。</p>
詳細説明	<p>コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。</p>
使用例	<p>使用例 1 ドメイン ID0 の OpenBoot PROM 環境変数 <code>use-nvramrc?</code> を <code>false</code> に設定します。</p> <pre>XSCF> setdomparam -d 0 use-nvramrc DomainIDs of domains that will be affected:00 OpenBoot PROM variable use-nvram will be set to false. Continue? [y n]:y</pre> <p>使用例 2 ドメイン ID0 の OpenBoot PROM 環境変数 <code>security-mode?</code> を <code>none</code> に設定します。</p> <pre>XSCF> setdomparam -d 0 security-mode DomainIDs of domains that will be affected:00 OpenBoot PROM variable security-mode will be set to none. Continue? [y n]:y</pre> <p>使用例 3 ドメイン ID0 の OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に初期化します。</p> <pre>XSCF> setdomparam -d 0 set-defaults DomainIDs of domains that will be affected:00 All OpenBoot PROM variable will be reset to original default values. Continue? [y n]:y</pre> <p>使用例 4 ドメイン ID1 の OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に初期化します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。</p> <pre>XSCF> setdomparam -q -y -d 1 set-defaults</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>

名前	setdscp - ドメイン/サービスプロセッサ間通信プロトコル (DSCP) の IP アドレス割り当てを設定します。
形式	<pre>setdscp [-v] setdscp [-f] [-v] [[-q] -{y n}] -i address -m netmask setdscp [-f] [-v] [[-q] -{y n}] -s -i address setdscp [-f] [-v] [[-q] -{y n}] -d domain_id -i address setdscp -h</pre>
説明	<p>setdscp(8) は、IP アドレスを DSCP リンクに割り当てるコマンドです。</p> <p>setdscp(8) コマンドは、初期設定にのみ使用することを目的としています。このコマンドを実行するときは、ドメインの電源を投入しないでください。</p> <p>注 - setdscp(8) コマンドを使用して DSCP の IP アドレスを変更したあと、指定した IP アドレスを使用するためには、サービスプロセッサをリセットする必要があります。</p> <p>すべての DSCP リンクで使用するためのネットワークアドレスは、<code>-i address</code> オプションと <code>-m netmask</code> オプションを使用して指定できます。この動作モードでは、サービスプロセッサおよびドメイン固有の各 DSCP リンクで使用される IP アドレスは、ネットワークアドレスによって示されるアドレス範囲の中から自動的に選択されます。</p> <p>個々のドメイン固有 DSCP リンクの IP アドレスを、その他すべての DSCP アドレス設定値とは別に設定するには、<code>-d domain_id</code> オプションと <code>-i address</code> オプションを使用します。</p> <p>サービスプロセッサの IP アドレスを、その他すべての DSCP アドレス設定値とは別に設定するには、<code>-s</code> オプションと <code>-i address</code> オプションを使用します。</p> <p>DSCP を以前に設定していた場合は、現在の設定が表示されます。表示された設定が適切な場合は、Enter キーを押すことでそのまま使用できます。</p> <p>事前に設定されたネットワークアドレスの範囲外にある値をサービスプロセッサまたはドメインのアドレスとして設定した場合や、設定したアドレスが別のドメインやサービスプロセッサにすでに割り当てられているアドレスと競合する場合は、エラーが発生します。これらのエラーは、<code>-f</code> オプションを使用して無効にできます。</p> <p>注 - 矛盾した IP アドレスで <code>-f</code> オプションを使用すると、間違った構成となる場合があります。このような場合は、DSCP に関する矛盾を適切に解決してください。</p> <p>setdscp(8) コマンドを何も指定しないで実行すると対話モードとなり、DSCP の IP アドレスを順番に入力するためのプロンプトが表示されます。非対話モードではすべてのドメインの IP アドレスを <code>-i</code> および <code>-m</code> オプションを使用して設定します。必</p>

要な設定が終わったら、設定した内容を確認し、DSCP 構成のデータベースにコミットするかどうかを決めることができます。

注 - 対話モードで `setdscp(8)` コマンドを実行した場合は、`-q` オプションの使用にかかわらず、`-y` または `-n` オプションが使用できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges(8)` コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- d *domain_id* 対象のドメイン ID を指定します。*domain_id* には、システム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。`-i address` オプションと一緒に指定します。
- f 範囲外やアドレス競合によるエラーを無視し、新しい設定値を強制的にコミットします。
- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- i *address* IP アドレスを IPv4 のドットつき 10 進表記で指定します。
 - `-m netmask` と一緒に指定する場合、システム内の DSCP リンクすべてのネットワークアドレスを指定します。
 - `-d domain_id` と一緒に指定する場合、DSCP で使用される個々のドメイン固有 IP アドレスを指定します。
 - `-s` オプションと一緒に指定する場合、システム内の DSCP リンクすべてのサービスプロセッサ側で使用される IP アドレスを指定します。
- m *netmask* システム内の DSCP リンクすべてのネットマスクアドレスを指定します。`-i address` オプションと一緒に指定します。
- n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- s システム内の DSCP リンクすべてのサービスプロセッサ側を指定します。`-i address` オプションと一緒に指定します。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

使用例

注 - 以下の使用例に示す IP アドレスは、サンプルです。DSCP の IP アドレスを指定する場合は、ローカルエリアネットワーク (LAN) 上で使用されていない IP アドレスを指定してください。DSCP の IP アドレスの詳細については『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。

使用例 1 すべてのドメインに対して DSCP アドレスを割り当てます。

```
XSCF> setdscp -y -i 10.1.1.0 -m 255.255.255.0
Commit these changes to the database? [y|n] : y
```

使用例 2 ドメイン ID 1 へ代替 IP アドレスを割り当てます。

```
XSCF> setdscp -d 1 -i 10.1.1.26
Commit these changes to the database? [y|n] : y
```

使用例 3 -q と -y オプションを使用してネットマスクアドレスを指定します。

```
XSCF> setdscp -q -y -i 10.1.1.0 -m 255.255.255.0
```

使用例 4 対話モードを使用して DSCP アドレスを設定します。

対話モードの各プロンプトによって表示されるデフォルト値は、以前の設定と一致しています。このため、DSCP 設定を対話的に確認および変更することができます。この使用例では、ネットワークアドレスの一部分のみを入力し、その後は Enter キーを押して以降の設定値をすべて受け入れています。

```
XSCF> setdscp
DSCP network [0.0.0.0      ] > 10.1.1.0

DSCP netmask [255.0.0.0   ] > 255.255.255.0

XSCF address [10.1.1.1    ] > [Enter]
Domain #00 address [10.1.1.2      ] > [Enter]
Domain #01 address [10.1.1.3      ] > [Enter]
Domain #02 address [10.1.1.4      ] > [Enter]
Domain #03 address [10.1.1.5      ] > [Enter]
Domain #04 address [10.1.1.6      ] > [Enter]
Domain #05 address [10.1.1.7      ] > [Enter]
Domain #06 address [10.1.1.8      ] > [Enter]
Domain #07 address [10.1.1.9      ] > [Enter]
Domain #08 address [10.1.1.10     ] > [Enter]
Domain #09 address [10.1.1.11     ] > [Enter]
Domain #10 address [10.1.1.12     ] > [Enter]
Domain #11 address [10.1.1.13     ] > [Enter]
Domain #12 address [10.1.1.14     ] > [Enter]
Domain #13 address [10.1.1.15     ] > [Enter]
Domain #14 address [10.1.1.16     ] > [Enter]
Domain #15 address [10.1.1.17     ] > [Enter]
Domain #16 address [10.1.1.18     ] > [Enter]
Domain #17 address [10.1.1.19     ] > [Enter]
Domain #18 address [10.1.1.20     ] > [Enter]
Domain #19 address [10.1.1.21     ] > [Enter]
Domain #20 address [10.1.1.22     ] > [Enter]
Domain #21 address [10.1.1.23     ] > [Enter]
```

setdscp(8)

```
Domain #22 address [10.1.1.24      ] > [Enter]  
Domain #23 address [10.1.1.25      ] > [Enter]  
Commit these changes to the database [y|n]? y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdscp(8)

名前	setdualpowerfeed - 二系統受電モードを設定します。
形式	setdualpowerfeed -s key setdualpowerfeed -h
説明	<p>setdualpowerfeed(8) は、本体装置の二系統受電モードを有効/無効にするコマンドです。</p> <p>setdualpowerfeed(8) コマンドは、M3000/M4000/M5000 サーバにだけ使用できます。M8000/M9000 サーバでは二系統受電用の電源筐体を接続すると、自動的に、二系統受電モードが設定されます。</p> <p>設定した内容を反映させるには、本体装置を再起動する必要があります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-s key 本体装置の二系統受電モードを設定します。key には以下のどちらかを指定できます。</p> <p> enable 二系統受電モードを有効にします。</p> <p> disable 二系統受電モードを無効にします。</p>
詳細説明	showdualpowerfeed(8) コマンドを使用すると、現在の二系統受電モードの状態を確認できます。
使用例	<p>使用例 1 本体装置の二系統受電モードを無効にします。再起動前にメッセージが表示されます。</p> <pre>XSCF> setdualpowerfeed -s disable enable -> disable NOTE: Dual power feed will be disabled the next time the platform is powered on.</pre> <p>使用例 2 本体装置の二系統受電モードを有効にします。再起動前にメッセージが表示されます。</p> <pre>XSCF> setdualpowerfeed -s enable disable -> enable NOTE: Dual power feed will be enabled the next time the platform is powered on.</pre>

setdualpowerfeed(8)

終了ステータス	以下の終了値が返されます。
0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目	showdualpowerfeed (8)
-------------	------------------------------

名前	setemailreport - 電子メールレポートの設定データをセットアップします。
形式	<pre>setemailreport [-v] [-t] setemailreport [-s variable= value]... setemailreport -h</pre>
説明	<p>setemailreport(8) は、リモート保守用に電子メールレポート機能の設定データをセットアップするコマンドです。</p> <p>一度データを設定すると、必要に応じて、Fault Management デーモン (fmd) からメールが送信されるようになります。</p> <p>オプションを何も指定せずに setemailreport(8) コマンドを実行すると、電子メールレポートを有効にするかどうかを指定するように求められます。電子メールレポートを有効にする場合、電子メールアドレスのリストを入力するように求められます。</p> <p>オプションの意味は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> -a 受信者の追加 -d 受信者の削除 -r 受信者の置換 (デフォルト) <p>-s オプションを使用すると、電子メールレポートを非対話的にセットアップできません。</p> <p>setsmtp(8) コマンドを使用してメールサーバとポートを設定したあとは、setemailreport -t コマンドでテストメールを送信できるようになります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- s *variable=value* 電子メールレポートを設定します。

variable の有効な値は以下のとおりです。
 - enable
 - recipient
 enable で有効となる値は以下のとおりです。
 - yes
 - no
 recipient で有効となる値は以下のとおりです。
 - 任意の有効な企業電子メールアドレス
- t テスト電子メールを送信します。
- v 詳細なメッセージを表示します。

使用例

使用例 1 対話モードで電子メールレポートを有効にします。

```
XSCF> setemailreport
Enable Email Reporting? [no]:yes
Email Recipient Address [useradm@company.com]:
Do you want to send a test mail now (Yes/No): no
```

使用例 2 対話モードで電子メールレポート受信者を追加します。

```
XSCF> setemailreport
Enable Email Reporting? [yes]:[RETURN]
Email Recipient Address[useradmin@company.com]: -a adm2@company.com
```

使用例 3 対話モードで電子メールレポート受信者を削除します。

```
XSCF> setemailreport
Enable Email Reporting? [yes]:[RETURN]
Email Recipient Address[adm2@company.com]: -d adm2@company.com
```

使用例 4 電子メールレポートを非対話モードで有効にします。

```
XSCF> setemailreport -s enable=yes -s
recipient="useradm@company.com, adm2@company.com"
```

使用例 5 テスト電子メールを送信します。

```
XSCF> setemailreport -t
...Sending test email to useradm@company.com
[Email contents shown below]
```

```
Host Name: jupiter  
Send Timestamp: 04-20-2006 16:31:45 PST  
Mail Server: 10.4.1.1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsmtp (8), showemailreport (8)



名前	sethostname - XSCF ユニットのホスト名および DNS ドメイン名を設定します。	
形式	sethostname <i>xscfu hostname</i> sethostname -d <i>domainname</i> sethostname -h	
説明	sethostname(8) は、XSCF ユニットのホスト名および DNS ドメイン名を設定するコマンドです。 M8000/M9000 サーバの場合、DNS ドメイン名は XSCF ユニット共通となります。ホスト名は XSCF ユニットごとに指定できます。	
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。	
オプション	以下のオプションがサポートされています。	
	-d <i>domainname</i>	XSCF ユニットの DNS ドメイン名を指定します。 <i>domainname</i> はラベル要素を "." (ピリオド) で区切った形式で、 <i>hostname</i> と合わせた文字数が 254 文字以内になるように指定します。254 文字を超えるとエラーとなります。ラベル要素には英数字または "-" が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください。"localdomain" を指定するとエラーとなります。
	-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。	
	<i>hostname</i>	XSCF ユニットのホスト名を指定します。 Fully Qualified Domain Name(FQDN) ではなく省略された形式で、64 文字以内で指定します。64 文字を超えるとエラーとなります。英数字または "-" が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください。"localhost" を指定するとエラーとなります。
	<i>xscfu</i>	設定する XSCF ユニット名を指定します。システム構成によって以下のように指定できます。省略した場合はエラーとなります。
	xscf#0	XSCF ユニット 0
	xscf#1	XSCF ユニット 1 (M8000/M9000 サーバの場合)

詳細説明

- 設定したホスト名およびDNSドメイン名を XSCF に反映させるには、`applynetwork(8)` コマンドを実行します。`applynetwork(8)` コマンドで XSCF に反映したら、`rebootxscf(8)` コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。
- `shownetwork(8)` コマンドを使用すると、現在設定されている XSCF ユニットのホスト名およびDNSドメイン名が確認できます。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 に `scf0-hostname` というホスト名を設定します。

```
XSCF> sethostname xscf#0 scf0-hostname
```

使用例 2 XSCF ユニットに `example.com` という DNS ドメイン名を設定します。

```
XSCF> sethostname -d example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- | | |
|----|------------------|
| 0 | 正常に終了したことを表します。 |
| >0 | エラーが発生したことを表します。 |

関連項目

`applynetwork(8)`, `rebootxscf(8)`, `showhostname(8)`

名前	sethttps - XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定します。また、認証関連の設定を行います。
形式	<pre>sethttps [[-q] -{y n}] -c enable sethttps -c disable sethttps -c genscr country state province locality organization organizationalunit common e-mail sethttps [[-q] -{y n}] -c genserverkey sethttps -c importca sethttps [[-q] -{y n}] -c selfsign country state province locality organization organizationalunit common e-mail sethttps -h</pre>
説明	<p>sethttps(8) は、XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定するコマンドです。また、HTTPS サービスで使用される認証関連の設定を行います。</p> <p>認証に関連する項目として、以下の内容を設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自己認証局の構築 ■ 自己署名された web サーバ証明書の作成 ■ web サーバの秘密鍵の生成 ■ 外部認証局に対する web サーバ証明書要求 (CSR) の生成 ■ 外部認証局で署名された web サーバ証明書のインポート <p>XSCF では HTTP はサポートされません。HTTPS サービスだけサポートされます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <pre>-c {enable disable} HTTPS サービスの開始または停止を指定します。以下のど ちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。 enable HTTPS サービスを開始します。 disable HTTPS サービスを停止します。 -c genscr CSR を生成します。 -c genserverkey web サーバの秘密鍵を生成します。</pre>

<code>-c importca</code>	認証局で署名された web サーバ証明書を XSCF へインポートします。
<code>-c selfsign</code>	自己認証局を構築します。また、自己署名された web サーバ証明書を作成します。
<code>-h</code>	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
<code>-n</code>	プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
<code>-q</code>	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
<code>-y</code>	プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

<code>common</code>	作成者名やサーバのホスト名など、共通名を指定します。
<code>country</code>	JP、US など、国名を 2 文字のコードで指定します。
<code>e-mail</code>	E-mail アドレスを指定します。
<code>locality</code>	都市名などを指定します。
<code>organization</code>	会社名などを指定します。
<code>organizationalunit</code>	部、課など、所属を指定します。
<code>state province</code>	州名や県名などを指定します。

詳細説明

- HTTPS サーバを有効にする場合や自己認証局、web サーバ証明書、または web サーバの秘密鍵がすでに存在する場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- CSR は上書き作成されます。
- XSCF ユニットが二重化構成の場合、スタンバイ側の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF に異常が発生しているときはエラーとなります。
- 外部認証局を利用する場合、以下のようなときはエラーとなります。
 - `"-c genserverkey"` を実行しないで `"-c gencsr"` または `"-c enable"` を実行したとき
`"-c genserverkey"` を実行して web サーバの秘密鍵を作成してください。
 - `"-c importca"` を実行しないで `"-c enable"` を実行したとき
`"-c importca"` を実行して web サーバ証明書をインポートしてください。
 - `"-c importca"` でインポートする web サーバ証明書と `"-c genserverkey"` で作成した web サーバの秘密鍵が一致しないとき

web サーバ証明書が正しいかどうか確認してください。

- 設定した内容は、`rebootxscf(8)` コマンドで XSCF をリセットすると反映されません。
- `showhttps(8)` コマンドを使用すると、現在の HTTPS サービスの内容が確認できます。

使用例

使用例 1 HTTPS サービスを開始します。

```
XSCF> sethttps -c enable
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the https settings.
```

使用例 2 HTTPS サービスを停止します。

```
XSCF> sethttps -c disable
```

使用例 3 以下の内容で CSR を生成します。*country: JP, state|province: Kanagawa, locality: Kawasaki, organization: Example, organizationalunit: development, common: scf-host, e-mail: abc@example.com*

```
XSCF> sethttps -c genscsr JP Kanagawa Kawasaki Example development
\ scf-host abc@example.com
```

使用例 4 以下の内容で自己認証局を構築し、自己署名された web サーバ証明書を生成します。*country: JP, state|province: Kanagawa, locality: Kawasaki, organization: Example, organizationalunit: development, common: scf-host, e-mail: abc@example.com*

```
XSCF> sethttps -c selfsign JP Kanagawa Kawasaki Example development
scf-host abc@example.com
CA key and CA cert already exist. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 5 web サーバの秘密鍵を生成します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey
Server key already exists. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 6 web サーバの秘密鍵を生成します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey
Server key already exists. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 7 web サーバの秘密鍵を生成します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey -q -y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 8 web サーバ証明書をインポートします。終了は Enter キーを押してから、"Ctrl" と "D" を実行します。

```
XSCF> sethttps -c importca
Please import a certificate:
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIDdTCCA6gAwIBAgIBATANBgkqhkiG9w0BAQQFADCBgTELMakGA1UEBhMCamox
DjAMBgNVBAgTBXN0YXR1MREwDwYDVQQHEwshb2NhbG10eTEVMBMGAlUEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLewZvcmdhbmksDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQ
CSqGSIB3DQEJARYHZWUubWFpbDAeFw0wNjA1MzAwNTI1MTVaFw0xNjA1MjcwNTI1
MTVaMG4xCzAJBgNVBAYTAmpqMQ4wDAYDVQQIEwVzdGF0ZTEVMBMGAlUEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLewZvcmdhbmksDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQ
CSqGSIB3DQEJARYHZWUubWFpbDCBnzANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOBjQAwYkCgYEA
nkPntf+TjYtyKlNYFbO/YavFpUzkYTLHdt0Fbz/tZmGd3e6Jn34A2W9EC7D9hjLs
j+kAP41A16wFwGO7KP3H4iImX0Uysj19Hyk4jLBU51sw8JqvT2utTj1tV5mFPKL6
5A51Yuhf8OGrR+bYGli6H1a6RPmlMSD7Z0AGDxR0eY0CAwEAAOCAQ0wggEJMAkG
A1UdEwQCAAwLAYJYIZIAYb4QgENBB8WHU9wZW5TU0wgR2VuZXJhdGVkIENlcnRp
ZmljYXR1MB0GA1UdDgQWBBI1CmI7QyZa8zpt1H16EfLR+EwDCBrgYDVR0jBIGM
MIGjgBTnQys6jzD7wdDhk7wsFeJGVAUttaGBh6SBhDCBgTELMakGA1UEBhMCamox
DjAMBgNVBAgTBXN0YXR1MREwDwYDVQQHEwshb2NhbG10eTEVMBMGAlUEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLewZvcmdhbmksDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQ
CSqGSIB3DQEJARYHZWUubWFpbIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQCqBFbo88Hi
yvOUyW8E111AbuA04IrnjHI4cjHq9NusX1w8mJsXKTVMx3WZCJpJDC+f/WoRMKw
R+OpXAVQvb2tjIn3k099dq+begECO4mwknW1t7QI7A1BkCW2/MkOolIRa6iP1Zwg
JoPmwAbrGyAvGUtdzUoyIH0j17dRQrVIRA==
-----END CERTIFICATE-----
[Enter]
[Ctrl] and [D]
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0          正常に終了したことを表します。
>0        エラーが発生したことを表します。
```

関連項目

showhttps(8)

名前	setldap - XSCF を Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) クライアントとして設定します。
形式	setldap {-b <i>bind</i> } {-B <i>baseDN</i> } {-c <i>certchain</i> } {-p} {-s <i>servers</i> } {-t <i>uesr</i> } -T <i>timeout</i> setldap -h
説明	setldap(8) は、XSCF を LDAP クライアントとして設定するコマンドです。 注 - LDAP クライアントは UNIX Crypt または MD5 である CRYPT 形式のパスワードだけをサポートしています。したがって、LDAP サーバもこの形式のパスワードをサポートする必要があります。詳細については、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -B <i>baseDN</i> 検索ベースの識別名を指定します。指定できる最大文字数は 128 文字です。 -b <i>bind</i> LDAP サーバへ接続するときに使用するバインド ID を設定します。指定できる最大文字数は 128 文字です。 -c <i>certchain</i> LDAP サーバの証明書チェーンをインポートしてくるリモートファイルを指定します。この証明書チェーンは PEM 形式である必要があります。リモートファイルは、標準の scp 構文 ([user@]host:file.) を使用して指定され、scp を使用してインポートされます。コピーでユーザーパスワードが必要な場合は、入力するように求められます。-c オプションを使用すると、LDAP への接続時に、Transport Layer Security (TLS) の使用が暗黙的に有効になります。この動作は、 <i>certchain</i> を none に指定して無効にできます。証明書チェーンはサイズが 64K 以下であることと、有効であることが必要です。そうでない場合は、拒否されます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -p LDAP サーバへ接続するときに使用するパスワードを設定します。パスワードを入力するように求められます。

- s *servers* プライマリ LDAP サーバとセカンダリ LDAP サーバ、およびポートを設定します。*servers* は、*server:port* 形式で指定します。カンマ(,)で区切って複数指定できます。*port* は数字で、*server* は名前またはドットつき 10 進表記の IP アドレス、のいずれかで指定します。たとえば、10.8.31.14.636, company:636 のようになります。リスト内の最初のサーバがプライマリとなります。サーバ名は DNS サーバによって、名前解決可能である必要があります。
- t *user* 設定されたすべての LDAP サーバへの接続をテストします。設定した各サーバから、指定したユーザーのパスワードデータの取得を試み、すべてのケースについての、成功または失敗を出力します。
- T *timeout* LDAP 検索で結果を出力するまでのタイムアウト時間を設定します。

使用例

使用例 1 LDAP サーバへ接続するときに使用するバインド名を設定します。

```
XSCF> setldap -b user -p
Password: <Enter password>
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: Not set
LDAP Search Timeout:     0
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            None
CERTS:                   None
```

使用例 2 検索ベースの識別名を指定します。

```
XSCF> setldap -B ou=people,dc=company,dc=com
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     0
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            None
CERTS:                   None
```

使用例 3 LDAP 検索のタイムアウトを設定します。

```
XSCF> setldap -T 60
XSCF> showldap
Bind Name:                user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     60
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            None
CERTS:                   None
```

使用例 4 LDAP サーバを設定します。

```
XSCF> setldap -s ldap://company.com,ldaps://company2.com
XSCF> showldap
Bind Name: user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout: 60
Bind Password: Set
LDAP Servers: ldap://company.com:389 ldaps://company2.com:636
CERTS: None
```

使用例 5 証明書チェーンをインポートします。

```
XSCF> setldap -c user@remote.machine:/path/to/cacert.pem
XSCF> showldap
Bind Name: user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout: 60
Bind Password: Set
LDAP Servers: ldap://company.com:389 ldaps://company2.com:636
CERTS: cacert.pem
```

使用例 6 指定したユーザーで、LDAP 接続をテストします。

```
XSCF> setldap -t jsmith
company.com:389 PASSED
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

showldap(8)

setldap(8)



名前	setlocale - XSCF のデフォルトのロケールを設定します。
形式	setlocale -s <i>locale</i> setlocale -h
説明	setlocale(8) は、XSCF のデフォルトのロケールを設定するコマンドです。 設定できるロケールは英語または日本語です。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、 <code>platadm</code> 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、 <code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -s <i>locale</i> XSCF のデフォルトのロケールを指定します。 <i>locale</i> には以下のどちらかが指定できます。 C ロケールを英語に設定します。 ja_JP.UTF-8 ロケールを日本語に設定します。
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ 設定されたロケールは、次のログイン以降で有効になります。 ■ <code>showlocale(8)</code> コマンドを使用すると、現在設定されているロケールが確認できます。
使用例	<p>使用例 1 XSCF のデフォルトのロケールを英語に設定します。</p> <pre>XSCF> setlocale -s C C</pre> <p>使用例 2 XSCF のデフォルトのロケールを日本語に設定します。</p> <pre>XSCF> setlocale -s ja_JP.UTF-8 ja_JP.UTF-8</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	showlocale(8)

setlocale(8)



名前	setlocator - オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定します。
形式	setlocator <i>value</i> setlocator -h
説明	setlocator(8) は、オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定するためのコマンドです。 以下の状態が設定できます。 点滅開始 CHECK LED を点滅させます。 点滅解除 CHECK LED の点滅を解除します
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>value</i> CHECK LED の状態を指定します。以下のどちらかを指定できます。 blink CHECK LED を点滅させます。 reset CHECK LED の点滅を解除します。
詳細説明	showlocator(8) コマンドを使用すると、CHECK LED の状態を確認できます。
使用例	使用例 1 CHECK LED を点滅させます。 XSCF> setlocator blink 使用例 2 CHECK LED の点滅を解除します。 XSCF> setlocator reset
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。

setlocator(8)

関連項目

showlocator(8)

名前	setlookup - 認証とユーザー権限に関する参照先を設定します。
形式	setlookup -a {local ldap} setlookup -p {local ldap} setlookup -h
説明	setlookup(8) は、認証とユーザー権限のデータが、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) から参照されるかどうかを設定するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -a 認証の参照先を指定します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -p ユーザー権限の参照先を指定します。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 ldap 参照先に LDAP を含めます。-a オプションまたは-p オプションと一緒に指定します。認証およびユーザー権限は最初に XSCF 内 が参照され、見つからなかった場合は LDAP 内が参照されます。 local 参照先を XSCF とします。-a オプションまたは-p オプションと 一緒に指定します。認証およびユーザー権限は XSCF 内だけ参照 されます。
使用例	使用例 1 ユーザー権限の参照先を LDAP に設定します。 XSCF> setlookup -p ldap
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	showlookup (8)

setlookup(8)



名前	setnameserver - XSCF ネットワークで使用される Domain Name System (DNS) サーバを設定します。
形式	<pre>setnameserver [-c add] address... setnameserver -c del address... setnameserver -c del -a setnameserver -h</pre>
説明	<p>setnameserver(8) は、XSCF ネットワークで使用される DNS サーバを設定するコマンドです。</p> <p>XSCF では最大 3 つの DNS サーバを登録できます。4 つ以上登録しようとした場合はエラーとなります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -a 現在登録されている DNS サーバをすべて削除します。"-c del" と一緒に使用します。 -c add 指定した IP アドレスのホストを DNS サーバに追加します。 <i>address</i> と一緒に使用します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。DNS サーバを登録する場合は、既存の設定が削除され、指定した <i>address</i> で上書きされます。 -c del 指定した IP アドレスのホストを DNS サーバから削除します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>address</i> 追加または削除する DNS サーバの IP アドレスを指定します。4 組の整数値の間にピリオド (.) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。スペースで区切って、最大 3 つまで指定できます。</p> <pre>xxx.xxx.xxx.xxx xxx</pre> <p>0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。</p>

詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ DNS サーバが複数指定されている場合は、指定された順番に名前解決が行われま す。 ■ 設定した DNS サーバ名を XSCF に反映させるには、<code>applynetwork(8)</code> コマンドを 実行します。<code>applynetwork(8)</code> コマンドで XSCF に反映したら、 <code>rebootxscf(8)</code> コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。 ■ <code>shownameserver(8)</code> コマンドを使用すると、現在設定されている DNS サーバが 確認できます。
使用例	<p>使用例 1 IP アドレス 192.168.1.2, 10.18.108.10, 10.24.1.2 のホストを DNS サーバとして 追加します。指定された順番に名前解決が行われます。</p> <pre>XSCF> setnameserver 192.168.1.2 10.18.108.10 10.24.1.2</pre> <p>使用例 2 IP アドレス 10.18.108.10 のホストを DNS サーバから削除します。</p> <pre>XSCF> setnameserver -c del 10.18.108.10</pre> <p>使用例 3 設定されているすべての DNS サーバを削除します。</p> <pre>XSCF> setnameserver -c del -a</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	<p><code>shownameserver(8)</code></p>

名前	setnetwork - XSCF で使用されるネットワークインターフェースを設定または削除します。
形式	<pre>setnetwork [-m <i>addr</i>] <i>interface address</i> setnetwork -c {up down} <i>interface</i> setnetwork [[-q] -{y n}] -r <i>interface</i> setnetwork -h</pre>
説明	<p>setnetwork(8) は、XSCF で使用するネットワークインターフェースを設定または削除するコマンドです。</p> <p>指定したネットワークインターフェースに対して、以下の内容を設定または削除できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークインターフェースの有効または無効 ■ IP アドレス ■ ネットマスク <p>IP アドレスやネットマスクを設定した場合は、設定と同時に、指定したネットワークインターフェースが有効となります。</p> <p>ネットワークインターフェースを削除した場合は、削除と同時に、指定したネットワークインターフェースが無効となります。また、対象のネットワークインターフェースにルーティング情報が設定されている場合は、一緒に削除されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- c {up|down} 設定したネットワークインターフェースを有効にするかどうかを指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。
- up ネットワークインターフェースを有効にします。
- down ネットワークインターフェースを無効にします。
- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- m *addr* ネットマスクを指定します。4組の整数値の間にピリオド(.)をつけて指定します。以下の形式で指定できます。
- xxx.xxx.xxx.xxx*
xxx 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。
- m オプションを省略した場合は、*address* に対応するネットマスクが設定されます。
- クラス A: 255.0.0.0
 - クラス B: 255.255.0.0
 - クラス C: 255.255.255.0
- n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- r ネットワークインターフェースの、IP アドレスおよびネットマスクを削除します。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

<i>address</i>	<p>IP アドレスを指定します。4 組の整数値の間に "." (ピリオド) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。</p> <pre>xxx.xxx.xxx.xxx</pre> <p><i>xxx</i> 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。</p> <p>ループバックアドレス (127.0.0.0/8) を指定するとエラーとなります。</p>
<i>interface</i>	<p>設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ M3000/M4000/M5000 サーバの場合 <p>XSCF ユニット 0:</p> <pre>xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0 xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1</pre> <p>省略形:</p> <pre>lan#0 XSCF-LAN#0 lan#1 XSCF-LAN#1</pre> <ul style="list-style-type: none"> ■ M8000/M9000 サーバの場合 <p>-c または -r オプションと、インター SCF ネットワーク (ISN) を一緒に指定するとエラーとなります。</p> <p>XSCF ユニット 0:</p> <pre>xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0 xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1 xscf#0-if ISN</pre> <p>XSCF ユニット 1:</p> <pre>xscf#1-lan#0 XSCF-LAN#0 xscf#1-lan#1 XSCF-LAN#1 xscf#1-if ISN</pre> <p>引継ぎ IP アドレス:</p> <pre>lan#0 XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレス lan#1 XSCF-LAN#1 の引継ぎ IP アドレス</pre>

詳細説明

- 引継ぎ IP アドレスとは、M8000/M9000 サーバの場合に、XSCF が切り替えられていることを意識せずに使用できる IP アドレスのことです。アクティブな XSCF ユニットの各 LAN ポートを lan#0、lan#1 に設定しておくことによって、lan#0、lan#1 という名称でアクセスできるようになります。
- M3000/M4000/M5000 サーバの場合は、lan#0 は xscf#0-lan#0、lan#1 は xscf#0-lan#1 で固定となります。

- ネットワークインターフェースを設定後、そのネットワークインターフェースを無効にして `applynetwork(8)` コマンドを実行すると、設定した IP アドレスやネットマスクの情報は XSCF へ保存されます。ネットワークインターフェースを有効にしたときに、設定した IP アドレスとネットマスクが使用されます。
- 以下の場合、`setnetwork(8)` コマンドはエラーとなります。
 - XSCF-LAN#0 と XSCF-LAN#1 に同じサブネットを指定した場合
 - DSCP アドレスと同じ IP アドレスを指定した場合
 - DSCP アドレスと重複するサブネットを指定した場合
 - ISN と他のネットワークインターフェースに対して重複するサブネットを指定した場合
 - `-c` または `-r` オプションと、ISN を一緒に指定した場合
- ISN 以外のインターフェースに対する IP アドレス、ネットマスクを指定した場合、ISN が未設定のときは、以下のデフォルト値が設定されます。
 - `xscf#0-if`:
IP アドレス: 192.168.1.1 ネットマスク: 255.255.255.0
 - `xscf#1-if`:
IP アドレス: 192.168.1.2 ネットマスク: 255.255.255.0
- `shownetwork(8)` コマンドを使用すると、XSCF に現在設定されているネットワークインターフェースの内容が確認できます。
- 設定したネットワークインターフェースの内容を反映させるには、`applynetwork(8)` コマンドを実行します。`applynetwork(8)` コマンドで XSCF に反映したら、`rebootxscf(8)` コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に IP アドレス 192.168.10.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork xscf#0-lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.10.10
```

使用例 2 M3000/M4000/M5000 サーバの、XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に IP アドレス 192.168.10.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.10.10
```

使用例 3 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 を無効にします。

```
XSCF> setnetwork xscf#0-lan#1 -c down
```

使用例 4 XSCFU ユニット 0 の ISN に、IP アドレス 192.168.10.128 を設定します。ネットマスクはデフォルト (255.255.255.0) となります。

```
XSCF> setnetwork xscf#0-if 192.168.10.128
```

使用例 5 XSCF ユニット 1 の XSCF-LAN#0 に IP アドレス 192.168.11.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork xscf#1-lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.11.10
```

使用例 6 XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレスに IP アドレス 192.168.1.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.1.10
```

使用例 7 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定された IP アドレス、ネットマスクを削除します。

```
XSCF> setnetwork -r xscf#0-lan#0
You specified '-r' interface remove option.
So, we delete routing information that interface corresponds.
Continue? [y|n] :y
If you choose 'y'es, you must execute 'applynetwork' command for
application.
Or you choose 'y'es, but you don't want to apply, you execute 'rebootxscf'
for reboot.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **shownetwork(8)**

setnetwork(8)



名前	setntp - XSCF に対する NTP 情報を設定します。
形式	<pre>setntp [-c add] address ...</pre> <pre>setntp -c del address ...</pre> <pre>setntp -c del -a</pre> <pre>setntp -c stratum -i stratum_no</pre> <pre>setntp -h</pre>
説明	<p>setntp(8) は、XSCF に対する NTP 情報を設定するコマンドです。</p> <p>setntp(8) コマンドでは、以下の NTP 情報が設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCF ネットワークで使用される NTP サーバ <ul style="list-style-type: none"> 最大 3 つの NTP サーバを登録できます。4 つ以上登録しようとした場合はエラーとなります。 ■ XSCF に設定される stratum 値
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -a 現在登録されている NTP サーバをすべて削除します。"-c del" と一緒に使用します。 -c add 指定したアドレスまたはホスト名を NTP サーバに追加します。 <i>address</i> と一緒に指定します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。NTP サーバを登録する場合は既存の設定が削除され、指定した <i>address</i> で上書きされます。 -c del 指定したアドレスまたはホスト名を NTP サーバから削除します。-c オプションを省略した場合は "-c add" が指定されたとみなされます。 -c stratum XSCF を NTP サーバとした場合の、stratum 値を設定します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -i <i>stratum_no</i> stratum 値を指定します。"-c stratum" と一緒に指定します。1 から 15 までの整数で指定できます。stratum 値を設定しない場合は、5 となります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

追加または削除する NTP サーバの、IP アドレスまたはホスト名を指定します。IP アドレスやホスト名は、スペースで区切って、最大3つまで指定できます。

IP アドレスを指定する場合は、4組の整数値の間に"."(ピリオド)をつけて指定します。以下の形式で指定できます。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサ
プレスで指定できます。

ホスト名を指定する場合は、Fully Qualified Domain Name(FQDN)でなく、ホスト名だけ指定します。RFC 1034 に準拠した形式で指定できます。

"-c add" を指定して *address* を省略した場合はエラーとなります。

詳細説明

- NTP サーバが複数指定されている場合は、最初に設定された NTP サーバから優先されます。
- M8000/M9000 サーバの場合、スタンバイ側の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF に異常が発生しているときはエラーとなります。
- 設定した内容を反映させるには、rebootxscf(8) コマンドを使用して、XSCF をリセットする必要があります。
- XSCF がリセットされると、XSCF の時刻が NTP サーバの時刻に同期されます。
- XSCF に NTP サーバを設定すると、ドメインの時刻が変更される場合があります。必要に応じて、ドメインの時刻を設定しなおしてください。
- showntp(8) コマンドを使用すると、現在設定されている NTP サーバが確認できます。

使用例

使用例 1 3つの NTP サーバ 192.168.1.2、10.18.108.10、10.24.1.2 を登録します。

```
XSCF> setntp 192.168.1.2 10.18.108.10 10.24.1.2
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 2 設定されている NTP サーバ 10.18.108.10 を削除します。

```
XSCF> setntp -c del 10.18.108.10
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 3 2つの NTP サーバ ntp1.examples.com、ntp2.example.com を登録します。

```
XSCF> setntp ntp1.example.com ntp2.example.com
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 4 stratum 値を 7 に設定します。

```
XSCF> setntp -c stratum -i 7
```

Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showntp(8)**

setntp(8)



名前	setpasswordpolicy - システムのパスワードポリシーを管理します。
形式	setpasswordpolicy [-d <i>dcredit</i>] [-e <i>expiry</i>] [-i <i>inactive</i>] [-k <i>difok</i>] [-l <i>lcredit</i>] [-M <i>maxdays</i>] [-m <i>minlen</i>] [-n <i>mindays</i>] [-o <i>ocredit</i>] [-r <i>remember</i>] [-u <i>ucredit</i>] [-w <i>warn</i>] [-y <i>retry</i>] setpasswordpolicy -h
説明	setpasswordpolicy(8) は、システムのパスワードポリシーを変更するコマンドです。 これらのポリシーは、サービスプロセッサ上の XSCF によって行われます。新しく設定されたパスワードポリシーは、setpasswordpolicy(8) コマンド実行後に追加されたユーザーアカウントに対して適用されます。 新しいユーザーアカウントの作成を制御するパラメータには、 <i>expiry</i> 、 <i>inactive</i> 、 <i>maxdays</i> 、 <i>mindays</i> 、および <i>warn</i> があります。ユーザーを作成するとき、adduser(8) コマンドによって、これらのパラメータが新しいアカウントのパスワード有効期限設定として使用されます。password(8) コマンドを使用して、既存アカウントのパスワード有効期限設定を変更することができます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -d <i>dcredit</i> パスワードに含まれる数字の最大数を設定します。各数字は1つのクレジットになります。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる数字1文字ごとに、 <i>dcredit</i> 文字まで1ずつ減ります。有効な値は、ゼロ以上の整数です。初期設定値は1です。 -e <i>expiry</i> 新しいアカウントの有効期限が切れて無効になるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は0です。ゼロは、アカウントの有効期限が切れないことを意味します。有効な値は、ゼロ以上の整数です。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -i <i>inactive</i> パスワードの有効期限が切れてからアカウントがロックされるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は-1です。値が-1の場合は、パスワードの有効期限が切れたあともアカウントがロックされないことを意味します。有効な値は、-1以上の整数です。

- k difok** 新しいパスワードの中に、新しい文字 (古いパスワードに含まれていなかった文字) が何文字以上含まれている必要があるかを設定します。初期設定値は 3 です。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。
- l lcredit** パスワードに含まれる小文字の最大数を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる小文字 1 文字ごとに、*lcredit* 文字まで 1 ずつ減ります。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。初期設定値は 1 です。
- M maxdays** パスワードが有効である最大日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 999999 です。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。
- m minlen** 新しいパスワードの最小サイズを設定します。
- 注** - *minlen* には、6 未満の値を設定できません。
- 有効な値は、6 以上の整数です。
- n mindays** パスワードを変更してから次に変更するまでの間の最小日数を設定します。このフィールドの初期値 0 は、いつでもパスワードを変更できることを示します。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。
- o ocredit** パスワードに含まれる英数字以外の文字の最大数を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる英数字以外の文字 1 文字ごとに、*ocredit* 文字まで 1 ずつ減ります。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。初期設定値は 1 です。
- r remember** パスワード履歴に記憶させるパスワードの数を設定します。
- 有効な最大値は 10 です。初期設定値は 3 です。

- u *ucredit*** パスワードに含まれる大文字の最大数を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる大文字 1 文字ごとに、*ucredit* 文字まで 1 ずつ減ります。
- 初期設定値は 1 です。
- w *warn*** ユーザーにパスワードの有効期限の警告を發してから実際に有効期限が切れるまでのデフォルトの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 7 です。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。
- y *retry*** `password` コマンドを使用してユーザーアカウント用のパスワードを変更する場合のパスワードの再試行を許可する回数を設定します。初期値は 3 回です。
- 有効な値は、ゼロ以上の整数です。

使用例

使用例 1 記憶させるパスワードの最小サイズと数を設定します。

```
XSCF> setpasswordpolicy -m 12 -r 5
```

使用例 2 最小パスワード長と最大数を設定します。

```
XSCF> setpasswordpolicy -m 10 -d 1 -u 0 -l 1 -o 1
```

このコマンドを実行すると、新しいパスワードの最小パスワード長は 10 文字になります。数字 (または英数字以外の文字) を 1 文字以上含んでいる場合は、9 文字のパスワードが受け入れられます。数字 1 文字と、英数字以外の文字 1 文字を含んでいる場合は、8 文字のパスワードが受け入れられます。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser (8), password (8), showpasswordpolicy (8)

setpasswordpolicy(8)



名前	setpowerupdelay - システムの暖機運転時間および起動までの待ち時間を設定します。
形式	<pre>setpowerupdelay -c warmup -s time</pre> <pre>setpowerupdelay -c wait -s time</pre> <pre>setpowerupdelay -h</pre>
説明	<p>setpowerupdelay(8) は、システムの暖機運転時間および起動までの待ち時間を設定するコマンドです。</p> <p>起動までの待ち時間は、コンピュータールーム内の空調が適温になってからシステムを起動する、などの制御に利用できます。システムの電源がすでに投入され稼働している場合、設定した内容は次のシステム起動時に有効となります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-c warmup 暖機運転時間を設定します。</p> <p>-c wait システム起動までの待ち時間を設定します。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-s <i>time</i> 暖機運転または起動までの待ち時間を分単位で指定します。<i>time</i> は 0 から 255 までの整数で指定できます。</p>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ showpowerupdelay(8) コマンドを使用すると、現在設定されている暖機運転時間および起動までの待ち時間が確認できます。 ■ オペレーターパネルから電源が投入された場合、暖機運転時間や起動までの待ち時間に設定した値は無視されます。これらの時間を設定して起動時に監視する場合は、poweron(8) コマンドを使用してください。
使用例	<p>使用例 1 暖機運転時間を 10 分に設定します。</p> <pre>XSCF> setpowerupdelay -c warmup -s 10</pre> <p>使用例 2 起動までの待ち時間を 20 分に設定します。</p> <pre>XSCF> setpowerupdelay -c wait -s 20</pre>

setpowerupdelay(8)

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpowerupdelay (8)

名前	setprivileges - ユーザー権限を割り当てます。
形式	setprivileges <i>user</i> [<i>privileges</i>] [<i>domainprivilege</i> @ <i>domains</i>] setprivileges -h
説明	<p>setprivileges(8) は、XSCF ユーザーアカウントにユーザー権限を割り当てるコマンドです。</p> <p>setprivileges(8) コマンドで変更できるのは、XSCF のユーザー権限データだけです。スペースで区切って複数のユーザー権限を指定できます。1つのユーザー権限に対して、最大 100 ユーザーアカウントを割り当てることができます。1 ユーザーアカウントには、複数のユーザー権限を設定できます。ユーザー権限のリストは、「オペランド」を参照してください。</p> <p>domainop 権限、domainmgr 権限、domainadm 権限は、特定のドメインに対して割り当てなければなりません。他のユーザー権限には、この機能はありません。詳細については、「オペランド」および使用例 1 を参照してください。</p> <p>ユーザー権限を指定しない場合、setprivileges(8) コマンドは指定したユーザーの XSCF 上の権限データをすべて削除します。その後、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) へのユーザー権限の参照が有効になっている場合は、ユーザーの権限データが LDAP 内で参照されるようになります。</p> <p>none を指定した場合は、LDAP 内の権限データの内容にかかわらず、指定したユーザーには権限が与えられません。</p>
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

domainprivilege@domains

特定の1つまたは複数のドメインに対し、*domainadm* 権限、*domainmgr* 権限、または *domainop* 権限を指定します。

以下は、*domainprivilege* に対する有効値です。それぞれ必ず *@domains* と一緒に指定します。

<i>domainadm</i>	権限を与えられたドメインに割り当てられている、ハードウェアに関するすべての操作(割り当て、割り当て解除、電源供給など)を実行できます。権限を与えられたドメインに割り当てられている、ハードウェアの状態をすべて表示できます。権限を与えられたドメインに関する、すべての操作を実行できます。権限を与えられたドメインの、すべての状態を表示できます。
<i>domainmgr</i>	権限を与えられたドメインの再起動、電源の投入や切断を実行できます。権限を与えられたドメインに割り当てられている、すべてのハードウェアの状態をすべて表示できます。権限を与えられたドメインのすべての状態を表示できます。
<i>domainop</i>	この権限を持つドメインに割り当てられているすべてのハードウェアの状態をすべて表示できます。この権限を持つすべてのドメインの状態をすべて表示できます。
<i>domains</i>	<p><i>domainprivilege</i> に対する適切な値に、@記号と <i>domains</i> 記述子をつけて、1つまたは複数のドメインを指定します。</p> <p>ドメインを指定するには、@記号の後ろにドメインIDをつけて使用します。</p> <p>例: <i>domainadm@3</i></p> <p>ドメインを範囲で指定する場合は、範囲に含まれるドメインの始めと終わりを "-" で区切って指定します。</p> <p>例: <i>domainadm@3-4</i></p> <p>1つのドメインやドメイン範囲を複数指定する場合は、カンマ(,)で区切ります。ドメインの指定が重複した場合はエラーとなります。</p> <p>例: <i>domainadm@1-2,4</i></p>

privileges

ユーザー権限の有効な値は以下のとおりです。

<code>auditadm</code>	監査を設定できます。監査トレイルを削除できます。
<code>auditop</code>	すべての監査状態と監査トレイルを表示できます。
<code>fieldeng</code>	保守作業員および当社技術員用に限定されているすべての操作を実行できます。
<code>none</code>	ユーザーにLDAP内で権限が設定されている場合でも、ユーザー権限を必要とするサービスプロセッサに関する操作を一切実行できません。この権限を使用すると、サービスプロセッサおよびドメイン上でそのような操作にアクセスすることを管理者が制限できます。
<code>platadm</code>	<code>useradm</code> 権限と <code>auditadm</code> 権限で実行できる内容を除いた、すべての XSCF の設定を実行できます。ドメインにハードウェアを割り当てたり、ドメインからハードウェアの割り当てを解除したりできます。ドメインと XSCF の電源供給に関する操作を実行できます。XSCF ユニットのフェイルオーバーに関する操作を実行できます。プラットフォームのすべての状態を表示できます。
<code>platop</code>	プラットフォームのすべての状態を表示できますが、変更はできません。
<code>useradm</code>	ユーザーアカウントの作成、削除、無効化、有効化ができます。ユーザーのパスワードとパスワードポリシーを変更できます。ユーザー権限を変更できます。

user

有効なユーザー名を指定します。

使用例

使用例 1 指定したユーザー (JSmith) についてユーザー権限を設定します。

```
XSCF> setprivileges jsmith platadm domainadm@1-4,6,9
```

使用例 2 指定したユーザーのすべての権限を削除します。

```
XSCF> setprivileges jsmith none
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

setprivileges(8)

関連項目

setpasswordpolicy(8), showuser(8)

名前	setroute - XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定します。
形式	setroute -c {add del} -n <i>address</i> [-m <i>address</i>] [-g <i>address</i>] <i>interface</i> setroute -h
説明	<p>setroute(8) は、XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定するコマンドです。</p> <p>ルーティング情報は、ネットワークインターフェースごとに最大 8 個まで登録できます。8 個を超えた場合はエラーとなります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-c {add del} ルーティング情報に対する機能を指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。</p> <p style="margin-left: 40px;">add ルーティング情報を追加します。 del ルーティング情報を削除します。</p> <p>-g <i>address</i> ルーティングで使用されるゲートウェイアドレスを指定します。 <i>address</i> には 4 組の整数値の間に "." (ピリオド) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。省略した場合は未設定となります。</p> <p style="margin-left: 40px;"><i>xxx.xxx.xxx.xxx</i> <i>xxx</i> 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。</p>

- h** 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- m *address*** ルーティング情報の宛先となるネットマスクを指定します。4組の整数値の間に"." (ピリオド) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。
- xxx.xxx.xxx.xxx*
xxx 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。
- m オプションを省略し、-n オプションでネットワークアドレス (クラスに応じた、デフォルトのホストアドレス部分が 0 のアドレス) を指定した場合は、クラスに応じて、以下のようなデフォルトのネットマスク値が適用されます。
- | クラス | マスク値 |
|-----|---------------|
| A | 255.0.0.0 |
| B | 255.255.0.0 |
| C | 255.255.255.0 |
- m オプションを省略し、-n オプションでホストアドレスを指定した場合は、ネットマスクは適用されません。
- n オプションで"0.0.0.0"を指定した場合は、ネットマスクは無効となります。
- n *address*** ルーティング情報の宛先となる IP アドレスを指定します。4組の整数値の間に"." (ピリオド) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。
- xxx.xxx.xxx.xxx*
xxx 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。
- address* に"0.0.0.0"を指定した場合は、デフォルトのルーティング情報を設定できます。

オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>interface</i> 設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ M3000/M4000/M5000 サーバの場合 <pre>XSCF ユニット 0: xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0 xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1</pre> <p>省略形:</p> <pre>lan#0 XSCF-LAN#0 lan#1 XSCF-LAN#1</pre> <ul style="list-style-type: none"> ■ M8000/M9000 サーバの場合 <pre>XSCF ユニット 0: xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0 xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1</pre> <pre>XSCF ユニット 1: xscf#1-lan#0 XSCF-LAN#0 xscf#1-lan#1 XSCF-LAN#1</pre>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ DSCP アドレスと同じアドレスを指定した場合はエラーとなります。 ■ XSCF-LAN#0 と XSCF-LAN#1 に、同じネットワークやホストへのルーティングを設定しないでください。 ■ 設定したルーティング情報を XSCF に反映させるには、<code>applynetwork(8)</code> コマンドを実行します。<code>applynetwork(8)</code> コマンドで XSCF に反映したら、<code>rebootxscf(8)</code> コマンドを使用して XSCF をリセットすると設定が完了します。 ■ <code>showroute(8)</code> コマンドを使用すると、XSCF ネットワークに現在設定されているルーティング情報が表示されます。
使用例	<p>使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に対して、宛先に 192.168.1.0、ネットマスク 255.255.255.0 としたルーティングを追加します。</p> <pre>XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xscf#0-lan#0</pre> <p>使用例 2 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、ゲートウェイ 192.168.1.1 としたルーティングを追加します。</p> <pre>XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -g 192.168.1.1 xscf#0-lan#1</pre> <p>使用例 3 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、ネットマスクをデフォルト (255.255.255.0) としたルーティングを追加します。</p> <pre>XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 xscf#0-lan#1</pre>

使用例 4 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、ネットマスクをデフォルト (255.255.255.0) としたルーティングを削除します。

```
XSCF> setroute -c del -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xscf#0-lan#1
```

使用例 5 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.4 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.4 xscf#0-lan#1
```

使用例 6 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.4 としたルーティングを削除します。

```
XSCF> setroute -c del -n 192.168.1.4 xscf#0-lan#1
```

使用例 7 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に対して、デフォルトのゲートウェイを 192.168.10.1 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 0.0.0.0 -g 192.168.10.1 xscf#0-lan#1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork (8), **rebootxscf (8)**, **showroute (8)**

名前	setshutdowndelay - 無停電電源装置 (UPS) からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を設定します。
形式	setshutdowndelay -s time setshutdowndelay -h
説明	setshutdowndelay(8) は、UPS が接続されたシステムで停電が発生した場合の、システムシャットダウン開始までの待ち時間を設定するコマンドです。 指定した時間までシャットダウンの開始を遅らせることができます。時間内に UPS から復電が通知された場合はシャットダウンされません。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -s <i>time</i> シャットダウン開始までの待ち時間を秒単位で指定します。 <i>time</i> は 0 から 9999 までの整数で指定できます。デフォルトは 10 秒です。
詳細説明	showshutdowndelay(8) コマンドを使用すると、現在設定されている待ち時間が表示されます。
使用例	使用例 1 シャットダウン開始までの待ち時間を 600 秒に設定します。 XSCF> setshutdowndelay -s 600
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	showshutdowndelay (8)

setshutdowndelay(8)



名前	setsmtp - Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) サービスを設定します。
形式	setsmtp [-v] setsmtp [-s <i>variable= value</i>].. setsmtp -h
説明	<p>setsmtp(8) は、SMTP サービスを設定するコマンドです。</p> <p>オプションを指定せずに使用した場合、対話的に、使用する SMTP 電子メールサーバの名前を入力するように求められます。また、発信電子メールで使用するポートと Reply-To アドレスも入力するように求められます。ここで指定する電子メールアドレスが有効なものであることを確認してください。-s オプションを使用すると、SMTP 設定値を非対話的にセットアップできます。</p> <p>setsmtp(8) コマンドを使用してメールサーバとポートを設定したあとは、setemailreport(8) コマンドで電子メールレポートを設定してテストメールを送信できるようになります。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-s *variable=value* SMTP を設定します。

variable の有効なエントリは次のとおりです。

- mailserver
- port
- auth
- user
- password
- replyaddress

変数の意味は次のとおりです。

auth は、認証メカニズムです。

user および **password** は、SMTP メールサーバに対する認証情報です。

auth の有効なエントリは次のとおりです。

- none
- pop
- smtp-auth

-v 詳細な情報を表示します。

使用例

使用例 1 非対話型モードで、認証情報を指定せずに、メールサーバをセットアップします。

```
XSCF> setsmtp -s mailserver=10.4.1.1 -s auth=none
```

使用例 2 非対話型モードで、認証情報をセットアップします。

```
XSCF> setsmtp -s auth=pop -s user=jsmith -s password=*****
```

使用例 3 対話モードで、SMTP 認証情報をセットアップします。

```
XSCF> setsmtp
Mail Server [10.4.1.1]:
Port [25]:
Authentication Mechanism [none]: smtp-auth
  User Name []: jsmith
  Password []: *****
Reply Address [useradm@company.com]:
```

使用例 4 無効な認証メカニズムを使用して、メールサーバをセットアップします。

```
XSCF> setsmtp  
Mail Server [10.4.1.1]:  
Port [25]:  
Authentication Mechanism [none]: ?  
Invalid value '?'. Valid authentication mechanism are: none pop smtp-auth  
Authentication Mechanism [none]:  
Reply Address [useradm@company.com]:
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setemailreport(8), **showsmtp(8)**

setsntp(8)



名前	setsnmp - SNMP エージェントを管理します。
形式	<pre> setsnmp enable [<i>mib_name</i>] setsnmp disable [<i>mib_name</i>] setsnmp addtraphost -t <i>type</i> -s <i>community-string</i> [-p <i>trap-port</i>] <i>traphost</i> setsnmp remtraphost -t <i>type</i> <i>traphost</i> setsnmp addv3traphost -u <i>username</i> -r <i>authentication-protocol</i> {-n <i>engine_id</i> -i} [-a <i>authentication-password</i>] [-e <i>encryption-password</i>] [-p <i>trap-port</i>] <i>traphost</i> setsnmp remv3traphost -u <i>username</i> <i>traphost</i> setsnmp enablev1v2c <i>read-only-community-string</i> setsnmp disablev1v2c setsnmp [-l <i>system-location</i>] [-c <i>system-contact</i>] [-d <i>system-description</i>] [-p <i>agent-port</i>] setsnmp -h </pre>
説明	setsnmp(8) は、SNMP エージェントの設定値を定義するだけでなく、SNMP エージェントを有効または無効にするコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> -c <i>system-contact</i> エージェントのシステムの連絡先を指定します。 -d <i>system-description</i> エージェントのシステムの説明を指定します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -l <i>system-location</i> エージェントのシステムの場所を指定します。 -p <i>agent-port</i> エージェントのリスニングポートを指定します。デフォルトは 161 です。 -s <i>community-string</i> SNMP v1 エージェントと v2 エージェントへのアクセスを制御するパスワードに似た働きをします。インターセプト可能なクリアテキスト文字列です。パスワード暗号化と非可視性には、addv3traphost を使用します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

addtraphost SNMP エージェントから目的のホストへの、選択されたタイプのトラップの送信を有効にします。*trap-port* を指定しない場合、デフォルトは 162 です。コミュニティストリングは必須です。

addtraphost には以下のオプションとオペランドがあります。

-p *trap-port*

トラップポートの ID を指定します。デフォルト値は 162 です。

-s *community-string*

SNMP v1 エージェントと v2 エージェントへのアクセスを制御するパスワードに似た働きをします。インターセプト可能なクリアテキスト文字列です。パスワード暗号化と非可視性には、**addv3traphost** を使用します。

-t *type*

トラップのタイプを指定します。有効なトラップのタイプは以下のとおりです。

- v1 = エージェントは SNMPv1 トラップを送信します。
- v2 = エージェントは SNMPv2 トラップを送信します。
- inform = エージェントは情報通知を送信します。

addtraphost には以下のオペランドがあります。

traphost トラップホスト名を指定します。

`adv3traphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、SNMPv3 トラップの送信または通知を有効にします。認証プロトコルを選択する必要があります。有効なプロトコルは以下のとおりです。

MD5 = 認証に MD5 アルゴリズムを使用します。

SHA = 認証に Secure Hash Algorithm (SHA) を使用します。

すべての通信で使用される暗号化プロトコルは Data Encryption Standard (DES) です。パスワードオプションを使用しない場合、パスワードを入力するように求められます。パスワードは読み取られますが、画面にエコーされません。`adv3traphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-a authentication-password`

認証パスワードを設定します。8 文字以上である必要があります。

`-e encryption-password`

暗号化パスワードを設定します。

`-i`

受信側のホストに肯定応答を要求します。

`-n engine_id`

トラップを送信するローカルエージェントの ID を設定します。ローカル SNMP エージェントのエンジン ID を指定できますが、これを指定しない場合でも、受信側のホストから期待されるエンジン ID と一致している必要があります。「0x」で始まり、偶数の 16 進文字で構成されている必要があります。そうでない場合、エラーになります。

`-p trap-port`

トラップポートの ID を指定します。デフォルト値は 162 です。

`-r authentication-protocol`

認証プロトコルを設定します。

`-u username`

ユーザー名を指定します。

`traphost`

トラップホスト名を指定します。

disable	<p>単独で使用される場合、SNMP エージェントを停止します。</p> <p>オプションの <i>mib_name</i> の値 ALL と一緒に使用される場合、SNMP エージェントを停止します。</p> <p>オプションの <i>mib_name</i> の ALL 以外の値と一緒に使用される場合、対象 MIB モジュールのサポートを削除します。別の MIB モジュールのサポートが維持されている場合、SNMP エージェントは有効のままです。両方の MIB モジュールのサポートが削除されると、SNMP エージェントは無効になり、停止します。<i>mib_name</i> は一度に 1 つだけ指定できます。</p> <p><i>mib_name</i></p> <p>無効にする MIB モジュールの名前です。有効な MIB モジュールは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SP_MIB = XSCF 拡張 MIB ■ FM_MIB = Fault Management MIB ■ ALL = このリスト内のすべての MIB モジュール
disablev1v2c	<p>SNMPv1 または SNMPv2c を使用した SNMP エージェントの通信を無効にします。これらのバージョンを使用した SNMP 通信は安全ではありません。</p>
enable	<p>単独で使用される場合、すべての MIB モジュールをサポートする SNMP エージェントを有効にします。</p> <p>オプションの <i>mib_name</i> の値 ALL と一緒に使用される場合、すべての MIB モジュールをサポートする SNMP エージェントをアクティブにします。</p> <p>オプションの <i>mib_name</i> の ALL 以外の値と一緒に使用される場合、対象 MIB モジュールのサポートを追加し、必要に応じて SNMP エージェントを有効にします。<i>mib_name</i> は一度に 1 つだけ指定できます。</p> <p><i>mib_name</i></p> <p>有効にする MIB モジュールの名前です。指定できる MIB モジュールは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SP_MIB = XSCF 拡張 MIB ■ FM_MIB = Fault Management MIB ■ ALL = このリスト内のすべての MIB モジュール

- enablev1v2c** SNMPv1 または SNMPv2c を使用した SNMP エージェントの通信を有効にします。これらのバージョンを使用した SNMP 通信は安全ではありません。したがって、エージェントはデフォルトで SNMPv3 を実行します。このエージェントは読み取り専用です。唯一要求されるコミュニティストリングは読み取り専用です。
- remtraphost** SNMP エージェントから目的のホストへの、選択されたタイプのトラップの送信を無効にします。remtraphost には以下のオプションとオペランドがあります。
- t type**
トラップのタイプを指定します。有効なトラップのタイプは以下のとおりです。
- v1 = エージェントは SNMPv1 トラップを送信します。
 - v2 = エージェントは SNMPv2 トラップを送信します。
 - inform = エージェントは情報通知を送信します。
- traphost**
トラップホスト名を指定します。
- remv3traphost** SNMP エージェントから目的のホストへの、SNMPv3 トラップの送信を無効にします。remv3traphost には以下のオプションとオペランドがあります。
- u username**
ユーザー名を指定します。
- traphost**
トラップホスト名を指定します。

使用例

使用例 1 システム情報を設定します。

```
XSCF> setsnmp -l sandiego -c username@company.com -d ff1
```

使用例 2 パスワードオプションを使用して SNMPv3 トラップホストを設定します。

```
XSCF> setsnmp addv3traphost -u jsmith -n 0x### -r SHA -a xxxxxxxx
-e yyyyyyyy fiche
```

使用例 3 パスワードオプションを使用しないで SNMPv3 トラップホストを設定します。

```
XSCF> setsnmp addv3traphost -u bob -i -r SHA fiche
Authentication Password:
Encryption Password:
```

使用例 4 SNMP エージェントを有効にします。

```
XSCF> setsnmp enable SP_MIB
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnp(8)

名前	setsnmpusm - SNMPv3 エージェントの User-based Security Model (USM) 設定します。
形式	<pre>setsnmpusm create -a authentication_protocol [-p authentication_password] [-e encryption_password] user</pre> <pre>setsnmpusm delete user</pre> <pre>setsnmpusm clone -u clone_user user</pre> <pre>setsnmpusm passwd [-c {auth encrypt}] [-o old_password] [-n new_password] user</pre> <pre>setsnmpusm -h</pre>
説明	setsnmpusm(8) は、SNMP エージェントの USM を設定するコマンドです。
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>
オペランド	<p>以下のオペランドがサポートされています。</p> <p>clone 指定したユーザーが、指定した <i>clone_user</i> と同じ設定で、以降の SNMP 通信でエージェントに認識されるようにします。</p> <p> -u <i>clone_user</i> クローンを作成するユーザー名を指定します。 user <i>clone_user</i> のクローンを作成するための別のユーザー名を指定します。</p>

create	<p>指定した設定で、以降の SNMP 通信でエージェントに認識されるユーザーを作成します。-a オプションまたは -p オプションを指定しないで使用する場合、パスワードを求めるプロンプトが表示され、パスワードが読み取られますが、画面にはエコーされません。すべての SNMP 通信で使用される暗号化プロトコルは Data Encryption Standard (DES) です。setsnmpusm(8) コマンドでは、SNMP 通信用の認証プロトコルを使用します。MD5 アルゴリズムまたは Secure Hash Algorithm(SHA) のどちらかを指定できます。</p> <p><i>user</i> ユーザー名を指定します。</p> <p><i>-a authentication_protocol</i> 認証プロトコルを指定します。MD5 または SHA のどちらかを指定できます。</p> <p><i>-e encryption_password</i> 暗号化パスワードを指定します。8 文字以上で指定します。</p> <p><i>-p authentication_password</i> 認証パスワードを指定します。8 文字以上で指定します。</p>
delete	<p>指定したユーザーを以降の SNMP 通信でエージェントに認識されないようにします。</p> <p><i>user</i> ユーザー名を指定します。</p>
passwd	<p>指定したユーザーのパスワードを変更します。変更できるパスワードは、認証パスワードまたは暗号化パスワードのどちらかです。-c オプションを指定していない場合は、両方になります。-c オプションを指定していない場合、認証パスワードと暗号化パスワードが一致している必要があります。そうでない場合はエラーとなります。オプションを指定しない場合、パスワードを求めるプロンプトが表示されます。パスワードは読み取られますが、画面には表示されません。</p> <p><i>-c auth encrypt</i> 変更するパスワードを指定します。認証パスワードの場合は <i>auth</i>、暗号化パスワードの場合は <i>encrypt</i> を指定します。</p> <p><i>-n new_password</i> 新しいパスワードを指定します。8 文字以上で指定します。</p> <p><i>-o old_password</i> 古いパスワードを指定します。</p> <p><i>user</i> ユーザー名を指定します。</p>

使用例	<p>使用例 1 パスワードを指定してユーザーを追加します。</p> <pre>XSCF> setsnmpusm create -a SHA -p xxxxxxxx -e yyyyyyyy jsmith</pre> <p>使用例 2 パスワードを指定しないでユーザーを追加します。</p> <pre>XSCF> setsnmpusm create -a SHA bob Authentication Password: Encryption Password:</pre> <p>使用例 3 ユーザーのクローンを作成します。</p> <pre>XSCF> setsnmpusm clone -u sue joe Authentication Password: Encryption Password:</pre> <p>使用例 4 ユーザーを削除します。</p> <pre>XSCF> setsnmpusm delete joe</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	<p>shownmpusm (8)</p>

setsnmpusm(8)



createview	SNMP エージェントに関するエクスポート済み MIB 情報のビューをセットアップします。このエージェントのビューアクセスは、読み取り専用で制限されています。ビューは MIB OID サブツリーによって識別され、OID マスクを使用してそのサブツリーの特定部分に制限することができます。
-e	除外するビューを指定します。デフォルトは、含めるビューです。
-m <i>OID_Mask</i>	有効な OID サブツリーマスクを指定します。デフォルトでは、マスクは ff(サブツリー全体)です。
-s <i>OID_subtree</i>	MIB OID サブツリーを指定します。MIB ツリー全体において、値は .1 で始まります。
<i>viewname</i>	有効なビュー名を指定します。
deleteaccess	アクセスエントリーを削除します。
<i>groupname</i>	有効なグループ名を指定します。
deletegroup	グループを削除します。
-u <i>username</i>	有効なユーザー名を指定します。
<i>groupname</i>	有効なグループ名を指定します。
deleteview	ビューを削除します。
-s <i>OID_subtree</i>	MIB OID サブツリーを指定します。MIB ツリー全体において、値は .1 で始まります。
<i>viewname</i>	有効なビュー名を指定します。

使用例

使用例 1 ビューアクセスのグループを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm creategroup -u jsmith admin
```

使用例 2 MIB 全体のビューを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createview -s .1 all_view
```

使用例 3 サブツリーを除外したビューを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createview -e -s .1.3.6.1.2.1.1 -m fe excl_view
```

使用例 4 MIB ビューへのアクセスを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createaccess -r all admin
```


終了ステータス | 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 | **shownmpvacm (8)**

setsnmpvacm(8)



名前	setssh - XSCF ネットワークで使用する Secure Shell(SSH) サービスを開始または停止します。また、SSH サービスに必要なホスト鍵の生成やユーザー公開鍵の登録、削除を行います。
形式	<pre>setssh [[-q] -{y n}] -c enable setssh -c disable setssh -c addpubkey [-u user_name] setssh -c delpubkey {-a -s line } [-u user_name] setssh [[-q] -{y n}] -c genhostkey setssh -h</pre>
説明	<p>setssh(8) は、XSCF ネットワークで使用する SSH サービスを開始または停止するコマンドです。また、SSH サービスに必要なホスト鍵の生成や、ユーザー公開鍵の登録、削除を行います。</p> <p>ホスト鍵を生成する場合に、すでに鍵が存在するときは、更新するかどうかのプロンプトが表示されます。</p> <p>ユーザー公開鍵はユーザーアカウントごとに登録できます。また、1 ユーザーアカウントに対して、複数のユーザー公開鍵を登録できます。1 ユーザーアカウントあたり、改行を含んだ最大 1023 文字数分まで、ユーザー公開鍵を登録することができます。</p> <p>XSCF では SSH2 だけサポートされます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SSH サービスの開始または停止、ホスト鍵の生成： platadm ■ 他のユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の登録または削除： useradm ■ 現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の登録または削除： useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- a 登録されているすべてのユーザー公開鍵を削除します。
"-c delpubkey" と一緒に指定します。
- c addpubkey ユーザー公開鍵を登録します。
- c delpubkey ユーザー公開鍵を削除します。
- c genhostkey SSH2 用ホスト鍵を生成します。
- c {enable|disable} SSH2 サービスの開始または停止を指定します。以下のどちらかを指定できます。

enable	SSH2 サービスを開始します。
disable	SSH2 サービスを停止します。
- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- s *line* 削除するユーザー公開鍵の番号を指定します。*line* には、`showssh -c pubkey` コマンドを実行したときに表示される番号を指定します。"-c delpubkey" と一緒に指定します。
- u *user_name* ユーザー公開鍵を登録、削除するユーザーアカウント名を指定します。"-c addpubkey" または "-c delpubkey" と一緒に指定します。-u オプションを省略した場合は、現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵が対象となります。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

詳細説明

- ホスト鍵を生成する場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- `setssh(8)` コマンドで一度に登録できるユーザー公開鍵は、1 つです。
- `setssh(8)` コマンド実行時のユーザー公開鍵の入力は、Enter キーを押してから "Ctrl" と "D" (EOF) を押して終了します。
- XSCF ユニットが二重化構成の場合は、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。
- 設定した内容は、`rebootxscf(8)` コマンドで XSCF をリセットすると反映されません。

- showssh(8) コマンドを使用すると、SSH サービスに関して現在設定されている内容が確認できます。

使用例

使用例 1 SSH サービスを開始します。

```
XSCF> setssh -c enable
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

使用例 2 SSH サービスを開始します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -y -c enable
Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

使用例 3 SSH サービスを開始します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -q -y -c enable
```

使用例 4 SSH サービスを停止します。

```
XSCF> setssh -c disable
```

使用例 5 SSH 用ホスト鍵を生成します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey
Host key create. Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

使用例 6 SSH 用ホスト鍵を生成します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -y
Host key create. Continue? [y|n] :y
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ssh settings.
```

使用例 7 SSH 用ホスト鍵を生成します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -q -y
```

使用例 8 ユーザー公開鍵を登録します。公開鍵の入力は、Enter キーを押してから、"Ctrl" と "D" キーを押して終了します。

```
XSCF> setssh -c addpubkey
Please input a public key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNK0VLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
```

```
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
[Enter]
[Ctrl]and[D]
```

使用例 9 ユーザー名を指定してユーザー公開鍵を登録します。公開鍵の入力は、Enter キーを押してから、"Ctrl" と "D" キーを押して終了します。

```
XSCF> setssh -c addpubkey -u efgh
Please input a public key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPBGGVb61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIPk
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
[Enter]
[Ctrl]and[D]
```

使用例 10 公開鍵番号を指定して、ユーザー公開鍵を削除します。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -s 1
1 ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPBGGVb61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIPk
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
```

使用例 11 すべてのユーザー公開鍵を削除します。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -a
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), showssh(8)

名前	settnet - XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止します。
形式	settnet -c {enable disable} settnet -h
説明	settnet(8) は、XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -c {enable disable} Telnet サービスを開始または停止するかどうかを指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。 enable Telnet サービスを開始します。 disable Telnet サービスを停止します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ M8000/M9000 サーバの場合は、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。 ■ Telnet サービスを停止する場合、rebootxscf(8) コマンドで XSCF をリセットすると反映されます。 ■ showtnet(8) コマンドを使用すると、現在の Telnet サービスの状態が確認できます。
使用例	<p>使用例 1 Telnet サービスを開始します。</p> <pre>XSCF> settnet -c enable</pre> <p>使用例 2 Telnet サービスを停止します。</p> <pre>XSCF> settnet -c disable Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the telnet settings.</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。

settelnet(8)

関連項目

showtelnet(8)

名前	settimezone - XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定します。
形式	<pre>settimezone -c settz -s <i>timezone</i> settimezone -c settz -a [-M] settimezone -c adddst -b <i>std</i> -o <i>offset</i> -d <i>dst</i> [-p <i>offset</i>] -f <i>date</i> [/time] -t <i>date</i> [/time] settimezone -c deldst -b <i>std</i> -o <i>offset</i> settimezone -h</pre>
説明	<p>settimezone(8) は、XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定するコマンドです。</p> <p>タイムゾーンは POSIX 規格に準拠しています。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、<code>platadm</code> または <code>fieldeng</code> 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -a 設定可能なタイムゾーンを一覧表示します。 -c settz POSIX 規格に準拠したタイムゾーンを設定します。 -c adddst 手動でタイムゾーンとサマータイムを設定します。 -c deldst タイムゾーンとサマータイムを削除します。 -b <i>std</i> タイムゾーンの略称を指定します。<i>std</i> はアルファベット 3 文字以上で指定します。RFC2822 に準拠した形式で指定できます。 "-c adddst" と一緒に指定した場合は設定するタイムゾーンとリンクされます。"-c deldst" と一緒に指定した場合は設定されているタイムゾーンとのリンクが解除されます。 -d <i>dst</i> サマータイム名を指定します。<i>dst</i> はアルファベット 3 文字以上で指定します。RFC2822 に準拠した形式で指定できます。 "-c adddst" と一緒に指定します。

- `-f date [/time]` サマータイムの開始時間を指定します。*date* は以下のいずれかの形式で指定できます。
- Mm.w.d*
- Mm*: サマータイムを開始する月を指定します。*m* は 1 から 12 までの数値で指定できます。
- w*: サマータイムを開始する週を指定します。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で指定できます。
- d*: サマータイムを開始する曜日を指定します。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で指定できます。
- Jn*
- Jn*: サマータイムを開始する日にちを指定します。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。
- n*
- n*: サマータイムを開始する日にちを指定します。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。
- time* には時刻を指定します。以下の形式で指定できます。
- hh:mm:ss* "時間:分:秒の形式" で指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* は 0 から 59、*ss* は 0 から 60 です。省略した場合は、02:00:00 となります。
- `-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- `-M` テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

-o *offset*

タイムゾーンとグリニッジ標準時 (GMT) とのオフセットを指定します。*offset* は以下の形式で指定できます。

GMT{+|-}*hh[:mm[:ss]]*

GMT
{+|-}

グリニッジ標準時
標準時を GMT よりプラスの時刻に設定する場合は - を指定します。(グリニッジより東側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはマイナス値になります。) 標準時を GMT よりマイナスの時刻に設定する場合は + を指定します。(グリニッジより西側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはプラス値になります。)

hh[:mm[:ss]]

オフセット時間を指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* と *ss* は 0 から 59 です。

-p *offset*

サマータイムとグリニッジ標準時 (GMT) とのオフセットを指定します。*offset* は以下の形式で指定できます。省略した場合は、タイムゾーンで指定した時間の 1 時間前となります。

GMT{+ | -}hh[:mm[:ss]]

GMT
{+ | -}

グリニッジ標準時
標準時を GMT よりプラスの時刻に設定する場合は - を指定します。(グリニッジより東側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはマイナス値になります。) 標準時を GMT よりマイナスの時刻に設定する場合は + を指定します。(グリニッジより西側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはプラス値になります。)

hh[:mm[:ss]]

オフセット時間を指定します。hh は 0 から 23、mm と ss は 0 から 59 です。

-s *timezone*

タイムゾーンを指定します。*timezone* には -a オプションで表示されるタイムゾーンのいずれかを指定できます。

`-t date [/time]` サマータイムの終了時間を指定します。*date* は以下のいずれかの形式で指定できます。

Mm.w.d

Mm: サマータイムを終了する月を指定します。*m* は 1 から 12 までの数値で指定できます。

w: サマータイムを終了する週を指定します。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で指定できます。

d: サマータイムを終了する曜日を指定します。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で指定できます。

Jn

Jn: サマータイムを終了する日にちを指定します。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。

n

n: サマータイムを終了する日にちを指定します。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time には時刻を指定します。以下の形式で指定できます。

hh:mm:ss "時間:分:秒の形式" で指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* は 0 から 59、*ss* は 0 から 60 です。省略した場合は、02:00:00 となります。

詳細説明

- タイムゾーン、サマータイムに有効年数を指定することはできません。年ごとにサマータイムが変更される場合は、`settimezone(8)` コマンドで再度指定しなおす必要があります。
- `settimezone(8)` コマンドで設定された標準時にオフセット時間を加算すると GMT になります。
- `showtimezone(8)` コマンドを使用すると、現在設定されているタイムゾーンが確認できます。
- `-c adddst`、`-c deldst` オプションで変更されたサマータイム情報を反映するにはログアウトして、再びログインしてください。

使用例

使用例 1 タイムゾーンを「Asia/Tokyo」に設定します。

```
XSCF> settimezone -c settz -s Asia/Tokyo
Asia/Tokyo
```

使用例 2 設定可能なタイムゾーンを一覧表示します。

```
XSCF> settimezone -c settz -a
Africa/Abidjan
Africa/Accra
Africa/Addis_Ababa
Africa/Algiers
Africa/Asmera
Africa/Bamako
Africa/Bangui
.
```

使用例 3 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 3 月最終日曜日 2:00 から 10 月最終日曜日 2:00 までとして、サマータイム情報を設定します。

```
XSCF> settimezone -c adddst -b JST -o GMT-9 -d JDT -f M3.5.0 -t M10.5.0
JST-9JDT,M3.5.0,M10.5.0
```

使用例 4 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムの GMT からのオフセットを +10 時間、期間を 4 月第 1 日曜日 0:00 から 9 月第 1 日曜日 0:00 までとして、サマータイム情報を設定します。

```
XSCF> settimezone -c adddst -b JST -o GMT-9 -d JDT -p GMT-10 -f M4.1.0/00:00:00 -t M9.1.0/00:00:00
JST-9JDT-10,M4.1.0/00:00:00,M9.1.0/00:00:00
```

使用例 5 現在設定されているサマータイム情報を削除します。

```
XSCF> settimezone -c deldst -b JST -o GMT-9
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0          正常に終了したことを表します。
>0        エラーが発生したことを表します。
```

関連項目

setdate (8), **showdate (8)**, **showtimezone (8)**

名前	setupfru - デバイスのハードウェアに関する設定を行います。
形式	setupfru [-m {y n}] [-x {1 4}] <i>device location</i> setupfru -h
説明	<p>setupfru(8) は、指定したデバイスのハードウェアに関する設定を行うコマンドです。</p> <p>setupfru(8) コマンドは、M3000 サーバではサポートされていません。</p> <p>デバイスとして物理システムボード (PSB) を指定できます。</p> <p>PSB を増設したあとシステムで使用できるようにするため、PSB に対して、以下の内容が設定できます。</p> <p>XSB 形式 増設した PSB をシステムで使用するためには、PSB 上のハードウェアリソースを論理的に分割して、システムボード (XSB) を構成する必要があります。XSB には PSB を分割しないで構成単位とする Uni-XSB と、4 分割したものを構成単位とする Quad-XSB の 2 種類があります。PSB を Uni-XSB として構成するか、Quad-XSB として構成するかを指定します。</p> <p>メモリミラーモード ミラーモードとは、PSB に搭載されたメモリを 2 分割し、データをミラーリングしたモードです。メモリを 2 分割するためメモリサイズは 1/2 になりますが、データの信頼性が高まります。メモリをミラーモードに設定するかどうかを指定します。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-m {y n} <i>device</i> に <i>sb</i> を指定した場合、XSB に搭載されたメモリをミラーモードに設定するかどうかを指定します。ミラーモードに設定する場合は <i>y</i>、設定しない場合は <i>n</i> を指定します。-m オプションを省略した場合は、前の設定が引き継がれます。</p> <p>-x {1 4} <i>device</i> に <i>sb</i> を指定した場合、PSB を、Uni-XSB と Quad-XSB のどちらで構成するかを指定します。Uni-XSB で構成する場合は 1、Quad-XSB で構成する場合には 4 を指定します。-x オプションを省略した場合は、前の設定が引き継がれます。</p>

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

<i>device</i>	設定するデバイスを指定します。以下のデバイスだけ指定できます。
<i>sb</i>	物理システムボード (PSB)
<i>location</i>	デバイスの搭載されている位置を指定します。 <i>device</i> に <i>sb</i> を指定した場合、 <i>location</i> には PSB 番号を指定します。0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明

- M8000/M9000 サーバの場合、Quad-XSB 構成のときはメモリミラーモードを設定できません。
- すでに搭載されている PSB を設定しなおす場合は、対象の PSB から構成されたすべての XSB が、ドメイン構成から切り離され、システムボードプールになっている必要があります。XSB をドメイン構成から切り離す方法については、`deleteboard(8)` コマンドを参照してください。
- システムによって、PSB の構成は以下のように異なります。
 - M8000/M9000 サーバの場合は、CPU / メモリボードユニットと I/O ユニットの組み合わせ
 - M4000/M5000 サーバの場合は、マザーボードユニット上の CPU モジュールとメモリモジュールを各々論理的に 2 分割したものと、I/O モジュールの組み合わせ
- `showfru(8)` コマンドを使用すると、PSB に現在設定されている内容が表示されます。

使用例

使用例 1 PSB#00 を Quad-XSB に設定します。(メモリミラーモードの設定は省略されているため、前の設定から変更されません。)

```
XSCF> setupfru -x 4 sb 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

`addboard(8)`, `deleteboard(8)`, `moveboard(8)`, `setdcl(8)`, `showboards(8)`, `showdcl(8)`, `showdevices(8)`, `showfru(8)`

名前	setupplatform - プラットフォーム固有の設定を行います。														
形式	<pre>setupplatform [-v] setupplatform [-v] -p part [-p part] setupplatform -h</pre>														
説明	<p>setupplatform(8) は、プラットフォーム固有の設定を行うコマンドです。</p> <p>このコマンドに従って、管理者はサービスプロセッサのインストールを行います。</p> <p>デフォルトで、setupplatform(8) コマンドは、利用可能な設定を1つずつ確認します。個別の設定は、-p オプションを使用して選択できます。</p>														
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCF ユーザーアカウントの作成 useradm ■ ネットワーク/高度/タイムゾーンの設定 platadm <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>														
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;">-h</td> <td>使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">-p <i>part</i></td> <td>行いたい設定を指定します。<i>part</i> には、以下のいずれかを指定できます。</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">altitude</td> <td>本体装置の高度を設定します。</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">network</td> <td>XSCF ネットワーク、DSCP、DNS、NTP、SSH、HTTPS および SMTP の設定を行います。</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">timezone</td> <td>XSCF のタイムゾーンを設定します。タイムゾーンはリストから選択します。</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">user</td> <td>platadm 権限、platop 権限、および useradm 権限を持つ、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成します。</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">-v</td> <td>詳細な情報を表示します。</td> </tr> </table>	-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。	-p <i>part</i>	行いたい設定を指定します。 <i>part</i> には、以下のいずれかを指定できます。	altitude	本体装置の高度を設定します。	network	XSCF ネットワーク、DSCP、DNS、NTP、SSH、HTTPS および SMTP の設定を行います。	timezone	XSCF のタイムゾーンを設定します。タイムゾーンはリストから選択します。	user	platadm 権限、platop 権限、および useradm 権限を持つ、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成します。	-v	詳細な情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。														
-p <i>part</i>	行いたい設定を指定します。 <i>part</i> には、以下のいずれかを指定できます。														
altitude	本体装置の高度を設定します。														
network	XSCF ネットワーク、DSCP、DNS、NTP、SSH、HTTPS および SMTP の設定を行います。														
timezone	XSCF のタイムゾーンを設定します。タイムゾーンはリストから選択します。														
user	platadm 権限、platop 権限、および useradm 権限を持つ、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成します。														
-v	詳細な情報を表示します。														
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ M3000/M4000/M5000 サーバ上で使用できるインターフェースは、xscf#0-lan#0、xscf#0-lan#1、lan#0、lan#1 です。M8000/M9000 サーバ上で使用できるインターフェースは同じですが、さらに xscf#0-if、xscf#1-lan#0、xscf#1-lan#1、xscf#1-if を含みます。 														

- ユーザーアカウント設定では、新しいユーザーアカウントを、ユーザーが定義したパスワードで作成できます。
- ネットワーク設定では、以下の項目を任意で設定できます。
 - XSCF ネットワークの設定
 - ドメイン / サービスプロセッサ間通信プロトコル (DSCP)
 - DNS サーバ
 - NTP サーバ
 - SSH
 - HTTPS サーバ
 - 電子メールレポート

使用例

使用例 1 新しいユーザーアカウントを作成します。

```
XSCF> setupplatform -p user
Do you want to set up an account? [y|n]: y
Username: myadminuser
User id in range 100 to 65533 or leave blank to let the system
choose one:
    Username: myadminuser
    User id:
Are these settings correct? [y|n]: y
XSCF> adduser myadminuser
XSCF> setprivileges myadminuser useradm platadm platop
XSCF> password myadminuser
New XSCF password: [not echoed]
Retype new XSCF password: [not echoed]
```

使用例 2 XSCF ネットワークを構成します。

```
XSCF> setupplatform
Do you want to set up an account? [y|n]: n
Do you want to set up the XSCF network interfaces? [y|n]: y
Do you want to configure xscf#0-lan#0? [y|n]: y
xscf#0-lan#0 ip address? []: 192.168.1.4
xscf#0-lan#0 netmask? [255.255.255.0]: 255.255.254.0
xscf#0-lan#0 default gateway? []: 192.168.1.1
    xscf#0-lan#0 ip address: 192.168.1.4
    xscf#0-lan#0 netmask: 255.255.254.0
    xscf#0-lan#0 default gateway: 192.168.1.1
Are these settings correct? [y|n]: y
XSCF> setnetwork xscf#0-lan#0 -m 255.255.254.0 192.168.1.4
. . .
```

使用例 3 SSH を有効にします。

```
XSCF> setupplatform -p network
Do you want to set up the XSCF network interfaces? [y|n]: n
Do you want to set up the DSCP network? [y|n]: n
```

```

Do you want to set up the domain name service? [y|n]: n
Do you want to set up the network time protocol? [y|n]: n
Do you want to set up ssh? [y|n]: y
Enable ssh service? [y|n]: y
XSCF> setssh -q -y -c enable
Do you want to set up https? [y|n]: n
. . .

```

使用例 4 本体装置の高度を設定します。

```

XSCF> setupplatform -p altitude
Do you want to set up the chassis altitude? [y|n]: y
Chassis altitude is already configured:
    Chassis altitude in meters: 200
Continue setting up the chassis altitude? [y|n]: y
Chassis altitude in meters: 400
    Chassis altitude in meters: 400
Is this setting correct? [y|n]: y
XSCF> setaltitude -s altitude=400
400m

The specified altitude becomes valid when the circuit breakers of the system
are switched on again.
Do you want to reboot the XSCF now? [y|n]: n
XSCF>

```

使用例 5 XSCF のタイムゾーンを設定します。

```

XSCF> setupplatform -p timezone
Do you want to set up the XSCF time zone? [y|n]: y
Chassis time zone is already configured:
    XSCF time zone: US/Pacific
Continue setting up the XSCF time zone? [y|n]: y
0    Africa/Abidjan
1    Africa/Accra
2    Africa/Addis_Ababa
3    Africa/Algiers
4    Africa/Asmera
5    Africa/Bamako
6    Africa/Bangui
7    Africa/Banjul
8    Africa/Bissau
9    Africa/Blantyre
10   Africa/Brazzaville
11   Africa/Bujumbura
12   Africa/Cairo
13   Africa/Casablanca
14   Africa/Ceuta
15   Africa/Conakry
16   Africa/Dakar
17   Africa/Dar_es_Salaam
18   Africa/Djibouti
19   Africa/Douala

```

setupplatform(8)

```
20      Africa/El_Aaiun
21      Africa/Freetown
22      Africa/Gaborone
Enter number to choose time zone or return for next set of time zones: 21
      XSCF time zone: Africa/Freetown
Is this setting correct? [y|n]: Y
XSCF> setaltitude -c settz -s Africa/Freetown
Africa/Freetown
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0          正常に終了したことを表します。
>0        エラーが発生したことを表します。
```

関連項目

adduser (8), **applynetwork (8)**, **password (8)**, **setaltitude (8)**, **setdscp (8)**,
setemailreport (8), **sethostname (8)**, **sethttps (8)**, **setnameserver (8)**,
setnetwork (8), **setntp (8)**, **setprivileges (8)**, **setsmtp (8)**, **setssh (8)**, **setroute (8)**,
settimezone (8)

名前	showaltitude - 本体装置の高度およびエアフィルターの搭載状況を表示します。
形式	showaltitude showaltitude -h
説明	showaltitude(8) は、現在設定されている本体装置の高度およびエアフィルターの搭載状況を表示するコマンドです。 エアフィルターの搭載状況は、M4000/M5000 サーバだけで表示されます。 高度は 100 メートル (m) 単位で表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ エアフィルターは搭載されている場合だけ表示されます。搭載されていない場合は、何も表示されません。 ■ setaltitude(8) コマンドを使用すると、本体装置の高度およびエアフィルターの搭載状況を設定できます。
使用例	<p>使用例 1 本体装置の高度を表示します。</p> <pre>XSCF> showaltitude 1000m</pre> <p>使用例 2 エアフィルターが搭載された M4000/M5000 サーバで本体装置の高度およびエアフィルターの搭載状況を表示します。</p> <pre>XSCF> showaltitude 1000m Filter is installed.</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setaltitude (8)

showaltitude(8)



名前	showarchiving - ログアーカイブの設定状態を表示します。
形式	<p>showarchiving</p> <p>showarchiving [-e] [-v]</p> <p>showarchiving -h</p>
説明	showarchiving(8) は、XSCF のログアーカイブに設定されている状態を表示するコマンドです。
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, platop, fieldeng</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-e アーカイブエラーのうち最新の 10 件に関する情報を表示します。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペラントと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-v 詳細な情報を表示します。</p>
詳細説明	<p>■ -e オプションを指定しないで showarchiving(8) コマンドを実行すると、以下の情報が表示されます。</p> <p>1. アーカイブ設定データのリスト</p> <p>Archiving state ログのアーカイブ機能が有効かどうか。</p> <p>Archive host ログがアーカイブされるホスト。初期値は Not configured です。ホスト名または IPv4 のアドレスで表示されます。</p> <p>Archive directory アーカイブデータが格納されるアーカイブホストのディレクトリ。初期値は Not configured です。</p> <p>Username for ssh login サービスプロセッサがアーカイブホストにログインするために使用するユーザー名。初期値は Not configured です。</p> <p>Archive host public key サービスプロセッサがアーカイブホストの ID を確認するために使用する公開キー。-v オプションを指定した場合には表示されます。</p> <p>Archive host fingerprint サービスプロセッサがアーカイブホストの ID を確認するために使用する、公開キーの MD5 フィンガープリント。</p>

2. 最後にアーカイブホストへの接続を試みた時刻、およびその試行の結果 (成功か失敗か)

Latest communication 最後にアーカイブホストとの通信を試みたときの終了時刻。

Connection status 最後にアーカイブホストへの接続を試みた結果。成功した場合は OK、失敗した場合は FAILED が表示されます。

3. 監査ログおよび監査以外のログに関するステータス情報の表示

Archive space limit アーカイブに割り当てられている領域の合計。

Archive space used アーカイブによって現在使用されている領域。

Total archiving failures 失敗したアーカイブ操作の数。

Unresolved failures 失敗したアーカイブ操作のうち、サービスプロセッサが引き続き試みる操作の数。

- `-e` オプションを指定して `showarchiving(8)` コマンドを実行すると、発生したアーカイブエラーのうち、最新の 10 件に関する詳細情報が表示されます。

使用例

使用例 1 ログアーカイブに関するステータスと設定に関するデータを表示します。

```
XSCF> showarchiving
*** Archiving Configuration ***
Archiving state ----- Disabled
Archive host ----- Not configured
Archive directory ----- Not configured
User name for ssh login -- Not configured
Archive host fingerprint - Server authentication disabled

*** Connection to Archive Host ***
Latest communication ---- None
Connection status ----- None

                                AUDIT LOGS      OTHER LOGS
                                -----
Archive space limit             Unlimited      2000 MB
Archive space used              Not monitored Not monitored
Total archiving failures        0             0
Unresolved failures             0             0
```


使用例 2 アーカイブエラーに関する情報を表示します。

```
XSCF> showarchiving -e  
No archiving errors have occurred.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setarchiving (8)



名前	showaudit - 監査システムの現在の状態を表示します。
形式	showaudit showaudit [all] showaudit [-a <i>users</i>] [-c <i>classes</i>] [-e <i>events</i>] [-g] [-m] [-p] [-s] [-t] showaudit -h
説明	showaudit(8) は、システム監査の現在の状態を表示します。オプションを指定しないで showaudit を実行すると、監査レコードの書き込みが有効であるか無効であるかが表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、auditadm または auditop 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- a users** 指定されたユーザーの監査レコード生成ポリシーを表示します。
users は、有効なユーザー名のカンマ区切りリストです。
- c classes** 指定された監査クラスの監査レコード生成ポリシーを表示します。
classes は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前によって指定できます。ACS_ の接頭語は省略可能です。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 2 と表現できます。
- 有効なクラスは以下のとおりです。
- | | |
|-------------------|---------------------|
| all | すべてのクラス |
| ACS_SYSTEM(1) | システムに関連するイベント |
| ACS_write(2) | 状態を変更できるコマンド |
| ACS_READ(4) | 現在の状態を表示するコマンド |
| ACS_LOGIN(8) | ログインに関連するイベント |
| ACS_AUDIT(16) | 監査に関連するイベント |
| ACS_DOMAIN(32) | ドメイン管理に関連するイベント |
| ACS_USER(64) | ユーザー管理に関連するイベント |
| ACS_PLATFORM(128) | プラットフォーム管理に関連するイベント |
| ACS_MODES(256) | モードに関連するイベント。 |
- e events** 指定された監査イベントの監査レコード生成ポリシーを表示します。
events は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前によって指定できます。AEV_ の接頭語は省略可能です。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 4 と表現できます。
- 有効なすべてのイベントのリストについては、`showaudit -e all` を参照してください。
- g** ユーザーのグローバル監査レコード生成ポリシーを表示します。
- h** 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- m** ローカルの監査領域の使用量がしきい値に達した場合に送信される電子メールの宛先アドレスを表示します。

- P 監査トレイルが全容量に達した場合に従うポリシーを表示します。
- s 以下の監査ステータスを表示します。
 - ローカルの監査レコードによって消費されている領域
 - ローカルの監査レコード用に残っている空き領域
 - 監査トレイルが全容量に達したために(前回のブート以降に)削除された監査レコードの数
- t ローカルの領域の使用量に関して警告を発行するしきい値を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

- all 以下の情報を表示します。
 - 監査トレイルの書き込みがenableとdisableのどちらに設定されているか。この情報は、オプションを何も指定しないでshowaudit(8) コマンドを実行した場合に表示されるものと同じです。
 - -a、-c all、-e all、-g、-m、-p、-s、-tの各オプションを指定してshowauditを実行した場合に表示されるすべての情報。

使用例

使用例 1 監査ステータスを表示します。

```
XSCF> showaudit
Auditing: enabled
```

使用例 2 ログイン監査に関するすべてのクラス情報を表示します。

```
XSCF> showaudit -c LOGIN
Events:
AEV_LOGIN_BUI                enabled
AEV_LOGIN_CONSOLE            enabled
AEV_LOGIN_SSH                 enabled
AEV_LOGIN_TELNET              enabled
AEV_LOGOUT                     enabled
AEV_AUTHENTICATE              enabled
```

使用例 3 すべてのイベント情報を表示します。

```
XSCF> showaudit -e all
Events:
AEV_AUDIT_START               enabled
AEV_AUDIT_STOP                 enabled
AEV_ENTER_MODE                 enabled
AEV_EXIT_MODE                  enabled
AEV_LOGIN_BUI                  enabled
AEV_LOGIN_CONSOLE              enabled
```

showaudit(8)

```
AEV_LOGIN_SSH          enabled
AEV_LOGIN_TELNET       enabled
AEV_LOGOUT              enabled
AEV_AUTHENTICATE       enabled
AEV_addboard           enabled
AEV_addcodlicense      enabled
AEV_addfru             enabled
[...]
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0          正常に終了したことを表します。
>0        エラーが発生したことを表します。
```

関連項目

setaudit (8), viewaudit (8)

名前	showautologout - XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。
形式	showautologout showautologout -h
説明	showautologout(8) は、現在設定されている XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示するコマンドです。 セッションタイムアウト時間は分単位で表示されます。setautologout(8) コマンドでセッションタイムアウト時間を設定していない場合は、デフォルトで 10 分と設定されています。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。 XSCF> showautologout 30min 使用例 2 XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。(デフォルトの場合) XSCF> showautologout 10min
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setautologout(8)

showautologout(8)



名前	showboards - システムボード (XSB) の情報を表示します。												
形式	<p>showboards [-v] -a [-c sp]</p> <p>showboards [-v] -d <i>domain_id</i> [-c sp]</p> <p>showboards [-v] <i>xsb</i></p> <p>showboards -h</p>												
説明	<p>showboards(8) は、XSB の情報を表示するコマンドです。</p> <p>現在ドメインに組み込まれている、または割り当てられている XSB や、搭載されているすべての XSB の情報が表示されます。ドメインを指定した場合は、ドメイン構成情報 (DCL) に定義されている情報だけ表示されます。</p> <p>以下の情報が表示されます。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">XSB</td> <td> <p>XSB 番号</p> <p>以下の形式で表示されます。</p> <p><i>x-y</i>:</p> <p><i>x</i> 00 から 15 までの整数</p> <p><i>y</i> 0 から 3 までの整数</p> </td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">DID</td> <td> <p>ドメイン ID</p> <p>以下のいずれかが表示されます。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">00-23</td> <td>XSB が割り当てられているドメイン ID</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">SP</td> <td>XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">Other</td> <td>ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">LSB</td> <td> <p>ドメインに定義されている論理システムボード (LSB) 番号</p> <p>00 から 15 までの整数で表示されます。</p> </td> </tr> </table>	XSB	<p>XSB 番号</p> <p>以下の形式で表示されます。</p> <p><i>x-y</i>:</p> <p><i>x</i> 00 から 15 までの整数</p> <p><i>y</i> 0 から 3 までの整数</p>	DID	<p>ドメイン ID</p> <p>以下のいずれかが表示されます。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">00-23</td> <td>XSB が割り当てられているドメイン ID</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">SP</td> <td>XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">Other</td> <td>ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB</td> </tr> </table>	00-23	XSB が割り当てられているドメイン ID	SP	XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態	Other	ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB	LSB	<p>ドメインに定義されている論理システムボード (LSB) 番号</p> <p>00 から 15 までの整数で表示されます。</p>
XSB	<p>XSB 番号</p> <p>以下の形式で表示されます。</p> <p><i>x-y</i>:</p> <p><i>x</i> 00 から 15 までの整数</p> <p><i>y</i> 0 から 3 までの整数</p>												
DID	<p>ドメイン ID</p> <p>以下のいずれかが表示されます。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">00-23</td> <td>XSB が割り当てられているドメイン ID</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">SP</td> <td>XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top; padding-right: 20px;">Other</td> <td>ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB</td> </tr> </table>	00-23	XSB が割り当てられているドメイン ID	SP	XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態	Other	ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB						
00-23	XSB が割り当てられているドメイン ID												
SP	XSB がドメインに属しておらず、システムボードプール状態												
Other	ユーザー権限を持たないドメインに属している XSB												
LSB	<p>ドメインに定義されている論理システムボード (LSB) 番号</p> <p>00 から 15 までの整数で表示されます。</p>												

Assignment	<p>XSB のドメインへの割り当て状態</p> <p>以下のいずれかが表示されます。</p> <p>Unavailable XSB が使用できない状態。XSB が未搭載または故障により認識できない、ドメイン設定またはシステムボード設定が行われていない、または他のドメインに割り当てられている場合があります。</p> <p>Available XSB が DCL に登録されていて、使用できる状態。システムボードプール状態の場合があります。</p> <p>Assigned XSB がドメインに予約または割り当てられている状態</p>
Pwr	<p>XSB の電源投入状態</p> <p>以下のどちらかが表示されます。</p> <p>n 電源が切断されている状態</p> <p>y 電源が投入されている状態</p>
Conn	<p>XSB のドメイン構成への接続状態</p> <p>以下のどちらかが表示されます。</p> <p>n 該当するドメインへ接続されていない、またはシステムボードプール状態</p> <p>y 該当するドメインへ接続されている状態</p>

Conf	<p>XSB のハードウェアリソースの、オペレーティングシステムへの組み込み状態</p> <p>以下のどちらかかが表示されます。</p> <p>n オペレーティングシステムから切り離されている状態</p> <p>y オペレーティングシステムに組み込まれている状態</p>
Test	<p>XSB の初期診断の状態</p> <p>以下のいずれかが表示されます。</p> <p>Unmount 未搭載または故障により認識できない状態</p> <p>Unknown 診断されていない状態</p> <p>Testing 初期診断中</p> <p>Passed 初期診断が正常に終了した状態</p> <p>Failed 初期診断で異常が発生した状態。XSB は使用できない、または縮退している状態となります。</p>
Fault	<p>XSB の縮退の状態</p> <p>以下のいずれかが表示されます。</p> <p>Normal 正常な状態</p> <p>Degraded 縮退部品がある状態。XSB は稼働できます。</p> <p>Faulted 異常が発生し XSB が動作しない状態</p>
	<p>-v オプションと指定すると、XSB の詳細ステータスとして、以下の情報が表示されます。</p>
R	<p>XSB のドメインへの Dynamic Reconfiguration(DR) 予約状態</p> <p>* DR 処理が予約されている状態。ドメインがリブートされると、XSB が組み込まれたり、切り離されたりして、ドメイン構成が変更されます。</p>
COD	<p>XSB が COD ボードであるかどうか</p> <p>n COD ボードでない</p> <p>y COD ボードである</p>

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng すべてのドメイン、XSB に対して実行できます。

domainadm, domainmgr, domainop アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges(8)` コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- a ドメインに組み込まれている、または割り当てられている XSB や搭載されたすべての XSB の状態を表示します。
- c sp システムボードプールの XSB を表示します。システムボードプールとは、どのドメインにも属さない状態のことです。
- d *domain_id* XSB の状態を表示するドメイン ID を指定します。指定したドメインの DCL に定義されている情報だけ表示されます。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- v XSB の詳細な情報を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb 表示する XSB 番号を指定します。以下の形式で指定します。

```

x-y
x                    00 から 15 までの整数
y                    0 から 3 までの整数

```

詳細説明

ドメインを指定した場合は、DCL に定義されている XSB 情報だけ表示されます。

使用例

使用例 1 搭載されているすべての XSB の情報を表示します。

```

XSCF> showboards -a
XSB  DID(LSB)  Assignment  Pwr  Conn Conf Test      Fault
-----
00-0  00(00)    Assigned    y    y    y    Passed Normal
00-1  00(01)    Assigned    y    y    y    Passed Normal
00-2  SP          Available    y    n    n    Passed Normal
00-3  02(00)    Unavailable y    n    n    Unknown Normal

```

使用例 2 搭載されているすべての XSB の詳細な情報を表示します。

```

XSCF> showboards -v -a
XSB  R DID(LSB)  Assignment  Pwr  Conn Conf Test      Fault  COD
-----
00-0  00(00)    Assigned    y    y    y    Passed Normal  n
00-1  * 00(01)    Assigned    y    y    y    Passed Normal  n
00-2  SP          Available    y    n    n    Passed Normal  n
00-3  02(00)    Unavailable y    n    n    Unknown Normal  n

```

使用例 3 XSB#00-0 の情報を表示します。

```
XSCF> showboards 00-0
XSB DID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault
-----
00-0 15(00) Assigned y y y Passed Normal
```

使用例 4 XSB#00-0 の詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showboards -v 00-0
XSB R DID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault COD
-----
00-0 * 15(00) Assigned y n n Passed Normal y
```

使用例 5 システムボードプールの XSB を表示します。

```
XSCF> showboards -a -c sp
XSB DID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault
-----
00-0 SP Available y n n Passed Normal
00-2 SP Available y n n Passed Normal
00-3 SP Available y n n Passed Normal
```

使用例 6 ドメイン ID 0 に定義されていて、システムボードプールの XSB を表示します。

```
XSCF> showboards -d 0 -c sp
XSB DID(LSB) Assignment Pwr Conn Conf Test Fault
-----
00-2 SP Available y n n Passed Normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard (8), **addcodlicense** (8), **deleteboard** (8), **deletecodlicense** (8),
moveboard (8), **setdcl** (8), **setupfru** (8), **showcodlicense** (8), **showcodusage** (8),
showdcl (8), **showdevices** (8), **showfru** (8)



名前	showcod - ドメインで設定されているキャパシティオンデマンド (COD) に関する情報を表示します。
形式	showcod [-v] [-d <i>domain_id</i>] showcod -h
説明	showcod(8) は、ドメインで設定されている COD 情報を表示するコマンドです。 showcod(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。 COD 情報には、ヘッドルームの数、インストールされた COD Right-To-Use (RTU) ライセンスの数、およびドメインとシャーシホスト ID 用に予約された COD RTU ライセンスの数が含まれます。何も指定しないで、showcod(8) コマンドを実行した場合は、現在の COD 情報が表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 platadm, platop すべてのドメインに対して実行できます。 domainadm, domainmgr, アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。 domainop ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメイン ID を指定します。 <i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -v 詳細な情報を表示します。
使用例	使用例 1 すべての COD 情報を表示します (ドメイン ID 1 に対して domainadm, domainmgr, domainop のいずれかの権限を持っている場合)。 XSCF> showcod PROC RTUs reserved for domain 1 : 0 使用例 2 すべての COD 情報を表示します。(platadm 権限または platop 権限を持っている場合)。 XSCF> showcod Chassis HostID : 81000001 PROC RTUs installed : 8 PROC Headroom Quantity : 0 PROC RTUs reserved for domain 0 : 4

showcod(8)

```
PROC RTUs reserved for domain 1 : 0
PROC RTUs reserved for domain 2 : 0
PROC RTUs reserved for domain 3 : 0
PROC RTUs reserved for domain 4 : 0
PROC RTUs reserved for domain 5 : 0
PROC RTUs reserved for domain 6 : 0
PROC RTUs reserved for domain 7 : 0
PROC RTUs reserved for domain 8 : 0
PROC RTUs reserved for domain 9 : 0
PROC RTUs reserved for domain 10 : 0
PROC RTUs reserved for domain 11 : 0
PROC RTUs reserved for domain 12 : 0
PROC RTUs reserved for domain 13 : 0
PROC RTUs reserved for domain 14 : 0
PROC RTUs reserved for domain 15 : 0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setcod(8)

名前	showcodlicense - COD ライセンスデータベースに格納されている現在のキャンペーンデマンド (COD) Right-To-Use (RTU) ライセンスキーを表示します。
形式	showcodlicense [-r] [-v] showcodlicense -h
説明	showcodlicense(8) は、COD ライセンスデータベースに格納されている COD ライセンス情報を表示するコマンドです。 showcodlicense(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。 何も指定しないで、showcodlicense(8) コマンドを実行した場合は、現在の COD ライセンスが表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -r ライセンス情報を、COD ライセンスデータベースに格納されているのと同様の、加工されていない形式で表示します。 -v 詳細な情報を表示します。ライセンス情報は加工された形式とされていない形式の、両方が表示されます。
詳細説明	showcodlicense(8) コマンドを使用すると、以下の COD 情報が表示されます。 Description リソース (プロセッサ) の種類。 Ver ライセンスのバージョン番号。常に 01 に設定されています。 Expiration ライセンスの有効期限。 Count 所定のリソースに与えられている RTU ライセンスの数。 Status COD ライセンスの状態。所定のリソースが有効な場合は、GOOD、リソースのライセンスが切れている場合は、EXPIRED が表示されます。
使用例	使用例 1 加工された形式でライセンスデータを表示します。 XSCF> showcodlicense -v Description Ver Expiration Count Status ----- PROC 01 NONE 16 GOOD 01:84000000:000000001:0301010100:16:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

使用例 2 加工されていない形式でライセンスデータを表示します。

```
XSCF> showcodlicense -r  
01:84000000:104:0301010100:3:00000000:xxxxxxxxxxxxxxxx
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodlicense (8), deletecodlicense (8), showcodusage (8)

名前	showcodusage - キャパシティオンデマンド (COD) リソースの使用状況を表示します。
形式	showcodusage [-v] [-M] [-p resource domain all] showcodusage [-h]
説明	showcodusage(8) は、使用中の COD Right-To-Use (RTU) ライセンスに関する現在の状況を表示するコマンドです。 showcodusage(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。 デフォルトでは、使用中およびインストール済みの COD RTU ライセンスの概要が、各リソースの現在の状態とともに表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 platadm, platop, 全てのドメインに対して実行できます。 fielddeng domainadm, domainmgr, アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。 domainop ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。 -p domain ライセンスの使用状況をドメイン別に表示します。表示される統計情報には、ドメインで使用されている COD RTU ライセンスの数、ドメインに割り当てられているリソースの数、およびドメインに予約されている COD RTU ライセンスの数が含まれます。 -p resource ライセンスの使用状況をリソースタイプ別に表示します。 -p all すべての COD 使用状況情報を表示します。 -v 詳細な情報を表示します。使用可能なすべての COD の使用状況に関する情報 (システムとそのドメインの両方における COD RTU ライセンスの使用状況を含む) が表示されます。

詳細説明

- `showcodusage -p resource` コマンドを使用すると、システムに関する以下の COD 使用状況が表示されます。

Resource	使用可能な COD リソース (プロセッサ) のタイプ	
In Use	システムで現在使用されている COD CPU の数	
Installed	システムに装着されている COD CPU の数	
License	インストールされている COD RTU ライセンスの数	
Status	以下のいずれかの COD 状態。	
	OK	使用中の COD CPU に対して十分な数のライセンスがあります。また、残存する使用可能な COD リソースの数、および使用可能なインスタントアクセス CPU (ヘッドルーム) の数も表示されます。
	HEADROOM	使用されているインスタントアクセス COD CPU の数。
	Violation	COD RTU ライセンス違反が存在します。使用可能な COD RTU ライセンスの数を超えている、使用中の COD CPU の数が表示されます。この状況が発生する可能性があるのは、COD RTU ライセンスキーを COD RTU ライセンスデータベースから強制的に削除したときに、そのライセンスキーに関連づけられている COD CPU がまだ使用されていた場合です。

- `showcodusage -p domain` コマンドを使用すると、各ドメインに関する以下の COD 使用状況が表示されます。

Domain/Resource	各ドメインの COD RTU リソース (プロセッサ)。Unused と表示されているプロセッサは、まだドメインに割り当てられていない COD CPU です。
In Use	ドメインで現在使用されている COD CPU の数。

Installed	ドメインに装着されている COD CPU リソースの数。
Reserved	ドメインに割り当てられている COD RTU ライセンスの数。
Status	COD CPU の使用状況。-v オプションを指定したときに、以下のいずれかの情報が表示されます。
Licensed	ドメイン COD CPU は、COD RTU ライセンスを持っており、使用されています。
Unlicensed	ドメイン COD CPU は、COD RTU ライセンスを取得できず、使用されていません。
Unused	COD CPU は使用されていません。

使用例

プラットフォームに関する権限を持つユーザーは、リソースと、ドメインに関する使用状況の概要を両方表示できます。ドメインに関する権限を持つユーザーは、権限を持っているドメインの使用状況の概要と、使用されていないライセンスのレポートだけ表示できます。

使用例 1 COD の使用状況をリソース別に表示します。

```
XSCF> showcodusage -p resource
Resource  In Use  Installed  Licensed  Status
-----  -
PROC      4       4          16       OK: 12 available
```

使用例 2 COD の使用状況をドメイン別に表示します。

```
XSCF> showcodusage -p domains
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved
-----
0 - PROC          4       4          0
1 - PROC          4       4          0
2 - PROC          4       4          0
3 - PROC          4       4          0
4 - PROC          0       0          0
Unused - PROC     0       0          12
```

使用例 3 COD の使用状況をリソース別およびドメイン別に表示します。(Quad-XSB の CMU#00 と Uni-XSB の CMU#02 で構成された M8000 サーバの例)

```
XSCF> showcodusage -v
Resource  In Use  Installed  Licensed  Status
-----
PROC      0       8          0       OK: 0 available Headroom: 2
Domain/Resource  In Use  Installed  Reserved  Status
-----
0 - PROC          0       8          0
  00-0 - PROC     0       1          1
  CMU00-CPU0
  00-1 - PROC     0       1          1
  CMU00-CPU0          Unused
```

showcodusage(8)

```

CMU00-CPU1
00-2 - PROC      0      1      Unused
CMU00-CPU2
00-3 - PROC      0      1      Unused
CMU00-CPU3
02-0 - PROC      0      4      Unused
CMU02-CPU0
CMU02-CPU1
CMU02-CPU2
CMU02-CPU3
1 - PROC          0      0      0
2 - PROC          0      0      0
3 - PROC          0      0      0
4 - PROC          0      0      0
5 - PROC          0      0      0
6 - PROC          0      0      0
7 - PROC          0      0      0
8 - PROC          0      0      0
9 - PROC          0      0      0
10 - PROC         0      0      0
11 - PROC         0      0      0
12 - PROC         0      0      0
13 - PROC         0      0      0
14 - PROC         0      0      0
15 - PROC         0      0      0
Unused - PROC    0      0      2

```

使用例 4 M5000 サーバで、COD の使用状況をリソース別およびドメイン別に表示します。

```

XSCF> showcodusage -v
Resource In Use Installed Licensed Status
-----
PROC          0          4          0 OK: 0 available
Domain/Resource In Use Installed Reserved Status
-----
0 - PROC          0          0          0
1 - PROC          0          0          0
2 - PROC          0          0          0
3 - PROC          0          0          0
Unused - PROC    0          4          0
    00-0 - PROC    0          4
    CPUM00-CPU0
    CPUM00-CPU1
    CPUM01-CPU0
    CPUM01-CPU1

```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 | **addcodlicense (8), deletecodlicense (8), showcodlicense (8)**

showcodusage(8)



名前	showconsolepath - 現在接続されているドメインコンソールの情報を表示します。														
形式	<p>showconsolepath -a</p> <p>showconsolepath -d <i>domain_id</i></p> <p>showconsolepath -h</p>														
説明	<p>showconsolepath(8) は、現在接続されているドメインコンソールの情報を表示するコマンドです。</p> <p>以下の内容が表示されます。</p> <table border="0"> <tr> <td>user</td> <td>ドメインコンソールに接続している XSCF ユーザーアカウント</td> </tr> <tr> <td>DID</td> <td>ドメイン ID</td> </tr> <tr> <td>ro/rw</td> <td>ドメインコンソールの種類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>ro 読み取り専用コンソール</td> </tr> <tr> <td></td> <td>rw 書き込み可能コンソール</td> </tr> <tr> <td>escape</td> <td>コンソールに設定されているエスケープ記号</td> </tr> <tr> <td>date</td> <td>ドメインコンソールに接続した日時</td> </tr> </table>	user	ドメインコンソールに接続している XSCF ユーザーアカウント	DID	ドメイン ID	ro/rw	ドメインコンソールの種類		ro 読み取り専用コンソール		rw 書き込み可能コンソール	escape	コンソールに設定されているエスケープ記号	date	ドメインコンソールに接続した日時
user	ドメインコンソールに接続している XSCF ユーザーアカウント														
DID	ドメイン ID														
ro/rw	ドメインコンソールの種類														
	ro 読み取り専用コンソール														
	rw 書き込み可能コンソール														
escape	コンソールに設定されているエスケープ記号														
date	ドメインコンソールに接続した日時														
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>useradm, platadm, platop, すべてのドメインに対して実行できます。 fieldeng</p> <p>domainadm, domainmgr, アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。 domainop</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>														
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-a アクセスできるすべてのドメインに接続されているコンソールの情報を表示します。</p> <p>-d <i>domain_id</i> 情報を表示するドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定します。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>														
詳細説明	1 つのドメインに対して、書き込み可能コンソールは 1 つだけ、読み取り専用コンソールは複数接続できます。														

使用例

使用例 1 アクセスできるすべてのドメインに接続されているコンソールの情報を表示します。

```
XSCF> showconsolepath -a
User          DID  ro/rw  escape  Date
nakagawa     00   rw     @       Fri Jul 29 21:23:34
hana         00   ro     #       Fri Jul 29 09:49:12
k-okano      00   ro     #       Fri Jul 29 18:21:50
yuuki        01   rw     |       Fri Jul 29 10:19:18
uchida       01   ro     *       Fri Jul 29 13:30:41
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

console (8), **sendbreak (8)**

名前	showdate - XSCF の時計の日付、時刻を表示します。
形式	showdate [-u] showdate -h
説明	showdate(8) は、XSCF の時計の日付、時刻を表示するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -u 時刻を協定世界時 (UTC) で指定します。省略した場合は地方時となります。
詳細説明	setdate(8) コマンドを使用すると、XSCF の時計の日付、時刻を設定できます。
使用例	使用例 1 現在の時刻を地方時 (JST) で表示します。 XSCF> showdate Mon Jan 23 14:53:00 JST 2006 使用例 2 現在の時刻を UTC で表示します。 XSCF> showdate -u Mon Jan 23 05:56:15 UTC 2006
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setdate (8), settimezone (8), showtimezone (8)

showdate(8)



名前	showdcl - 現在設定されているドメイン構成情報 (DCL) を表示します。
形式	showdcl [-v] -a showdcl [-v] -d <i>domain_id</i> [-1 <i>lsb</i> [-1 <i>lsb</i>]]... showdcl -h
説明	<p>showdcl(8) は、setdcl(8) コマンドで設定された DCL を表示するコマンドです。</p> <p>ドメイン構成情報とは、ドメインやドメインを構成する論理システムボード (LSB) に設定できるハードウェアリソース情報です。</p> <p>LSB とは、ドメインの Solaris OS で認識されるボードの単位です。ドメインごとに最大 16 枚まで登録でき、00 から 15 までの整数で表されます。</p> <p>システムボード (XSB) とは、物理システムボード (PSB) を分割してシステム上で使用できる単位に構成しなおしたボードのことです。XSB は PSB 番号と PSB を分割したときの分割番号を組み合わせる x-y (x は 00 から 15 までの整数、y は 0 から 3 までの整数) で表されます。</p>

showdcl(8) コマンドでは、DCL 内の、以下の情報を表示できます。

DID	ドメイン ID
LSB	LSB 番号。00 から 15 までの整数で表示されます。
XSB	LSB に対応する XSB 番号。以下の形式で表示されます。 x - y : x 00 から 15 までの整数 y 0 から 3 までの整数
Status	ドメインの稼働状態。以下のいずれかが表示されます。追加情報が表示される場合があります。 Powered Off 電源が切断されている状態 Panic State パニックが発生し、再起動中の状態 Shutdown Started 電源が切断中の状態 Initialization Phase OpenBoot PROM が初期化中の状態 OpenBoot Executing Completed OpenBoot PROM が起動され、プロンプト (ok) が表示されている状態 Booting/OpenBoot PROM prompt Solaris OS が起動中の状態。またはドメインのシャットダウンや再起動によって、OpenBoot PROM が動作中かプロンプト (ok) で停止している状態 Running Solaris OS が稼働している状態

-v オプションを指定すると、以下の情報が追加されます。

Cfg-policy	ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲。以下のいずれかが表示されます。
	FRU FRU 単位で縮退します (デフォルト)
	XSB XSB 単位で縮退します
	System ドメイン単位で縮退します
No-Mem	LSB に搭載されているメモリをドメインで使用させるかどうか。以下のどちらかが表示されます。
	True メモリを使用させません
	False メモリを使用させます (デフォルト)
No-IO	LSB に搭載されている入出力デバイスをドメインで使用させるかどうか。以下のどちらかが表示されます。
	True 入出力デバイスを使用させません
	False 入出力デバイスを使用させます (デフォルト)
Float	LSB を優先してフローティングボードとするかどうか。以下のどちらかが表示されます。
	True フローティングボードになる優先度を高くします
	False フローティングボードになる優先度を高くしません (デフォルト)

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges(8)` コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべてのドメインの情報を表示します。
-d <i>domain_id</i>	表示するドメイン ID を指定します。 <i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で表示されます。

詳細説明

- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
 - l *lsb* 表示する LSB 番号を指定します。-l オプションはスペースで区切って複数指定できます。*lsb* は 0 から 15 まで整数で指定します。*lsb* を省略した場合は、ドメイン内のすべての LSB が対象となります。
 - v ドメイン構成情報内の Cfg-policy、No-Mem、No-IO、Float の情報を追加して表示します。
- フローティングボードの優先度が低く設定されている XSB は、フローティングボードになりにくくなります。そのため、ドメインの Solaris OS に対して影響を与えにくくなります。
 - setdcl(8) コマンドを使用すると、DCL を設定できます。

使用例

使用例 1 ドメイン ID 0 に設定されている DCL を表示します。

```
XSCF> showdcl -d 0
DID  LSB  XSB  Status
00           Running
      00   00-0
      04   01-0
      08   02-0
      12   03-0
```

使用例 2 ドメイン ID 0 に設定されている詳細な DCL を表示します。

```
XSCF> showdcl -v -d 0
DID  LSB  XSB  Status  No-Mem  No-IO  Float  Cfg-policy
00           Running  FRU
      00   00-0      False  False  False
      01   -
      02   -
      03   -
      04   01-0      False  True   False
      05   -
      06   -
      07   -
      08   02-0      True   True   True
      09   -
      10   -
      11   -
      12   03-0      True   True   False
      13   -
      14   -
      15   -
```


使用例 3 すべてのドメインに設定されている詳細な DCL を表示します。

```
XSCF> showdcl -v -a
DID  LSB  XSB  Status  No-Mem  No-IO  Float  Cfg-policy
00   00   00-0  Running
      01   -
      02   -
      03   -
      04   01-0  False   True    False
      05   -
      06   -
      07   -
      08   02-0  True    True    True
      09   -
      10   -
      11   -
      12   03-0  True    True    False
      13   -
      14   -
      15   -
-----
01   00   01-2  Running (Waiting for OS Shutdown)  FRU
      01   04-0  False   False   False
      02   -
      03   -
      04   -
      05   -
      06   -
      07   05-0  True    False   False
      08   -
      09   -
      10   -
      11   -
      12   -
      13   -
      14   06-0  True    True    True
      15   -
-----
:
:
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard (8), **deleteboard (8)**, **moveboard (8)**, **setdcl (8)**, **setupfru (8)**,
showboards (8), **showdevices (8)**, **showfru (8)**

showdcl(8)



名前	showdevices - システムボード (XSB) のデバイスと、リソースの使用状況を表示します。																				
形式	<pre>showdevices [-v] [-p bydevice byboard query force] xsb showdevices [-v] [-p bydevice byboard] -d domain_id showdevices -h</pre>																				
説明	<p>showdevices(8) は、XSB を構成するデバイスと、デバイス上の、リソースの使用状況を一覧表示するコマンドです。</p> <p>リソースの使用状況は、システムのリソースを管理しているアプリケーションとサブシステムより提供されます。管理対象のリソースがオフラインで照会され、XSB に対して Dynamic Reconfiguration(DR) 操作が行われた場合の影響が予測されて表示されます。デフォルトの設定では管理対象外のデバイスは表示されませんが、-v オプションを使用すると、これらのデバイスを表示できます。</p> <p>以下の情報が表示されます。</p> <p>共通：</p> <table border="0"> <tr> <td>DID</td> <td>ドメイン ID</td> </tr> <tr> <td>XSB</td> <td>XSB 番号</td> </tr> </table> <p>CPU:</p> <table border="0"> <tr> <td>id</td> <td>プロセッサの ID</td> </tr> <tr> <td>state</td> <td>プロセッサの状態</td> </tr> <tr> <td>speed</td> <td>CPU の周波数 (MHz)</td> </tr> <tr> <td>ecache</td> <td>CPU の外部キャッシュサイズ (MB)</td> </tr> </table> <p>メモリ：</p> <table border="0"> <tr> <td>board mem</td> <td>XSB に搭載されているメモリサイズ (MB)</td> </tr> <tr> <td>perm mem</td> <td>XSB に搭載されている、再配置できないメモリサイズ (MB)</td> </tr> <tr> <td>base address</td> <td>XSB に搭載されているメモリの物理アドレス</td> </tr> <tr> <td>domain mem</td> <td>ドメインメモリサイズ (MB)</td> </tr> </table>	DID	ドメイン ID	XSB	XSB 番号	id	プロセッサの ID	state	プロセッサの状態	speed	CPU の周波数 (MHz)	ecache	CPU の外部キャッシュサイズ (MB)	board mem	XSB に搭載されているメモリサイズ (MB)	perm mem	XSB に搭載されている、再配置できないメモリサイズ (MB)	base address	XSB に搭載されているメモリの物理アドレス	domain mem	ドメインメモリサイズ (MB)
DID	ドメイン ID																				
XSB	XSB 番号																				
id	プロセッサの ID																				
state	プロセッサの状態																				
speed	CPU の周波数 (MHz)																				
ecache	CPU の外部キャッシュサイズ (MB)																				
board mem	XSB に搭載されているメモリサイズ (MB)																				
perm mem	XSB に搭載されている、再配置できないメモリサイズ (MB)																				
base address	XSB に搭載されているメモリの物理アドレス																				
domain mem	ドメインメモリサイズ (MB)																				

メモリを切り離し中の場合は、以下の項目が表示されます。

target XSB	移動先の XSB 番号
deleted mem	削除済みのメモリサイズ (MB)
remaining mem	削除する残りのメモリサイズ (MB)

入出力 デバイス:

device	入出力デバイスのインスタンス名
resource	管理されているリソース名
usage	リソースを使用しているインスタンスの説明
query	リソースについてのオフライン照会の結果

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。
domainadm, domainmgr, domainop	アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d <i>domain_id</i>	表示するドメイン ID を指定します。 <i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定します
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p byboard	XSB ごとに結果を表示します。結果は、さらに、デバイスごとにまとめて表示されます。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたものとみなされます。
-p bydevice	CPU、メモリ、I/O など、デバイスごとに結果が表示されます。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたものとみなされます。

- p force** deleteboard -f コマンドを使用して XSB をドメインから強制的に切り離した場合に、Solaris OS から削除されるシステムリソースを予測します。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたとみなされます。
- p query** deleteboard(8) コマンドを使用して XSB をドメインから切り離した場合に、Solaris OS から削除されるシステムリソースを予測します。-p オプションを省略した場合は、"-p bydevice" が指定されたとみなされます。
- v** 管理対象外の入出力デバイスを含め、すべての入出力デバイスの情報を表示します。ただし、管理対象外の入出力デバイスについては、物理的な構成だけ表示され、リソースや使用状況は表示されません。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xsb 表示する XSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。スペースで区切って複数指定できます。

```

x-y
x          00 から 15 までの整数
y          0 から 3 までの整数

```

使用例

使用例 1 XSB#00-0 上のデバイスと、リソースの使用状況を表示します。

```

XSCF> showdevices 00-0

CPU:
----
DID XSB id state speed ecache
00 00-0 40 on-line 2048 4
00 00-0 41 on-line 2048 4
00 00-0 42 on-line 2048 4
00 00-0 43 on-line 2048 4

Memory:
-----
          board perm base          domain target deleted remaining
DID XSB mem MB mem MB address          mem MB XSB mem MB mem MB
00 00-0 2048 1290 0x000003c000000000 2048 03-0 250 1500
00 00-1 2048 0 0x0000038000000000 2048 0 0 0
00 00-2 2048 0 0x0000034000000000 2048 0 0 0
00 00-3 2048 0 0x0000030000000000 2048 0 0 0
00 01-0 2048 0 0x000002c000000000 2048 1024 0 0
00 02-0 2048 0 0x0000028000000000 2048 0 0 0

IO Devices:
-----
DID XSB          device resource          usage

```

```

00 00-0      sd3      /dev/dsk/c0t3d0s0      mounted filesystem "/"
00 00-0      sd3      /dev/dsk/c0t3s0s1      dump device (swap)
00 00-0      sd3      /dev/dsk/c0t3s0s1      swap area
00 00-0      sd3      /dev/dsk/c0t3d0s3      mounted filesystem "/var"
00 00-0      sd3      /var/run                mounted filesystem "/var/run"

```

使用例 2 ドメイン ID 0 上のデバイスと、リソースの詳細な使用状況を表示します。

```
XSCF> showdevices -v -d 0
```

CPU:

DID	XSB	id	state	speed	ecache
00	00-0	40	on-line	2048	4
00	00-0	41	on-line	2048	4
00	00-0	42	on-line	2048	4
00	00-0	43	on-line	2048	4
00	01-0	50	on-line	2048	4
00	01-0	51	on-line	2048	4
00	01-0	52	on-line	2048	4
00	01-0	53	on-line	2048	4

Memory:

DID	XSB	board	perm	base	domain	target	deleted	remaining
DID	XSB	mem MB	mem MB	address	mem MB	XSB	mem MB	mem MB
00	00-0	2048	1290	0x000003c000000000	4096	00-1	250	1500
00	01-0	2048	0	0x000002c000000000	4096			

IO Devices:

DID	XSB	device	resource	usage
00	00-0	sd0		
00	00-0	sd1		
00	00-0	sd2		
00	00-0	sd3	/dev/dsk/c0t3d0s0	mounted filesystem "/"
00	00-0	sd3	/dev/dsk/c0t3s0s1	dump device (swap)
00	00-0	sd3	/dev/dsk/c0t3s0s1	swap area
00	00-0	sd3	/dev/dsk/c0t3d0s3	mounted filesystem "/var"
00	00-0	sd3	/var/run	mounted filesystem "/var/run"
00	00-0	sd4		
00	00-0	sd5		
00	00-0	sd6		

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard (8), deleteboard (8), moveboard (8), setdcl (8), setupfru (8), showboards (8), showdcl (8), showfru (8)

showdevices(8)



名前	showdomainmode - 現在設定されているドメインの動作モードを表示します。																																				
形式	showdomainmode -d <i>domain_id</i> showdomainmode -h																																				
説明	<p>showdomainmode(8) は、指定したドメインに現在設定されているドメインの動作モードを表示するコマンドです。</p> <p>以下の状態が表示されます。</p> <table border="0"> <tr> <td>HOST-ID</td> <td>HOST ID</td> </tr> <tr> <td>Diagnostic Level</td> <td>OpenBoot PROM の診断レベル。以下のいずれかが表示されます。</td> </tr> <tr> <td></td> <td> <table border="0"> <tr> <td>none</td> <td>なし</td> </tr> <tr> <td>min</td> <td>標準</td> </tr> <tr> <td>max</td> <td>最大</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td>Secure Mode</td> <td>host watchdog、Break 信号受信抑止機能の状態。以下のどちらかが表示されます。</td> </tr> <tr> <td></td> <td> <table border="0"> <tr> <td>on</td> <td>有効</td> </tr> <tr> <td>off</td> <td>無効</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td>Autoboot</td> <td>オートブート機能の状態。以下のどちらかが表示されます。</td> </tr> <tr> <td></td> <td> <table border="0"> <tr> <td>on</td> <td>有効</td> </tr> <tr> <td>off</td> <td>無効</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td>CPU Mode</td> <td>ドメインに搭載されている CPU 動作モードの設定方法。以下のどちらかが表示されます。</td> </tr> <tr> <td></td> <td> <table border="0"> <tr> <td>auto</td> <td>ドメイン起動時に自動的に判別</td> </tr> <tr> <td>compatible</td> <td>搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	HOST-ID	HOST ID	Diagnostic Level	OpenBoot PROM の診断レベル。以下のいずれかが表示されます。		<table border="0"> <tr> <td>none</td> <td>なし</td> </tr> <tr> <td>min</td> <td>標準</td> </tr> <tr> <td>max</td> <td>最大</td> </tr> </table>	none	なし	min	標準	max	最大	Secure Mode	host watchdog、Break 信号受信抑止機能の状態。以下のどちらかが表示されます。		<table border="0"> <tr> <td>on</td> <td>有効</td> </tr> <tr> <td>off</td> <td>無効</td> </tr> </table>	on	有効	off	無効	Autoboot	オートブート機能の状態。以下のどちらかが表示されます。		<table border="0"> <tr> <td>on</td> <td>有効</td> </tr> <tr> <td>off</td> <td>無効</td> </tr> </table>	on	有効	off	無効	CPU Mode	ドメインに搭載されている CPU 動作モードの設定方法。以下のどちらかが表示されます。		<table border="0"> <tr> <td>auto</td> <td>ドメイン起動時に自動的に判別</td> </tr> <tr> <td>compatible</td> <td>搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定</td> </tr> </table>	auto	ドメイン起動時に自動的に判別	compatible	搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定
HOST-ID	HOST ID																																				
Diagnostic Level	OpenBoot PROM の診断レベル。以下のいずれかが表示されます。																																				
	<table border="0"> <tr> <td>none</td> <td>なし</td> </tr> <tr> <td>min</td> <td>標準</td> </tr> <tr> <td>max</td> <td>最大</td> </tr> </table>	none	なし	min	標準	max	最大																														
none	なし																																				
min	標準																																				
max	最大																																				
Secure Mode	host watchdog、Break 信号受信抑止機能の状態。以下のどちらかが表示されます。																																				
	<table border="0"> <tr> <td>on</td> <td>有効</td> </tr> <tr> <td>off</td> <td>無効</td> </tr> </table>	on	有効	off	無効																																
on	有効																																				
off	無効																																				
Autoboot	オートブート機能の状態。以下のどちらかが表示されます。																																				
	<table border="0"> <tr> <td>on</td> <td>有効</td> </tr> <tr> <td>off</td> <td>無効</td> </tr> </table>	on	有効	off	無効																																
on	有効																																				
off	無効																																				
CPU Mode	ドメインに搭載されている CPU 動作モードの設定方法。以下のどちらかが表示されます。																																				
	<table border="0"> <tr> <td>auto</td> <td>ドメイン起動時に自動的に判別</td> </tr> <tr> <td>compatible</td> <td>搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定</td> </tr> </table>	auto	ドメイン起動時に自動的に判別	compatible	搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定																																
auto	ドメイン起動時に自動的に判別																																				
compatible	搭載されている CPU に関係なく、SPARC64 VI 互換モードに設定																																				
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <table border="0"> <tr> <td>platadm, fieldeng</td> <td>すべてのドメインに対して実行できます。</td> </tr> <tr> <td>domainadm</td> <td>管理権限を持つドメインに対して実行できます。</td> </tr> </table> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>	platadm, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。	domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。																																
platadm, fieldeng	すべてのドメインに対して実行できます。																																				
domainadm	管理権限を持つドメインに対して実行できます。																																				

オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> 表示するドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ オペレーターパネルのモードスイッチが「Service」の場合は、<code>showdomainmode(8)</code> コマンドで表示された内容にかかわらず、ドメインの動作モードは以下のように設定されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ OpenBoot PROM 診断レベル (Diagnostic Level), CPU 動作モード (CPU Mode): <code>showdomainmode(8)</code> コマンドの表示どおり ■ host watchdog 監視および Break 信号受信抑止 (Secure Mode), オートブート機能 (Autoboot): 無効 ■ OpenBoot PROM 環境変数 <code>auto-boot?</code> が <code>false</code> に設定されている場合は、オートブート機能は無効となります。 ■ <code>setdomainmode(8)</code> コマンドを使用すると、ドメインの動作モードを設定できません。
使用例	<p>使用例 1 ドメイン ID 0 に設定されているドメインの動作モードを表示します。</p> <pre>XSCF> showdomainmode -d 0 Host-ID :0f010f10 Diagnostic Level :min Secure Mode :on Autoboot :on CPU Mode :auto</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	setdomainmode(8)

名前	showdomainstatus - 現在のドメインの状態を表示します。																
形式	showdomainstatus -d <i>domain_id</i> showdomainstatus -a showdomainstatus -h																
説明	<p>showdomainstatus(8) は、現在のドメインの状態を表示するコマンドです。</p> <p>ドメインごとに、以下のいずれかの状態が表示されます。追加情報が表示される場合があります。</p> <table border="0"> <tr> <td>Powered Off</td> <td>電源が切断されている状態</td> </tr> <tr> <td>Panic State</td> <td>パニックが発生し、再起動中の状態</td> </tr> <tr> <td>Shutdown Started</td> <td>電源が切断中の状態</td> </tr> <tr> <td>Initialization Phase</td> <td>OpenBoot PROM が初期化中の状態</td> </tr> <tr> <td>OpenBoot Execution Completed</td> <td>OpenBoot PROM が起動され、プロンプト (ok>) が表示されている状態</td> </tr> <tr> <td>Booting/OpenBoot PROM prompt</td> <td>Solaris OS が起動中の状態。またはドメインのシャットダウンや再起動によって、OpenBoot PROM が動作中かプロンプト (ok>) で停止している状態</td> </tr> <tr> <td>Running</td> <td>Solaris OS が稼働している状態</td> </tr> <tr> <td>-</td> <td>ドメインが定義されていない状態</td> </tr> </table>	Powered Off	電源が切断されている状態	Panic State	パニックが発生し、再起動中の状態	Shutdown Started	電源が切断中の状態	Initialization Phase	OpenBoot PROM が初期化中の状態	OpenBoot Execution Completed	OpenBoot PROM が起動され、プロンプト (ok>) が表示されている状態	Booting/OpenBoot PROM prompt	Solaris OS が起動中の状態。またはドメインのシャットダウンや再起動によって、OpenBoot PROM が動作中かプロンプト (ok>) で停止している状態	Running	Solaris OS が稼働している状態	-	ドメインが定義されていない状態
Powered Off	電源が切断されている状態																
Panic State	パニックが発生し、再起動中の状態																
Shutdown Started	電源が切断中の状態																
Initialization Phase	OpenBoot PROM が初期化中の状態																
OpenBoot Execution Completed	OpenBoot PROM が起動され、プロンプト (ok>) が表示されている状態																
Booting/OpenBoot PROM prompt	Solaris OS が起動中の状態。またはドメインのシャットダウンや再起動によって、OpenBoot PROM が動作中かプロンプト (ok>) で停止している状態																
Running	Solaris OS が稼働している状態																
-	ドメインが定義されていない状態																
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>useradm, platadm, platop, すべてのドメインに対して実行できます。 fieldeng</p> <p>domainadm, domainmgr, アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。 domainop</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>																

オプション	以下のオプションがサポートされています。
-a	アクセスできるすべてのドメインの状態を表示します。
-d <i>domain_id</i>	状態を表示するドメイン ID を指定します。 <i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で 1 つだけ指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
使用例	<p>使用例 1 すべてのドメインの状態を表示します。</p> <pre>XSCF> showdomainstatus -a DID Domain Status 00 Running 01 Running (Waiting for OS Shutdown) 02 Powered Off 03 Panic State 04 Shutdown Started 05 Booting/OpenBoot PROM prompt 06 Initialization Phase 07 OpenBoot Execution Completed</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。
0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。
関連項目	poweroff(8) , poweron(8) , reset(8) , showdcl(8)

名前	showdscp - ドメイン - SP 通信プロトコル (DSCP) に割り当てられている IP アドレスを表示します。
形式	<pre>showdscp showdscp [-v] [-p] showdscp [-v] [-p] -d domain_id showdscp [-v] [-p] -s showdscp -h</pre>
説明	<p>showdscp(8) は、DSCP 使用のために割り当てられている IP アドレス、つまり個々のドメイン、サービスプロセッサ、またはシステム全体の IP アドレスを表示するコマンドです。</p> <p>システム内の DSCP リンクすべての IP アドレスを表示する場合、出力は表になります。この表は、ドメイン ID によってソートされます。</p> <p>特定のドメインまたはサービスプロセッサの IP アドレスを表示する場合、表ではなく、指定したドメインまたはサービスプロセッサの IP アドレスのみが出力されます。</p> <p>-p オプションを使用すると、解析可能な出力を生成できます。この出力は、のちに、スクリプトなどで使用することができます。個々の IP アドレスを解析可能な形式で表示すると、追加のラベルは除外され、IPv4 アドレスのみがドットつき 10 進表記で出力されます。表を解析可能なバージョンで出力すると、値のみが表示され (表見出しは表示されません)、各カラムは 1 つのタブ文字によって区切られます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, platop, fieldeng すべてのドメインに対して実行できます。</p> <p>domainadm, domainmgr, domainop アクセス権を持つドメインに対して実行できます。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> IP アドレスを表示するドメイン ID を指定します。<i>domain_id</i> はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。</p> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p>

- p 解析可能な出力を生成します。
- s サービスプロセッサの IP アドレスを表示します。
- v 詳細な情報を表示します。プログラムの操作の内部プロセスに関する詳細情報を画面に出力します。

使用例

注 - 以下の使用例に示す IP アドレスは、サンプルです。

使用例 1 DSCP のすべての IP アドレスを示す表を表示します。

```
XSCF> showdscp

DSCP Configuration

Network: 10.1.1.0
Netmask: 255.255.255.0

  Location      Address
  -----
XSCF           10.1.1.1
Domain #00     10.1.1.2
Domain #01     10.1.1.3
Domain #02     10.1.1.4
Domain #03     10.1.1.5
Domain #04     10.1.1.6
Domain #05     10.1.1.7
Domain #06     10.1.1.8
Domain #07     10.1.1.9
Domain #08     10.1.1.10
Domain #09     10.1.1.11
Domain #10     10.1.1.12
Domain #11     10.1.1.13
Domain #12     10.1.1.14
Domain #13     10.1.1.15
Domain #14     10.1.1.16
Domain #15     10.1.1.17
Domain #16     10.1.1.18
Domain #17     10.1.1.19
Domain #18     10.1.1.20
Domain #19     10.1.1.21
Domain #20     10.1.1.22
Domain #21     10.1.1.23
Domain #22     10.1.1.24
Domain #23     10.1.1.25
```

使用例 2 特定ドメインの IP アドレスを表示します。

```
XSCF> showdscp -d 1
Domain #01 Address: 10.1.1.3
```

使用例 3 特定ドメインの IP アドレスを解析可能な形式で表示します。

```
XSCF> showdscp -p -d 1
Domain[1] 10.1.1.3
```

使用例 4 すべての DSCP アドレス情報を解析可能な形式で表示します。

```
XSCF> showdscp -p
Network 10.1.1.0
Netmask 255.255.255.0
XSCF 10.1.1.1
Domain[0] 10.1.1.2
Domain[1] 10.1.1.3
Domain[2] 10.1.1.4
Domain[3] 10.1.1.5
Domain[4] 10.1.1.6
Domain[5] 10.1.1.7
Domain[6] 10.1.1.8
Domain[7] 10.1.1.9
Domain[8] 10.1.1.10
Domain[9] 10.1.1.11
...
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 [setdscp\(8\)](#)

showdscp(8)



名前	showdualpowerfeed - 二系統受電モードの状態を表示します。
形式	showdualpowerfeed showdualpowerfeed -h
説明	showdualpowerfeed(8) は、本体装置の二系統受電モードの状態を表示するコマンドです。 showdualpowerfeed(8) コマンドは、M3000/M4000/M5000 サーバにだけ有効です。 二系統受電モードは、setdualpowerfeed(8) コマンドで設定できます。setdualpowerfeed(8) コマンドによって、二系統受電モードが変更される予定の場合は、変更内容も表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 本体装置に現在設定されている二系統受電モードを表示します。 XSCF> showdualpowerfeed Dual power feed is enabled. 使用例 2 setdualpowerfeed(8) コマンドによって二系統受電モードを変更後、現在の状態を表示します。 XSCF> showdualpowerfeed enable -> disable NOTE: Dual power feed will be disabled the next time the platform is powered on.
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setdualpowerfeed (8)

showdualpowerfeed(8)



名前	showemailreport - 電子メールレポートの設定データを表示します。
形式	showemailreport [-v] showemailreport -h
説明	showemailreport(8) は、電子メールレポートの設定データを表示するコマンドです。 オプションを指定しないで使用すると、現在の電子メールレポートの設定データが表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 platadm, platop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -v 詳細な情報を表示します。
詳細説明	電子メールレポート情報には、電子メールレポートが有効になっているかどうかが含まれます。有効になっている場合は、アドレスのリストも含まれます。
使用例	使用例 1 電子メールレポートの設定を表示します。 XSCF> showemailreport EMail Reporting: enabled Email Recipient Address: admin@company.com, adm2@company.com
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setemailreport (8)

showemailreport(8)



名前	showenvironment - 本体装置の吸気温度と湿度、温度センサー情報、電圧センサー情報、ファン回転情報を表示します。
形式	showenvironment [-M] [<i>type</i>] showenvironment -h
説明	showenvironment(8) は、以下の情報を表示するコマンドです。 以下の情報が表示されます。
環境情報	本体装置の吸気温度と湿度 湿度は M8000/M9000 サーバだけで表示されます。
温度情報	本体装置の吸気温度と各コンポーネントの排気温度 以下のコンポーネントの排気温度が確認できます。
M3000 サーバ	マザーボードユニット (MBU_A)、CPU
M4000/M5000 サーバ	CPU モジュール (CPUM), I/O ユニット (IOU)
M8000/M9000 サーバ	CPU / メモリボードユニット (CMU)、CPU モジュール (CPUM)、クロスバーユニット (XBU_B)
電圧情報	電圧センサー値
ファン回転情報	ファンの回転状態と回転数
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

<i>type</i>	表示する情報のタイプを指定します。以下のいずれかのタイプが指定できます。省略した場合は、本体装置の吸気温度と湿度の情報を表示します。
temp	温度情報を表示します。
volt	電圧情報を表示します。
Fan	ファンの回転情報を表示します。

使用例

使用例 1 M8000/M9000 サーバで、本体装置の吸気温度と湿度を表示します。

```
XSCF> showenvironment
Temperature:30.71C
Humidity:90.05%
```

使用例 2 M8000 サーバで、本体装置と各コンポーネントの温度情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment temp
Temperature:30.71C
CMU#0:30.71C
CPUM#0-CHIP#0:30.71C
CPUM#1-CHIP#0:30.71C
CPUM#2-CHIP#0:30.71C
CPUM#3-CHIP#0:30.71C
CMU#1:30.71C
CPUM#0-CHIP#0:30.71C
CPUM#1-CHIP#0:30.71C
CPUM#2-CHIP#0:30.71C
CPUM#3-CHIP#0:30.71C
CMU#2:30.71C
CPUM#0-CHIP#0:30.71C
CPUM#1-CHIP#0:30.71C
CPUM#2-CHIP#0:30.71C
CPUM#3-CHIP#0:30.71C
CMU#3:30.71C
CPUM#0-CHIP#0:30.71C
CPUM#1-CHIP#0:30.71C
CPUM#2-CHIP#0:30.71C
CPUM#3-CHIP#0:30.71C
```

使用例 3 M4000 サーバで、各コンポーネントの電圧情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment volt
MBU_A
1.0V Power Supply Group:1.010V
1.8V Power Supply Group:1.700V
CPUM#0-CHIP#0
1.0V Power Supply Group:1.000V
CPUM#1-CHIP#0
1.0V Power Supply Group:1.000V
```

```

MEMB#0
  1.2V Power Supply Group:1.200V
  1.8V Power Supply Group:1.700V
  2.5V Power Supply Group:2.500V
MEMB#1
  1.2V Power Supply Group:1.200V
  1.8V Power Supply Group:1.700V
  2.5V Power Supply Group:2.500V
MEMB#2
  1.2V Power Supply Group:1.200V
  1.8V Power Supply Group:1.700V
  2.5V Power Supply Group:2.500V
MEMB#3
  1.2V Power Supply Group:1.200V
  1.8V Power Supply Group:1.700V
  2.5V Power Supply Group:2.500V
IOU#0
  1.0V Power Supply Group:1.020V
  1.2V Power Supply Group:1.180V
  1.5V Power Supply Group:1.500V
  1.8V Power Supply Group:1.850V
  2.5V Power Supply Group:2.510V
  3.3V Power Supply Group:3.300V
  5.0V Power Supply Group:5.000V
  12V Power Supply Group:12.000V
 -12V Power Supply Group:-12.000V
FANBP
  3.3V Power Supply Group:3.300V
  5.0V Power Supply Group:5.010V
  12V Power Supply Group:12.020V
 -12V Power Supply Group:-12.030V

```

使用例 4 M5000 サーバで、ファンの回転情報を表示します。

```

XSCF> showenvironment Fan
FAN_A#0:Low speed
      FAN_A#0: 4101rpm
FAN_A#1:Low speed
      FAN_A#1: 4101rpm
FAN_A#2:Low speed
      FAN_A#2: 4177rpm
FAN_A#3:Low speed
      FAN_A#3: 4101rpm
PSU#0
  PSU#0:Low speed
        PSU#0: 3879rpm
        PSU#0: 3835rpm
PSU#1
  PSU#1:Low speed
        PSU#1: 3924rpm
        PSU#1: 3970rpm
PSU#2
  PSU#2:Low speed

```

showenvironment(8)

```
PSU#2: 4218rpm
PSU#2: 4066rpm
PSU#3
PSU#3:Low speed
PSU#3: 3835rpm
PSU#3: 3970rpm
```

使用例 5 M3000 サーバで、ファンの回転情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment Fan
FAN_A#0:Low speed (level-4)
FAN_A#0: 4134rpm
FAN_A#1:Low speed (level-4)
FAN_A#1: 4212rpm
PSU#0
PSU#0:Low speed (level-4)
PSU#0: 6436rpm
PSU#1
PSU#1:Low speed (level-4)
PSU#1: 6352rpm
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前	showfru - デバイスのハードウェアに関する設定内容を表示します。																								
形式	<p>showfru <i>device location</i></p> <p>showfru -a <i>device</i></p> <p>showfru -h</p>																								
説明	<p>showfru(8) は、setupfru(8) コマンドによってデバイスのハードウェアに設定された内容を表示するコマンドです。</p> <p>指定したデバイスか、すべてのデバイスの内容を表示できます。デバイスとして物理システムボード (PSB) を指定できます。</p> <p>以下の内容が表示されます。</p> <table border="0"> <tr> <td>Device</td> <td>指定したデバイス名</td> </tr> <tr> <td></td> <td>sb(PSB) だけ表示されます。</td> </tr> <tr> <td>Location</td> <td>デバイスが搭載されている位置</td> </tr> <tr> <td></td> <td><i>device</i> が sb の場合、00 から 15 の整数値で表示されます。</td> </tr> <tr> <td>XSB Mode</td> <td>PSB に設定されている XSB モード</td> </tr> <tr> <td></td> <td>以下のどちらかの値が表示されます。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>Uni Uni-XSB</td> </tr> <tr> <td></td> <td>Quad Quad-XSB</td> </tr> <tr> <td>Memory Mirror Mode</td> <td>PSB に設定されているメモリのミラーモード</td> </tr> <tr> <td></td> <td>以下のどちらかの値が表示されます。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>yes メモリミラーモード</td> </tr> <tr> <td></td> <td>no 非メモリミラーモード</td> </tr> </table>	Device	指定したデバイス名		sb(PSB) だけ表示されます。	Location	デバイスが搭載されている位置		<i>device</i> が sb の場合、00 から 15 の整数値で表示されます。	XSB Mode	PSB に設定されている XSB モード		以下のどちらかの値が表示されます。		Uni Uni-XSB		Quad Quad-XSB	Memory Mirror Mode	PSB に設定されているメモリのミラーモード		以下のどちらかの値が表示されます。		yes メモリミラーモード		no 非メモリミラーモード
Device	指定したデバイス名																								
	sb(PSB) だけ表示されます。																								
Location	デバイスが搭載されている位置																								
	<i>device</i> が sb の場合、00 から 15 の整数値で表示されます。																								
XSB Mode	PSB に設定されている XSB モード																								
	以下のどちらかの値が表示されます。																								
	Uni Uni-XSB																								
	Quad Quad-XSB																								
Memory Mirror Mode	PSB に設定されているメモリのミラーモード																								
	以下のどちらかの値が表示されます。																								
	yes メモリミラーモード																								
	no 非メモリミラーモード																								
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>																								
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <table border="0"> <tr> <td>-a</td> <td>指定したすべてのデバイスの内容を表示します。</td> </tr> <tr> <td>-h</td> <td>使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</td> </tr> </table>	-a	指定したすべてのデバイスの内容を表示します。	-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。																				
-a	指定したすべてのデバイスの内容を表示します。																								
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。																								

オペランド	以下のオペランドがサポートされています。
	<p><i>device</i> 表示するデバイスを指定します。以下のデバイスだけ指定できます。</p> <p style="padding-left: 100px;"><i>sb</i> 物理システムボード (PSB)</p> <p><i>location</i> <i>device</i> の搭載されている位置を指定します。<i>device</i> が <i>sb</i> の場合、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。</p>
詳細説明	setupfru(8) コマンドを使用すると、デバイスのハードウェアに関する設定ができます。
使用例	<p>使用例 1 すべての PSB に設定されている情報を表示します。</p> <pre>XSCF> showfru -a sb Device Location XSB Mode Memory Mirror Mode sb 00 Quad no sb 01 Uni yes sb 02 Quad no sb 03 Uni no</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。
	<p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	addboard (8) , deleteboard (8) , moveboard (8) , setdcl (8) , setupfru (8) , showboards (8) , showdcl (8) , showdevices (8)

名前	showhardconf - 本体装置に搭載されている Field Replaceable Unit (FRU) の情報を表示します。
形式	showhardconf [-u] [-M] showhardconf -h
説明	showhardconf(8) は、FRU 単位の情報を表示するためのコマンドです。 表示される情報は、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在の構成、状態 ■ 搭載されている個数 ■ ドメイン情報 ■ PCI ボックス (IOBOX) 情報 ■ PCI カードの Name プロパティ
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, すべてのドメインに対して実行できます。 fieldeng domainadm, domainmgr, アクセス権限を持つドメインに対して実行できます。 domainop ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。 -u FRU 単位の搭載個数を表示します。CPU モジュールは動作周波数、メモリボードはメモリごとの容量を表示します。省略した場合は、FRU 単位の現在の構成、状態情報とドメイン情報が表示されます。

詳細説明

FRU の構成、状態情報とドメイン情報を表示した場合、故障または縮退が発生したユニットに対して、異常箇所であることを表すアスタリスク (*) と以下のいずれかの状態が表示されます。

状態	内容
Failed	故障していて動作していない状態。
Degraded	ユニットは動作中。ユニット内の一部が故障または縮退していたり、何らかのエラーが検出されていたりするために、ユニットも故障状態を呈しているが、正常に動作中。
Deconfigured	構成異常、環境異常、または他のユニットの縮退によって、正常でありながら縮退している状態
Maintenance	保守作業中。deletefru(8)、replacefru、または addfru(8) 操作中。
Normal	正常に動作している状態

使用例

使用例 1 M5000 サーバの FRU 情報を表示します。

```
XSCF> showhardconf
SPARC Enterprise M5000;
+ Serial:BE80601021; Operator_Panel_Switch:Service;
+ Power_Supply_System:Single; SCF-ID:XSCF#0;
+ System_Power:On; System_Phase:Cabinet Power On;
Domain#0 Domain_Status:Powered Off;

MBU_B Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000297 ;
+ FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
+ Memory_Size:64 GB;
CPUM#0-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:PP0629L068 ;
+ FRU-Part-Number:CA06761-D104 A0 ;
+ Freq:2.150 GHz; Type:16;
+ Core:2; Strand:2;
CPUM#0-CHIP#1 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:PP0629L068 ;
+ FRU-Part-Number:CA06761-D104 A0 ;
+ Freq:2.150 GHz; Type:16;
+ Core:2; Strand:2;
:
CPUM#3-CHIP#0 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:PP0629L066 ;
+ FRU-Part-Number:CA06761-D104 A0 ;
+ Freq:2.150 GHz; Type:16;
+ Core:2; Strand:2;
CPUM#3-CHIP#1 Status:Normal; Ver:0201h; Serial:PP0629L066 ;
+ FRU-Part-Number:CA06761-D104 A0 ;
+ Freq:2.150 GHz; Type:16;
+ Core:2; Strand:2;
MEMB#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:01068 ;
+ FRU-Part-Number:CA20393-B54X A1 ;
MEM#0A Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123520;
```

```

+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#0B Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123e25;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#1A Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123722;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#1B Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123b25;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#2A Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123e20;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#2B Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123822;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#3A Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123724;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#3B Status:Normal;
+ Code:c100000000000004572T128000HR3.7A 252b-04123b20;
+ Type:1B; Size:1 GB;
:
MEMB#7 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:01100 ;
+ FRU-Part-Number:CA20393-B54X A1 ;
MEM#0A Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d016910;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#0B Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d016911;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#1A Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d016a14;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#1B Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d017e22;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#2A Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d016a13;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#2B Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d016417;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#3A Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d017617;
+ Type:1B; Size:1 GB;
MEM#3B Status:Normal;
+ Code:c100000000000005372T128000HR3.7A 356d-0d016b12;
+ Type:1B; Size:1 GB;
DDC_A#0 Status:Normal;
DDC_A#1 Status:Normal;
DDC_A#2 Status:Normal;
DDC_A#3 Status:Normal;
DDC_B#0 Status:Normal;

```

```

        DDC_B#1 Status:Normal;
IOU#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000395 ;
+ FRU-Part-Number:CF00541-0483 0040 /541-0483-00-40 ;
        DDC_A#0 Status:Normal;
        DDCR Status:Normal;
        DDC_B#0 Status:Normal;
PCI#2 Status:Normal; Name_Property:; Card_Type:DownLink;
+ Ver:21h; Serial:XF01NW; Type:Optic;
+ Connection:IOX@XODF/IOB0;
+ FRU-Part-Number:CF00501-7040 04 /501-7040-04;
* IOX@XODF Status:Faulted; Serial:XCX0DF;
+ FRU-Part-Number:CF00541-0314 05 /501-6937-05;
        IOB0 Status:Normal; Serial:XX00KA; Type:PCI-X;
+ FRU-Part-Number:CF00541-0316 03 /501-6938-05;
        LINK Status:Normal; Ver:21h; Serial:1F0090; Type:Optic;
+ FRU-Part-Number:CF00501-7040 04 /501-7040-04;
        PS0 Status:Normal; Serial:LL0807;
+ FRU-Part-Number:CF00300-2001 02 /300-2001-02;
        PS1 Status:Normal; Serial:LL0381;
+ FRU-Part-Number:CF00300-2001 02 /300-2001-02;
PCI#4 Status:Normal; Name_Property:; Card_Type:DownLink;
+ Ver:17h; Serial:XF01LM; Type:Optic;
+ Connection:IOX@X07P/IOB1;
+ FRU-Part-Number:CF00501-7040 04 /501-7040-04;
* IOX@X07P Status:Faulted; Serial:XCX07P;
+ FRU-Part-Number:CF00541-0314 05 /501-6937-03;
        IOB1 Status:Normal; Serial:XE00F9; Type:PCI-Express;
+ FRU-Part-Number:CF00541-0507 03 /501-6939-05;
        LINK Status:Normal; Ver:17h; Serial:XF01N0; Type:Optic;
+ FRU-Part-Number:CF00501-7040 04 /501-7040-04;
        PS0 Status:Normal; Serial:LL1097;
+ FRU-Part-Number:CF00300-2001 02 /300-2001-02;
        PS1 Status:Normal; Serial:LL1121;
+ FRU-Part-Number:CF00300-2001 02 /300-2001-02;
IOU#1 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:78670000376 ;
+ FRU-Part-Number:CA20393-B55X A4 ;
        DDC_A#0 Status:Normal;
        DDCR Status:Normal;
        DDC_B#0 Status:Normal;
XSCFU Status:Normal,Active; Ver:0101h; Serial:7867000262 ;
+ FRU-Part-Number:CA20393-B56X A0 ;
OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000087 ;
+ FRU-Part-Number:CA00629-D061 A0 ;
PSU#0 Status:Normal; Serial:0000000-ASTECB10 ;
+ FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
+ Power_Status:Off; AC:200 V;
PSU#1 Status:Normal; Serial:0000000-ASTECB18 ;
+ FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
+ Power_Status:Off; AC:200 V;
PSU#2 Status:Normal; Serial:0000000-DELTAB19 ;
+ FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
+ Power_Status:Off; AC:200 V;
PSU#3 Status:Normal; Serial:0000000-ASTECB09 ;
+ FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;

```

```

+ Power_Status:Off; AC:200 V;
FANBP_C Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000053 ;
+ FRU-Part-Number:CA06629-D051 001AA ;
FAN_A#0 Status:Normal;
FAN_A#1 Status:Normal;
FAN_A#2 Status:Normal;
FAN_A#3 Status:Normal;

```

使用例 2 M9000 サーバに搭載されている FRU の数を表示します。

```

XSCF> showhardconf -u
SPARC Enterprise M9000; Memory_Size:432 GB;
+-----+-----+
|          FRU          | Quantity |
+-----+-----+
| CMU                   |          9 |
|   CPUM                |          36 |
|     Freq:2.277 GHz;   | ( 30) |
|     Freq:2.376 GHz;   | ( 6) |
|   MEM                 |         224 |
|     Type:1B; Size:1 GB; | ( 16) |
|     Type:2B; Size:2 GB; | ( 208) |
| IOU                   |          9 |
| IOBOX                 |          1 |
|   IOB                 |          2 |
|   PSU                 |          2 |
| XSCFU_B               |          2 |
| XSCFU_C               |          2 |
| XBU_B                 |         16 |
| CLKU_B                |          4 |
| OPNL                  |          1 |
| PSU                   |         30 |
| FANBP_A               |          2 |
| FANBP_B               |          2 |
|   FAN_A               |         32 |
| SWBP                  |          2 |
| MEDBP                 |          2 |
+-----+-----+

```

使用例 3 M3000 サーバに搭載されている FRU の数を表示します。

```

XSCF> showhardconf -u
SPARC Enterprise M3000; Memory_Size:8 GB;
+-----+-----+
|          FRU          | Quantity |
+-----+-----+
| MBU_A                 |          1 |
|   CPU                 | ( 1) |
|     Freq:2.520 GHz;   | ( 1) |
|   MEM                 |          8 |
|     Type:1A; Size:1 GB; | ( 8) |
| OPNL                  |          1 |
| PSU                   |          2 |
+-----+-----+

```

showhardconf(8)

FANBP_B	1
FAN_A	2

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

名前	showhostname - XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。
形式	showhostname {-a <i>xscfu</i> } showhostname -h
説明	showhostname(8) は、XSCF ユニットに現在設定されているホスト名を表示するコマンドです。 ホスト名は Fully Qualified Domain Name(FQDN) 形式で表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -a すべての XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。-a オプションと一緒に指定されている XSCF ユニット名は無効となります。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <i>xscfu</i> 表示する XSCF ユニット名を指定します。システム構成によって以下のどちらかを指定できます。-a オプションと一緒に指定した場合は無効となります。 xscf#0 XSCF ユニット 0 xscf#1 XSCF ユニット 1 (M8000/M9000 サーバの場合)
詳細説明	<ul style="list-style-type: none"> ■ M8000/M9000 サーバの場合、スタンバイ側の XSCF ユニットに異常が発生しているときはメッセージが表示されます。 ■ sethostname(8) コマンドを使用すると、XSCF ユニットのホスト名を設定できません。
使用例	使用例 1 すべての XSCF ユニットに設定されているホスト名を表示します。 XSCF> showhostname -a xscf#0: scf0-hostname.example.com xscf#1: scf1-hostname.example.com

showhostname(8)

使用例 2 XSCF ユニット 0 に設定されているホスト名を表示します。

```
XSCF> showhostname xscf#0  
xscf#0: scf0-hostname.example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethostname (8)

名前	showhttps - XSCF ネットワークに設定されている HTTPS サービスの状態を表示します。
形式	showhttps showhttps -h
説明	<p>showhttps(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている HTTPS サービスの状態を表示するコマンドです。</p> <p>HTTPS サービスが動作しているかどうかと、認証に必要な情報のインストール状態が確認できます。インストールされている場合は、インストールされた日付も表示されます。</p> <p>以下の状態が表示されます。</p> <pre> HTTPS status HTTPS サービスが動作しているかどうか Server key web サーバの秘密鍵がインストールされているかどうか CA key 認証局の秘密鍵がインストールされているかどうか CA cert 認証局の証明書がインストールされているかどうか CSR web サーバ証明書 </pre>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <pre> useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng </pre> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <pre> -h 使用方法を表示します。 </pre>
詳細説明	sethttps(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの HTTPS サービスが設定できます。
使用例	<p>使用例 1 HTTPS サービスの状態を表示します。</p> <pre> XSCF> showhttps HTTPS status: enabled Server key: installed in Apr 24 12:34:56 JST 2006 CA key: installed in Apr 24 12:00:34 JST 200 CA cert: installed in Apr 24 12:00:34 JST 200 CSR: -----BEGIN CERTIFICATE REQUEST----- MIIBwjCCASsCAQAwgYExCzAJBgNVBAYTAmpqMQ4wDAYDVQQIEWVzdGF0ZTERMA8G </pre>

showhttps(8)

```
A1UEBxMIbG9jYWxpdHkxFTATBgNVBAoTDG9yZ2FuaXphdGlvbjEPMA0GA1UECxMG
b3JnYW5pMQ8wDQYDVQQDEWZjb21tb24xFjAUBgkqhkiG9w0BCQEWB2V1Lm1haWww
gZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQADgY0AMIGJAoGBAJ5D57X/k42LcipTbWzV2GrxaVM
5GEyx3bdBW8/7WZhnd3uiZ9+ANlvRAuw/YYy7I/pAD+NQJesBcBjuyj9x+IiJl9F
MrI5fR8pOIywV0dbMPCar09rrU45bVeZhTyi+uQOdWLoX/Dhq0fm2BpYuh9WukT5
pTEg+2dABg8UdHmNagMBAAGgADANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQAux1jH3dyB6Xho
PgBuVIakDzIKEPipK9qQfC57YI43uRBGRubu0AHEcLVue5yTu6G5SxHTCq07tV5g
38UHSg5Kgy9QuWHWMri/hxm0kQ4gBpApjNb6F/B+ngBE3j/thGbEuvJb+0wbycvu
5jrhB/ZV9k8X/MbDOxSx/U5nF+Zuyw==
-----END CERTIFICATE REQUEST-----
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethttps(8)

名前	showldap - サービスプロセッサの Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 設定を表示します。
形式	showldap showldap [-c] showldap -h
説明	showldap(8) は、サービスプロセッサの LDAP 設定を表示するコマンドです。 オプションを指定せずに showldap(8) コマンドを実行すると、LDAP サーバへの接続時に使用される証明書チェーンとパスワードを除くすべての LDAP 設定が表示されます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -c LDAP サーバの証明書チェーンを表示します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
使用例	使用例 1 すべての LDAP 設定データを表示します。 XSCF> showldap Bind Name: <i>user</i> Base Distinguishing Name: ou=people,dc=company,dc=com LDAP Search Timeout: 60 Bind password: Set LDAP Servers: ldap://company.com:389 CERTS: None 使用例 2 LDAP サーバの証明書チェーンを表示します。 XSCF> showldap -c There are no certificates configured.
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setldap (8)

showldap(8)



名前	showlocale - 設定されている XSCF のロケールを表示します。
形式	showlocale showlocale -h
説明	showlocale(8) は、現在設定されている XSCF のロケールを表示するコマンドです。 以下のどちらかが表示されます。 C 英語 ja_JP.UTF-8 日本語
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
詳細説明	setlocale(8) コマンドを使用すると、XSCF のロケールが設定できます。
使用例	使用例 1 現在設定されている XSCF のロケールを表示します (英語の場合)。 <pre>XSCF> showlocale C</pre> 使用例 2 現在設定されている XSCF のロケールを表示します (日本語の場合)。 <pre>XSCF> showlocale ja_JP.UTF-8</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setlocale (8)

showlocale(8)



名前	showlocator - オペレーターパネルの CHECK LED の状態を表示します。
形式	showlocator showlocator -h
説明	showlocator(8) は、オペレーターパネルの、CHECK LED の点滅状態を表示するコマンドです。 以下のいずれかの状態が表示されます。 Off(消灯) 正常、サーキットブレーカー切断中、停電のいずれかの状態であることを表します。 Blinking(点滅) 保守対象の装置であることを表します。 On(点灯) 本体装置に異常が検出されたことを表します。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
詳細説明	setlocator(8) コマンドを使用すると、CHECK LED の点滅状態を設定できます。
使用例	使用例 1 CHECK LED の状態を表示します。 XSCF> showlocator Locator LED status:Blinking
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setlocator (8)

showlocator(8)



名前	showlogs - 指定したログを表示します。
形式	<pre> showlogs [-t <i>time</i> [-T <i>time</i>] -p <i>timestamp</i>] [-v -V -S] [-r] [-M] <i>error</i> showlogs [-t <i>time</i> [-T <i>time</i>] -p <i>timestamp</i>] [-v] [-r] [-M] <i>event</i> showlogs [-t <i>time</i> [-T <i>time</i>]] [-r] [-M] {<i>power</i> <i>env</i>} showlogs [-r] [-M] <i>monitor</i> showlogs -d <i>domain_id</i> [-t <i>time</i> [-T <i>time</i>]] [-r] [-M] {<i>console</i> <i>ipl</i> <i>panic</i>} showlogs -h </pre>
説明	<p>showlogs(8) は、指定したログを表示するコマンドです。</p> <p>ログは、デフォルトでタイムスタンプの古いものから順に表示されます。採取される単位別に、以下のログを指定できます。</p> <p>Field Replaceable Unit(FRU) 単位</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ エラーログ (スキャンログを含む場合がある) ■ パワーログ ■ イベントログ ■ 温度・湿度履歴 ■ 監視メッセージログ <p>ドメイン単位</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ コンソールメッセージログ ■ パニックメッセージログ ■ IPL メッセージログ
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ エラーログ、イベントログ、温度・湿度履歴、監視メッセージログ platadm, platop, fieldeng ■ パワーログ platadm, platop, domainadm, domainmgr, fieldeng ■ スキャンログ fieldeng ■ コンソールメッセージログ、パニックメッセージログ、IPL メッセージログ platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- d *domain_id* 表示するドメイン ID を指定します。ドメイン単位のログに対して指定できます。*domain_id* はシステム構成によって、0 から 23 までの整数で指定できます。
- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
- p *timestamp* ログを単独で表示する場合に、ログのタイムスタンプを指定します。エラーログとイベントログに対して指定できます。

timestamp は、以下のいずれかの形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
年 - 月 - 日, 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm:ss
月 / 日 / 年, 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
Monddhh:mm:ssyyyy
月名, 日, 時 : 分 : 秒, 年の形式で指定します。
- r タイムスタンプの新しいログから表示します。デフォルトでは、タイムスタンプの古いログから表示されます。
- S エラーログに付帯されているスキャンログを表示します。*fieldeng* 権限を持つユーザーだけ指定できます。-v オプション、-V オプションとは一緒に指定できません。
- t *time* ログの表示範囲を指定する場合の、開始日時を指定します。以下のいずれかの形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm
年 - 月 - 日, 時 : 分の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm
月 / 日 / 年, 時 : 分の形式で指定します。
Monddhh:mmyyyy
月名, 日, 時 : 分, 年の形式で指定します。
yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
年 - 月 - 日, 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm:ss
月 / 日 / 年, 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
Monddhh:mm:ssyyyy
月名, 日, 時 : 分 : 秒, 年の形式で指定します。

-r オプションと一緒に指定しても、-t と -T オプションの指定が逆になることはありません。監視メッセージログには使用できません。

-T time ログの表示範囲を指定する場合の、終了日時を指定します。以下のいずれかの形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm

年 - 月 - 日, 時 : 分の形式で指定します。

mm/dd/yy,hh:mm

月 / 日 / 年, 時 : 分の形式順で指定します。

Monddhh:mmyyyy

月名, 日, 時 : 分, 年の形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm:ss

年 - 月 - 日, 時 : 分 : 秒の形式で指定します。

mm/dd/yy,hh:mm:ss

月 / 日 / 年, 時 : 分 : 秒の形式で指定します。

Monddhh:mm:ssyyyy

月名, 日, 時 : 分 : 秒, 年の形式で指定します。

-r オプションと一緒に指定しても、**-t** と **-T** オプションの指定が逆になることはありません。監視メッセージログには使用できません。

-v 詳細な情報を表示します。通常の表示に加え、詳細な診断コード (Diagnostic Code) と、**fmadm(8)**、**fmdump(8)** コマンドで使用される UUID、MSG-ID が表示されます。**-v** オプション、**-S** オプションとは一緒に指定できません。エラーログとイベントログに対して指定できます。

-V より詳細な情報を表示します。**-v** オプションで表示される情報に加え、マシン管理詳細ログ情報および OpenBoot PROM コンソールログ情報が採取されている場合は、それらが表示されます。**-v** オプション、**-S** オプションとは一緒に指定できません。エラーログに対して指定できます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

error	エラーログを表示します。(スキャンログを含む場合がある)
event	イベントログを表示します。
power	パワーログを表示します。
env	温度・湿度履歴を表示します。
monitor	監視メッセージログを表示します。
console	コンソールメッセージログを表示します。
ipl	IPL メッセージログを表示します。
panic	パニックメッセージログを表示します。

詳細説明

各ログは以下のフォーマットで表示されます。

■ エラーログ
デフォルト

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005      Code: xxxxxxxx-xxxxxxx-
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                        Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3) (FEP type = A1)
```

-v オプションを指定した場合

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005      Code: xxxxxxxx-xxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                        Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3) (FEP type = A1)
Diagnostic Code:
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID:FMD-8000-11
```

-V オプションを指定した場合

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005      Code: xxxxxxxx-xxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                        Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3) (FEP type = A1)
Diagnostic Code:
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID:FMD-8000-11
Diagnostic Messages:
:
:
```

-S オプションを指定した場合

```
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005      Code: xxxxxxxx-xxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
Status: Alarm                        Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3) (FEP type = A1)
Diagnostic Code:
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
  xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID:FMD-8000-11
Detail log: SCAN MINOR RC 2K
0000: xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
```

```

0010: xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
      :
      :
Date:      ログが採取された日付 (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)
           ローカルタイムで表示されます。
Code:      エラーコード
           16 バイトで表示されます。
Occurred:  異常が発生した日付 (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)
           ローカルタイムで表示されます。
Status:    エラーの状態
           以下のどちらかが表示されます。

Warning    ユニットの部分的な縮退または警告
Alarm      ユニットの故障または異常

FRU:       被疑ユニット
           第1、第2 被疑ユニットが"," (カンマ)で区切られて表示されま
           す。第3 被疑ユニットがある場合は、"*" が表示されます。第2
           被疑ユニット以降が表示されるかどうかは、検出された箇所によ
           って異なります。

Msg:       エラー内容
Diagnostic Code:  エラー詳細コード
           16 進数で表示されます。
UUID:     Universal Unique Identifier の略
           世界中で固有な ID で、16 進数 32 桁で表示されます。
MSG-ID:   固有のメッセージ ID
Diagnostic Messages:  詳細メッセージ
           ログに詳細なメッセージがある場合に表示されます。
Detail log: スキャンログコード
           ログにスキャンログがある場合に表示されます。
           アドレス: 16 進数で表示されます。

```

■ パワーログ

Date	Event	Cause	DID	Switch
Mar 30 17:25:31 JST 2005	System Power Off	Power Failure	--	Service
Mar 30 17:35:31 JST 2005	System Power On	AC Restored	--	Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005	Domain Power On	Panel	00	Locked
Mar 30 17:50:31 JST 2005	Domain Power Off	Operator	10	Service
:				
:				

Date: ログが採取された日付 (月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年)
ローカルタイムで表示されます。

Event: 電源の状態
以下のいずれかの状態が表示されます。

Domain Power On	ドメインの電源が投入されている状態
Domain Power Off	ドメインの電源が切断されている状態
System Power On	本体装置の電源が投入されている状態
System Power Off	本体装置の電源が切断されている状態
SCF Reset	XSCF がリセットされている状態
Domain Reset	ドメインが再起動されている状態
XIR	ドメインの CPU がリセットされている状態

Cause: Event となった要因
以下のうちのいずれかが表示されます。

Self Reset, Power On, System Reset, Panel, Scheduled, RCI, AC Restored, Operator, Poweron Restart, Power Failure, SW Request, Alarm, Fatal, Panic

DID: ドメイン ID
システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

Switch: オペレーターパネルのモードスイッチの状態
以下のいずれかの状態が表示されます。

Locked	通常運用時のモード
Service	サービスモード

■ イベントログ
デフォルト

Date	Message
Mar 30 17:45:31 JST 2005	System power on
Mar 30 17:55:31 JST 2005	System power off
:	
:	

-v オプションを指定した場合

Date	Message
Mar 30 17:45:31 JST 2005	System power on
Switch= Service	
Code=xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx	
xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx	

Date: ログが採取された日付 (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)
ローカルタイムで表示されます。

Message: イベントメッセージ

Switch: オペレーターパネルのモードスイッチの状態
以下のいずれかの状態が表示されます。

Locked	通常運用時のモード
Service	サービスモード

Code: イベント詳細情報
16 進数で表示されます。

■ 温度・湿度履歴

Date	Temperature	Humidity	Power
Mar 30 17:45:31 JST 2005	32.56 (C)	60.20%	System Power On
Mar 30 17:55:31 JST 2005	32.56 (C)	60.25%	System Power Off
:			
:			

Date: ログが採取された日付 (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)
ローカルタイムで表示されます。

Temperature: 吸気温度
10 進数で小数点第 2 位まで表示されます。単位は摂氏 (°C) です。

Humidity: 湿度
パーセント (%) で表示されます。M8000/M9000 サーバにだけ表示されます。

Power: 本体装置の電源の状態
以下のどちらかの状態が表示されます。

System Power On	本体装置の電源が投入されている状態
System Power OFF	本体装置の電源が切断されている状態

■ 監視メッセージログ

Mar 30 17:45:31 JST 2005	monitor message
Mar 30 17:55:31 JST 2005	monitor message
:	

日付と監視メッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。日付にはログ採取時の日付が (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)、ローカルタイムで表示されます。

■ コンソールメッセージログ

```
DomainID: 00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      console message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      console message
:
```

[1 行目]

DomainID: ドメイン ID
 システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

[2 行目以降]

日付とコンソールメッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)、ローカルタイムで表示されます。

■ パニックメッセージログ

```
<<panic>>
Date: Mar 30 18:45:31 JST 2005      DomainID: 00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      panic message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      panic message
:
```

[2 行目]

Date: パニック時の日付 (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)
 ローカルタイムで表示されます。

DomainID: ドメイン ID
 システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

[3 行目以降]

日付とパニックメッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)、ローカルタイムで表示されます。

■ IPL メッセージログ

```
<<ipl>>
Date: Mar 30 18:45:31 JST 2005      DomainID: 00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      ipl message
Mar 30 17:55:31 JST 2005      ipl message
:
```

[2 行目]

Date: IPL 時の日付 (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)
ローカルタイムで表示されます。

DomainID: ドメイン ID
システム構成によって、00 から 23 までの整数で表示されます。

[3 行目以降]

日付と IPL メッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が (月 日 時:分:秒 TimeZone 年)、ローカルタイムで表示されます。

使用例

使用例 1 エラーログを表示します。

```
XSCF> showlogs error
Date: Mar 30 12:45:31 JST 2005      Code: 00112233-44556677-8899aabbccceeff0
Status: Alarm                       Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: IOU#0/PCI#3
Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
Date: Mar 30 15:45:31 JST 2005      Code: 00112233-44556677-8899aabbccceeff0
Status: Warning                     Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3) (FEP type = A1)
Date: Mar 30 17:45:31 JST 2005      Code: 00112233-44556677-8899aabbccceeff0
Status: Alarm                       Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: PSU#1,PSU#2,*
Msg: ACFAIL occurred (ACS=3) (FEP type = A1)
```

使用例 2 指定したタイムスタンプでのエラーログを、詳細 (-v) に表示します。

```
XSCF> showlogs error -p Mar3012:45:312005 -v
Date: Mar 30 12:45:31 JST 2005      Code: 00112233-44556677-8899aabbccceeff0
Status: Alarm
Component: IOU#0/PCI#3
Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
Diagnostic Code:
00112233 44556677 8899aabb
00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID: FMD-8000-11
```

使用例 3 指定したタイムスタンプでのエラーログを、より詳細 (-v) に表示します。

```
XSCF> showlogs error -p Mar3012:45:312005 -V
Date: Mar 30 12:45:31 JST 2005      Code: 00112233-44556677-8899aabbccceeff0
Status: Alarm                       Occurred: Mar 30 17:45:31.000 JST 2005
FRU: IOU#0/PCI#3
Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
Diagnostic Code:
```

```

00112233 44556677 8899aabb
00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
UUID: bf36f0ea-9e47-42b5-fc6f-c0d979c4c8f4 MSG-ID: FMD-8000-11
Diagnostic Messages
Jul 11 16:17:42 plato10 root: [ID 702911 user.error] WARNING: /
pci@83,4000/scsi@2/sd@0,0 (sd47):
Jul 11 16:17:42 plato10 root: [ID 702911 user.error] incomplete write-
giving up

```

使用例 4 パワーログを表示します。

```

XSCF> showlogs power
Date                Event                Cause                DID  Switch
Mar 30 17:25:31 JST 2005  System Power Off  Power Failure  --  Service
Mar 30 17:35:31 JST 2005  System Power On   AC Restored   --  Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005  Domain Power Off  Operator       00  Locked
Mar 30 17:50:31 JST 2005  Domain Power On   Operator       00  Service

```

使用例 5 パワーログをタイムスタンプの新しいログから表示します。

```

XSCF> showlogs power -r
Date                Event                Cause                DID  Switch
Mar 30 17:50:31 JST 2005  Domain Power On Operator          00  Service
Mar 30 17:45:31 JST 2005  Domain Power Off Operator          00  Locked
Mar 30 17:35:31 JST 2005  System Power On AC Restored     --  Locked
Mar 30 17:25:31 JST 2005  System Power Off Power Failure  --  Service

```

使用例 6 パワーログのうち、指定した範囲のログを表示します。

```

XSCF> showlogs power -t Mar3017:302005 -T Mar3017:492005
Date                Event                Cause                DID  Switch
Mar 30 17:35:31 JST 2005  System Power On AC Restored     --  Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005  Domain Power Off Operator          00  Locked

```

使用例 7 パワーログのうち、指定した範囲のログを表示します。タイムスタンプの新しいログから表示します。

```

XSCF> showlogs power -t Mar3017:302005 -T Mar3017:492005 -r
Date                Event                Cause                DID  Switch
Mar 30 17:45:31 JST 2005  Domain Power Off Operator          00  Locked
Mar 30 17:35:31 JST 2005  System Power On AC Restored     --  Locked

```

使用例 8 表示の開始日時を指定してパワーログを表示します。

```

XSCF> showlogs power -t Mar3017:302005
Date                Event                Cause                DID  Switch
Mar 30 17:35:31 JST 2005  System Power On AC Restored     --  Locked
Mar 30 17:45:31 JST 2005  Domain Power Off Panel              00  Locked
Mar 30 17:50:31 JST 2005  Domain Power On Operator          00  Service

```

使用例 9 指定したドメインのコンソールメッセージログを表示します。

```
XSCF> showlogs console -d 00
DomainID:00
Mar 30 17:45:31 JST 2005      Executing last command: boot
Mar 30 17:55:31 JST 2005      Boot device: /pci@83,4000/FJSV,ulsa@2,1/
disk@0,0:a File and args:
Mar 30 17:55:32 JST 2005      SunOS Release 5.10 Version Generic 64-bit
```

注 - 表示されているコードやメッセージは実際の表示と異なる場合があります。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

showlogs(8)



名前	showlookup - 認証とユーザー権限のルックアップに関する設定を表示します。
形式	showlookup showlookup -h
説明	showlookup(8) は、認証とユーザー権限に関する設定を表示するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm または fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 認証とユーザー権限に関する設定を表示します。 XSCF> showlookup Privileges lookup:Local only Authentication lookup: Local and LDAP
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setlookup(8)

showlookup(8)



名前	showmonitorlog - 監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。
形式	showmonitorlog showmonitorlog -h
説明	<p>showmonitorlog(8) は、監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示するコマンドです。</p> <p>showmonitorlog(8) コマンドを実行すると、監視メッセージログを表示するためにコマンドは終了せず、XSCF シェルが占有されます。監視メッセージログ内にメッセージが登録されると、その内容が表示されます。</p> <p>リアルタイム表示を終了する場合は、"Ctrl" と "c" キーを押します。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>platadm, platop, fieldeng</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。</p>
使用例	<p>使用例 1 監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。</p> <pre>XSCF> showmonitorlog Apr 13 12:32:16 XXXXX Alarm: /CMU#1,/CMU#0/DDC#0:ANALYZE:SC-IOU I/F fatal error 0x00000000; : :</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>

showmonitorlog(8)



名前	shownameserver - XSCF ネットワークに設定されている Domain Name System (DNS) サーバを表示します。
形式	shownameserver shownameserver -h
説明	shownameserver(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている DNS サーバを表示するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
詳細説明	setnameserver(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの DNS サーバが設定できます。
使用例	<p>使用例 1 XSCF ネットワークに現在設定されている DNS サーバを表示します。3つの DNS サーバが設定されている場合を例に挙げます。</p> <pre>XSCF> shownameserver nameserver 192.168.1.2 nameserver 10.18.108.10 nameserver 10.24.1.2</pre> <p>使用例 2 XSCF ネットワークに現在設定されている DNS サーバを表示します。DNS サーバは設定されていない場合を例に挙げます。</p> <pre>XSCF> shownameserver ---</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setnameserver (8)

shownameserver(8)



名前	shownetwork - XSCF に設定されているネットワークインターフェースの情報を表示します。
形式	shownetwork [-M] {-a -i <i>interface</i> } shownetwork -h
説明	<p>shownetwork(8) は、XSCF に現在設定されているネットワークインターフェースの情報を表示するコマンドです。</p> <p>指定したネットワークインターフェース、またはすべてのネットワークインターフェースに対する情報を表示できます。以下の情報が表示されます。</p> <pre> xscf#x-y XSCF ネットワークインターフェース名 HWaddr MAC アドレス (16 進表示) inet addr IP アドレス Bcast ブロードキャスト Mask ネットマスク UP/DOWN ネットワークインターフェースが有効かどうか </pre>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <pre> useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng </pre> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <pre> -a すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されている情報を表示します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。 </pre>

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface

表示するネットワークインターフェースを指定します。システム構成によって、以下のいずれかを指定できます。`-a` オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

- M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0

xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1

省略形:

lan#0 XSCF-LAN#0

lan#1 XSCF-LAN#1

- M8000/M9000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0

xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1

xscf#0-if XSCF ユニット間のインターフェース (ISN;
Inter SCF Network)

XSCF ユニット 1:

xscf#1-lan#0 XSCF-LAN#0

xscf#1-lan#1 XSCF-LAN#1

xscf#1-if ISN

引継ぎ IP アドレス:

lan#0 XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレス

lan#1 XSCF-LAN#1 の引継ぎ IP アドレス

詳細説明

- 引継ぎ IP アドレスとは、M8000/M9000 サーバの場合に、XSCF が切り替えられていることを意識せずに使用できる IP アドレスのことです。アクティブな XSCF ユニットの各 LAN ポートを lan#0、lan#1 に設定しておくことによって、lan#0、lan#1 という名称でアクセスできるようになります。
- M3000/M4000/M5000 サーバの場合は、lan#0 は xscf#0-lan#0、lan#1 は xscf#0-lan#1 で固定となります。
- M8000/M9000 サーバの場合、setnetwork(8) コマンドで引継ぎ IP アドレスを無効としているときは、shownetwork(8) コマンドで引継ぎ IP アドレス指定しても何も表示されません。
- setnetwork(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークインターフェースが設定できます。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shoownetwork xscf#0-lan#1
xscf#0-lan#1
  Link encap:Ethernet HWaddr 00:00:00:12:34:56
  inet addr:192.168.10.11 Bcast: 192.168.10.255 Mask:255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:20241827 (19.3 MiB) TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
  Base address:0x1000
```

使用例 2 M3000/M4000/M5000 サーバの、XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shoownetwork lan#1
xscf#0-lan#1
  Link encap:Ethernet HWaddr 00:00:00:12:34:56
  inet addr:192.168.10.11 Bcast: 192.168.10.255 Mask:255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:20241827 (19.3 MiB) TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
  Base address:0x1000
```

使用例 3 XSCF ユニット 0 の ISN に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shoownetwork xscf#0-if
xscf#0-if
  Link encap:Ethernet HWaddr 00:00:00:12:34:56
  inet addr:192.168.10.128 Bcast: 192.168.10.255 Mask:255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:(0.0 B) TX bytes:17010 (16.6 KiB)
  Base address:0x1000
```

使用例 4 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shoownetwork xscf#0-lan#0
xscf#0-lan#0
  Link encap:Ethernet HWaddr 00:00:00:12:34:56
  inet addr:192.168.11.10 Bcast:192.168.11.255 Mask 255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:14541827 (13.8 MiB) TX bytes:1459769 (1.3 MiB)
  Base address:0x1000
```

使用例 5 XSCF-LAN#0 の引継ぎ IP アドレスに設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork lan#0
lan#0      Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
inet addr:192.168.1.10  Bcast:192.168.1.255  Mask:255.255.255.0
UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
Base address:0xe000
```

使用例 6 XSCF ネットワークの状態を表示します。

```
XSCF> shownetwork -i
Active Internet connections (without servers)
Proto Recv-Q Send-Q Local Address          Foreign Address         State
tcp      0      0 xx.xx.xx.xx:telnet    xxxx:1617               ESTABLISHED
```


使用例 7 M8000/M9000 サーバの XSCF ユニット 0 と XSCF ユニット 1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork -a
xscf#0-lan#0
  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
  inet addr: 192.168.11.10  Bcast: 192.168.11.255  Mask:255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:12241827 (11.3 MiB)  TX bytes:1189769 (0.9 MiB)
  Base address:0x1000

xscf#0-lan#1
  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:57
  inet addr:192.168.10.11  Bcast: 192.168.10.255  Mask:255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:20241827 (19.3 MiB)  TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
  Base address:0x1000

xscf#0-if  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:00:00:00
  inet addr:192.168.10.128  Bcast:192.168.10.255  Mask: 255.255.255.0
  UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
  RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
  TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
  collisions:0 txqueuelen:1000
  RX bytes:0 (0.0 B)  TX bytes:17010 (16.6 KiB)
  Base address:0x1000

xscf#1-lan#0
  HWaddr 00:00:00:12:34:59
  inet addr:192.168.10.12  Mask:255.255.255.0

xscf#1-lan#1
  HWaddr 00:00:00:12:34:60

xscf#1-if
  HWaddr 00:00:00:12:34:61
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **setnetwork(8)**

shownetwork(8)



名前	shownotice - XSCF Control Package (XCP) の著作権および著作権に関するライセンス情報を表示します。
形式	shownotice [-c {copyright license}] shownotice -h
説明	shownotice(8) は、XCP の著作権、および存在する場合はライセンス情報を表示するコマンドです。 オプションを指定しない場合は、著作権情報とライセンス情報が表示されます。-c オプションを指定すると、著作権またはライセンス情報のどちらかを表示できます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -c {copyright license} 表示する XCP 情報を指定します。以下のどちらかを指定できます。 copyright 著作権情報だけを表示します。 license ライセンス情報だけを表示します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
使用例	使用例 1 著作権情報だけを表示します。 XSCF> shownotice -c copyright [著作権情報が表示されます。] 使用例 2 著作権情報とライセンス情報を表示します。 XSCF> shownotice [著作権情報とライセンス情報が表示されます。]



名前	showntp - XSCF に設定されている NTP 情報を表示します。
形式	showntp {-l -a <i>address</i> -s} showntp -h
説明	showntp(8) は、XSCF に現在設定されている NTP 情報を表示するコマンドです。 以下の情報を表示できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCF ネットワークに登録されている NTP サーバ ■ NTP サーバとの同期状態 ■ XSCF に設定されている stratum 値
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> -a XSCF ネットワークに現在設定されているすべての NTP サーバを表示します。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -l NTP サーバと同期しているかどうかを表示します。 -s XSCF に設定されている stratum 値を表示します。
オペランド	以下のオペランドがサポートされています。 <p><i>address</i> 表示する NTP サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。-a オプションが指定されている場合は無効となります。</p> <p>IP アドレスを指定する場合は 4 組の整数値の間に "." (ピリオド) をつけて指定します。以下の形式で指定できます。</p> <p><i>xxx.xxx.xxx.xxx</i> <i>xxx</i> 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。</p> <p>ホスト名を指定する場合は、RFC 1034 に準拠した形式で指定します。</p>

詳細説明	setntp(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの NTP サーバが設定できます。
使用例	<p>使用例 1 登録済みの NTP サーバをすべて表示します。</p> <pre>XSCF> showntp -a server ntp1.example.com prefer # [1] ntp server name server ntp2.example.com # [2] ntp server name</pre> <p>使用例 2 NTP サーバへの同期を確認し、結果を表示します。</p> <pre>XSCF> showntp -l remote refid st t when poll reach delay offset jitter ===== *192.168.0.27 192.168.1.56 2 u 27 64 377 12.929 -2.756 1.993 +192.168.0.57 192.168.1.86 2 u 32 64 377 13.030 2.184 94.421 127.127.1.0 LOCAL(0) 5 l 44 64 377 0.000 0.000 0.008</pre> <p>使用例 3 XSCF に設定されている stratum 値を表示します。</p> <pre>XSCF> showntp -s stratum : 5</pre>
終了ステータス	<p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了したことを表します。</p> <p>>0 エラーが発生したことを表します。</p>
関連項目	setntp(8)

名前	showpasswordpolicy - 現在のパスワードポリシーの設定を表示します。
形式	showpasswordpolicy showpasswordpolicy -h
説明	showpasswordpolicy(8) は、パスワードポリシーの設定を表示するコマンドです。 pam_cracklib モジュール、有効期限の日付、およびパスワード履歴に保存されるパスワードの数が含まれます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 パスワードポリシーの設定を表示します。 XSCF> showpasswordpolicy Mindays: 0 Maxdays: 99999 Warn: 7 Inactive: -1 Expiry: 0 Retry: 3 Difok: 10 Minlen: 9 Dcredit: 1 Ucredit: 1 Lcredit: 1 Ocredit: 1 Remember: 3
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setpasswordpolicy (8)

showpasswordpolicy(8)



名前	showpowerupdelay - 現在設定されているシステムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を表示します。
形式	showpowerupdelay showpowerupdelay -h
説明	showpowerupdelay(8) は、現在設定されているシステムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を設定するコマンドです。 以下の内容が表示されます。 warmup time 暖機運転時間 wait time 起動までの待ち時間
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
詳細説明	setpowerupdelay(8) コマンドを使用すると、システムの暖機運転と起動までの待ち時間が設定できます。
使用例	使用例 1 システムの暖機運転時間と起動までの待ち時間を表示します。 XSCF> showpowerupdelay warmup time : 10 minute(s) wait time : 20 minute(s)
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setpowerupdelay (8)

showpowerupdelay(8)



名前	showresult - 直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。
形式	showresult showresult -h
説明	showresult(8) は、直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。 showresult(8) は、直前に実行したコマンドが成功したか否かをリモート制御プログラムが確認するのに便利です。
ユーザー権限	すべてのユーザーが実行できます。 ユーザー権限の詳細については、 setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 setupfru(8) コマンドの実行結果を表示します。 XSCF> setupfru -x 1 sb 0 XSCF> showresult 0
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。

showresult(8)



名前	showroute - XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。																						
形式	showroute [-M] [-n] {-a <i>interface</i> } showroute -h																						
説明	<p>showroute(8) は、XSCF ネットワークインターフェースに現在設定されているルーティング情報を表示するコマンドです。</p> <p>指定したネットワークインターフェース、またはすべてのネットワークインターフェースに対するルーティング情報を表示できます。以下の情報が表示されます。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">Destination</td> <td>宛先となる IP アドレス</td> </tr> <tr> <td>Gateway</td> <td>ゲートウェイ</td> </tr> <tr> <td>Netmask</td> <td>ネットマスク</td> </tr> <tr> <td>Flags</td> <td>ルーティングの状態を表すフラグ</td> </tr> <tr> <td></td> <td>U 経路が有効である</td> </tr> <tr> <td></td> <td>H 1つのホストだけに到達可能</td> </tr> <tr> <td></td> <td>G ゲートウェイを使用する</td> </tr> <tr> <td></td> <td>R 回復される動的経路</td> </tr> <tr> <td></td> <td>C キャッシュのエントリーである</td> </tr> <tr> <td></td> <td>! 拒否された経路である</td> </tr> <tr> <td>Interface</td> <td>XSCF ネットワークインターフェース名</td> </tr> </table>	Destination	宛先となる IP アドレス	Gateway	ゲートウェイ	Netmask	ネットマスク	Flags	ルーティングの状態を表すフラグ		U 経路が有効である		H 1つのホストだけに到達可能		G ゲートウェイを使用する		R 回復される動的経路		C キャッシュのエントリーである		! 拒否された経路である	Interface	XSCF ネットワークインターフェース名
Destination	宛先となる IP アドレス																						
Gateway	ゲートウェイ																						
Netmask	ネットマスク																						
Flags	ルーティングの状態を表すフラグ																						
	U 経路が有効である																						
	H 1つのホストだけに到達可能																						
	G ゲートウェイを使用する																						
	R 回復される動的経路																						
	C キャッシュのエントリーである																						
	! 拒否された経路である																						
Interface	XSCF ネットワークインターフェース名																						
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <p>useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>																						
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">-a</td> <td>すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。</td> </tr> <tr> <td>-h</td> <td>使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</td> </tr> <tr> <td>-M</td> <td>テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。</td> </tr> <tr> <td>-n</td> <td>ホスト名の名前解決をしないで、IP アドレスを表示します。</td> </tr> </table>	-a	すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。	-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。	-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。	-n	ホスト名の名前解決をしないで、IP アドレスを表示します。														
-a	すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。																						
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。																						
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。																						
-n	ホスト名の名前解決をしないで、IP アドレスを表示します。																						

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface

表示するネットワークインターフェースを指定します。システム構成によって、以下のいずれかを指定できます。`-a` オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

■ M3000/M4000/M5000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0

xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1

省略形:

lan#0 XSCF-LAN#0

lan#1 XSCF-LAN#1

■ M8000/M9000 サーバの場合

XSCF ユニット 0:

xscf#0-lan#0 XSCF-LAN#0

xscf#0-lan#1 XSCF-LAN#1

XSCF ユニット 1:

xscf#1-lan#0 XSCF-LAN#0

xscf#1-lan#1 XSCF-LAN#1

詳細説明

`setroute(8)` コマンドを使用すると、XSCF ネットワークのルーティングが設定できます。

使用例

使用例 1 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定されているルーティング情報を表示します。

```
XSCF> showroute xscf#0-lan#0
```

Destination	Gateway	Netmask	Flags	Interface
server1.example	*	255.255.255.0	U	xscf#0-lan#0
default	192.168.10.1	0.0.0.0	UG	xscf#0-lan#0

使用例 2 XSCF ユニット 0 の XSCF-LAN#0 に設定されているルーティング情報を、ホスト名の名前解決をしないで表示します。

```
XSCF> showroute -n xscf#0-lan#0
```

Destination	Gateway	Netmask	Flags	Interface
192.168.10.0	0.0.0.0	255.255.255.0	U	xscf#0-lan#0
0.0.0.0	192.168.10.1	0.0.0.0	UG	xscf#0-lan#0

使用例 3 M8000/M9000 サーバの XSCF ユニット 0 と XSCF ユニット 1 のすべてのルー

ティング情報を表示します。

```
XSCF> showroute -a
Kernel IP routing table
Destination      Gateway          Netmask          Flags Interface
192.168.10.0    *                255.255.255.0   U      xscf#0-lan#0
default         192.168.10.1    0.0.0.0         UG     xscf#0-lan#0

Destination      Gateway          Netmask          Interface
default         192.168.10.1    0.0.0.0         xscf#1-lan#0
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
 >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setroute (8)

showroute(8)



名前	showshutdowndelay - 無停電電源装置 (UPS) からの停電通知時のシャットダウン待ち時間を表示します。
形式	showshutdowndelay showshutdowndelay -h
説明	showshutdowndelay(8) は、UPS 接続されたシステムで停電が発生した場合の、システムシャットダウン開始までの待ち時間を表示するコマンドです。 setshutdowndelay(8) コマンドで設定した時間が表示されます。デフォルトでは 10 秒に設定されています。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 シャットダウン開始までの待ち時間を表示します。 XSCF> showshutdowndelay UPS shutdown wait time : 600 second(s)
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setshutdowndelay (8)

showshutdowndelay(8)



名前	showsmtp - Simple Mail Transfer Protocol(SMTP) の設定情報を表示します。
形式	showsmtp showsmtp [-v] showsmtp -h
説明	showsmtp(8) は、SMTP の設定情報を表示するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -v 詳細な情報を表示します。
詳細説明	SMTP 情報には、メールサーバおよび返信用アドレスが含まれます。
使用例	使用例 1 SMTP の設定情報を表示します。 XSCF> showsmtp Mail Server: 10.4.1.1 Port: 25 Authentication Mechanism: smtp-auth User Name: jsmith Password: ***** Reply Address: adm@customer.com
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setsmtp (8)

showsmtp(8)



名前	showsnmp - SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示します。
形式	showsnmp showsnmp -h
説明	<p>showsnmp(8) は、SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示するコマンドです。</p> <p>表示される情報には、エージェントのステータス、ポート、システムの場合、連絡先と説明、トラップホスト、および SNMP のバージョンおよび有効な MIB モジュールが含まれます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-h 使用方法を表示します。</p>
使用例	<p>使用例 1 セットアップされていないシステムの、SNMP 情報を表示します。</p> <pre>XSCF> showsnmp Agent Status: Disabled Agent Port: 161 System Location: Unknown System Contact: Unknown System Description: Unknown Trap Hosts: None SNMP V1/V2c: None Enabled MIB Modules: None</pre> <p>使用例 2 SNMPv3 トラップホストがセットアップされた、無効なシステムの SNMP 情報を表示します。</p> <pre>XSCF> showsnmp Agent Status: Disabled Agent Port: 161 System Location: SanDiego System Contact: bob@jupiter.west System Description: FF1 Trap Hosts: Hostname Port Type Community String Username Auth Protocol ----- -</pre>

```

host1          162          v3          n/a          jsmith      SHA

SNMP V1/V2c: None

Enabled MIB Modules: None

```

使用例 3 SNMPv1 トラップホストや SNMPv2c トラップホストがセットアップされた、有効なシステムの SNMP 情報を表示します。

XSCF> **showsnmp**

```

Agent Status:      Enabled
Agent Port:        161
System Location:   SanDiego
System Contact:    jsmith@jupiter.west
System Description: FF1

```

Trap Hosts:

Hostname	Port	Type	Community String	Username	Auth Protocol
host1	162	v1	public	jsmith	SHA
host2	162	v2c	public	n/a	n/a
host3	162	v3	n/a	bob	SHA

SNMP V1/V2c:

```

Status:           Enabled
Community String: public

```

Enabled MIB Modules:

```

SP_MIB
FM_MIB

```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsnmp (8)

名前	showsnmpusm - SNMP エージェントに関する現在の User-based Security Model (USM) 情報を表示します。
形式	showsnmpusm showsnmpusm -h
説明	showsnmpusm(8) は、SNMP エージェントに関する現在の USM 情報を表示するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 セットアップされていないシステムの、SNMP 情報を表示します。 XSCF> showsnmpusm Username Auth Protocol ----- ----- jsmith SHA sue MD5
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setsnmpusm (8)

showsnpusm(8)



名前	showsnmpvacm - SNMP エージェントに関する現在の View-based Control Access (VACM) 情報を表示します。
形式	showsnmpvacm showsnmpvacm -h
説明	showsnmpvacm(8) は、SNMP エージェントに関する現在の VACM 情報を表示するコマンドです。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
使用例	使用例 1 システムの SNMP 情報を表示します。 <pre>XSCF> showsnmpvacm Groups: Groupname Username ----- - admin jsmith, bob Views: View Subtree Mask Type ---- - all_view .1 ff include Access: View Group ---- - all_view admin</pre>
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	setsnmpvacm (8)

showsnmpvacm(8)



名前	showssh - XSCF ネットワークに設定されている Secure Shell(SSH) サービスの状態、ホスト公開鍵、フィンガープリント、またはユーザー公開鍵を表示します。
形式	<pre>showssh [-c hostkey] [-M] showssh -c pubkey [-u user_name] [-M] showssh -h</pre>
説明	<p>showssh(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている SSH サービスの状態、ホスト公開鍵、フィンガープリント、またはユーザー公開鍵を表示するコマンドです。</p> <p>以下の情報が表示されます。</p> <pre>SSH status SSH サービスが有効かどうか RSA key RSA 形式のホスト公開鍵 DSA key DSA 形式のホスト公開鍵 Fingerprint フィンガープリント形式のホスト公開鍵</pre> <p>ユーザー公開鍵の表示を指定した場合は、システムで自動的につけられるユーザー公開鍵番号とユーザー公開鍵が表示されます。</p> <p>XSCF では SSH2 だけサポートされます</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 他のユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の表示： useradm ■ 上記以外の情報の表示： useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <pre>-c hostkey ホスト公開鍵を表示します。-c オプションが省略された場合は "-c hostkey" が指定されたとみなされます。 -c pubkey ユーザー公開鍵を表示します。-c オプションが省略された場合は "-c hostkey" が指定されたとみなされます。</pre>

- h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- M テキストを1画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
- u *user_name* ユーザー公開鍵を表示するユーザーアカウント名を指定します。"-c pubkey"と一緒に指定します。-u オプションを省略した場合は、現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵が表示されます。

詳細説明

- ユーザー公開鍵に対して自動的につけられるユーザー公開鍵番号は、setssh(8) コマンドでユーザー公開鍵を削除するときに指定できます。
- setssh(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークのSSH サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 ホスト公開鍵の情報を表示します。

```
XSCF> showssh
SSH status: enabled
RSA key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAt0IG3wfpQnGr51znS9XtzwHcBBb/
UU0LN08SilUXE6j+
avlxdY7AFqBf1wGxLF+Tx5pTa6HuZ8o8yUBbDZVJAAAAFCfKPxarV+/5qzK4A43Qaigkqu/
6QAAAIBM
LQ122G8pwibESrh5JmOhSxpLz13P26ksI8qPr+7BxmjLR0k=
Fingerprint:
1024 e4:35:6a:45:b4:f7:e8:ce:b0:b9:82:80:2e:73:33:c4 /etc/ssh/
ssh_host_rsa_key.pub

DSA key:
ssh-dss
AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAJSy4GxD7Tk4fxFvyW1D0NUDqZQPY3PuY2IG7QC4BQ1kewDnblB8
/
JEqI+8pnfbWzmOWU37KHL19OEYNAV6v+WZT6RElU5Pyb8F16uq96L8QDMswFlICMZgrn+ilJN
Str6r8
KDJfwOQMmK0eeDFj2mL40NOvaLQ83+rRwW6Ny/yF1Rgv6PUPuqRLw4VeRb+uOfmPRpe6/
kb4z++lOhtp
WI9bay6CK0nrFRok+z54ez7BrDFBQVUNZx9PyEFezJG9ziEYVUag/23LIAiLxxBmW9ppqa/
WxC21Ja4RQ
VN3009kmVwAAAIaON1LR/
9Jdd7yyG18+Ue7eBBJHrCA0pkSvzfzzFFj5XUzQBdabh5p5Rwz+lvriawFI
ZI9j2uhM/3HQdrvYSVBE dmjaasF9hB6T/
uFwP8yqtJf6Y9GdjBAhWuH8F13pX4BtvK9IeldqCscnOuu0
e2rlUoI6GICMr64FL0YYBSwfbwLIz6PSA/yKQe23dwfkSfcwQZNq/
5pThGPi3tob5Qev2KCK2OyEDMCA
OvVlMhqHuPNpX+hE19nPdBFGzQ==
Fingerprint:
1024 9e:39:8e:cb:8a:99:ff:b4:45:12:04:2d:39:d3:28:15 /etc/ssh/
ssh_host_dsa_key.pub
```

使用例 2 現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵を表示しま

す。

```
XSCF> showssh -c pubkey
Public key:
 1  ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIPk
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDwlrTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
 2  ssh-rsa
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDCBnzANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOBjQAwgYkCgYEA
nkPntf+TjYtyKlNYFbO/YavFpUzkYTLHdt0Fbz/
tZmGd3e6Jn34A2W9EC7D9hjLsj+kAP41A16wFwGO7
KP3H4iImX0Uysj19Hyk4jLBU51sw8JqvT2utTjltV5mFPKL6bDcAgY9=efgh@example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setssh (8)

showssh(8)



名前	showstatus - 縮退された Field Replaceable Unit(FRU) を表示します。												
形式	showstatus [-M] showstatus -h												
説明	showstatus(8) は、本体装置を構成する FRU の中で、縮退されたユニットの情報を表示するためのコマンドです。												
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。												
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -M テキストを 1 画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。												
詳細説明	本体装置を構成する FRU の中で、故障または縮退が発生したユニットとその 1 階層上のユニットの情報が表示されます。表示されたユニットには、"Status:" 以降に以下のいずれかの状態が表示されます。また、故障または縮退が発生したユニットには、異常箇所であることを表す "*" が表示されます。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>状態</th> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Normal</td> <td>正常に動作している状態</td> </tr> <tr> <td>Faulted</td> <td>故障していて動作していない状態</td> </tr> <tr> <td>Degraded</td> <td>ユニットは動作中。ユニット内の一部が故障または縮退していたり、何らかのエラーが検出されていたりするために、ユニットも故障状態を呈しているが、正常に動作中。</td> </tr> <tr> <td>Deconfigured</td> <td>構成異常、環境異常、または他のユニットの縮退によって、正常でありながら縮退している状態</td> </tr> <tr> <td>Maintenance</td> <td>保守作業中。deletefru(8)、replacefru(8)、または addfru(8) 操作中。</td> </tr> </tbody> </table>	状態	内容	Normal	正常に動作している状態	Faulted	故障していて動作していない状態	Degraded	ユニットは動作中。ユニット内の一部が故障または縮退していたり、何らかのエラーが検出されていたりするために、ユニットも故障状態を呈しているが、正常に動作中。	Deconfigured	構成異常、環境異常、または他のユニットの縮退によって、正常でありながら縮退している状態	Maintenance	保守作業中。deletefru(8)、replacefru(8)、または addfru(8) 操作中。
状態	内容												
Normal	正常に動作している状態												
Faulted	故障していて動作していない状態												
Degraded	ユニットは動作中。ユニット内の一部が故障または縮退していたり、何らかのエラーが検出されていたりするために、ユニットも故障状態を呈しているが、正常に動作中。												
Deconfigured	構成異常、環境異常、または他のユニットの縮退によって、正常でありながら縮退している状態												
Maintenance	保守作業中。deletefru(8)、replacefru(8)、または addfru(8) 操作中。												
使用例	使用例 1 縮退されたユニットを表示します。ここでは CPU メモリユニット上の CPU												

モジュールとメモリが、故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
      CMU#0;
*      CPUM#0-CHIP#0 Status:Faulted;
*      MEM#00A Status:Faulted;
```

使用例 2 縮退されたユニットを表示します。ここではメモリボード上のメモリが故障のため縮退している場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
      MBU_B;
      MEMB#0;
*      MEM#0A Status:Faulted;
```

使用例 3 縮退されたユニットを表示します。ここではマザーボードユニット上の CPU /メモリボードユニットとメモリが、故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
      MBU_B Status:Normal;
*      MEMB#1 Status:Deconfigured;
*      MEM#3B Status:Deconfigured;
```

使用例 4 縮退されたユニットを表示します。ここではクロスバーユニットが縮退しているため、CPU /メモリボードユニットが縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
      MBU_B Status:Normal;
*      CPUM#1-CHIP#1 Status:Deconfigured;
*      XBU_B#0 Status:Degraded;
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前	showtelnet - XSCF ネットワークに設定されている Telnet サービスの状態を表示します。
形式	showtelnet showtelnet -h
説明	showtelnet(8) は、XSCF ネットワークに現在設定されている Telnet サービスの状態を表示するコマンドです。 以下のどちらかの状態が表示されます。 enable Telnet サービスが稼働していることを表します。 disable Telnet サービスが停止していることを表します。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, domainadm, domainmgr, domainop, fieldeng ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。
詳細説明	settelnet(8) コマンドを使用すると、XSCF ネットワークの Telnet サービスが設定できます。
使用例	使用例 1 XSCF ネットワークに現在設定されている Telnet サービスの状態を表示します。 XSCF> showtelnet Telnet status:enabled
終了ステータス	以下の終了値が返されます。 0 正常に終了したことを表します。 >0 エラーが発生したことを表します。
関連項目	settelnet(8)

showtelnet(8)



<i>offset</i>	タイムゾーンとグリニッジ標準時 (GMT) とのオフセット時間 オフセットがプラスの場合はマイナス (-)、マイナスの場合はプラス (+) で表示されます。
<i>dst</i>	サマータイム名
<i>offset2</i>	サマータイムと GMT とのオフセット時間 オフセットがプラスの場合はマイナス (-)、マイナスの場合はプラス (+) で表示されます。
<i>from-date[/time]</i>	サマータイム開始情報 <i>from-date</i> は以下のいずれかの形式で表示されます。 <i>Mm.w.d</i> <i>Mm</i> : サマータイムが開始される月。 <i>m</i> は 1 から 12 までの数値で表示されます。 <i>w</i> : サマータイムが開始される週。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で表示されます。 <i>d</i> : サマータイムが開始される曜日。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で表示されます。 <i>Jn</i> <i>Jn</i> : サマータイムが開始される日にち。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。 <i>n</i> <i>n</i> : サマータイムが開始される日にち。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。 <i>time</i> にはサマータイムに切り替える時刻が、切り替える前の時刻で表示されます。 <i>hh:mm:ss</i> "時間:分:秒の形式" で表示されます。デフォルトは、02:00:00 です。

to-date[/time] サマータイム終了情報

to-date は以下のいずれかの形式で表示されます。

Mm.w.d

Mm: サマータイムが終了する月。 *m* は 1 から 12 までの数値で表示されます。

w: サマータイムが終了する週。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で表示されます。

d: サマータイムが終了する曜日。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で表示されます。

Jn

Jn: サマータイムが終了する日にち。1月1日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2月 29 日はカウントされません。

n

n: サマータイムが終了する日にち。1月1日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2月 29 日もカウントされます。

time にはサマータイムから切り替える時刻が、切り替える前の時刻で表示されます。

hh:mm:ss "時間:分:秒の形式" で表示されます。デフォルトは、02:00:00 です。

- *standard* を指定した場合

From: *ddd MM dd hh:mm:ss yyyy dst*

To: *ddd MM dd hh:mm:ss yyyy dst*

<i>ddd</i>	曜日
<i>MM</i>	月
<i>dd</i>	日
<i>hh</i>	時
<i>mm</i>	分
<i>ss</i>	秒
<i>yyyy</i>	年
<i>dst</i>	サマータイムゾーン名

- *settimezone(8)* コマンドを使用すると、XSCF のタイムゾーンが設定できます。

使用例

使用例 1 タイムゾーンを表示します。

```
XSCF> showtimezone -c tz
Asia/Tokyo
```

使用例 2 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 3 月最終日曜日 2:00 から 10 月最終日曜日 2:00 までと設定されている場合に、サマータイム情報を表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m custom
JST-9JDT,M3.5.0,M10.5.0
```

使用例 3 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 4 月第 1 日曜日 0:00 から 9 月第 1 日曜日 0:00 までと設定されている場合に、サマータイム情報を表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst
JST-9JDT-10,M4.1.0/00:00:00,M9.1.0/00:00:00
```

使用例 4 現在のタイムゾーンに標準で設定されているサマータイムの情報を表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m standard
From: Sun Mar 9 03:00:00 2008 PDT
To: Sun Nov 2 01:59:59 2008 PDT
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdate (8), **settimezone (8)**, **showdate (8)**

名前	showuser - XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。
形式	<pre>showuser [[-a] [-M] [-p] [-u] [user]] showuser [[-a] [-l] [-M] [-p] [-u]] showuser -h</pre>
説明	<p>showuser(8) は、XSCF ユーザーアカウント情報を表示するコマンドです。</p> <p>ユーザーアカウント名を指定して showuser(8) コマンドを実行すると、指定したユーザーのアカウント情報が表示されます。ユーザーアカウント名を指定しないで showuser(8) コマンドを実行すると、現在のユーザーのアカウント情報が表示されます。-l オプションを指定して showuser(8) コマンドを実行すると、すべてのユーザーのアカウント情報が表示されます。</p> <p>-a、-p、-u のうち 1 つまたは複数のオプションを指定して showuser(8) コマンドを実行すると、以降のオプションの項で説明する情報が表示されます。これらのオプションを何も指定せずに showuser(8) コマンドを実行すると、すべてのアカウント情報が表示されます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自分のアカウント情報の表示： 必要な権限はありません。 ■ 他のユーザーアカウント情報の表示： useradm
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> -a パスワードの有効性およびアカウントの状態に関する情報を表示します。XSCF ユーザーアカウントに対してのみ有効です。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -l ユーザーのログイン名でソートされたすべての XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。user オペランドとは一緒に使用できません。

- M テキストを1画面ずつ表示します。more コマンドと同様です。
- p ユーザーに割り当てられているすべての権限を表示します。これは、ローカルユーザーとリモートユーザーに対して有効です。
- u ユーザー ID(UID) を表示します。これは、ローカルユーザーとリモートユーザーに対して有効です。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

user 既存のユーザーアカウントの名前。-l オプションとは一緒に使用できません。

使用例 **使用例 1** パスワードおよびアカウントの有効性に関する情報を表示します。

```
XSCF> showuser -a
User Name:      jsmith
Status:        Enabled
Minimum:        0
Maximum:        99999
Warning:        7
Inactive:       -1
Last Change:    Aug 22, 2005
Password Expires: Never
Password Inactive: Never
Account Expires: Never
```

使用例 2 ユーザー権限の情報を表示します。

```
XSCF> showuser -p
User Name:      jsmith
Privileges:     domainadm@1,3-6,8,9
                platadm
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 **adduser (8), deleteuser (8), disableuser (8), enableuser (8), password (8), setprivileges (8)**

名前	snapshot - 環境、ログ、エラー、および Field Replaceable Unit Identifier(FRUID)に関するデータを収集し、転送します。
形式	<pre>snapshot -d device [-r] [-e [-P password]] [-L{F I R}] [-l] [-v] [[-q] -{y n}] [-S time [-E time]] snapshot -t user@host:directory [-e [-P password]] [-k host-key] [-l] [-L{F I R}] [-p password] [-v] [[-q] -{y n}] [-S time [-E time]] snapshot -T [-D directory] [-e [-P password]] [-k host-key] [-l] [-L{F I R}] [-v] [[-q] -{y n}] [-S time [-E time]] snapshot -h</pre>
説明	<p>snapshot(8) はデータ収集メカニズムを提供し、サービスプロセッサ上の診断情報を迅速、確実、柔軟に取得するコマンドです。</p> <p>snapshot(8) コマンドは、構成、環境、ログ、エラー、および FRUID 情報のデータを収集し、指定された宛先にデータを転送します。</p> <p>snapshot(8) コマンドは、収集したデータをファイルへ出力します。ファイル名は、サービスプロセッサに割り当てられているホスト名と IP アドレス、および snapshot 実行時のサービスプロセッサ上の日付と UTC 時間 (時、分、秒形式) に基づいて自動生成されます。たとえば <code>jupiter:10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44</code> のようになります。snapshot(8) コマンドは、出力ファイル名は指定できません。ファイルとコマンド出力がサービスプロセッサから収集されると、snapshot は出力データを圧縮して、.zip 形式のアーカイブに書き込みます。</p> <p>snapshot(8) コマンドは、-t オプション、-T オプション、-d オプションのいずれかが使用されているかに基づいて、収集したデータをリモートネットワークホストまたは外部メディア装置に保存します。-t オプションを使って収集したデータをリモートネットワークホストに保存するには、ホスト名 (または IP アドレス)、リモートネットワークホスト上の宛先ディレクトリ、およびリモートホスト上のユーザー名を指定する必要があります。すでに <code>setarchiving(8)</code> を使用してアーカイブの対象を設定している場合、同じ情報を利用して、リモートネットワーク上にデータを保存するために -T オプションを使用できます。また、-T オプションと -D オプションを一緒に使って、保存するディレクトリだけを変更することもできます。リモートネットワークホスト上にデータを保存するとき、snapshot はリモートファイルへのデータのパイプ役としての機能を果たすために SSH ネットワーク接続を開きます。</p> <p>-s オプション、および必要に応じて -E オプションを使用して、日付範囲を指定することでいくつかのより大きいログファイル上へのデータ収集を制限できます。</p> <p>SSH や SSL などの暗号化ネットワークプロトコルが、ネットワーク接続を介したデータ転送に使用されます。.zip アーカイブ自体を暗号化するには、-e オプションを使用します。このプロセスで暗号化した .zip アーカイブを復号化するには、以下の <code>openssl</code> コマンドで、snapshot(8) コマンドに指定した暗号化パスワードを</p>

使用します。以下は、ファイル `jupiter_10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44.zip.e` を復号化する例です。

```
% openssl aes-128-cbc -d -in jupiter_10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44.zip.e -out jupiter_10.1.1.1_2006-07-08T22-33-44.zip
```

`snapshot(8)` コマンドによって生成されるすべての `.zip` アーカイブに、`snapshot` 自体が生成する 2 つのファイルが入っています。README という名前の最初のファイルには、`.zip` アーカイブのものと名前、`.zip` アーカイブの作成に使用したサービスプロセッサ上の設定ファイルの名前、`snapshot(8)` コマンドのバージョン、およびアーカイブの生成にログ専用モード (`-l` オプション) が使用されたかどうか記述されます。CONFIG という名前の 2 番目のファイルは、`snapshot(8)` コマンドがアーカイブの生成に使用した、実際の設定ファイルのコピーです。

`snapshot(8)` コマンドで収集されたデータは、システム上の問題を診断するために保守作業員に使用される場合があります。`snapshot(8)` コマンドでは、診断の目的によって異なるデータのセットを収集できます。これらのデータセットはそれぞれ Initial、Root Cause、Full と呼ばれ、`-L` オプションを使用して設定されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細については、`setprivileges(8)` コマンドを参照してください。

-k <i>host-key</i>	<p>-t あるいは、-T オプションを指定します。サービスプロセッサがネットワークホストにログインするために使用する公開キーを設定します。このオプションは、-d オプションと一緒に使用すると、無効になります。</p> <p><i>host-key</i> に指定できる値は、以下のとおりです。</p> <p>none ネットワークホストの認証に公開キーを使用しない場合に、このリテラル値を指定します。</p> <p>download snapshot(8) コマンドが SSH を使用してネットワークホストの公開ホストキーのダウンロードと、-t 引数で指定されたホストからの公開ホストキーのダウンロードを行う場合に、このリテラル値を指定します。snapshot(8) コマンドはキーの md5 フィンガープリントを表示し、確認を求めます。キーを受け入れると、そのキーはサーバ認証に使用されます。キーを拒否すると、snapshot(8) コマンドは何もせずに終了します。-k オプションが指定されていない場合、これが SSH ターゲットモードでのデフォルトの動作になります。指定した公開キーは、サーバ認証に使用されます。<i>host-key</i> 引数は、ネットワークホストの完全な公開キー (キータイプで始まる) でなければなりません (つまり、ネットワークホスト上の /etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub の完全な内容でなければなりません) 。</p> <p>public 指定した公開キーは、サーバ認証に使用されます。<i>host-key</i> 引数は、ネットワークホストの完全な公開キー (キータイプで始まる) でなければなりません (つまり、ネットワークホスト上の /etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub の完全な内容でなければなりません) 。</p> <p>注 - 公開キーは、シェルが単一の語として処理できるように引用符で囲む必要があります。</p>
-L{F I R}	<p>収集するログセットを指定します。</p> <p>F Full ログセット I Initial ログセット R Root Cause ログセット</p> <p>ログセットが指定されない場合、Initial ログセットがデフォルトで収集されます。</p>
-l	<p>ログファイルのみを収集するように指定します。コマンド出力は収集しません。</p>
-n	<p>プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p>
-P <i>password</i>	<p>-e オプションと一緒に指定します。出力ファイルの暗号化に使用する暗号化パスワードを設定します。</p>

- p** *password* SSH ログインに使用されるユーザーパスワードを設定します。このオプションは、**-t** オプションと一緒に指定します。**-d** または **-T** オプションと一緒に使用すると、無効になります。
- q** プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- S** *time* データが収集される開始時間を指定します。終了時間の **-E** *time* オプションと一緒に使用して、**snapshot(8)** で収集されるログメッセージの時間枠を定義します。終了時間の指定がないと、ターゲット期間は、**snapshot** コマンドが実行された時点で終わります。**-E** オプションも参照してください。
- time* **strptime(3)** で記述される、以下の 2 つのフォーマットのどちらか 1 つの形式を使用します。
- %Y-%m-%d, %H:%M:%S
%Y-%m-%d_%H-%M-%S
- T** SSH ターゲットモードで **snapshot** を実行するとき指定します。このとき、**setarchiving(8)** であらかじめ設定した *user@host:directory* の値を使用します。**-D** オプションと一緒に指定すると、*directory* の値を選択できます。
- 注** - **snapshot** コマンドではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。

-t *user@host:directory* データ転送先のネットワークホストとリモートディレクトリを設定します。*host* フィールドには、ネットワークホストのホスト名または IP アドレスを指定します。*user* フィールドには、アーカイブホストへの `ssh` ログイン用のユーザー名を指定します。*directory* フィールドには、出力ファイルの保存先となるアーカイブホスト上のアーカイブディレクトリを指定します。*directory* フィールドは、"- " や "~" で始めてはいけません。

注 - `snapshot` コマンドではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。

-v 詳細な情報を表示します。すべてのアクションとコマンドを実行時に表示します。`-q` オプションと一緒に指定すると、`-v` オプションは無効になります。

注 - `snapshot` 設定ファイルで実行されるすべてのコマンドを動作させるためのユーザー権限は与えられていないかもしれません。この場合、これらのコマンド操作が許可されていないことを示すエラーメッセージが表示されます。

-y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

詳細説明

動作モード

以下に、`snapshot(8)` コマンドの動作モードの概要について説明します。

最初のモードは「SSH ターゲットモード」です。`-t` あるいは `-T` オプションを指定してデータコレクタを起動すると、このモードで実行されます。このモードでは、データコレクタはサービスプロセッサから指定された宛先の `SSH` 接続を (適切な認証後に) 開き、`zip` 形式のデータアーカイブを `SSH` 接続を介して宛先ホストに送信します。`snapshot` コマンドではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。このモードでの転送暗号化は、`SSH` によって行われます。

2 番目のモードは、「USB デバイスモード」です。`-d` オプションを指定してデータコレクタを起動すると、このモードで実行されます。このモードでは、データコレクタの出力 (`zip` 形式のアーカイブ) は、USB 装置上のファイルに保存されます。USB 装置は `FAT32` ファイルシステムでフォーマットされている必要があります。このモードでは、`SSH` ターゲットモードの場合のように `zip` ファイルを暗号化するための `-e` オプションが使用できます。しかしながら、このモードではデータがサービスプロセッサに対してローカルなままであるため、転送暗号化 (`SSH` のような) は行われません。

使用例

使用例 1 SSH を使用して公開キーをダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x -k download
Downloading Public Key from 'jupiter.west'...
Key fingerprint in md5: c9:e0:bc+b2:1a:80:29:24:13:d9:f1:13:f5:5c:2c:0f
Accept this public key (yes/no)? Y
Enter ssh password for user 'joe' on host 'jupiter.west'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 2 ホストキーをダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x
Downloading Public Key from 'jupiter.west'...
Public Key Fingerprint: c9:e0:bc+b2:1a:80:29:24:13:d9:f1:13:f5:5c:2c:0f
Accept this public key (yes/no)? Y
Enter ssh password for user 'joe' on host 'jupiter.west'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 3 ユーザー指定の公開キーを使用してダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x -k "ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAwVFiSQNVBFhTTzq0AX5iQqCkkJjd6ezWkVGt
mMkJJzZmJYK0sBlhn6dGEIiHdBszO8QLAXb8N4Kq8JDOBPtLSN4yokUPTcZQNxJaY
A0W058Qgxbn"
Enter ssh password for user 'joe' on host 'jupiter.west'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 4 公開キーを使用しないで、ログファイルだけをダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t bob@mars.east:/home/bob/logs/x -k none -l
Enter ssh password for user 'bob' on host 'mars.east'
Log only mode. No commands will be collected.
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 5 公開キーを使用しないで、指定したパスワードでの暗号化を使用してダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -t bob@mars.east:/home/bob/logs/x -k none -e -P
password
Output data will be encrypted.
Enter ssh password for user 'bob' on host 'mars.east'
Setting up ssh connection to remote host...
Collecting data into joe@jupiter.west:/home/joe/logs/x/archive.zip
Data collection complete.
```

使用例 6 無効なディレクトリを指定してダウンロードしているときにエラーとなった例。

```
XSCF> snapshot -t sue@saturn.north:/home/sue/logs/bad_dir -k none
Enter ssh password for user 'sue' on host 'saturn.north'
Setting up ssh connection to remote host...
Failed to create remote file:
/home/sue/logs/bad_dir/archive.zip
Verify adequate disk permissions and disk space on target host
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 7 公開キーをダウンロードしているときに接続エラーとなった例。

```
XSCF> snapshot -t sue@saturne.west:/home/sue/logs/x -k download
Downloading Public Key from 'saturne.west'...
Error downloading key for host 'saturne.west'
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 8 公開キーをダウンロードします。すべてのプロンプトには "no" と応答します。

```
XSCF> snapshot -v -t jill@earth.east:/home/jill/logs/x -k download
-n
Downloading Public Key from 'earth.east'...
Public Key: ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIWAAAIEAwVFiSQNVBFhTTzq0AX5iQqCkkJjd6ezWkVGtmMkJJzzM
jYK0sBlhn6dGEIiHdBSzO8QLAXb8N4Kq8JDOBpLSN4yokUPTcZQNxJaYA0W058Qgxbn
Key fingerprint in md5: c9:e0:bc+b2:1a:80:29:24:13:d9:f1:13:f5:5c:2c:0f
Accept this public key (yes/no)? no
Public Key declined
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 9 権限のないユーザーから公開キーのダウンロードを試みます。

```
XSCF> snapshot -t fakeuser@fakehost.com:/fakedir -p fake-password
Downloading Public Key from 'fakehost.com'...
Error downloading key for host 'fakehost.com'
Error opening SSH target
Exiting with error 1
```

使用例 10 外部メディア装置へダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -r
Testing writability of USB device....SUCCESS
```



```
About to remove all files from device 'usb0'. Continue? [y|n] : y
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2006-04-17T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

使用例 11 データ範囲に対する特定のログを得るため、ログ収集を制限します。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -S 2007-01-01,01:00:00 -E 2007-01-31_14-
00-00
Testing writability of USB device...SUCCESS
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2006-04-17T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0          正常に終了したことを表します。
>0        エラーが発生したことを表します。
```

関連項目

setarchiving (8), **showarchiving (8)**, **showlogs (8)**

snapshot(8)



名前	switchscf - XSCF ユニットのアクティブ、スタンバイ状態を切り替えます。
形式	switchscf [[-q] -{y n}] -t {Active Standby} [-f] switchscf -h
説明	<p>switchscf(8) は、現在ログインしている XSCF ユニットのアクティブ、スタンバイ状態を切り替えるコマンドです。</p> <p>switchscf(8) コマンドは、M8000/M9000 サーバにだけ使用できます。</p> <p>現在ログイン中の XSCF ユニットの状態を切り替えると、対になっている XSCF ユニットの状態も切り替わります。</p> <p>注 - 切り替え時には、アクティブ側の XSCF に接続されているネットワークのセッションは切断されます。</p> <hr/> <p>注意 - 通常、保守作業中の場合は XSCF を切り替えることはできません。switchscf(8) コマンドの実行結果が「Switching of XSCF state is disabled due to a maintenance operation. Try again later.」となって、XSCF が切り替えられない場合は、addfru(8)、deletefru(8)、replacefru(8)、flashupdate(8) の保守コマンドが実行中かどうか確認してください。実行中であればコマンドが終了するまでお待ちください。保守コマンドが実行中でないにもかかわらず XSCF が切り替えられない場合は、-f オプションを使用して切り替えてください。</p> <hr/>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-f XSCF が切り替えられない場合に、強制的に切り替えます。</p> <hr/> <p>注意 - -f オプションは強制的に XSCF を切り替えるため、通常の操作で切り替えられない場合に限り使用してください。</p> <hr/> <p>-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</p> <p>-n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。</p> <p>-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。</p>

- t Active XSCF ユニットをアクティブ状態に切り替えます。
- t Standby XSCF ユニットをスタンバイ状態に切り替えます。
- y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。

使用例

使用例 1 現在ログインしている XSCF ユニットをスタンバイ状態に切り替えます。

```
XSCF> switchscf -t Standby
The XSCF unit switch between the Active and Standby states. Continue? [y|n]:y
```

使用例 2 現在ログインしている XSCF ユニットをスタンバイ状態に切り替えます。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> switchscf -t Standby -y
The XSCF unit switch between the Active and Standby states. Continue? [y|n]:y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

- 0 正常に終了したことを表します。
- >0 エラーが発生したことを表します。

名前	testsb - 指定した物理システムボード (PSB) に初期診断を行います。
形式	<pre>testsb [-q] -{y n} [-m diag=mode] location testsb [-q] -{y n} [-m diag=mode] -c {all expansion} testsb -v [-y -n] [-m diag=mode] location testsb -v [-y -n] [-m diag=mode] -c {all expansion} testsb -h</pre>
説明	<p>testsb(8) は、指定した PSB に初期診断を行うコマンドです。</p> <p>testsb(8) コマンドは、M3000 サーバでは使用できません。</p> <p>PSB の構成、および PSB に搭載された各デバイスの動作が診断されます。診断する PSB はドメインに組み込まれていない状態、または組み込まれているドメインの電源が切断されている状態でなければなりません。</p> <p>診断後は、診断結果が表示されます。また、showboards(8) コマンドで表示される Test や Fault の項目で確認できます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- `-c {all|expansion}` 診断する対象の PSB を指定します。以下のどちらかを指定できます。
- `all` 搭載されているすべての PSB を診断します。
以下の条件を満たしていない場合は、エラーとなります。
- システムの電源が切断されている
 - 対象となるすべての PSB が Uni-XSB
- `expansion` 拡張筐体に搭載されているすべての PSB を診断します。
以下の条件を満たしていない場合は、エラーとなります。
- 対象となるすべての PSB がドメイン上で稼働していない
 - 対象となるすべての PSB が Uni-XSB
- `-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- `-m diag=mode` 初期診断の診断レベルを指定します。以下のどちらかを指定できます。
- `min` 標準 (デフォルト)
`max` 最大
- `-n` プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。
- `-q` プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
- `-v` 初期診断の詳細な情報を表示します。
- `-y` プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`location` 診断する PSB 番号を 1 つだけ指定します。00 から 15 までの整数で指定できます。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- 指定した PSB に属しているシステムボード (XSB) が以下の状態の場合は、`testsb(8)` コマンドはエラーとなります。
 - XSB がドメインに組み込まれていて、かつ、そのドメインが稼働中
 - XSB がドメインに組み込まれていて、かつ、そのドメインが OpenBoot PROM (ok プロンプト) 状態

- XSB がドメインに組み込まれていて、かつ、そのドメインが電源投入中、電源切断中、再起動中のいずれかの状態
- XSB を対象に、`addboard(8)`、`deleteboard(8)`、`moveboard(8)` コマンドを実行中
- 指定したPSBに属しているXSBがUnmountまたはFaulted状態となっている場合は、診断の対象から外され、診断結果に表示されないときがあります。このようなときは、`showboards(8)` コマンドで診断結果を確認してください。
- 暖機運転および起動までの待ち時間が設定されている場合は、これらを見捨てて `testsb(8)` コマンドを実行してよいかを確認するプロンプトが表示されます。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
- `testsb(8)` コマンドによる診断結果は、以下のように表示されます。

XSB	PSB に属する番号 Uni-XSB タイプの場合は 1 つ、Quad-XSB タイプの場合は 4 つの XSB が表示されます。										
Test	XSB の初期診断状態 以下のいずれかが表示されます。 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>Unmount</td> <td>未搭載または故障により認識できない状態</td> </tr> <tr> <td>Unknown</td> <td>診断されていない状態</td> </tr> <tr> <td>Testing</td> <td>初期診断中</td> </tr> <tr> <td>Passed</td> <td>初期診断が正常に終了した状態</td> </tr> <tr> <td>Failed</td> <td>初期診断で異常が発生した状態。XSB は使用できない、または縮退している状態となります。</td> </tr> </table>	Unmount	未搭載または故障により認識できない状態	Unknown	診断されていない状態	Testing	初期診断中	Passed	初期診断が正常に終了した状態	Failed	初期診断で異常が発生した状態。XSB は使用できない、または縮退している状態となります。
Unmount	未搭載または故障により認識できない状態										
Unknown	診断されていない状態										
Testing	初期診断中										
Passed	初期診断が正常に終了した状態										
Failed	初期診断で異常が発生した状態。XSB は使用できない、または縮退している状態となります。										
Fault	XSB の異常の状態 状態は 1 つ、または複数で表示されます。 <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>Normal</td> <td>正常な状態</td> </tr> <tr> <td>Degraded</td> <td>縮退部品がある状態。XSB は稼働できます。</td> </tr> <tr> <td>Faulted</td> <td>異常が発生し XSB が動作しない状態</td> </tr> </table>	Normal	正常な状態	Degraded	縮退部品がある状態。XSB は稼働できます。	Faulted	異常が発生し XSB が動作しない状態				
Normal	正常な状態										
Degraded	縮退部品がある状態。XSB は稼働できます。										
Faulted	異常が発生し XSB が動作しない状態										

使用例

使用例 1 PSB#00 の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb 0
Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
SB#00 power on sequence started.
  0end
Initial diagnosis started. [1800sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
SB power off sequence started. [1200sec]
  0.end
SB powered off.
XSB Test      Fault
-----
00-0 Passed  Normal
```

```
00-1 Passed Normal
00-2 Passed Normal
00-3 Passed Normal
```

使用例 2 PSB#01 の初期診断を詳細なメッセージを表示して行います。

```
XSCF> testsb -v 1
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
SB#01 powered on sequence started.
:
:
Initial diagnosis has completed.
{0} ok SB power off sequence started. [1200sec]
0.end
SB powered off.
XSB Test Fault
-----
01-0 Passed Normal
```

使用例 3 搭載されているすべての PSB の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb -c all
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
SB power on sequence started.
0.end
Initial diagnosis started. [1800sec]
0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
SB power off sequence started. [1200sec]
0.end
SB powered off.
XSB Test Fault
-----
00-0 Passed Normal
01-0 Passed Normal
02-0 Passed Normal
03-0 Passed Normal
```

使用例 4 設定されている暖機運転および空調待ち時間を無視して、PSB の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb -c all
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
Ignore warmup-time and air-conditioner-wait-time, Continue?[y|n] :y
SB power on sequence started.
0.end
Initial diagnosis started. [1800sec]
0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
SB power off sequence started. [1200sec]
0.end
SB powered off.
```



```
XSB  Test      Fault
-----
00-0 Passed  Normal
01-0 Passed  Normal
02-0 Passed  Normal
03-0 Passed  Normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addfru (8), **deletefru (8)**, **replacefru (8)**, **setupfru (8)**, **showboards (8)**,
showfru (8)

testsb(8)



名前	tracert - 指定したホストまたはネットワーク装置までのネットワーク経路を表示します。
形式	tracert [-n] [-r] [-v] [-m <i>maxttl</i>] [-p <i>port</i>] [-q <i>nqueries</i>] [-s <i>src_addr</i>] [-w <i>wait</i>] <i>host</i> tracert -h
説明	tracert(8) は、指定したホストまたはネットワーク装置までのネットワーク経路を表示するコマンドです。 ネットワーク経路とは、指定したホストまたはネットワーク装置間を接続するルータ（ゲートウェイ）を表し、経路上にどのようなルータが位置しているかを表示します。 tracert(8) コマンドは IP プロトコルの TTL フィールドを利用して、指定したホストまたはネットワーク装置までの、ネットワーク経路上にあるすべてのゲートウェイから ICMP TIME_EXCEEDED レスポンスを引き出そうと試みます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。 <ul style="list-style-type: none">■ DSCP アドレスに対して実行する場合 fieldeng■ "localhost" またはループバックアドレス (127.0.0.0/8) に対して実行する場合 fieldeng■ インター SCF ネットワーク (ISN) に対して実行する場合 fieldeng■ 上記以外の場合 必要な権限はありません ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -m <i>maxttl</i> ホップ数の最大値を指定します。指定したホップ数分のゲートウェイを表示します。省略した場合は 30 に設定されます。 -n DNS 逆引きを行わずに、IP アドレスだけを出力します。 -p <i>port</i> 使用する UDP パケットのポート番号を指定します。UDP パケットを使用する場合にだけ有効です。省略した場合は 33434 に設定されます。 -q <i>nqueries</i> 1 つのゲートウェイに対する試行回数を指定します。省略した場合は 3 回に設定されます。

<code>-r</code>	ルーティングテーブルを無視して、直接パケットを、指定したホストまたはネットワーク装置へ転送します。同一の物理ネットワーク上に目的のホストまたはネットワーク装置がない場合は、エラーとなります。
<code>-s src_addr</code>	経路をたどるソースアドレスを指定します。
<code>-v</code>	詳細な情報を表示します。パケットの送信サイズが表示されます。
<code>-w wait</code>	タイムアウト時間を秒単位で指定します。省略した場合は 3 秒に設定されます。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

<code>host</code>	パケットを送信するホストまたはネットワーク装置を指定します。ホスト名または IP アドレスで指定できます。
-------------------	---

使用例 **使用例 1** `server.example.com` というホストまでのネットワーク経路を表示します。

```
XSCF> tracert server.example.com
tracert to server.example.com (XX.XX.XX.XX), 30 hops max, 40 byte
packets
 1 XX.XX.XX.1 (XX.XX.XX.1)  1.792 ms  1.673 ms  1.549 ms
 2 XX.XX.XX.2 (XX.XX.XX.2)  2.235 ms  2.249 ms  2.367 ms
 3 XX.XX.XX.3 (XX.XX.XX.3)  2.199 ms  2.228 ms  2.361 ms
 4 XX.XX.XX.4 (XX.XX.XX.4)  2.516 ms  2.229 ms  2.357 ms
 5 XX.XX.XX.5 (XX.XX.XX.5)  2.546 ms  2.347 ms  2.272 ms
 6 server.example.com (XX.XX.XX.XX)  2.172 ms  2.313 ms  2.36 ms
```

使用例 2 `server.example.com` というホストまでの詳細なネットワーク経路を表示します。(XSCF-LAN=192.168.100.10)

```
XSCF> tracert -v server.example.com
tracert to server.example.com (XX.XX.XX.XX), 30 hops max, 40 byte packets
 1 XX.XX.XX.1 36 bytes to 192.168.100.10  1.792 ms  1.673 ms  1.549 ms
 2 XX.XX.XX.2 36 bytes to 192.168.100.10  2.235 ms  2.249 ms  2.367 ms
 3 XX.XX.XX.3 36 bytes to 192.168.100.10  2.199 ms  2.228 ms  2.361 ms
 4 XX.XX.XX.4 36 bytes to 192.168.100.10  2.516 ms  2.229 ms  2.357 ms
 5 XX.XX.XX.5 36 bytes to 192.168.100.10  2.546 ms  2.347 ms  2.272 ms
 6 server.example.com 48 bytes to 192.168.100.10  2.172 ms  2.313 ms  2.36 ms
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前	unlockmaintenance - XSCF のロック状態を強制的に解除します。
形式	unlockmaintenance [[-q] -{y n}] unlockmaintenance -h
説明	unlockmaintenance(8) は、XSCF のロック状態を強制的に解除するコマンドです。 通常、保守用コマンドである addfru(8)、deletefru(8)、replacefru(8) コマンドが実行されている間は XSCF はロック状態となり、実行が終わるとロックが解除されます。しかし、保守用コマンドのいずれかを実行中に LAN が切断されるなどの異常が発生すると、XSCF のロックが解除できなくなることがあります。このような場合は unlockmaintenance(8) コマンドを実行して、XSCF のロック状態を強制的に解除できます。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。 ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。 -h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。 -n プロンプトに対して自動的に "n" (no) と応答します。 -q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 -y プロンプトに対して自動的に "y" (yes) と応答します。
詳細説明	コマンドを実行すると、実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されません。実行する場合は "y"、中断する場合は "n" を入力します。
使用例	使用例 1 保守のロック状態を解除します。 XSCF> unlockmaintenance This command unlocks the maintenance lock which prevents the multiple execution of maintenance commands. *Never* use this command, except when the lock state remains by some reason. Careless execution of this command causes serious situation because it interrupts the running command and XSCF might not be able to recognize the parts. Continue? [y n] : y

使用例 2 保守のロック状態を解除します。プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> unlockmaintenance -y
This command unlocks the maintenance lock which prevents the multiple
execution of maintenance commands.
*Never* use this command, except when the lock state remains by some
reason.
Careless execution of this command causes serious situation because it
interrupts the running command and XSCF might not be able to recognize the
parts.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 保守のロック状態を解除します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に "y" と応答します。

```
XSCF> unlockmaintenance -q -y
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0           正常に終了したことを表します。
>0         エラーが発生したことを表します。
```

関連項目

addfru (8), deletefru (8), replacefru (8)

名前	version - ファームウェアの版数を表示します。												
形式	<pre> version -c xcp [-v] [-t] version -c {cmu xscf} [-v] version -h </pre>												
説明	<p>version(8) はファームウェアの版数を表示するコマンドです。</p> <p>以下の版数が表示できます。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">xcp</td> <td>システムに適用されている XSCF Control Package (XCP) の総合版数</td> </tr> <tr> <td>cmu</td> <td>OpenBoot PROM ファームウェアの版数</td> </tr> <tr> <td>xscf</td> <td>XSCF ファームウェアの版数</td> </tr> </table>	xcp	システムに適用されている XSCF Control Package (XCP) の総合版数	cmu	OpenBoot PROM ファームウェアの版数	xscf	XSCF ファームウェアの版数						
xcp	システムに適用されている XSCF Control Package (XCP) の総合版数												
cmu	OpenBoot PROM ファームウェアの版数												
xscf	XSCF ファームウェアの版数												
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>												
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="padding-right: 20px;">-c xcp</td> <td>XCP 総合版数を表示します。</td> </tr> <tr> <td>-c cmu</td> <td>OpenBoot PROM ファームウェアの版数を表示します。</td> </tr> <tr> <td>-c xscf</td> <td>XSCF ファームウェアの版数を表示します。</td> </tr> <tr> <td>-h</td> <td>使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。</td> </tr> <tr> <td>-t</td> <td>XSCF 内に登録されている XCP 総合版数の情報を表示します。 "-c xcp" と一緒に指定します。</td> </tr> <tr> <td>-v</td> <td>詳細な情報を表示します。"-c xscf" と一緒に指定した場合は通常と同じ情報が表示されます。</td> </tr> </table>	-c xcp	XCP 総合版数を表示します。	-c cmu	OpenBoot PROM ファームウェアの版数を表示します。	-c xscf	XSCF ファームウェアの版数を表示します。	-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。	-t	XSCF 内に登録されている XCP 総合版数の情報を表示します。 "-c xcp" と一緒に指定します。	-v	詳細な情報を表示します。"-c xscf" と一緒に指定した場合は通常と同じ情報が表示されます。
-c xcp	XCP 総合版数を表示します。												
-c cmu	OpenBoot PROM ファームウェアの版数を表示します。												
-c xscf	XSCF ファームウェアの版数を表示します。												
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。												
-t	XSCF 内に登録されている XCP 総合版数の情報を表示します。 "-c xcp" と一緒に指定します。												
-v	詳細な情報を表示します。"-c xscf" と一緒に指定した場合は通常と同じ情報が表示されます。												
使用例	<p>使用例 1 XCP 総合版数を表示します。</p> <pre> XSCF> version -c xcp XSCF#0 (Active) XCP0 (Current): 1020 XCP1 (Reserve): 1020 XSCF#1 (Standby) XCP0 (Current): 1020 XCP1 (Reserve): 1020 </pre>												

使用例 2 XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v
XSCF#0 (Active)
XCP0 (Current): 1020
OpenBoot PROM : 01.01.0001
SCF           : 01.01.0001
XCP1 (Reserve): 1020
OpenBoot PROM : 01.01.0001
OpenBoot PROM BACKUP
#0:          01.01.0001
#1:          01.02.0001
XSCF#1 (Standby)
XCP0 (Current): 1020
OpenBoot PROM : 01.01.0001
SCF           : 01.01.0001
XCP1 (Reserve): 1020
OpenBoot PROM : 01.01.0001
SCF           : 01.01.0001
OpenBoot PROM BACKUP
#0:          01.01.0001
#1:          01.02.0001
```

使用例 3 XSCF に登録されている XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -t
XCP: 1020
```

使用例 4 XSCF に登録されている XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v -t
XCP           : 1020
OpenBoot PROM: 01.01.0001
SCF           : 01.01.0001
```

使用例 5 OpenBoot PROM ファームウェアの版数を表示します。

```
XSCF> version -c cmu
DomainID 00 : 01.01.0001
DomainID 01 : 01.01.0001
DomainID 02 : 01.01.0001
DomainID 03 : 01.01.0001
:
DomainID 23: 01.01.0001
```

使用例 6 OpenBoot PROM ファームウェアの詳細な版数を表示します。

```
XSCF> version -c cmu -v
DomainID 00 : 01.01.0001
DomainID 01 : 01.01.0001
DomainID 02 : 01.01.0001
DomainID 03 : 01.01.0001
```



```

:
DomainID 23: 01.01.0001

XSB#00-0 : 01.01.0001 (Current), 01.01.0001 (Reserve)
XSB#00-1 : 01.01.0001 (Reserve), 01.01.0001 (Current)
XSB#00-2 : 01.01.0001 (Current), 01.01.0001 (Reserve)
XSB#00-3 : 01.01.0001 (Current), 01.01.0001 (Reserve)
:
XSB#15-3 : 01.01.0001 (Current), 01.01.0001 (Reserve)

```

使用例 7 XSCF ファームウェアの版数を表示します。

```

XSCF> version -c xscf
XSCF#0 (Active) 01.01.0001 (Current), 01.01.0001 (Reserve)
XSCF#1 (Standby) 01.01.0001 (Current), 01.01.0001 (Reserve)

```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```

0           正常に終了したことを表します。
>0         エラーが発生したことを表します。

```

version(8)



名前	viewaudit - 監査レコードを表示します。
形式	<p>viewaudit</p> <p>viewaudit [-A <i>date-time</i>] [-B <i>date-time</i>] [-C] [-c <i>classes</i>] [-D <i>date-time</i>] [-E <i>end-record</i>] [-e <i>events</i>] [-i <i>audit-ids</i>] [-l] [-m <i>del</i>] [-n] [-p <i>privilege-results</i>] [-r <i>return-values</i>] [-S <i>start-record</i>] [-u <i>users</i>] [-x]</p> <p>viewaudit -h</p>
説明	<p>viewaudit(8) は、監査レコードを表示するコマンドです。</p> <p>オプションを指定しないで viewaudit(8) コマンドを実行すると、現在のローカル監査レコードがすべて表示されます。オプションを指定して viewaudit(8) コマンドを実行すると、選択したレコードのみが表示されます。デフォルトでは、レコードはテキスト形式で表示されます。1行に1トークンずつ示され、フィールド区切り文字としてカンマが使用されます。出力形式は、-C、-E、-l、-m <i>del</i>、-n、-S、または -x の各オプションを使い分けることにより変更できます。</p>
ユーザー権限	<p>このコマンドを実行するには、auditadm または auditop 権限が必要です。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。</p>
オプション	<p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p>-A <i>date-time</i> <i>date-time</i> 以後に発生したレコードを選択します。<i>date-time</i> はローカル時間に基づきます。-A オプションと-B オプションを一緒に使用すると、範囲を指定できます。<i>date-time</i> の有効な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 絶対時間 <i>date-time</i> : <i>yyyymmdd[hh[mm[ss]]]</i> 変数の意味は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ <i>yyyy</i> = 年 (1970 が最も早い有効値) ■ <i>mm</i> = 月 (01 ~ 12) ■ <i>dd</i> = 日 (01 ~ 31) ■ <i>hh</i> = 時 (00 ~ 23) ■ <i>mm</i> = 分 (00 ~ 59) ■ <i>ss</i> = 秒 (00 ~ 59) <p><i>hh</i>、<i>mm</i>、および <i>ss</i> のデフォルトの値は 00 です。</p>

-B *date-time*

date-time 以前に発生した記録を選択します。*date-time* はローカル時間に基づきます。**-A** オプションと**-B** オプションを一緒に使用すると、範囲を指定できます。*date-time* の有効な値は、絶対時間またはオフセット時間です。

- 絶対時間 *date-time* : *yyyymmdd*[*hh*[*mm*[*ss*]]]

変数の意味は以下のとおりです。

- *yyyy* = 年 (1970 が最も早い有効値)
- *mm* = 月 (01 ~ 12)
- *dd* = 日 (01 ~ 31)
- *hh* = 時 (00 ~ 23)
- *mm* = 分 (00 ~ 59)
- *ss* = 秒 (00 ~ 59)

- オフセット *date-time*: *+n d|h|m|s*

変数の意味は以下のとおりです。

- *n* = ユニット数
- *d* = 日数
- *h* = 時間数
- *m* = 分数
- *s* = 秒数

オフセット時間は**-B** オプションでだけ指定でき、**-A** オプションと一緒に指定する必要があります。

hh、*mm*、および *ss* のデフォルトの値は 00 です。

-C

出力の最後に、選択基準に一致した記録数を追加します。

-c *classes*

指定されたクラスの記録を選択します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前の中からかき指定できます。接頭語「ACS_」は省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 2 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

all	すべてのクラス
ACS_SYSTEM (1)	システムに関連するイベント
ACS_write (2)	状態を変更できるコマンド
ACS_READ (4)	現在の状態を表示するコマンド
ACS_LOGIN (8)	ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT (16)	監査に関連するイベント
ACS_DOMAIN (32)	ドメイン管理に関連するイベント
ACS_USER (64)	ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM (128)	プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES (256)	モードに関連するイベント

- D *date-time*** 特定の日 (指定の日の 00:00:00 に開始して 23:59:59 に終了する 24 時間の期間) に発生したレコードを選択します。指定日はローカル時間に基づき、*yyyymmddhhmmss* (年、月、日、時、分、秒) の形式で指定します。指定した日付のタイムスタンプを持つすべてのレコードが選択されます。時間、分、秒を指定しても無効となります。**-D** オプションは、**-A** オプションや **-B** オプションとは一緒に指定できません。
- E *end-record*** 表示する選択基準と一致する、最後のレコードを指定します。
- e *events*** 指定されたイベントのレコードを選択します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前のどちらかで指定できます。接頭語「*AEV_*」は省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、*AEV_LOGIN_SSH*、*LOGIN_SSH*、または *4* と表現できます。
- 有効なイベントのリストについては、`showaudit -e all` を参照してください。
- h** 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
- i *audit-ids*** 指定された監査セッション識別子のレコードを選択します。特定の監査レコードに反映されるアクティビティに関心がある場合は、そのセッションのすべての監査レコードを表示することができます。*audit-id* は固定ではなく、サービスプロセッサをリセットすると再割り当てされます。*audit-ids* は、監査セッション識別子のカンマ区切りリストです。*audit-id* は、監査ファイルの「*subject*」ラベルの後ろにある数字です。
- たとえば、以下のリストでは、*audit-id* は「*1*」です。
- ```
subject,1,bob,normal,telnet 45880 jupiter
```
- l** 1 行に 1 レコードずつ出力します。
- m *del*** フィールド区切り文字として、デフォルトの区切り文字 ( カンマ ) ではなく *del* を使用します。*del* がシェルで特別な意味を持つ場合は、引用符で囲む必要があります。区切り文字の最大文字数は 3 文字です。区切り文字は意味を持ちません。また、**-x** オプションと一緒に指定できません。
- n** UID と IP アドレスをユーザー名またはホスト名に変換しないよう指定します。
- p *privilege-results*** 指定された *privilege-results* に従ってレコードを選択します。*privilege-results* は、カンマ区切りリストです。*privilege-results* は、*granted*、*denied*、または *error* です。

- r *return-values* 指定された戻り値に従ってレコードを選択します。*returnvals* は、値 *success* または *failure* のカンマ区切りリストです。*success* は、戻り値 0 に対応します。*failure* は非ゼロの戻り値に対応します。
- S *start-record* 表示する選択基準と一致する、最初のレコードを指定します。
- u *users* 指定されたユーザーに帰属するレコードを選択します。*users* は、ユーザーのカンマ区切りリストです。ユーザーはユーザー名または数値 *UID* によって指定できます。
- x XML 形式で出力します。

## 使用例

**使用例 1** 2005 年 12 月 12 日の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -D 20051212
```

```
file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
```

**使用例 2** すべてのユーザーの監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -u jsmith
```

```
file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2006-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

**使用例 3** ユーザー権限の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -p granted
```

```
file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2006-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

**使用例 4** アクセスが成功した監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -r success
```

```
file,1,2006-01-11 10:52:30.391 -05:00,20060111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2006-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

```
header,57,1,command - viewaudit,jupiter.company.com,2006-01-26
16:13:09.128 -05:00
subject,5,sue,normal,ssh 1282 saturn
command,viewaudit
platform access,granted
return,0
...
```

**使用例 5** 2 日間の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -A 20080108 -B +2d

file,1,2008-01-09 20:12:12.968 -08:00,20080110041212.0000000004.sca-m5k-0-0
file,1,2008-01-10 21:14:49.481 -08:00,terminated
file,1,2008-01-10 21:14:49.485 -08:00,20080111051449.0000000005.sca-m5k-0-0
```

**使用例 6** 日付の範囲に一致したレコード (4238 レコード) のうち、最初の 5 レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -l -A 20070515 -B 20080110 -C -S 1 -E 5

file,1,2008-01-09 20:12:12.968 -08:00,20080110041212.0000000004.sca-m5k-0-0
header,63,1,command - setaudit,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09
20:12:12.974 -08:00,subject,250,opl,normal,ssh 42759 san-e4900-
0.West.Sun.COM,command,setaudit,delete,platform access,granted,return,0
header,37,1,login - ssh,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09 20:12:14.455 -
08:00,subject,252,scfroot,normal,ssh 42761 san-e4900-0.West.Sun.COM
header,37,1,logout,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09 20:12:14.800 -
08:00,subject,250,opl,normal,ssh 42759 san-e4900-0.West.Sun.COM
header,37,1,login - ssh,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2008-01-09 20:12:15.595 -
08:00,subject,253,scfroot,normal,ssh 42762 san-e4900-0.West.Sun.COM
4238
```

## 終了ステータス

以下の終了値が返されます。

```
0 正常に終了したことを表します。
>0 エラーが発生したことを表します。
```

## 関連項目

**setaudit (8)**, **showaudit (8)**

viewaudit(8)





|         |                                                                                                                                                                                                                            |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 名前      | who - XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。                                                                                                                                                                                     |
| 形式      | <b>who</b><br><b>who -h</b>                                                                                                                                                                                                |
| 説明      | <p>who(1) は、XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示するコマンドです。</p> <p>以下の情報が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ XSCF ユーザーアカウント名</li> <li>■ 使用している端末</li> <li>■ アイドル時間</li> <li>■ ログイン時刻</li> <li>■ リモートホスト名</li> </ul> |
| ユーザー権限  | <p>このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。</p> <p>ユーザー権限の詳細については、<code>setprivileges(8)</code> コマンドを参照してください。</p>                                                                                                                        |
| オプション   | <p>以下のオプションがサポートされています。</p> <p><code>-h</code>                    使用方法を表示します。</p>                                                                                                                                          |
| 使用例     | <p><b>使用例 1</b>      XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。</p> <pre> XSCF&gt; who USER      TTY      IDLE      FROM      HOST scf       pts/0    00:00m    Dec 21 13:57  JJJJ.ggg.fujitsu.com </pre>                            |
| 終了ステータス | <p>以下の終了値が返されます。</p> <p>0                    正常に終了したことを表します。</p> <p>&gt;0                   エラーが発生したことを表します。</p>                                                                                                           |

who(1)





FUJITSU